
桜文論叢

第93卷

玉井通和先生
渡部宣裕先生

古稀記念号

日本大学法学部

Nihon University
College of Law



玉井通和先生近影

玉井通和教授略歴

学 歴

- 昭和40年 3 月 愛媛県立松山東高校卒業
- 昭和41年 4 月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 昭和45年 5 月 同文学部 3 類仏語仏文学専攻課程卒業
- 昭和45年 6 月～昭和47年 3 月
同大学院人文科学研究科仏語仏文学専攻・修士課程在籍
- 昭和47年 4 月 同博士課程進学
- 昭和48年10月～昭和51年 3 月
P. ヴァレリー・モンペリエ第三大学（フランス）
仏文学博士課程在籍 [仏政府給費留学生]
- 昭和51年 3 月 上記東京大学大学院・博士課程退学

職 歴

- 昭和51年 4 月 日本大学法学部専任講師
- 昭和52年 4 月～平成 4 年 3 月
立教大学文学部非常勤講師
- 昭和59年 4 月～平成29年 3 月
中央大学文学部非常勤講師
- 昭和57年10月 日本大学法学部助教授
- 平成 2 年 2 月～平成28年11月
日本大学法学部教授
- 平成28年11月～平成29年 3 月
同非常勤講師

研究業績

1. 著 書

ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—、駿河台出版社、2011.

2. 翻 訳

P. ゲイ 著、自由の科学—ヨーロッパ啓蒙思想の社会史—（Ⅰ・Ⅱ）、ミネルヴァ書房、2014（1986）[共訳].

3. 論 文

— Autour des *Bijoux Indiscrets* — réflexions sur le rapport de Diderot avec ses oeuvres romanesques —, Etudes de Langue et Littérature Françaises, No22, (La Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises), 1973.

— l'Esquisse du «Structuralisme génétique», 桜文論叢、vol.8、1978.

— Pour une lecture sociologique du texte littéraire（Ⅰ・Ⅱ）-Le monde romanesque de Voltaire-, 桜文論叢、vol.10、1980.

— Pour une lecture sociologique du texte littéraire（Ⅲ）-Le monde romanesque de Voltaire-suite-, 桜文論叢、vol.11、1981.

— Pour une lecture sociologique du texte littéraire（Ⅳ）-Les douze paragraphes de *Memnon*-, 桜文論叢、vol.12、1982.

— La conscience du style chez Diderot, 桜文論叢、vol.16、1984.

— Est-ce du réel? Est-ce de l'imaginaire? — Diderot : promeneur en quête de son esthétique à travers les 'Vernet' —, 桜文論叢、vol.18、1985.

— 『貴族』をめぐって：ある女流作家の出発（Ⅰ）—テキスト以前—、桜文論叢、vol.29、1990.

- 『貴族』をめぐって：ある女流作家の出発（Ⅱ）—テキスト以前—、桜文論叢、vol.30、1991.
- 『貴族』をめぐって：ある女流作家の出発（Ⅲ）—テキストへ—、桜文論叢、vol.32、1991.
- 『貴族』をめぐって：ある女流作家の出発（Ⅳ）—『貴族』試訳—、桜文論叢、vol.34、1992.
- 『ライデン新聞』が見た1766年－1768年のオランダ、桜文論叢、vol.35、1992.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅰ）、桜文論叢、vol.36、1993.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅱ）、桜文論叢、vol.40、1995.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅲ）、桜文論叢、vol.44、1997.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅳ）、桜文論叢、vol.45、1997.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅴ）、桜文論叢、vol.46、1998.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅵ）、桜文論叢、vol.48、1998.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅶ）、桜文論叢、vol.50、2000.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅷ）、桜文論叢、vol.52、2001.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅸ）、桜文論叢、vol.56、2003.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ—（Ⅹ）、桜文論叢、vol.57、2003.

- シャリエール夫人の見た J.-J. ルソー、桜文論叢、vol.58、2003.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ— (XI)、桜文論叢、vol.61、2004.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ— (XII)、桜文論叢、vol.67、2006.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ— (XIII)、桜文論叢、vol.68、2007.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ— (XIV)、桜文論叢、vol.70、2008.
- ある危険な関係—アニエスとデルマンシュ— (XV)、桜文論叢、vol.72、2008.
- 「リーニュ公とその世界」序説 (1)、桜文論叢、vol.81、2011.
- Memento mori*. —死を巡るデファン夫人とヴォルテールのやり取り—、桜文論叢、vol.82、2012.
- 「リーニュ公とその世界」序説 (2)、桜文論叢、vol.83、2012.
- 政治的観測と憶測、政経研究、vol.49、2013.
- 「リーニュ公とその世界」軍人としてのリーニュ公 (1)、桜文論叢、vol.86、2014.
- リーニュ公の『七年戦争従軍日記』について—1758年から1759年へ—、桜文論叢、vol.87、2014.
- リーニュ公とナポレオン、政経研究、vol.50、2014.
- リーニュ公の『七年戦争従軍日記』について—1760年から1762年へ—、桜文論叢、vol.88、2015.
- 1780年代の軍人リーニュ公、桜文論叢、vol.89、2015.
- リーニュ公と革命、桜文論叢、vol.91、2016.
- リーニュ公とエカテリーナ二世、桜文論叢、vol.94、2017.

4. 学会報告

- ディドロとその小説的作品、日本仏語仏文学会、1972年5月.
- ヴォルテールの小説的世界、日本仏語仏文学会、1978年6月.
- ヴォルテールの小説的世界（続き）、日本仏語仏文学会、1978年10月.
- Memnon の12のパラグラフ分析、日本仏語仏文学会、1979年6月.
- ディドロの文体について、日仏美術学会、1983年1月.



渡部宣裕教授近影

渡部宣裕教授略歴

学歴

昭和37年 4 月	私立本郷高等学校入学
昭和40年 3 月	私立本郷高等学校卒業
昭和40年 4 月	日本大学文理学部体育学科入学
昭和44年 3 月	日本大学文理学部体育学科卒業

職歴

昭和44年 4 月	日本大学法学部副手
昭和45年 5 月	日本大学法学部体育助手
昭和53年 4 月	日本大学法学部講師（専任扱）
昭和57年10月	日本大学法学部専任講師
昭和61年12月	日本大学法学部助教授
平成15年 4 月	日本大学法学部教授

学界活動

桜門体育学会理事 平成23年 4 月～平成28年 3 月

社会活動（スポーツ）

日本体操協会審判部副部長

国際体操連盟国際審判員 ※日本代表審判員として世界選手権等に派遣

研究業績

著 書

著 書 名	発行所名	発行年月
運動と健康の科学（共著）	北里健康総合研究出版	2009年5月
身体と運動の科学（単著）	桜門書房	2010年4月

研究論文

論 文 名	掲載雑誌	発行年月
スポーツ・パフォーマンスとしての身体接触の効果 ーバレーボールゲーム（女子）についてー	桜文論叢 51巻	1999年 8 月
体育実技授業の参加意欲向上に関する実証的考察	桜文論叢 63巻	2004年 8 月
競技スポーツ選手のメンタルヘルスパターン	桜文論叢 72巻	2007年12月
生存の生理的基礎「栄養・運動・休養」について	桜文論叢 83巻	2012年 9 月
大学生の生活習慣とメンタルヘルスの関係について の研究ー運動実施とメンタルヘルスについてー	桜文論叢 86巻	2014年 2 月
競技スポーツ選手の視覚と姿勢制御について	桜門体育学研究51集	2016年 9 月

目次

目 次

論 説

道徳性の経験科学とトローリー実験	常松 淳	1
「アジア雑誌」(<i>Journal asiatique</i>)		
—19世紀フランスにおける日本研究の黎明期	中村 圭子	29
Investigating Attitudinal Change Arising from a Content and Language Integrated Learning (CLIL) History Curriculum in Japan Thomas Lockley・Simon Cooke		57
The Oedipal Aestheticism of Yeats and Joyce	Hiroki Matsuyama	89
フランソワ・ボードワシ (1520-73) —— 歴史と法学の結合 ——	志々見 剛	109
<i>La Bible de l'humanité</i> de Jules Michelet —— Celle de tout le genre humain ? ——	Yasuko ESHIMA	139
成年後見における本人の意思決定 —— 「民」法と心理学」序説も兼ねて ——	清水 恵介	163
中野区のスポーツを通じた健康政策と施設利用料 —— 東京都弓道連盟第三地区内「八区」の比較を中心として —— ...	山田 光矢	177
大学生の感情特性と心理的自立が学習意欲に及ぼす影響 —— 習慣的スポーツ活動の関与を想定して —— 水落 文夫・田中 輝海・金野 潤 竹内 雅明・菅野慎太郎・佐藤 秀明		203
サッカーにおけるスモールサイドゲームに関する研究 —— ポジション別プレー現象の相違について ——	坂本 宗司	227
競技スポーツの参加動機について —— 高校生競技者を対象にして ——	高橋 理恵	241
対話を生む演技 —— 劇場文化における感情と「リアル」、——	児玉 直起	280
近藤芳樹『牛乳考』について —— 『寄居歌談』から『紙蘇小言』『牛乳考』へ、そしてその執筆意図 ——	小野 美典	308

道徳性の経験科学とトローリー実験

常 松 淳

1 はじめに——道徳性の経験科学

何をするのが（道徳的に）よいことなのか、（道徳的な観点からして）われわれは何をすべきでないのかといった問題は、社会生活において重要な意味を持っている。日々、われわれは他者の振舞いに対して正しい right とか間違っている wrong といった判断を下している。正しいと思われる行為をしたひとに対しては賞賛し、逆に、間違っていると考えられるような振舞いに及んだひとに対しては否定的な評価、場合によっては非難、さらには何らかのサンクションを与えるかもしれない。一方で、われわれは「正しいことをする・間違ったことをしない」というかたちで自分の行動を律してもいるだろう。もちろん、正しいと分かっているながら実行できないこと、間違っていると知っていてやってしまうことは数知れないが、われわれの行為に関わるこのような道徳性 morality が、社会に一定の秩序をもたらし、また法を中心とした制度を支える価値の一部となっていることは疑いない¹。本稿はこの道徳性に対する経験科学的アプローチをめぐる論考である。

ここで扱いたいのは、〈何をするのが正しいのか・間違っているのか〉という規範的な問いに直接答えようとする研究、すなわち規範的倫理学や道徳哲学などではない。そういった研究は、たとえば「いかなるときでもひとを傷つけることは間違っているのか」という問題に具体的な回答を与えようとするだ

ろう。本稿の関心は、ひとびとの道德性のあり方を対象として、おおまかに言えばその成り立ちや特性を**経験的**に解明しようとする研究に向けられている。道德性の経験的研究——自然科学的・社会科学的研究——は、何をすることが正しい・間違っているのかという問題に**直接**は関わらない。

ただ、注意を要するのは、規範的／経験的という区別そのものが、特に道德性の研究においては議論の焦点となるということである。特に、経験科学によって得られた道德性についての知見が、どのような道德原理が望ましいのかという規範的な問題にとって意義を持つのが重要な論点の一つとなる。たとえば、最近の経験科学は、ある道德問題についてひとびとがどのような基準でどういう判断を下す傾向にあるかを教えてくれる。この研究は、その問題に対する「正しい」答えを求める倫理学に対して、実のところいったい何を提供しているのか。規範的な課題は経験科学の知見とはまったく無関係に探求することができるのか、それとも、経験科学は規範的問題に対しても何らかの実質的な意義を有しているのか。道德性の科学には、こういった問題が常につきまといっている。

道德性の経験的研究については、社会学にもヨーロッパを中心として一定の伝統がある。道德性の社会科学的な理解を目指し、「べき ought」ではなく「である is」に焦点を当て、自身は価値判断を行うことなく記述に徹するものである。社会や文化、時代による道德の多様性 variation を観察された事実として、そこから個々の道德原理や信念の社会的規定要因を探るとというのが基本的な構えとなる²。すなわち、どの社会環境的要因がその社会の道德原理（及びその変動）のあり方に影響を与えているかを明らかにしようとするわけである。

しかし、道德性の経験的研究として近年隆盛を誇っているのは、広く「道德心理学 moral psychology」と呼ばれる分野である。これは狭義の心理学の1分野というより、道德性に対しさまざまな経験科学的方法によりアプローチする諸研究の総称といった方がよい。そこで主として援用されるのは進化生物学、心理学を中心とした種々の認知科学、そして脳神経科学である³。これらはそれぞれ独立して行われるというより、互いに組み合わされている。たとえば人

類の進化についての知見と矛盾しているような、あるいは、脳の作動メカニズムや構造と整合的でないような道徳的判断のモデルは斥けられてしまうからである⁴。1990年代まで道徳的信念や判断の神経科学的研究は技術的にも困難であったが、2001年に脳画像 brain imaging を用いた先駆的研究が発表されると、道徳性の神経科学という“赤ん坊”はその後急速な勢いで成長してきた（Sinnott-Armstrong 2008b: xiii）。そしていまや、道徳の認知科学は「大流行 booming」（Greene 2014: 695）とも言われる状況になっている。道徳性についての哲学的研究（道徳哲学）はむろん古くから行われてきているが、近年では、哲学者自身もまた各種の実験的手法を使って研究を進めることが珍しくなくなっている⁵。逆に言えば、道徳性に関わる経験的（実験的）研究を無視して哲学的研究をすることは困難になりつつあり、自らの哲学的議論が経験科学の示す各種の「事実」とどのように関係しているのかに論及せざるをえない状況が出来している⁶。

道徳心理学に代表される経験的研究に対して、社会学は二つの——密接に関連しているがひとまず区別される——レベルで関心を抱くことになる。ひとつは、人々の道徳的な信念、判断や行動、あるいは道徳感情の構造を明らかにするという同じ目的を共有する経験科学としての立場からの関心である。社会における道徳性のあり方（道徳性と社会現象・制度・文化との相互作用等）を解明することが社会学の目標であるなら、自然科学的手法による道徳性研究も無視することはできないだろう。

もう一方で、ひとびとの日常生活を浸している道徳性と経験科学との関わり自体も、社会学的視線の対象となる。何をすることが正しいか・間違っているか（あるいは何がよい生き方であるか、どんな人格を目指すべきか等）といった問題に、われわれは日々コミットせざるをえない（研究者自身も例外ではありえない）。こういった領野に、現代社会で特有の権威を与えられた自然科学（者）が道徳性についての“科学的事実”を携えて現れ、ひとびとの道徳観・価値観に直接関わるようなメッセージを発している。このような現象それ自体もまた、社会学的関心の的に他ならない。現代の科学研究は社会に対する積極的なアピールを要請されており、大学や研究所は、所属する研究者の論文が世界的な科学誌

に掲載されるとプレス・リリースを発行し、記者会見を行い、これが（ネットを主戦場として）ひろくメディアに流されることになる⁷。研究者自身も、専門雑誌論文だけでなく、一般向けの書籍で自らの「科学的知見」に基づいて道徳性や倫理に直結する主張を積極的に行っている。たとえば、ある心理学者は、自らの道徳心理学的研究に基づいて、現代社会で広く流布している「権利」概念を激しく攻撃している。彼によれば、「権利と、その鏡像である義務は、近代の道徳的論争に用いられる最強の修辭的武器」だが、それはあくまで修辭的なものにすぎない。これまでわれわれが信じてきたのとは異なり、「権利」概念にまともな正当化基盤は何もなく、われわれが行う権利へのアピールは、単に強い感情へのコミットメントを表明しているだけなのである⁸。道徳性の経験科学は、その研究手法上の理念としては価値判断と切り離されているものの、決して規範的な問題そのものと無縁でいようとはしていない。現代科学が**科学**として道徳について何を語り、何を唱道するのは、きわめて興味深い科学社会学的テーマである。

本論では、主として後者の意味での社会学的観点から、最近の道徳心理学でもっともよく参照されるタイプの実験——トローリー問題に関する心理学実験——を取り上げ、その手法を再検討し、それが何を示しうるものか、いかなる制約を含んでいるものであるかを明らかにするという作業を行いたい。科学者が社会の道徳についてきわめて強い規範的主張を打ち出すとき、しばしば経験科学的データがその後ろ盾として引き合いに出される。このデータに立ち返っておくことが必要だからである。

2 「直観」に対する3つの問い

道徳性の実験対象として好んで取り上げられるのが、ひとびとの「直観 intuition」（とそれを生み出すプロセス）である⁹。道徳性と結びつきうる出来事や事柄と接したとき、われわれにはそれに対する何らかの「直観的な」反応が生じる。直観的というのは、意識的な推論や推測によらない、即座のといった

意味である¹⁰。この種の直観的判断は、哲学的議論においても重用されてきた。それはその哲学者自身の直観に過ぎないのではないかという疑問に導かれ、実験によって経験的に検証しようというのが実験哲学の端緒の一つであった¹¹。同じように、倫理学においても、自明な道徳的真理としての直観から理論を発させる傾向が見られた。道徳的直観の極致としての道徳理論、あるいはまた、道徳理論を練り上げていくプロセスに対する重要なインプットとしての道徳的直観というアイデアである。これに対しても、経験主義からの反動が生じてきている¹²。道徳的問題についての規範的議論は、最終的には、それ以上遡れないような、それ自体として正当化されているとしか言いようのない道徳的直観（「ひとを痛めつけてはならない」のような直観的判断）に訴えなければ決着できないようにも思える。これに対して、道徳的直観そのものを所与として自明視するのではなく、経験的研究の対象とするような動きが活発になってきているのである。そこでは、少なくとも次の3つの問題が問われている。

- (1) それはいったい誰の直観なのか：ひとびとはそのような直観を共有しているのか？誰がどのような直観を持っているのか？
- (2) それはどのような成り立ちを持っているのか：直観は、いかなる要因によって左右されているのか？それはどのように一進化論的に一作り上げられてきたのか？直観的反応を支える脳の器質的基盤はどのようなものか？
- (3) 上記(1)(2)で明らかにされた構造と進化論的生成過程を備えた直観は、果たして道徳の基礎として用いることができるもの、道徳的に正当化されたものなのか？

(1)(2)は典型的に経験科学の問いであるが、一方、(3)それ自体は道徳的（規範的）な問題である。従って通常の意味では、〈Is〉に関わる(1)(2)への答えから〈Ought〉の問題である(3)に対する答えは直接的には導かれないはずである。しかし、(1)(2)のような角度から直観を扱おうとする構えの中に、しばしば既に人間の直観的判断に対する“不信”が潜んでいると言ってよい。経験科学の土

俵で道徳的直観を解剖してみせることは、直観に対するある種の正体暴露 debunking になりうるからである。それ自体が道徳的に意味のあるものだと思われていた直観的判断の成り立ちと由来を詳らかにすることは、道徳的価値の衣を剥ぐような効果を持つ。実際、上で紹介した「権利」概念攻撃は、それを裏付けると見なされてきた道徳的直観の経験的解剖に基づいて行われている。ここで「基づいている」というのは、それによって適切に正当化されているということでは必ずしもない。主張の筋道がそのように配置されているという程度の意味である。この筋道の妥当性問題は別稿に譲るが、ここでは、(1)(2)のような経験的研究の背後に(3)のような規範的問題意識が存在していることに注意しておきたい。

次節では、この分野でもっともよく知られた実験によって(1)(2)についてどのような答えが与えられているのか（与えられていないのか）を、(3)を念頭に置きつつ精査しよう。

3 暴走するトローリー

ひとの道徳性を経験的に研究しようとするときによく採られるアプローチは、前節で紹介したように、個人が下す直観的な道徳的判断を素材とするものである（道徳的な行為そのものではない。この点は後にまた触れる）¹³。それは特定の誰かが持っている道徳観を詳細に解明するのが目的ではない。ひとびとの間で観察される道徳的判断のパターンをデータとして展開されるのである。

ではひとの道徳的判断をデータとして収集するにはどうすればよいか。広く行われているのは、言葉（これに加えて、ちょっとした図など）によって表現された一種の短い「シナリオ」を、被験者として集められた人々に読ませ、そこに描かれている行為について道徳的な評価を下してもらうという実験である。シナリオによってひとの道徳的判断を誘発し、それを記録することでデータとするわけである（場合によっては、同時に脳をスキャンして画像データも収集する）。ここでいう道徳的判断は、時間をかけてじっくり考えさせた末に、そのひとの

考えを存分に語ってもらうという形で記録されるのではない。ほとんどの場合に被験者は、限られた時間の中で、その場で選択肢（yes/no の二択、あるいは段階評価）を選ぶことによって道徳的な判断を表明させられる。

シナリオ実験に登場する舞台装置として最もよく知られているのが、〈トロリー trolley¹⁴〉である。被験者は、線路上を暴走するトロリーを想像するよう求められる。この暴走トロリーが線路上にいるひとをどれだけ轢き殺してしまうかは、その場にたまたま居合わせた人物の行為によって変化しうる。そこで、ひとの死を左右するような行為選択について「道徳的に許容できるか」を被験者は問われることになる。トロリー実験では次のようなシナリオが基本型である¹⁵。

〈シナリオ 1〉 *Denise* が列車に乗っていると、運転士はブレーキが壊れたと叫んだ後、ショックで気を失ってしまった。列車の進む先には 5 人のひとがいるが、周囲の土手が急なので線路から逃げられそうもない。線路には右にそれる待避線があって、*Denise* は列車をそちらに進ませることもできる。だが運悪く、待避線にも 1 人のひとがいる。*Denise* は列車の進路を転換することができるが、その場合は 1 人を殺す *kill* ことになる。彼女は列車の進路転換をしないでもいいこともできるが、そのときは 5 人を死なせることになる *letting the five die*。

問： *Denise* が列車を待避線に切り替えることは道徳的に許容できる *morally permissible* だろうか？

〈シナリオ 2〉 *Frank* は線路をまたぐ跨線橋 *footbridge* にいる。彼には、制御不能になった列車が跨線橋に近づいてくのが見える。下を通る線路の先には 5 人のひとがいるが、周囲の土手が急なので線路から逃げられそうもない。制御不能な列車を止める唯一の方法は、線路上に重いものを落とすことしかない *Frank* は知っている。しかし、十分な重量があっけい利用可能なのは、同じく跨線橋から列車を眺めている、バックパックを背負った大

男しかいない。*Frank* はバックパック男を列車の近づく線路上に突き落とすことができるが、その場合は1人を殺すことになる。*Frank* は男を突き落とさずにいることもできるが、そのときは5人を死なせることになる。

問：*Frank* が男を突き落とすことは道徳的に許容できるだろうか？

これらはいずれも道徳的ジレンマの状況を表している。シナリオ1でもシナリオ2でも、すべての登場人物が救われるハッピーエンドはない。*Denise* と *Frank* が2つのうちどちらの選択肢をとったとしても、誰かは列車に轢かれて亡くなってしまうからである。すなわちこの手のシナリオ実験の眼目は、このような道徳的ジレンマにおいて異なる帰結をもたらしうる行為について、直観的な道徳的判断¹⁶を被験者たちに行わせることにある。そして、シナリオ間での回答分布の違いが分析対象となる。

では、この2つのシナリオによって、道徳的判断に関する何が分かるのであろうか。シナリオ1で、もし待避線が無人であれば、列車の進行方向を切り替えることに何の抵抗も生じないであろう¹⁷。問題は、5人の死を避けるためには1人の死が避けられないような状況になっていることである。それでも、この実験では85%のひとが *Denise* の行為は「道徳的に許容できる」と答えている。一方、シナリオ2でも、突き落とすのがバックパックの男ではなく大きな土嚢であればそもそもジレンマにならない。こちらでも、5人を救うにはバックパック男を犠牲にするしかないという状況である。つまり、シナリオ1もシナリオ2も「1人が死に、5人が助かる」という結果は同じであり、異なるのはその方法（*Denise* と *Frank* に必要とされる行為）である。そして、トローリーのスイッチ切り替えと、目の前にいる人間を突き落とすことの間には、大きな違いがあるように思える。実際、*Frank* について「道徳的に許容できる」と答えたのは12%であった。「1人が死に、5人が助かる」という結果は同一である（ように見える）にもかかわらず、そしてそれは「1人が助かり、5人が死ぬ」という帰結より明らかに望ましい（ように見える）にもかかわらず、なぜ人々の直観的な道徳判断はここまで大きく異なっているのか？これが関心の焦

点となる。いま筆者はすぐ上で「大きな違いがあるように思える」と書いたが、この「違いがあるように思える」とは、いったい何の違いのことなのだろうか。そして、この違いは何を意味しているのだろうか。

結果は同一であるようなシナリオ1とシナリオ2で、何が異なっているかをもう少し詳しく見てみよう。シナリオ1では、もし待避線の1人が近づく列車に気づき土手を駆け上がって逃げてしまっても構わない、いや、むしろ望ましいだろう。ところが、シナリオ2で、突き落とされたバックパック男が線路脇に逃げてしまうなら、少なくとも5人を救うという目的にとっては困ったことになる。すなわち、シナリオ2ではバックパックの男がトローリーに轢かれること自体が、目指された帰結をもたらすために必要な手段となっている。言い換えると、シナリオ1における1人の死者は、望ましからざる帰結として予見されてはいるが、それ自体が意図されているわけではない。Deniseは待避線の先にいる1人を轢かせるために列車の進行方向を切り替えたわけではない。彼女の目的は列車の方向を5人から逸らすことだけだったのだ。一方、シナリオ2におけるバックパック男の死は、それ自体が意図されているという点で大きく異なる。Frankが何のために男を突き落とすのかと言えば、それは列車に轢かせるためだったということにならざるをえない¹⁸。この違い—5人を救うために結果としてやむを得ず1人を死なせてしまうことと、同じ5人を救うためでも1人の人間をその手段として殺すこと¹⁹—が、道徳的判断分布の違いを生じさせたのではないか。

道徳的行為に関わるこの相違は、倫理学における義務論 deontology と帰結主義 consequentialism との伝統的な争点と関連している。単純化するなら、帰結主義によれば、われわれは常に最善の帰結をもたらすように行為しなくてはならない。一方、義務論によれば、もたらされる帰結とは別に、われわれにはすべきこと（すべきでないこと）がある。要するに、目的は手段を正当化するかどうかという、日常的にもしばしば直面せざるを得ない道徳的問題である。帰結主義者から見れば、より望ましい帰結（5人の死の回避）をもたらす行為を選択した以上、Deniseはもちろん、Frankもまたまったく等しく道徳的に許

容されなければならない。ところが義務論的立場からすると、その行為がどれほどよい結果を伴うとしても、罪のない人を殺してよいのかという問題が避けられない。手段（意図された危害 intended harm）と、手段が生み出す副次的効果 side effects や、さらに先の帰結 further consequences（予見された危害 foreseen harm）との間に、道徳的に意味のある区別を見いだす考え方は「二重効果の原理 The Principle of Double Effect」と呼ばれ、それは Aquinas にまで遡る²⁰。この原理によれば、放置すると痛みに苦しみながら死ぬほかない患者に、たとえ死期の早まることが副次的効果として予想されても、医師が鎮痛剤を与えることは正当化される。しかし、苦痛を防止する手段として患者を殺すような薬剤を与えてはならない。同様に、列車を止める手段として人を殺すことは認められないが、待避線にいるひとの死が二次的効果であって手段でない限り、それにより5人を救うことは正当化される。直接に意図された行為（目的と手段）と間接的に意図されたに過ぎない行為（副次的効果、更にその先の帰結）とを区別することにより、Denise の行為（＝1人の死は副次的効果）は道徳的に正当化されるが、Frank の選択（＝1人の死は手段）は道徳的に正当化されないと評価するわけである。

「トローリー問題」は、道徳哲学・倫理学において50年近く議論されてきている²¹。何をすることが正しいのかを示そうとする道徳哲学者にとって、トローリー問題における関心は、直観的な道徳判断の違い（例えば、線路のスイッチを切り替えることは許容できるが、ひとを突き落とすことは許容できない）をどのように正当化できるか、二つの行為の異なった道徳的取り扱いを正当化できるような道徳原理はいかなるものか、上記の「二重結果原理」はその役割を果たせるのかといった問いに向けられる。これらの問いをめぐる哲学的議論はやがて「トローリー学 trolleyology」とさえ呼ばれるほどの一大学術産業となり、いまやトローリー学の文献を積み上げれば“どんな暴走トローリーも止められそうなほど”²²と言われる。他方、近年の道徳性の経験科学もまた同じくトローリー問題を積極的に扱うが、その直接的な目的は些か異なる。哲学者が道徳的判断の違いを正当化できる原理を探ろうとするのに対し、心理学者らはトロー

リー実験を通じて、ひとびとの反応の違いを説明できる心理的・神経科学的要因を探ろうとする。そして、ここから議論は(1)(2)から(3)へと大きく広がっていったのである。

上記のシナリオ実験に戻るなら、Denise を道徳的に許容するひとは85%, Frank を許容するひとは12% であった。これは多くの人が二重結果原理を採用しているからだと解釈できるだろうか。実は、シナリオ 1・2 から読み取れる違いは、「意図された危害と（単に）予見された危害」との違いにとどまらない。列車の進路を切り替えるという行為と、横にいる男を自分の手で突き落とすという行為とでは、1 人の死を身体的な力で直接的に引き起こしているかという点でも大きく異なっている。進路を切り替えるのは手先の、しかも機械に対するスイッチ操作である。目の前のひとを自力で突き落とすのとはわけが違う（ように思える）。これだけでなく、死が生じる場面との距離や状況でもかなり差があるだろう。こういった複雑な違いは、実験データの解釈において邪魔になる。シナリオ間での比較を行うときには、シナリオの違いが実験目的となっている要素のみに絞られていないと、被験者の表した反応の差がその要素によってもたらされたかどうかの判別できなくなるからである。もし自分の身体的力を使って突き落とすのではなく、バックパック男が立つ足元のフラップが開くスイッチを押すだけだったら？ Frank の行為に抵抗があるとき、それはひとの死を手段として用いたからではなく、単に自分の筋肉を使って突き落とすという点が厭だっただけなのかもしれない。もしそのスイッチが線路から遠く離れて設置されていたら？ 現場が見えていなければ、1 人の死を手段としても構わないと感じるのかもしれない。あるいはまた、待避線の先が本線と繋がっていて、待避線上の 1 人がストッパーとして轢かれることが（シナリオ 1 と異なり）5 人を救うための必要条件だったら？ これは進路の切り替え操作のみで、しかし 1 名の死を手段として用いる行為である（ループシナリオと呼ばれる）。いや、その待避線が本線に合流する手前にある大きなブロックにトローリーをぶつけることが目的で、ブロックの手前にいる 1 人が轢かれるのは「予見されるが目的ではない」危害だったら？²³——かくして、トローリー実験では、シナリオに工

夫を凝らして、道徳的判断の違いをもたらす要因が何であるかをより精密に同定し、加えて、被験者の社会経済的地位や神経学的特性等による違いが生じるのかを確かめようとする試みが数多く行われることになった²⁴。そして、各種トローリーシナリオでひとの道徳的判断が変化するという多くの実験結果について Greene は、われわれの直観が道徳的には重要でない morally irrelevant 要素によって左右されていること、従ってそれらは信頼できない unreliable ものであることを示していると解釈している²⁵。

このように、トローリージレンマは哲学者の思考実験ではなく心理学者による実験の対象となっているわけだが、同時に、ここには神経科学も導入された。Greene らは、スイッチシナリオ（進路を変えて5人を救う）と跨線橋シナリオ（ひとを突き落として5人を救う）とでひとびとの道徳的直観が異なっていることを捉える整合的な道徳的原理は存在しないとして、かわりに、反応の違いを説明するのは感情 emotions の有無だという見方を打ち出した。すなわち、切り替えスイッチを操作することは、他者を手で突き落とすことのようにひとの感情を喚起せず、これが道徳判断の違いをもたらしているのではないかという仮説である。そして fMRI を用いた実験により、跨線橋シナリオに似せて作られた“身近で人身的な up close and personal”シナリオ群に接した被験者では、感情に結びついているとされる脳部位がより活性化していることを示してみせたのである²⁶。

このあと Greene は、自身のものを含めた各種シナリオ実験と神経科学、（社会）心理学を統合し、経験科学としては「二重過程脳 dual-process brain」説を打ち出していく。彼が好んで使う比喻によれば、一般的に、脳には〈オートマティック・モード〉と〈マニュアル・モード〉がある。オートモードはひとびとの反射的・直観的な反応を生み出し、事態に効率的に対処させてくれる。一方のマニュアルモードは推論システムであり、事態へのより柔軟な対応を可能にしてくれる。そしてそれぞれのモードに対応する脳部位は異なっている（前頭前野腹内側部 VMPFC と前頭前野背外側部 DLPFC）。道徳判断もこの二重過程脳によって生み出されるものに過ぎない。そして、義務論的判断はオートモー

ドの直観的・感情的反応によって支えられ、帰結主義的判断はマニュアルモードの意識的推論と認知的コントロールプロセスによって支えられると Greene は言う²⁷。彼は、道徳性の経験的研究を行う認知科学者にとどまらず、それを背景とした強力な（行為）功利主義者であり、先に触れたように、義務論的道徳を強く批判するに至っている。Greeneによれば、義務論的な道徳判断はオートモードによる直観的・感情的反応に他ならず、マニュアルモードによって乗り越えられなければならない。義務論哲学者は、本当の意味での道徳的推論 moral reasoning を行っていない。彼らは何が正しいかを見つけ出すのではなく、既存の直観的結論を正当化して整理しているだけであり、それは道徳的合理化、いわば単なる「直観の跡追い intuition chasing」（Greene 2014: 718）に過ぎないのである。

いま略述した議論は、第2節で言うところの(1)(2)から(3)までに渡る答えをすべて含むのみならず、さらに進んで特定の道徳的立場を強力に主張するものである。これらの論点をすべて再検討するには多くの作業が必要になる。本稿では、議論の核にあるトローリー実験が何を示しているのかを再考するところまで立ち戻ろう。道徳性の経験科学として、それは何を明らかにしているのだろうか。

4 トローリー実験を精査する

第2節で述べたように、道徳的直観を経験科学の俎上に載せること自体が正体暴露的な意味合いを帯びることは少なくないが、ここではトローリー実験が倫理学・道徳哲学にとってどういう意義を持つかという規範的議論には立ち入らない²⁸。いわばそれ以前の問題として、トローリー実験の方法とデータが抱えている制約を精査することで、それが何を示しうるのか、何を示していないのかを整理しておきたい。次の3点が重要である。

4.1 判断か行動か

上述のようなトロリー実験で特徴的なのは、被験者自身の行動ではなく、他者の行為に対する道徳的判断を調べている点である。シナリオは、ある状況におかれた他者の行為とその帰結を描いたものであった。これを読まされた被験者は、その行為について、道徳的に容認できるかどうかを尋ねられる。ここで、被験者の行動を調べているのではないというのには二つの意味がある。まず明らかに、描かれたような状況で被験者が実際にどのように行動するかではない。当然ながら、被験者に向かって本物のトロリーが暴走してきているわけではないし、救うべき5人も犠牲になりそうな1人も実在しない。行動を問われているのではないというもう一つの意味は、被験者は明示的に「あなたならどうするか」と問われているのでもないということである。あくまで、対象化された行為が道徳的に許容できるかどうかの判断が測定対象になっている。この判断と現実の行動は食い違いうるだろう。道徳的には間違っていると思う方の行為を行ってしまう可能性も当然ありうるということである（ひとを道具として使うことは間違っていると思いつつ、バックパック男を突き落とすかもしれない）²⁹。シナリオによって喚起される直観的判断は行為を決定するプロセスに対するひとつのインプットと見るのがことができるかもしれないが（Hauser et al. 2007: 3）、その繋がりをトロリー実験から知ることはできない。

いずれにしても、それは現実の行為ではないし、仮想的に予測された本人の行為でもない。このタイプのシナリオ実験で測られているのは、他者の行為に対する認知的な道徳的評定であり、そのひとの現実行動に表れるような道徳性とは異なっている。経験科学として、社会におけるひとびとの道徳性を総体的に知るという目的を設定するなら、シナリオ実験における「反応」のような切り詰められた道徳判断が、現実状況での道徳的判断から行動へとどのように繋がるのかを示すデータが別途必要になるだろう³⁰。そうでなければ、トロリー実験の結果は、他者の行為に対して外側からその道徳的正しさについて議論するという、いわば道徳哲学・倫理学的な構えにおいて生じる問題群においてしか意義を有さないことになりかねない³¹。

ところで、「Denise が～することを道徳的に許容できるか」といった質問は、そもそも何を尋ねているのだろうか³²。跨線橋ジレンマを与えられたとき、われわれはいったい何を想像しなければならないのか。ひとによっては、どこの誰とも知らない Frank について考えるのではなく、「その状況で自分ならどうするかを当て推量する」（Appiah 2008: 100）しかないかもしれない。Greene らの実験では、このような想像を防ぐために次のような指示を与えている。

この実験では、Joe, あなた, あるいは他の誰であれ、そのひとがこの状況下で実際にこの行為をするだろうと考えるかどうかを尋ねるのではないという点に注意して下さい。質問は行為の道徳的受容可能性 acceptability に関するものであって、描かれた状況で Joe, あなた, あるいは他の誰かが実際に何をするかについてではありません。³³

自分なら、あるいはシナリオの登場人物が何をするだろうかと考えるのではなく、行為を第三者として評価しろというのである。とはいいながら、シナリオ自体は現在形で書かれており、今まさに暴走トローリーが突っ込んでくるところである。進路を切り替えたりバックパック男を突き落とせばどうなるかは未来形で描かれている。行為は既に起こったものとしてではなく、いまこの場で決断が求められているような、ある種の「道徳的緊急事態 moral emergency」（Appiah 2008: 96）として提示されているのである。誰かが過去に跨線橋からひとを突き落として5人を救ったことについてではなく、いまそのひとが突き落とすことをどう評価するかと問われたときに、自分をその境遇に置いてみることを完全に断念した上で評価するとはどういうことか、想像するのはそう容易ではない。シナリオは、利害関係のない第三者としての事後的な判断というよりむしろ、事前的な行為選択の問題として答えを求めているからである³⁴。

4.2 シナリオ世界の確実性

シナリオそのものの非現実性（実際にトローリーをどうするか決めなければなら

ない状況との落差)という問題も大きい。あらゆる文脈から切り離された数行のシナリオと、現実の状況として暴走トローリーに接することとは、数え切れないほどの点でかけ離れている。ここでは特に、シナリオで提供されている情報の少なさと、シナリオが示す道筋の確実性に注意したい³⁵。一般に、何が道徳的判断を左右しているかを知ろうとするならば、影響しそうな要因をコントロールして、特定の要因においてのみ異なるシナリオを読ませるように実験をデザインしなければならない。その上で、シナリオには道徳的判断を引き出すために必要最低限の情報しか基本的には与えられない。トローリージレンマでは、なぜ Frank がそこにいるのか、彼は鉄道会社の人間なのか、線路上にいる6名とはどんな関係性があるのか、バックパッカーとはどんな繋がりがあるのか(ないのか)、何も分からない。それでも多くのひとは Frank の行為について許容度を答えることができるが、現実の状況であれば知っている可能性の高いこれらの情報が現場での判断にどう影響するかは未知である。シナリオをシンプルにするのは、道徳的判断の最小限の核を抽出するためにはやむを得ない制約ではある。ただ、雑多な情報に満ちた現実の判断や行動において、この最小限の核がどのような役割を果たすかは別途検討が必要な問題である。

登場人物や状況についての文脈的な情報がごく僅かである一方、行為の選択肢とそれに続く帰結はほぼ確実なものとして提示されている。Frank がトローリーを止めなければ5人は死ぬし、バックパッカーを突き落とせば彼が代わりに死ぬが、そのかわりトローリーは停車して5人は助かる。向かってくるトローリーに気付いて5人が逃げる可能性、バックパッカーを轢き殺しつつ5人に向かってさらにトローリーが暴走し続ける可能性などは排除されているわけである。現実の状況では、いずれの選択肢にも多かれ少なかれ不確実性がともなっている。結果として何が起こるかは、行為者にとって確率の問題である。いくら重いバックパックを背負っているからといって、暴走しているトローリーがひと1人のストッパーで停車するものだろうか? 線路の間で身を低くしていたら、5人はトローリーをやり過ごせないだろうか? このような疑問をも防ぐべく、実験者は次のような指示を与えなければならなくなる³⁶。

あなたは、描かれた状況が非現実的だと感じるかもしれません。たとえば「Joe が X をすれば Y が起きる」と書いてあるとき、それは現実的でない、Joe が X をしたからといって Y が起きるとは限らないとあなたは思うかもしれません。もしこのような疑念を感じたら、非現実的な映画を観るときには状況を描かれた通りのものと想定するように、“疑いを保留する suspend disbelief” ようにしてください。

「疑いを保留」した上で、何が起こるのかが確実に分かっている状況での行為選択について被験者は判断を迫られる。それは、結果がどうなるかが不確実な状況での行為選択とは異なってくるかもしれない。この点についても、確実な状況における最小限の道徳的判断と、実際の判断とがどのように繋がるのかは課題として残される。

加えて、そもそも、「疑いを保留」とはどういうことだろうか。そのような疑いを抱いてしまった被験者はどうすればよいのか。これが最後の問題に繋がる。

4.3 誰の道徳的判断か

実は Greene らの実験では、「疑いの保留」ができなかった、あるいはしたくなかったと答えたひとは分析対象から外されている³⁷。既に触れたように、別の実験では、無為にひとの死を引き起こすことに抵抗を感じないタイプの被験者も分析から除かれていたのだった（注17）。こういったタイプの人々を省くことは、被験者の条件を揃えるという、実験において必要とされる手続きと見なすことはできる。暴走するトローリーを止めるためにはひとを突き落とせばいいという仮想的状況設定にまったくリアリティを感じられないひとの道徳的判断と、それを現実的なものと受け止めるひとの判断とを同列に扱うなら分析の意味が曖昧になってしまうだろう。同じく、できるならばより多くの命を救った方がいいという前提を共有しないひとがトローリージレンマで帰結主義的立場をとるかどうかは、2つのシナリオが異なる判断を引き出す要因を探索

するという目的からすれば、当面知る必要がないことかもしれない（トローリー問題を問題としているのは、「1人より5人を救う方が望ましい」という帰結主義的な前提である。その前提にたって初めて、「にもかかわらず、なぜ突き落としを許容できないひとが少なくないのか、どの要因がそうすることを妨げているのか」が焦点となるからである）。

しかし、社会における道徳性を経験的に知るという観点からすれば、そのような人々の反応もまたカバーすべき対象に他ならない。社会においてひとびとが何を正しいと見なすか、その判断に基づいて（あるいは、その判断にもかかわらず）何を行うかを理解するためには、言い換えれば、正しさに関わる道徳性の全体像を知るためには、仮想的なシナリオ状況での判断を保留するひとや、“非道徳的な”ひとの道徳性も視野に入れなければ十分ではない。逆に言うと、上記のようなトローリー実験は、ひとびとの道徳的判断を全体として経験的に解明すること自体よりむしろ、道徳的直観のあり方において特定のパターンを示すひとびとの解明へと向けられているのである。

「誰の道徳的判断か」という問題は別の角度からも指摘できる。前節で触れたとおり、多くの実験結果では、トローリーの進行方向をスイッチで切り替えることを許容するひとは多数である一方、突き落としをよしとするひとは少数である。これらのデータを紹介しつつ、Greeneは、“なぜ私たちは、「スイッチ」ケースではひとりの命と引き換えに5人の命を救うことを受け入れられるのに、「跨線橋」ケースでは受け入れられないのか”と問う³⁸。この「私たち」とは誰のことだろうか。すぐ上に述べた意味で、この「私たち」に、一部の被験者（と同じようなタイプの人びと）は含まれていない。それだけでなく、スイッチ操作ですら受け入れられないと判断したひと、逆に、跨線橋ケースでの突き落としを容認するひともまた、この問いの中に居場所はない。主要なパターンに含まれない反応をする被験者はここでの「私たち」には含まれていないのである。

そもそも、この実験での道徳心理学的関心は、被験者グループ間の反応の平均的な差にある。より明確に言えば、あるシナリオを道徳的に許容するとした

ひとの割合と、別のシナリオを許容するひとの割合の差が統計的に有意かどうかである。典型的には次のように議論は進む。たとえば同じ「突き落とし」パターンでも、ひとを身体的な力を使って突き落とすシナリオと、スイッチ操作（床板を開けるスイッチを押す）で落とすシナリオとでは、後者を許容するひとの割合が有意に高い（前者が約3割、後者で約6割）。このデータから、危害の身体性（自身の筋肉を使った力で危害を生じさせるかどうか）という要素が、Greeneの言葉を借りれば“われわれの道徳ボタンを押す”ことにより道徳判断が変わるという解釈が導かれる³⁹。「行為の含む要素の違いがひとびとの道徳判断に影響する」というのは、あくまでも集団としてみたときの話である。たとえ集合的には統計的に有意な差がないような2つのシナリオでも反応が異なるひとはいるであろうし、上記のようなシナリオでも判断が変わらない（どちらも yes、あるいはどちらも no）ひとはいるはずである⁴⁰。しかし、そのようなデータの分散そのものは背景に退き、均質な平均的「われわれ」「ひとびと」が前面に置かれる⁴¹。

もちろん、データのどこに焦点を絞り、どのような比較を行うか、何を説明対象とするかは研究プログラムの問題ではある。グループ間の比較それ自体が間違っているということではない。だが、統計的に有意な差をグループ間にもたらす要因が、すべての個人にとって決定的であるとはまったく限らないことは留意しておかねばならない（逆に、グループ間では統計的に有意に至らない差が生じさせない要素が、あるひとにとっては決定的だということもありうる⁴²）。トローリー実験を根拠として「道徳的判断を左右する」と言われる要因も、百発百中でひとの判断を変えるわけではない。特定の要因が存在することで、シナリオを容認するひとの割合がある程度（差が統計的に有意となる程度）以上に異なっていれば、その要因が「我々の道徳的判断を左右する」としばしば要約されるのである。

道徳心理学はしばしば、トローリー実験を通じて「われわれの」「ひとびとの」道徳的直観について語っている。ある哲学者の直観に過ぎないものが「われわれの」直観として扱われてきた状況から、経験科学的手法の導入により、

直観の持ち主は被験者としての「われわれ」へと拡大されてきた。しかし、データの収集と分析というプロセスが含む制約の下で、それは完全な意味での「われわれ」「ひとびと」ではなくなり、あるパターンを示す判断が「われわれの」判断として取り扱われるようになりがちである。それはデータ分析を要約して語るための方便であるとしても、その背後に隠れたヴァリエーションの存在は意識しておかねばならない。

5 おわりに——トローリー実験と道徳性

前節では、道徳性の経験科学として強い影響力を持つトローリー実験がはらんでいる制約と課題について論じた。それは、ひとが他者の行為について何を道徳的に正しいと見なすかを探ることに特化した実験である。調べているのはひとの行為に表れた道徳性ではないし、そのひとが与えられた状況で何を選ぶかでもない。あくまで他者の行為に対する評定であり、それはもし自分がその状況に置かれたらどうするかという切迫した想像を掻き立てるようなシナリオによって引き出されたものである。5人を救うためとはいえ、自分はひとの背中を押して突き落とせるだろうかという問い掛けとは無縁でない。逆に言うと、両者が完全には切り離されない形で、他者の行為に関する道徳的直観を汲み上げているのである。加えてそれは、最低限まで切り詰められた道徳的判断である。ごく僅かな、しかしひとに道徳的反応を催させることが可能な程度の情報をもとに、被験者は許容度を答えさせられる。スケルトンのようなシナリオに現実世界の情報が大量にまわりついたとき、ひとがどのような道徳的判断を下し、どのように振る舞うかは、このデータからは簡単に推し量れない未知の問題である。社会における道徳問題が最小限の道徳的判断からの外挿によって理解・解決できるかどうか自体は、別に検討を要する事柄である。

トローリー実験のデータ解釈を核心の一つとする Greene らの研究は道徳性の経験科学として行われているが、それはひとびとが持っている道徳性（道徳的な認知と行動）の全体像を捉えることよりむしろ、倫理的な問題を解く

——というよりも、解消する——ための手段として用いられている。ある行為が許容可能かどうかの道徳的判断を実験の対象に据えることは、何が道徳的に正しいことなのかを定めようとする倫理学・道徳哲学の規範的問題とある意味で同じ観点に立つということでもある。このとき、ひとびとが示す実際のヴァリエーションそのものではなく、特定の道徳原理を反映した判断のパターンに関心が向けられることになる。“われわれのこころに関する隠された真実”の解明—(1)と(2)—はほぼ完了したと考える Greene は、残るのは規範的問題—(3)—だけであり、それもほぼ決着が付いたと見ているようである⁴³。規範的な(3)の問題以前に、(1)(2)に関しては、何を解明すべき対象として設定するかが決定的である。他者の行為に対する（切迫した状況下における）道徳的判断はひとびとの道徳性の一部ではあっても全体ではないこと、また、トローリー実験が「われわれ」のすべてを汲み尽くしているわけでない点を考慮に入れるならば、残された問題は少なくないと言うべきである。経験科学的証拠を背景として強い規範的主張がなされるとき、われわれはその証拠が何であるのかに遡って吟味しなくてはならない。本論で指摘したようなトローリー実験のデータが含まれている制約を念頭に置きながら、経験科学による道徳原理の貶価と擁護を捉え直していく必要がある。

【注】

- 1 ここでは道徳的価値として「正しさ」についてのみ言及しているが、もちろん他にも「よい good」「徳のある virtuous」といった価値も重要である。以下で明らかになるように、道徳性の科学の関心が「正しさ」の問題に偏っていること自体が問題となる（Abend 2012）。
- 2 社会学における道徳性研究の流れをまとめた Abend（2010）参照。Abendによれば、Durkheim や Simmel らの時代以降、道徳性の社会学はあまり顧みられなくなり、特にアメリカでは近年まで正統的な副次分野として認知されてこなかった。
- 3 それぞれ Sinnott-Armstrong ed.（2008a, 2008b, 2008c）を見よ。（社会）心理学における道徳判断研究のレビューとして唐沢（2013）が詳しい。
- 4 Sinnott-Armstrong（2008a: xiii）。
- 5 各種の「思考実験」は哲学者の十八番であったが、被験者を（哲学者自身ではなく）“普通の人々”としてその反応を探るという方向性である。「実験哲学」の手法と意義

については Alexander (2012) を見よ。道徳に関わる哲学の歴史からすると、最近の実験的な展開が新しいのではなく、むしろ心理学的な方法からの離反が（かつての）哲学の新しさであり、むしろそこから現代において反－反心理学主義へと回帰したと見ることもできる（Appiah 2008）。例えば近代道徳哲学の源流の一つと見なされる Hume『人間本性論』の原題は *A Treatise of Human Nature: Being an Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects* である。

- 6 たとえば、哲学者の観点から書かれた道徳心理学の新しいテキスト（Tiberius 2015）を通底するテーマがこれである（Tiberius 2015: 7, 22）。哲学的な道徳判断研究と経験科学（心理学，行動経済学，脳科学）との繋がりを指摘する鈴木（2013）も見よ。
- 7 常松（2015）参照。
- 8 Greene（2013=2015: 403-413）。このあと本論にたびたび登場する Joshua D. Greene は Harvard の心理学教授である。
- 9 特に倫理学に関わる実験については Appiah（2008）の批判的検討を見よ。
- 10 時間的要素は必ずしも本質的ではないとも言えるが（Mikhail 2011: 83），実際の実験状況では何時間も，何日も考えるということは想定されていない。
- 11 Alexander（2012）のほか，常松（2014）も見よ。
- 12 Appiah（2008: 特に Ch.3）。
- 13 そもそも道徳的判断とは何か，その客観的評価は可能かという哲学的問題については鈴木（2013）に整理がある。ここでは，以下の本文で述べる実験において引き出されているものを道徳的判断と考えておく。
- 14 ある種の路面電車のことである。ときに「トロッコ」と訳されることもあるが [Greene（2013=2015），唐沢（2013）など]，本稿ではトロローリーとする。
- 15 このシナリオは Hauser et al.（2007: Appendix）による。この実験で全体のサンプルは研究グループのウェブサイトを自発的に訪れた5000名（120カ国，ただし基本的に英語話者）である。サイトについては印刷媒体，オンラインメディア，掲示板，口コミで宣伝されたとされる（Hauser et al. 2007: 4-5）。
- 16 この実験では yes/no のみだが，〈まったく受け入れられない〉から〈完全に受け入れられる〉までを段階評価させる場合もある。
- 17 とはいえひとは様々である（だからこそ経験的サーヴェイをする意味がある）。この実験では，道徳的ジレンマではない別のシナリオに関して，まったくコストのかからない他の選択肢があるにもかかわらず，あえて死に至る行為を選ぶことを道徳的に許容可能だと答えた被験者は，分析対象から取り除かれている。すなわち，いたずらに他者の死を許容するような“非道徳的な”道徳性の持ち主（約2.7%）は排除されているのである（Hauser et al. 2007: 5）。この点は後にまた触れる。
- 18 ただし，シナリオ実験の被験者は，シナリオに描かれた通りの事態が生じたことを前提として判断するように求められる。すなわち，「待避線の男は逃げられるかもしれないから」という想定は除外しなければならない。この実験では質問文に明記されていないが，後に行われた別の実験では，「5人の死を避けるために Joe が男を跨線橋

から突き落とし、1人の死を引き起こすこと」とはっきり表現されており、他の可能性は排除するように求められている（Greene et al. 2009: Supplementary Material）。この点も後に触れる。

- 19 元シナリオでは、Denise も Frank も、5人を救うために1人を「殺す kill」と表現している。別の実験（Greene et al. 2009）では「死を引き起こす causing the death」である。実のところ、ある行為が意図的 intentional であったかどうか、ある行為の意図が何であったかを決定することは、ときに困難かつ重大な問題である。もし「行為は常にある特定の記述の下で意図的 intentional な行為となる」のであり、「同じ行為でもある記述の下においては意図的であるが、別の記述の下においてそうではないということがありうる」（Anscombe 1963=1984: 54*）とすると、行為をどのように記述するかが、意図の中身、ひいては、その記述に基づいた道徳判断に影響することが予測されるからである[* 同書の翻訳では intentional に「意志的」という訳語が当てられているが、ここでは変更させてもらった。]。ある副次的効果を意図的だと捉えるかどうかの判断は、その効果をよいものと見るか悪いものと見るかによって影響されるというよく知られた研究がある（Knobe 2003）。
- 20 帰結主義と義務論の争点、および二重効果原理の解説として Mackie（1977=1990: Ch.7）参照。Mackie 自身は、手段と副次的効果の区別を絶対視する立場には批判的である（Mackie 1977=1990: 239-243）。
- 21 端緒は、妊娠中絶の問題を二重結果原理との関連で論じた Foot（1967）の挙げた事例に登場する tram であり、Judith J. Thomson の研究がこれを拡充した。Edmonds（2013=2015）がその歴史的経緯から現代的展開までを扱って詳しい。トローリー問題の最近の哲学的検討として Kamm（2016）を見よ。
- 22 Appiah（2008: 89-91）。「トローリー学」という用語を最初に使ったのは Appiah とされる（Edmonds 2013=2015: 265）。
- 23 Hauser et al.（2007）の実験では、ループシナリオで線路の切り替えをすることについては56%のひとが、ブロック付きループシナリオでは72%がそれぞれ道徳的に許容できると答えた。ループシナリオは1人の死を手段としているにもかかわらず、跨線橋シナリオ（Frank）よりも許容するひとが多い。一方、ブロック付きループシナリオで1人の死は「予見される危害」だが、もとの待避線シナリオ（Denise）よりも許容するひとの割合は低下している。また、社会経済的地位による違いは大きくなかったされる。
- 24 たとえば Greene et al.（2009）は、鍵になると思われた要素（身体的接触のある・なし、距離的近接性のある・なし、人身的な力 personal force を用いる・用いない、手段か・副次的効果か）が道徳的許容度をどれほど左右するかを探っている。単純な比較は難しいが、1人の死を手段として用い、かつ人身的力を用いたケースで相対的に許容度が低くなっている（Fig.4）。そのほかにも、感情に関わる脳部位に疾患のある患者と健常者との比較、医師と公衆衛生専門家の比較など、被験者の属性による違いも検証されている（注27も見よ）。

- 25 判断の分布に影響している要素（たとえば人身的な力を用いる行為かどうか）自体は道徳的に重要でないという見方そのものは、経験科学の結論ではなく、いわばGreeneの直観的判断である。そしてこの「道徳的判断が道徳的に重要でない要素に影響されている」というトロリー実験の解釈が、われわれの道徳的直観の正体暴露—(1)(2)から(3)への移行—において跳躍板の役割を果たしている。このロジックについては別の機会に譲りたい。道徳心理学の倫理学にとっての意義に関しては、Greeneを標的としたBerker（2009）による批判を見よ。GreeneのBerkerへの反論はウェブ上に公開されている（Greene 2010）。
- 26 Greene et al.（2001）。
- 27 トロリー実験の解釈、二重過程脳説、および、これに依拠した功利主義擁護についてはGreene（2013=2015, 2014）を見よ。これらの理論は（本人も認めるとおり）Daniel KahnemanとJonathan Haidtの影響を受けている（Kahneman 2011=2012；Haidt 2012=2014）。ただ、HaidtとGreeneの間には細部において異同がある。Greene（2013=2015: 449ff）のほか、唐沢（2013: 87-88）も見よ。
- 28 注25参照。
- 29 道徳における普遍性を採用しないひと（道徳的に正しいことは、誰にとっても正しいとは考えないひと）が、他者の行為については道徳的に容認できないと判断しても自分が行うことは許されると判断する（あるいはその逆の）可能性もある。
- 30 Abend（2012: 177-178）も指摘するように、実際にこれを実験・調査することは重要ではあるがかなり困難な課題である。ただ、言うまでもなく、道徳性に関わる行動を対象とした実験は可能であり、広く行われている。
- 31 もちろんこれは、どのような研究プログラムを採用するかに相対的な問題ではある。哲学者にとっては道徳の客観的評価の可能性が主要な関心事であるため、道徳的判断が研究の中心になるという指摘がある（鈴木 2013: 145）。トロリー実験の先駆者のひとりでもあるJohn Mikhailは、ひとが普遍的に持っている「道徳文法 moral grammar」の構造解明を目的とする研究者だが、彼にとってトロリー問題はあくまで道徳的認知の実験であり、解明すべき課題は「特定の行為者がその状況でどのように行為するか」ではなく、「なぜひとは各種のトロリージレンマに対してそのような仕方判断するのか」だと明言している（Mikhail 2011: 96）。
- 32 ここでは詳述しないが、このタイプのシナリオ実験には次のような限界もある。まず、行為の道徳的正しさは、道徳的価値に関わる問題のごく一部であるに過ぎない（Abend 2012）。また、ある行為は、道徳的に許容できる permissible かどうかだけでなく、禁じられているか forbidden、あるいは要請されているか required といった観点からも評価されうる（Kahane & Shackel 2010: 565ff）。
- 33 Joeはこの実験シナリオの登場人物である。Greene et al.（2009: Supplemental Materials, Directions）参照。
- 34 被験者を3Dのヴァーチャル・リアリティ環境に置いて、トロリーの進路を切り替えるよう設定されたレバーを引かせる実験（轢かれる人達の悲鳴付き）も行われて

いる（Navarrete et al. 2012）。

- 35 これとは異なる批判としては、シナリオに描かれた状況がひとにとっては馴染みが薄く不自然だというものがある。シナリオ状況が必ずしもひとが日常的に出遭うものでないことは確かだが、にもかかわらずわれわれはその状況を理解し、特定の道徳的判断を下すことはできる（Mikhail 2011: 94-100）。
- 36 Greene et al. (2009: Supplemental Materials, Directions)。
- 37 保留できなかった・しなくなかったとした被験者と、混乱を感じたという被験者を合わせてサンプルの約6%が除外されている（Greene et al. 2009: 366）。
- 38 Greene (2013=2015: 283)。訳文を少し変更させてもらった。
- 39 Greene (2014: 708-710)。前者は31/33%, 後者は59/63%（2つの数字は、前者と後者でそれぞれ使われた2種のシナリオに対応）。「道徳ボタン」については Greene et al. (2009: 370) も見よ。
- 40 通常、実験では分割された被験者群はそれぞれ一つのシナリオだけを割り当てられる。ここで言っているのは仮に異なるシナリオを提示されていたらという意味である（順序の効果を見るために、同じ被験者グループに異なるシナリオを読ませることはある）。
- 41 Mikhail は被験者たちの直観の示す分散が重要なトピックであることを認めつつも、ある判断を許容できるとしたひとの割合が50%以上か以下かで「許容可能な permissible / 禁じられた forbidden」判断へとデータを二値化し、これを道徳文法という彼の仮説が説明すべき対象として設定している（Mikhail 2011: 110, 126）。Greene も、心理学実験が平均の違いに関するものであることに注意を促してはいるが（Greene 2013=2015: 105）、集団内でのヴァリエーション自体への関心は薄い。
- 42 注40参照。また、統計的に有意な差があったかどうかだけからは、「道徳ボタン」がどれほどの人で押されているかは定まらない。小さな差であってもサンプルが大きければ統計的有意となりやすい。このとき、「道徳ボタンを押される」被験者は相対的には少数でありうる。
- 43 Greene (2016: 177)。

【文献】

- Abend, Gabriel, 2010, "What's New and What's Old about the New Sociology of Morality," Steven Hitlin & Stephen Vaisey ed., *Handbook of the Sociology of Morality*, Springer, 561-584.
- Abend, Gabriel, 2012, "What the Science of Morality Doesn't Say About Morality," *Philosophy of the Social Sciences*, vol. 43, no.2, 157-200.
- Anscombe, G.E.M., [1957] 1963, *Intention 2nd edition*, Basil Blackwell. (=管豊彦訳『インテンション—実践知の構造—』産業図書.)
- Alexander, Joshua, 2012, *Experimental Philosophy: An Introduction*, Polity Press.
- Appiah, Kwame Anthony, 2008, *Experiments in Ethics*, Harvard University Press.

- Berker, Selim, 2009, “The Normative Insignificance of Neuroscience”, *Philosophy & Public Affairs*, vol.37, no.4, 293-329.
- Edmonds, David, 2013, *Would You Kill the Fat Man?: The Trolley Problem and What Your Answer Tells Us about Right and Wrong*, Princeton University Press. (=2015, 鬼澤忍訳『太った男を殺しますか? : トローリー問題が教えてくれること』太田出版.)
- Foot, Philippa, 1967, “The Problem of Abortion and the Doctrine of the Double Effect,” *Oxford Review*, no.5, 5-15.
- Greene, Joshua D., 2010, “Notes on ‘The Normative Insignificance of Neuroscience’ by Selim Berker,” URL: <https://joshgreene.squarespace.com/s/notes-on-berker.pdf>
- Greene, Joshua D., 2013, *Moral Tribes: Emotion, Reason, and The Gap Between Us and Them*, The Penguin Press. (=2015, 竹田円訳『モラル・トライブス——共存の道徳哲学へ (上・下)』岩波書店.)
- Greene, Joshua D., 2014, “Beyond Point-and-Shoot Morality: Why Cognitive (Neuro) Science Matters for Ethics,” *Ethics*, vol.124, 695-726.
- Greene, Joshua D., 2016, “Solving the Trolley Problem,” Justin Systema & Wesley Buckwalter ed., *A Companion to Experimental Philosophy*, Wiley, 175-178.
- Greene, Joshua D., R. Brian Sommerville, Leigh E. Neystrom, John M. Darley, Jonathan D. Cohen, 2001, “An fMRI Investigation of Emotional Engagement in Moral Judgment,” *Science*, vol.293, 2105-2108.
- Greene, Joshua D., Fiery A. Cushman, Lisa E. Stewart, Kelly Lowenberg, Leigh E. Neystrom, Jonathan D. Cohen, 2009, “Pushing Moral Buttons: The Interaction Between Personal Force and Intention in Moral Judgment,” *Cognition*, vol. 111, no.3, 364-371.
- Kahane, Guy & Nicholas Shackel, 2010, “Methodological Issues in the Neuroscience of Moral Judgment,” *Mind & Language*, vol.25, no.5, 561-582.
- Kahneman, Daniel, 2011, *Thinking, Fast and Slow*, Farrar, Straus and Giroux. (=2012, 村井章子訳『ファスト&スロー——あなたの意思決定はどのように決まるか? (上・下)』早川書房.)
- Kamm, F.M., 2016, *The Trolley Problem Mysteries: With Commentaries by Judith Jarvis Thomson, Thomas Hurka, and Shelly Kagan*, Oxford University Press.
- 唐沢穰, 2013, 「社会心理学における道徳判断研究の現状」『社会と倫理』, 第28号, 85-99.
- Knobe, Joshua, 2003, “Intentional Action and Side Effects in Ordinary Language,” *Analysis*, vol.63, 190-193.
- Mackie, J.L., 1977, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Pelican Books [Reprinted in Penguin Books 1990] . (=1990, 加藤尚武監訳『倫理学——道徳を創造する』哲書房.)
- Mikhail, John, 2011, *Elements of Moral Cognition: Rawls’ Linguistic Analogy and the*

- Cognitive Science of Moral and Legal Thought*, Cambridge University Press.
- Navarrete, C. David, Melissa M. McDonald, Michael L. Mott, and Benjamin Asher, 2012, “Virtual Morality: Emotion and Action in a Simulated Three-Dimensional ‘Trolley Problem’,” *Emotion*, vol.12, no.2, 364-370.
- Haidt, Jonathan, 2012, *The Righteous Mind: Why Good People Are Divided by Politics and Religion*, Pantheon. (=2014, 高橋洋訳『社会はなぜ左と右に分かれるのか——対立を超えるための道徳心理学』紀伊國屋書店.)
- Hauser, Marc, Fiery Cushman, Liane Young, R. Kang-Xing Jin and John Mikhail, 2007, “A Dissociation between Moral Judgments and Justifications,” *Mind & Language*, vol.22, 1-21.
- Sinnott-Armstrong, Walter, 2008a, “Introduction,” Sinnott-Armstrong ed. (2008b: xiii-xviii).
- Sinnott-Armstrong, Walter, 2008b, “Introduction,” Sinnott-Armstrong ed. (2008c: xiii-xix).
- Sinnott-Armstrong, Walter ed., 2008a, *Moral Psychology Volume1: The Evolution of Morality: Adaptations and Innateness*, MIT Press.
- Sinnott-Armstrong, Walter ed., 2008b, *Moral Psychology Volume2: The Cognitive Science of Morality: Intuition and Diversity*, MIT Press.
- Sinnott-Armstrong, Walter ed., 2008c, *Moral Psychology Volume3: The Neuroscience of Morality: Emotion, Brain Disorders, and Development*, MIT Press.
- 鈴木真, 2013, 「哲学・倫理学における道徳判断研究の現状—道徳判断の本性と情理—」『社会と倫理』, 第28号, 119-148.
- Tiberius, Valerie, 2015, *Moral Psychology: A Contemporary Introduction*, Routledge.
- 常松淳, 2014, 「神経科学の社会的インパクトをどう捉えるか—理論的検討と経験的研究—」『桜文論叢』 第87巻, 169-189.
- 常松淳, 2015, 「科学データからの往路と復路」『桜文論叢』 第90巻, 51-75.

「アジア雑誌」(*Journal asiatique*) —19世紀フランスにおける日本研究の黎明期

中 村 圭 子

はじめに

Journal asiatique (「アジア雑誌」) は、フランス・パリを本拠地とする Société asiatique (アジア協会) が発行する学術雑誌である。この雑誌は、アジア協会が設立された1822年から現在にいたるまで定期的に発行し続けられている、フランスで最も古いアジア研究の雑誌である。創刊当初の雑誌には、「アジアすなわち東洋諸国民の歴史・思想・自然科学・文学・言語に関する研究論文・抜粋・解題集¹」と記されている。フランスは他のヨーロッパ諸国に先駆けて、アジア研究の拠点となるアジア協会を設立した。現在、本部はフランス学士院を構成するアカデミーの一つ、碑文・文芸アカデミーの中にある。アジア協会は設立当時について次のように振り返っている。

アジア協会は東洋学とともに誕生している。19世紀初頭はヨーロッパにおいてアジア諸国の言語、文学、宗教、思想や記念物の発見の時代であり、研究をより正確な知識に導く前に批判的調査の精神が方法論を手に入れた時代であった。それはまたアジア諸国の教養人がヨーロッパ人の科学に心を開き、それらの研究に喜んで協力してくれた時代であった。知識の交換という一つの国際的な精神が生まれたのである²。

アジア協会はこうした時代背景の中で、アベル・レミュザ（Jean-Pierre Abel Rémusat, 1788-1832）、ラストゥリー（Charles Lasteyrie, 1759-1849）、フォリエール（Claude Fauriel, 1772-1844）、サン・マルタン（Antoine-Jean Saint-Martin, 1791-1832）といった中国学者や東洋学者たちの発案のもと、1822年4月1日に第一回の総会が行われ設立された。そして1822年4月22日にアジア協会が正式に発足する。名誉会長にはオルレアン公を迎え、シルベストル・ド・サシ（Antoine-Isaac Silvestre de Sacy, 1758-1838）がアジア協会初代会長（1822-1829, 1832-1835）となった。アジア協会は設立の目的を次のように記している。

公開講座で教える諸言語の研究に有益または必要不可欠と認められた文法書、辞書または入門書を編纂・出版させること。フランスまたは外国で企画された同種の著作の予約申し込みまたは出版に協力すること。アジアの文献を入手し、ヨーロッパの公共施設にある文献の全体あるいは一部を複写させ、翻訳や抜粋を作らせ、印刷、製版、石版によって数を増やすこと。東洋諸国の地理・歴史・科学・芸術に有益な文献の著者に対して、その努力の成果が聴衆に届くようにすること。アジアの書誌に当てられた定期刊行物の出版によって、東洋の科学的・文学的・詩的な作品、ヨーロッパで日の目を見る可能性のある同種の作品、ヨーロッパに関係しそうな出来事、東洋諸民族が主題となりえるあらゆる種類の発見や業績に聴衆の注意を喚起すること。以上アジア協会が定める目的である³。

アジア協会はマグレブから極東に至る広範囲な地域を研究対象としているが、本論稿では、1822年から1862年までの40年間に掲載された日本関連の論文、抜粋、報告に絞って年代順に取り上げ、必要に応じて補足を加えたい。そして19世紀中ごろまでに「アジア雑誌」を通して、どのような日本研究がなされたのか、若干の考察を試みたいと思う。尚、《Journal asiatique (1822-1862) 日本関連記事一覧⁴》に沿って、重要と思われた記事を紹介していきたい。

「アジア雑誌」(1822年～1862年)

1822年

— João Rodriguez (1561?-1633) *La Grammaire Japonaise* (『日本文典』) の出版の決定⁵

アジア協会は“有益かつ不可欠な文法書や辞書の編纂・印刷”物としてロドリゲスの日本語文法書の翻訳を決定する。日本語文法書としては Collado⁶ が書いた『日本文典』(1632)があるが、ラテン語で書かれた不完全な文法書だった。この機会に王立図書館が所蔵するロドリゲスの *Arte di Lingoa de Iapam* (『日本文典』) をポルトガル語からフランス語に翻訳して出版することになった。翻訳の責任を担ったのはランドレス (Charles-César Clerc de Landresse, 1801-1867) である。ロドリゲスの『日本文典』には1604年から1609年にかけて長崎で出版された版と1620年にマカオで出版された簡約版の2種類がある。フランス語に訳されることになったのは後者である。ロドリゲスは1577年に16歳で来日し、日本でイエズス会士となって1609年まで30年余りを日本で過ごしている。秀吉や家康の知遇を得た稀有な宣教師で、多くの日本人とも接したロドリゲスの日本語文法書は、19世紀の東洋学者のあいだではよく知られた文献であった。19世紀初頭のフランスにはフランス語で学べる日本語学習書がなかったので、アジア協会が『日本文典』の翻訳を設立直後の出版事業に選んだ意義は大きい。

— Isaac Titsingh (1745-1812) *Illustration of the History, Manners and Customs, Arts, Sciences, and Literature of Japan*⁷ (『日本風俗図誌』) の出版報告⁸

オランダ人ティチングの『日本風俗図誌』は、いずれも彼の死後にまずフランス語で2冊に分けて出版されている。1冊は1819年の *Cérémonies usitées au Japon pour les mariages et les funérailles* (『日本における婚礼と葬式』) で、もう1冊は1820年の *Mémoires et anecdotes sur la dynastie régnante des djogouns* (『歴代将軍譜』) で、レミュザが註や解説を加えている。英訳版はそれらを1冊

にまとめたものである⁹。ティチングは長崎出島の商館長として1779年、1781年、1784年と3度来日して3年8か月余り日本に滞在している。江戸参府で將軍に謁見し、江戸の蘭学者や長崎通詞と親交を深め、多くの貴重なコレクションをヨーロッパに持ち帰っている。『日本風俗図誌』は、ティチングが日本滞在中に見聞き観察した歴史・風俗・習慣に関する記述と、彼と親交のあった日本人から入手したと思われる日本語の文献を翻訳した記述で構成されている。日本や日本人の様子が伺える貴重な文献がフランス語版から英訳されたことは、イギリスにおける日本研究への関心の高さが伝わる出来事である。

— Martin Heinrich Klaproth (1783-1835) *L'origine du Papier-monnaie* (「紙幣の起源」) に補足¹⁰

クラプロートは、「アジア雑誌」の創刊号に寄稿した「紙幣の起源」という論文に付記する形で、日本の紙幣について短い文章を寄せている¹¹。ドイツ人クラプロートは19世紀最高の中国学・東洋学の学者の一人であり、「アジア雑誌」を通じてフランスのアジア研究の発展に多大な貢献した人物である。来日する機会はなかったが、この文章はクラプロートが「アジア雑誌」の中で最初に日本に触れた短い記事と言えよう。

1823年

— ロンドン・アジア協会の設立¹²

パリのアジア協会の成功に追随する形で設立されたこと、会員の多くはパリの会員でもあることが記され、かなり対抗意識が感じられる。

— *La Grammaire japonaise* 翻訳の中間報告¹³

ランドレスに任せた『日本文典』の翻訳の進捗状況を報告している。

— 図書館の開館¹⁴

火、土の1時～4時に開館することになる。アジア協会の歴代の図書館員か

らパジェスやロニーといった日本研究者が育っている。

1824年

— Eduard King Kingsborough (1795-1837) 日本の文献を寄贈¹⁵

キングスボロウ卿から寄贈された主な文献は、杉田玄白『解体新書』や『和漢三才図絵』、『日本王代一覧』、『太平記』と思われる¹⁶。

— Philipp Franz Barthasar von Siebold (1796-1866) の手紙について報告¹⁷

長崎出島のシーボルトから届いた手紙の写しを、ボンのシュレーゲル (Hermann Schlegel, 1804-1884)¹⁸がアジア協会に送ってきたことに関する報告である。この手紙の内容から、日本に滞在するシーボルトは、自身の日本研究の方向性を定めるために、アジア協会を通じて当時のヨーロッパで知りえた日本情報を手に入れたいと願っていたようだ。シーボルトは1823年に長崎商館付医師としてだけでなく、日本情報の収集という任務も帯びて出島に到着している。シーボルトの手紙がアジア協会に届いた1824年は、彼が長崎の鳴滝に塾を開いた年である。

—日本の地図について報告¹⁹

フランスで18世紀後半から19世紀初頭に紹介された日本地図について比較検討している。ティチングの『日本風俗図誌』に掲載された地図、レミュザが所有する地図、クラブロートが1805年から1806年イルクーツクに滞在したおりに、日本人の助けを借りて翻訳した地図を紹介している。なかでも最も優れている地図は、出島で製作された江戸、大阪、京都、長崎の地図であると報告している。ところで、宗谷岬を発見したラ・ペルーズ (1741-1788) が『世界周航紀』を刊行したのは1797年のことであり、すでに日本近海の様子はフランスに伝えられていた。しかし鎖国中の日本へ上陸して調査にあたることはできなかったため、当時フランスで目にすることができた日本国内の地図は限られていたことから、わざわざ報告したものと思われる。19世紀初頭はヨーロッパで学術的

にも政治的にもアジア地域の地理への関心が高まっていた。フランスの地理学協会は、アジア協会設立の前年1821年に、ナポレオンの海外遠征に調査団として同行した学者が中心となって創設されている。

1825年

—ランドレスの『日本文典』*Eléments de la Grammaire japonaise* の出版²⁰

ロドリゲスの『日本文典』のフランス語版が、ランドレスの翻訳で完成して出版される。レミュザが日本語の音綴表の解説を行っている。

—クラプロート *Mou nin sima* 「無人島」について翻訳²¹

1785年に江戸で出版された『三国通覧』の中から、小笠原諸島の無人島について抜粋を翻訳している。

—クラプロートが日本語の辞書出版を提案²²

この提案が具体化された様子はない。

1826年

—ランドレスの『日本文典』(*Eléments de la Grammaire japonaise*) に付記を追加²³

この付記は、フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769-1859)²⁴ が所有するメキシコで出版されたオヤングレン (Oyanguren, 1688-1742) の日本語文法書²⁵ とロドリゲスの『日本文典』を比較して書かれている。フンボルトは南米大陸探検のうちに、この日本語文法書を手に入れたのではないかと思われる。

—Johann Joseph Hoffmann (1805-1878) を会員に承認²⁶

ホフマンは1830年にシーボルトとの出会いがきっかけで、日本語を習得することになったといわれている。しかし彼はシーボルトと出会う前の1826年に、アジア協会の会員になっている点に注目しておきたい。大学で文献学を学んだ

ホフマンは、学生時代にアジアや日本の文献に触れる機会があった可能性がある。したがってホフマンを日本語や日本研究に直接導いたのはシーボルトだったかもしれないが、彼はアジアや日本への関心をそれ以前から持っていたことが、アジア協会への入会時期から今回明らかにできた。ホフマンはシーボルトが『日本』を編纂する際に多大な協力をしている。1855年にはライデン大学日本語科の教授にも就任し、ホフマンが1868年に出版した『日本文典』は、優れた日本語文法書としてヨーロッパで長く利用されている。

1828年

—クラプロート *Fookoua Siriad ou Traité sur l'origine des richesses au Japon*²⁷
の翻訳と註²⁸

日本の金銀貨の貨幣改鑄の歴史や金銀銅貨の各地の採掘について、新井白石(1657-1725)の文献から翻訳・解説していると思われる。クラプロートは白石が正徳・享保期の良貨政策に尽力していることなど、著者について特に触れてはいない。ところで白石は、宣教のため屋久島に上陸して捕まったイタリア人イエズス会士、シドッチ(Giovanni Battista Sidotti, 1668-1715)の取り調べを江戸で行っている。そしてその時の記録をまとめた詳細な海外事情が『采覧異言』、『西洋紀聞』である。これらの著書は執筆当時に公にされることはなかったが、クラプロートがイルクーツクで日本語を学んでいたおよそ100年後、19世紀初頭頃から流布し始めたようである。

—Pierre-François de Charlevoix (1682-1761) *Histoire du christianisme au Japon* の出版²⁹

フランス人イエズス会士シャルルボワが、1715年に出版した3巻本『日本キリスト教史』³⁰の新版である。

—クラブロート *Mémoires relatifs à l'Asie* 『アジアに関する論文集』第3巻についての報告³¹

クラブロートが執筆した論文集の中でも、ケンペルト (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) がヨーロッパに持ち帰った、日本製世界地図に関する記述に注目している。クラブロートは70年前に書かれた手書きの写しをもとに論文を書いている。この地図が、ロンドンの大英博物館所蔵のケンペルト・コレクションに含まれている、1688年(貞享5年)出版の『萬國總界図』であることを確認したと報告している。アジア協会には、1821年に創設された地理学協会の会員が多くいたことから、『萬國總界図』は話題性があったと思われる。

1829年

—クラブロート「日本の漢字の使い方と日本語の異なった音と綴りについて」³²

クラブロートはまず自分がどのようにして日本語を習得したか記している。彼は1805年から1806年にかけてイルクーツクに滞在したおり、日本人新蔵 (Sinsou)³³から日本語を習ったという。またその際に早引節用集を使って日本語を学習し、漢字、ひらがな、カタカナも習得したと明かしている。この論文の中では日本の文字の歴史、いろはやカタカナの一覧表が付され、韓国語の単語についても記述がある。日本関連の記載に不正確な部分も見受けられるが、クラブロートが日本語を習得するために参考にした辞書や文献を知るてがかりとして興味深い。

—シーボルトから管理しやすい植物の種が到着³⁴

シーボルトが植物の種を日本から送ってきたことに対して、内務大臣の謝意を表す手紙を学会から送ったことが記されている。この種のサンプルはフランス国王の庭園に届けられ、国王も目にしたようだ。この報告がされたのは1829年2月のアジア協会の会合で、シーボルトが日本から追放されたのは同年12月である。ただしシーボルトが実際に種を日本から送ったのは、手紙の日付からさらに1年2か月前の1827年12月と思われる。いずれにしても日本追放前の

シーボルトの動向がわかる報告である。

—シーボルトからの手紙³⁵ (1827年12月15日付, 出島より)

シーボルト自身が *Quelques mots sur l'origine des Japonais* (「日本人の起源についての小論」) という論文の出版を依頼するため、アジア協会に送ってきた手紙が掲載されている。この手紙には日本国内で訪れた町を正確に測量したことや、富士山の測量のために登山隊が組織されたことが記されている。また研究のため収集した膨大な量の書籍や動植物について紹介し、出島にオランダ政府の出資で植物園を作って、1200種もの植物を育てていると書いている。さらにシーボルトは、科学に貢献するだけでなく、人類の役に立ちたいと願っているので、フランス国王に植物の種と手紙を送った旨を記している。日本からアジア協会に対して、熱心に研究成果を報告していたシーボルトの想いが伝わる貴重な手紙である。

—シーボルトから送られた「日本人の起源に関する小論」について報告³⁶

クラプロートはシーボルトの論文を2名の会員と査読した結果、内容がかなり不正確であり、アジア協会からの出版は見合わせたと報告している。ヨーロッパ有数の東洋学者が集まるアジア協会の論文審査は厳しかったようである。

—シーボルトが取り上げた日本と韓国の文献について報告³⁷

シーボルトがおそらく「日本人の起源に関する小論」の中で言及した、歴史や地理に関する文献を、書名に補足を加えて紹介した記事である。なかでも地理に関する文献に注目しておきたい。まず琉球の風俗等を図解入りで著わした森嶋中良の『琉球談』(1791)。次に松前奉行所の蝦夷通詞だった上原熊五郎が著わした『もしほ草』(1792)。これは蝦夷言葉の語彙集で、最上徳内(1754-1836)が編纂に協力したといわれている書物である。この語彙集の写本をシーボルトは *Vocabulaire complet de la langue de Iezo* として今回の文献の中に含めている。おそらくシーボルトは徳内から直接この写本を受け取ったと考え

られ、シーボルトと徳内の交流を示す資料の一つといえる³⁸。さらに注目すべき写本は次の2点である。*Voyage de Mamia Rinsoo*(1808), *Description des îles de Iezo et de Karafto*(1810)。これらは間宮林蔵(1781-1844)が幕府の命で樺太の探検調査を行い、樺太が島であることを突き止めて、間宮海峡発見につながった調査の記録、『東鞆地方紀行』、『北蝦夷島図』、『北夷分界余話』ではないかと思われる。これらは1810年に編纂を終え、幕府に献上された非常に貴重な文献である。これらの文献の写本の入手経路は明らかではないが、シーボルトと交流のあった幕府天文方、高橋景保(1785-1829)が関わっているに相違ない。シーボルトが論文の中で紹介した日本の地理に関する文献は、シーボルト事件につながる重要な証拠の数々と捉えることもできるので驚かされる。シーボルトは論文を書いた時点で、自分が手入した地図の写本が、日本追放の一因になるとは想像もできなかったはずである。いずれにしてもシーボルトはオランダのためだけでなく、フランスのアジア協会のためにも有益な日本情報を提供していたことになる。

1831年

—シーボルト「アイヌの風俗と習慣」³⁹

この論文はアジア協会からは出版されなかった、ドイツ語版『日本人の起源』から抜粋してフランス語に訳したものである。シーボルトの蝦夷研究は、江戸参府のおりに最上徳内との交流で深められたと考えられる。実際にエゾ語の編纂に徳内の協力を得ている⁴⁰。

1833年

—クラブロート「日本の内裏あるいは天皇について」⁴¹

クラブロートは、日本に二人の皇帝“empereur”がいるとヨーロッパで間違っ

て伝えられている点を指摘して、その違いを説明している。間違いの原因は天皇と将軍を表すために、同じ“empereur”という単語を使っているからで、本来の天皇(empereur)にあたる人はDaïriとよばれ、将軍に“empereur”を使

うのは誤りであると説明している。誰が日本を治めているかという問題は、ヨーロッパ諸国にとって重要なことであり、天皇と将軍の関係をティチングの言葉を引用しながらその皇統とともに簡潔にまとめている。

—日本に関する新著の出版⁴²

シーボルト『NIPPON』の第1巻が出版され、東洋学者が待ち望んでいた著書として紹介される。

—クラブロート「中国と日本の年代記」の解説⁴³

国王の図書館が100年以上も前から所蔵する上代から慶長16年(1611)までの和漢対照年表である『倭漢皇統編年合運』を紹介している。

1835年

—シーボルト『NIPPON』第2巻の出版と『日本植物誌』の刊行開始⁴⁴

1846年

—シーボルト ライデン図書館の日本書籍や写本の図録を出版⁴⁵

この図録はライデン図書館が所蔵する595冊の日本書籍や写本に、オランダ語と日本語の書名を付けたものである。シーボルトはホフマンの協力も得て1845年に出版している。特に今までヨーロッパでほとんど知られていなかった日本文学の蔵書に注目している。またこの報告の中で、長崎のオランダ商館から近年は音沙汰がなく、日本に関する翻訳や書籍がアジア協会に届かないことに不満を漏らしている。

1847年

—Jules Mohl (1800-1876) の報告⁴⁶

アジア協会設立25周年に寄せてモールが行った報告である。25周年を振り返って、東洋学の研究の足跡をたどり課題や問題点を取り上げている。今後は

東洋学者とアジアへの旅行者が互いに協力し支え合うことで、フランスの東洋研究に新たな活路を見出せるのではないかと記している。

1848年

—日本語の翻訳書に関する報告⁴⁷

モールは出版された2冊の翻訳書を紹介するにあたって、近年日本語の文献がフランスに届かないことに対して、「長崎のオランダ人が日本語や日本文学に対して何の貢献もしていないからだ」と非難している。2冊の訳書について、まずホフマンの *Yo-san-fi-rok, l'art d'élever les vers à soie au Japon* (『養蚕秘録』1803)⁴⁸を絶賛し、この翻訳本はフランスの養蚕業に役立つ書物として養蚕学会でも評価されていること、今後こうしたテーマが研究されることにアジア協会が期待していると記している。次にフィッツマイヤー (August Pfitzmaier, 1808-1887) がドイツ語に訳した柳亭種彦の『浮世六枚屏風』(1821)を紹介している⁴⁹。モールはフィッツマイヤーの作品の内容を簡単に解説するとともに、この作品の出版に際してウィーンの王立印刷所が、日本語の草書体で世界初の活版印刷を行ったことを称賛している。モールはこの報告の最後に直接的な言葉は避けているが、2月革命で混乱するフランスそしてヨーロッパ全土を念頭に置いて、このような時こそ平和的な研究をしている学術団体に価値があり、アジア協会を支えるために結束するよう呼び掛けている。

1851年

—ノルウェーの聖書協会から届いた手紙の報告⁵⁰

詳細は明らかではないが、日本の新約聖書が送られてきたことが報告される。

1852年

—ホフマンとシュルツ「日本と中国の植物の名前」を発表⁵¹

この論文に紹介された植物は、オランダにある押葉標本の中から選別されたものである。ホフマンは、オランダ人がヨーロッパに初めて日本の植物相をも

たらしたことを指摘し、17世紀から19世紀現在までのシーボルトやツッカリーニ(Joseph Gerhard Zuccarini,1797-1848)の植物誌の業績を紹介している。今回は先人の研究をもとに、特に日本の植物を日本語名と中国語名でアルファベット順にまとめて発音と漢字表記を一覧にしている。発音に関しては必ずしも正確に記されてはいないが意欲的な試みである。

1853年

—Léon de Rosny (1837-1914) 日本文学について発表⁵²

ロニーはこの年、弱冠16歳でアジア協会の会員に迎えられ、この研究発表はロニーがアジア協会で初めて行った日本に関する発表であった。彼はアジア協会会員で中国学の権威、コレージュ・ド・フランス教授、ジュリアン(Stanislas Aignan Julien,1797-1873)の弟子でもある。

1854年

—ロニー ヨハネ福音書を日本語に翻訳し日本語のカタカナを使って印刷・出版したことの報告⁵³

—ロニー 日本語の新しい活字の初刷りを報告⁵⁴

17歳のロニーは、帝国印刷所所長に日本語の活字の作成に助言させてもらえるように手紙で願い出ている。この件は了承され、ロニーは以来33年間にわたって、日本語の印刷に必要なひらがな、カタカナ、漢字の活字作りに尽力している⁵⁵。翌1855年には、ひらがなの字型を印刷所に治めていることもアジア協会で報告されている⁵⁶。

1855年

—ホフマン訳「日本の陶器の主な産地」について解説⁵⁷

この翻訳の原典は1799年に大阪で出版された法橋關月著、『山海名産圖會』(全5巻)である。この書物は日本の山や海の産物を図解したもので、ホフマン

が翻訳抜粋した「日本の陶器の主な産地」は第5巻にあたる。ホフマンはライデンの日本博物館や、デン・ハーグの王立博物館に所蔵されている図録や写本を利用し、ケンペルトやシーボルトの研究を参照しながら解説している。ホフマンが日本語の固有名詞の発音を、ほぼ正確にローマ字表記していることには驚かされる。

—ロニー *Introduction à l'étude de la langue japonaise* 出版の予告⁵⁸

ロニーはこの日本語学習入門書に『日本語考』⁵⁹と日本語の表紙をつけ、自分の名前を漢字で“羅尼”と当て字している。ロニーは序文の中で、日本語の学習が“文学的・科学的好奇心を満足させる”ためだけのものではなく、“政治的な儀礼や商業的な利益”に必要不可欠になるだろうと述べている。おそらくこの文章は、1854年に結ばれた日米・日英・日露和親条約を念頭において書いたのであろう。日本語の起源、漢字の使い方、日本語の文法、日本文学について教科書的に一冊にまとめている。特に日本語の異なった書体を発音とともに詳しく解説している点は、ロニーの活字に対するこだわりが見て取れる。

1858年

—ロニー 「日中辞典についての考察」⁶⁰

『書言字考』、『手引節用集大全』、『文翰節用通寶蔵』、『會玉篇大全』といった辞書について、ごく簡単に言葉の説明や辞書の使い方を説明している。

1859年

—シーボルト 日本へ再出発⁶¹

アジア協会は日本へ出発するシーボルトに、日本の情報を協会に送ってくるように依頼し、シーボルトはアジア協会に対して出版物を日本に送ってくれるよう願ったことが報告されている。

—Léon Pagès (1814-1886) の記事「日本とヨーロッパ列強との条約」について⁶²

パジェスが *Le Correspondant* に掲載した記事⁶³について、モールが報告を行っている。日本が米・英・露・仏と条約を結んだことに対して日本の将来を憂えて、“日本人のいかなる英知をもってしてもヨーロッパ人は日本に政治的な危険をもたらすだろう”と述べている。「アジア雑誌」で政治的な主題が扱われることは稀であるが、東洋学者たちも開国に揺れる当時の日本情勢から目が離せなかったに違いない。

1860年

— Louis-Théodore Furet 神父 (1816-1900) からロニーに届いた手紙⁶⁴

この手紙はフュレ神父が函館や琉球などからロニーに宛てて書いた手紙である。フュレ神父がロニーに手紙を書くことになった経緯は明らかにされていない。手紙に続いてロニーが、*Sin-kagami-gousa* (『新鏡草』) の一部を初めてフランス語に訳している⁶⁵。日本人に広く知られた教義書として『新鏡草』を翻訳・解説し、巻末にアイヌや韓国語などの単語集をローマ字で添えている。

1861年

— ロニー 「東アジア諸島に関する考察」⁶⁶

ロニーが中国語と日本語の文献の中から、東アジア諸島の民族学や地理学に関連のある箇所を翻訳と解説を行っている。日本に関しては、当時“日本の百科全書”(Encyclopédie japonaise)と東洋学者に言われていた『和漢三才図絵』から蝦夷・日本・琉球を取り上げている。また例えば日本語の単語の発音について、漢字が組み合わさっている場合の間違いなど具体例を挙げて説明している。

1862年

— シーボルト『日本』についてロニーの解説⁶⁷

シーボルトの大著『日本』の中から、主に日本文明の創世記や日本の歴史など「アジア雑誌」にふさわしい主題について紹介している。

—パジェス 『日仏辞典』 第1巻の出版の報告⁶⁸

パジェスがフランス語版『日仏辞典』⁶⁹の出版を始めることが報告されている。この辞書は、1603年と1630年にポルトガルの宣教師たちが編纂した『日葡辞典』や、ロドリゲスの『日本文典』をもとに編纂され、5巻本として1868年までかけて出版されている。この辞書の出版が、日本語の文法書や仏和辞典の出版に今後つながることを予告している。パジェスの『日仏辞典』は、今なお研究者の間で高く評価されている“日仏対訳辞典”である。パジェスは他に『日本切支丹宗門史』⁷⁰の翻訳も手掛けている。また『日本図書目録』⁷¹は、ヨーロッパ各地の図書館に所蔵されている日本書籍を調べ上げて作った労作として、アジア協会から出版されている。

—Pemberton Hodgson (1821-1865) 「長崎・函館滞在記1860-1861」の報告⁷²

イギリス初代長崎・函館領事ホジソンの日本滞在記が、ロンドンで出版されたことを、この本の内容とともに簡単に紹介している。日本や日本人に対する好意的で率直な印象とともに、当時の日本が置かれていた困難な状況も伝えている。この滞在記は、ホジソンが日本から帰国直後に出版された新刊本だったことから、アジア協会でも現在進行形の日本情勢に高い関心が示されていたことが窺える。

「アジア雑誌」と日本研究

1822年から1862年まで40年間に「アジア雑誌」81冊に掲載された、日本関連の記事を年代順に調べたところ、まず19世紀前半のフランスにおける日本研究は非常に進展が遅かったことがわかった。そしてその理由として、この期間に出版された日本に関する文献や提供された情報が、やはり相当限られていたことが確認できた。もちろん日本は鎖国下であり、この点は事前に予想できたことである。「アジア雑誌」に発表された日本研究の40年を振り返って、改めて浮き彫りになった事柄を考察していきたい。

まずアジア協会設立の趣旨を思い出しておきたい。それは“東洋の諸言語を

学ぶために必要な辞書、文法書、基本的な文献の編纂と出版”である。アジア協会が力を注いでいた出版事業について、「アジア雑誌」創刊時から20年間に完成された形で出版された日本文献は、ランドレスが仏訳したロドリゲスの『日本文典』だけである。アジア協会が設立直後に、日本語文法書の翻訳を決定したことは注目に値する。しかし日本語への関心の高さと日本研究への期待が伺われたにもかかわらず、後に続く著書が見当たらないばかりか、断片的な翻訳や文献の抜粋、解説、紹介記事も数えるほどである。特に1830年代半ばから1840年代半ばまでの10年間は、「アジア雑誌」にめばしい研究が見当たらない。フランスではいったい何が起こっていたのか。実はこの時期はレミュザ(1832年)、クラブロート(1835年)、シルベストル・ド・サシ(1838年)といった19世紀を代表する偉大な東洋学者が相次いで亡くなった時期と重なっている。シルベストル・ド・サシはアジア協会設立に尽力し、ヨーロッパの知識人や政府と太いパイプを持ち、アカデミーにも強い影響力のあった人物である。レミュザとクラブロートは語学力に秀で、示唆に富む多くの論文を残した中国学の権威であった。日本に関心を持った東洋学者の多くは、中国語の知識や漢字に親しんでいることが、日本に関する文献学的な研究には強みであった。さらにクラブロートの場合は文献学的な研究のみならず、現地に出向き実証的な研究も取り入れていたことも特徴であった。クラブロートは先に記した通り、19世紀初頭に日本人から日本語を習うという、体験型の日本語学習を経験した数少ない研究者でもあった。1830年代に、フランス東洋学の第一世代といえる優れた研究者たちを相次いで失ったことは、日本研究の発展を遅らせた要因の一つといえるだろう。

さらに考えられることは、シーボルトのように日本から定期的に「アジア雑誌」に論文を投稿する研究熱心な会員がいなくなってしまったことも影響しているだろう。モールは、「訳すべき日本の書物も手元にないのはオランダ人のせいである」とオランダ人たちの怠慢を非難している。論文はおろか研究材料となる新たな資料や文献も届いていない状態は、明らかにフランスの日本研究の停滞を招いたと考えられる。

また日本研究を発表する場が、「アジア雑誌」に限られていたわけではないことも一因だったかもしれない。アジア協会の会員は、地理学協会 (Société de Géographie)、東洋学会 (Société Orientale) やロニーが1859年に設立したアメリカ・東洋民族史学会 (Société d'Ethnographie américaine et orientale) の会員とも重なっており、これらの学会誌にも日本関連の記事の掲載が可能であった。つまり、どの学会誌に寄稿するかは執筆者の裁量であり、「アジア雑誌」の論文数に少なからず影響を及ぼしたのではないだろうか。

次に、日本や日本語に関する出版物や情報量の少なさからくる人材不足が、日本研究の発展を妨げたと言えるのではないだろうか。東洋学者の第一世代亡き後、フランスで日本研究者といえる人物が現れたのは1850年代以降である。ロニーが16歳でアジア協会会員になって、日本関連の論文や翻訳を発表し始めたのが1853年である。パリの東洋語学校に日本語講座が開講したのは1863年で、ロニーが日本語科の初代教授に就任したのは1868年である。フランスでは日本や日本語を本格的に研究し、専門の教育機関で日本語を教えるようになるまでに、「アジア雑誌」創刊から40年もかかったことになる。実は本論稿を、雑誌が創刊された1822年から1862年までの40年に絞った理由もそこにある⁷³。1862年は、日仏交流史の視点に立つならば、文久遣欧使節がフランスを訪れた象徴的な年である。ロニーはこの使節の非公式な通訳として、日本人と親交を深めたことはつとに知られている⁷⁴。フランスの日本研究者と日本人が出会った日仏交流の始まりは、日本研究への新たな時代を予感させ、アジア協会創設から40年を一つの大きな節目ととらえ、日本研究の黎明期と位置づけたい。

「アジア雑誌」の40年を振り返ることで、フランスにおける本格的な日本研究は、19世紀半ば以降に始まったことが確信できた。ではこの雑誌は、フランスの日本研究にどのような役割を果たし、「アジア雑誌」の日本研究にはどのような特徴があったのか。

アジア協会は東洋諸語の文献の編纂と出版を目的としてきた。そこで未知の言語であった日本語に関して、まず出版に必要な“ひらがな”や“カタカナ”という、日本独自の活字の字型作りから始めなければならなかった。例えばロ

ニーが、帝国印刷所の活字製作に30年以上にわたって協力したことは、日本研究を充実させる一助となったはずである⁷⁵。字型が整い、漢字仮名交じりあるいは漢字カタカナ交じりの文章が印刷できるようになったことで、「アジア雑誌」の論文に日本語表記が徐々に増えていった。「アジア雑誌」の出版に必要な活字の整備は、文献学的な日本研究の進展と質の向上に一翼を担ったことになる。

では「アジア雑誌」に掲載された記事にはどのような特徴があり、どのような研究分野が多かったのか簡単に検討しておきたい。研究分野に関しては、雑誌の創刊当初から非常に多岐にわたっていることが特徴といえる。例えば創刊号で取り上げられたロドリゲスの『日本文典』とティチングの『日本風俗図誌』。前者は文法書で、後者は風俗誌である。一方は言語を学ぶための教科書で、もう一方は日本や日本人を知るための一種の情報誌といえよう。この2冊を比較しただけでも違いは明らかである。さらにキングスボロウ卿が寄贈した文献に注目してみると、まず『和漢三才図絵』は日本の百科全書としてヨーロッパで広く知られた文献である。『日本王大一覧』は神武天皇以来の日本の皇統を知る文献であり、『太平記』は優れた日本の歴史文学である。これらの書物は天皇や将軍について知識を得ることができ、日本の体制を理解するために参照される機会の多かった文献である。また日本の地図に関する論文もたびたび発表された。初期の「アジア雑誌」に掲載された日本研究に関して、言語・宗教・思想といった“伝統的な研究”と、風俗・地理・博物といった“世俗的な研究”の両方の分野にまたがる文献が、ほぼ同時にそろっていたことになる。この事実は、鎖国のために情報量が限られていた日本研究に、思いがけない利点となったのではないだろうか。鎖国下では、外国人が日本人を介さずに日本の書物や写本を入手することは不可能であった。外国人つまりオランダ人と接することができた数少ない日本人は、幕府の役人の中でもエリートだったといえるだろう。彼らならば幕府に許される範囲で、オランダ人の求めに応じて有益な文献を厳選できたはずである。つまり、異なる分野の良質な文献が海を越えてヨーロッパに渡ったのは、江戸の日本人に拠るところも大きかった

と言える。こうした制約の中で、多岐にわたる分野の文献が日本から届いたことが、「アジア雑誌」の日本研究に広がりをもたせる幸運な結果となったのではないだろうか。

おわりに

「アジア雑誌」は創刊から約200年、途切れることなく現在も刊行されている学術雑誌である。それはひとえに研究の拠点であるアジア協会が設立以来、“東洋研究の発展に寄与する”という目標を真摯に守ってきたからであろう。

19世紀のフランスでは、アジア協会設立とほぼ時期を同じくして、1821年に地理学協会が設立され、さらに1841年には東洋学会が設立されている。東洋学会は設立に際し、アジア協会とも地理学協会とも設立の趣旨が異なることを明言している。東洋学会は「フランスの利益を守り、東洋のカトリック人口を守ることは国家的な目的」であるとし、「現在や未来に役立つ研究」を目指すとしている。地理学協会の設立の目的は、19世紀に企てられた旅行や探検の調査と分析であった。その調査と分析はフランスの植民地拡大に有効な手段となっていた。そして“明確な目的と意図をもってなされた地理学の研究は帝国主義時代のフランス植民地拡張と経済発展”に向かっていった。このように時代の要請に合わせて活動目的が変化する学会がある一方で、アジア協会のように歴史的にフランスやヨーロッパが混乱に陥った困難な時代も、創設から一貫して変わらず、東洋諸国民の歴史・思想・自然科学・文学・言語研究に対して“学際的な使命”を果たしていることの意味は大きい。

言葉という人間に与えられた尊い宝を通じて、いかなる異民族いかなる異なった思想の異国民に対しても、人間への信頼をもって接し、知識の力によってあらゆる誤解を解決しうるという強い自信⁷⁶

これは16世紀フランスのユマニスト、ギヨーム・ポステルを評した言葉だ。この自信は「アジア雑誌」の根底に貫かれている研究姿勢に通じるのではないだ

ろうか。そして今この自信こそ、混迷を極める21世紀を生きる我々に必要かもしれない。

注

- 1 *Journal asiatique* ou recueil de mémoires, d'extraits et de notices relatifs à l'histoire, à la philosophie, aux sciences, à la littérature et aux langues des peuples orientaux
現在は「*Journal asiatique*」とのみ記されている。また1828-1835年発刊された2巻のみ雑誌名が「*Nouveau journal asiatique*」となっている。
- 2 <http://www.aibl.fr/societe-asiatique>
- 3 *La Société Asiatique : Livre du centenaire, 1822-1922*, Paris, Paul Gautier, 1922, p5.
- 4 文末に掲載。
- 5 *Journal asiatique* (J.A.) Série1 Tome1 (S.1 T.1) p252, p319.
- 6 Diego Collado (15世紀後半～1638? 1641?) スペイン人, ドミニコ会宣教師。1619年日本に渡り, 1632年 *Ars grammaticae Iaponicae linguae* を出版。
- 7 I. Titsingh, translated from the French by Frederic Shoberl, *Illustration of the History, Manners and Customs, Arts, Sciences, and Literature of Japan*, London, R.Ackermann, 1822.
- 8 J.A. (S.1 T.1) p127.
- 9 英訳版の初めにフランス・アジア協会のレミユザが「将軍たちの私的思い出」という前書きを寄せている。
- 10 J.A. (S.1 T.1) p257, p380.
- 11 J.A. (S.1 T.1) p358. Wa-zy-sy, Kaibara Tokuzin とあるが日本語の原典は貝原益軒『和事始』のことか。
- 12 J.A. (S.1 T.2) p178.
- 13 J.A. (S.1 T.2) p318.
- 14 J.A. (S.1 T.2) p380. アジア協会の図書館の開館とともに図書館員も選出されている。
- 15 J.A. (S.1 T.5) p113.
- 16 J.A. (S.1 T.5) pp113-114.
- 17 J.A. (S.1 T.5) p173.
- 18 シュレーゲルはシーボルトが『日本動物誌』を編纂する際に協力している。
- 19 J.A. (S.1 T.5) p183.
- 20 J.A. (S.1 T.6) p186, p254, p315.
- 21 J.A. (S.1 T.7) p243.
- 22 J.A. (S.1 T.7) p252.
- 23 J.A. (S.1 T.8) p188.
- 24 ドイツ人フンボルトは近代地理学の父ともいわれる探検家であり博物学者であるが、当時パリに滞在しアジア協会会員であった。

- 25 Arte de la lengua Japona (1738). オヤングレンは来日したことはないが、フランシスコ会の宣教師としてフィリピンに滞在中、日本語の勉強を始めてロドリゲスの『日本文典』を参考にこの日本文法書を書いたらしい。
- 26 J.A. (S.1 T.8) p319.
- 27 新井白石の原典を明らかにすることができなかった。
- 28 J.A. (S.2 T.2) pp1-25.
- 29 J.A. (S.2 T.2) p314.
- 30 Histoire de l'établissement, des progrès et de la décadence du christianisme dans l'Empire du Japon
- 31 J.A. (S.2 T.2) p400.
- 32 J.A. (S.2 T.3) pp19-48.
- 33 伊勢の新蔵は、大黒屋光太夫とともに船が難破し漂着し、後にロシアに帰化し通訳としても活躍した人物である。
- 34 J.A. (S.2 T.3) p236.
- 35 J.A. (S.2 T.3) pp237-240.
- 36 J.A. (S.2 T.3) pp385-405.
- 37 J.A. (S.2 T.3) pp405-408.
- 38 シーボルトの日記には、1827年の江戸参府で度々最上徳内と会っていることが記されている。
- 39 J.A. (S.2 T.7) p73.
- 40 『日本人の起源』にはそのあたりのことが書かれているようである。
- 41 J.A. (S.2 T.11) pp160-177.
- 42 J.A. (S.2 T.11) pp492-531.
- 43 J.A. (S.2 T.12) p402.
- 44 J.A. (S.2 T.15) p552.
- 45 J.A. (S.3 T.8) p65.
- 46 J.A. (S.3 T.10) p12.
- 47 J.A. (S.4 T.12) pp170-172.
- 48 上垣守国著。シーボルトがヨーロッパに持ち帰った日本の養蚕技術書である。
- 49 Sechs Wandschirme in Gestalten der vergänglichen Welt ein japanischer Roman, Vienne, 1847. フランス語では Les six feuilles de paravant
- 50 J.A. (S.4 T.17) p303.
- 51 J.A. (S.4 T.20) p257.
- 52 J.A. (S.5 T.2) p529.
- 53 J.A. (S.5 T.3) p363.
- 54 J.A. (S.5 T.4) p431.
- 55 Fabre-Muer, Leboulleux, Rothstein: Léon de Rosny 1837-1914 De l'Orient à l'Amérique, Press universitaires de Sepstention, 2014, pp49-50.

- 56 J.A. (S.5 T.6) p6.
57 J.A. (S.5 T.5) p198.
58 J.A. (S.5 T.6) p526.
59 Rosny Léon de : Introduction à l'étude de la langue japonaise, Paris, Maisonneuve, Londres, Trubner, 1856.
60 J.A. (S.5 T.11) pp258-277.
61 J.A. (S.5 T.13) pp555-556.
62 J.A. (S.5 T.14) pp271-272.
63 Le Correspondant 46, Le Japon et les Derniers Traités avec les Puissances Européennes, pp28-46, 1859.
64 J.A. (S.5 T.16) p550.
65 Lettres à M. Léon de Rosny sur l'Archipel japonais et la Tartarie orientale par le P. Furet, précédé d'une Introduction par E. Cortambert et suivi d'un Traité de Philosophie japonaise & de plusieurs Vocabulaires, Paris, Maisonneuve, 1860.
66 J.A. (S.5 T.17) pp357-376.
67 J.A. (S.5 T.19) pp225-242.
68 J.A. (S.5 T.19) p532.
69 Dictionnaire japonais-français, Benjamin Dupart, 1868.
70 Histoire de la religion chrétienne du Japon depuis 1598 jusqu'à 1651, Paris, Charles Deniorl, 1869.
71 Bibliographie japonaise ou Catalogue des ouvrages relatifs au Japon qui ont été publiés depuis le XVe siècle jusqu'à nos jours, Paris, Institut Impérial, Benjamin Dupart, 1859.
72 J.A. (S.5 T.19) p533.
73 この40年間の雑誌の構成は《*Journal asiatique* (1822-1862) 日本関連記事一覧》の最後に示したとおりである。
74 芦田 (中村) 圭子『レオン・ド・ロニーと文久遣欧使節との交流をめぐって』, 「仏蘭西学研究」, 第25号, 1995年, 30-38頁。
75 ロニーは1862年に文久遣欧使節の一員を印刷局にも案内している。
76 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』「ある東洋学者の話」岩波書店1992年, 182頁。

参考文献

- 彌永信美『幻想の東洋 オリエンタリズムの系譜』青土社1996年
P. ガスカル 沖田吉穂訳『探検博物学者 フンボルト』白水社1989年
片桐一男『江戸のオランダ人 カピタンの江戸参府』中央公論新社2000年
上垣外憲一『「鎖国」の比較文明論 東アジアからの視点』講談社1994年

- 駒井洋『脱オリエンタリズムとしての社会知 社会科学の非西洋的パラダイムの可能性』ミネルヴァ書房1998年
- E. サイード 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上／下』平凡社1993年
- シーボルト 斎藤信訳『参府旅行中の日記』思文閣出版1983年
- 杉本つとむ『西洋人の日本語発見 外国人の日本語研究史』講談社2008年
- 高田時雄編『東洋学の系譜 欧米篇』大修館書店1996年
- 築島謙三『「日本人論」の中の日本人（上）』講談社2000年
- 富田仁・西堀昭『日本とフランス 出会いと交流』三修社1979年
- 中村圭子「解題《シーボルト家とフランス》」仏蘭西学研究第29号, 39-50頁, 1999年
- Nakamura-Ashida, Keiko : Léon de Rosny et les études japonaises en France 桜文論叢第46巻, 1998年 227-246頁
- 平野千果子『フランス植民地主義の歴史 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院2002年
- 松本健一『近代アジア精神史の試み』中央公論社1993年
- 山内昶『青い目に映った日本人 戦国・江戸の日仏文化情報誌』人文書院1998年

Journal asiatique (1822-1862) 日本関連記事一覧

年月	巻・号	頁	項目・筆者	題目・見出し
1822	S.1 T.1	127	Nouvelles	Ouvrages nouveaux : Illustration of the History, Monners and Customs, Arts, Sciens, and Litterature of Japan par Titsingh
		253	Nouvelles	une édition française de la Grammaire japonaise
		257	M. Klaproth	Sur l'origine du papier-monnaie
		318	Rapport	l'impression de l'ouvrage de Rodriguez
		380	Addition	Klaproth sur l'origine du papier-monnaie
1823	T.2	178		Fondation de la Société asiatique de Londres
1824	T.5	114		Livres japonais donnés à la société par le lord Kingsborough
		173	Nouvelles	Séance du 6 septembre 1824
		183		Note sur les cartes du Japon
1825	T.6	186	Nouvelles	Séance du 7 mars : Annonce sur la Grammaire japonaise
		254	Nouvelles	Séance du 5 avril : Présentation d'un exemplaire complet de la Grammaire japonaise du P. Rodriguez
		315		Elément de la Grammaire japonaise par le P. Rodriguez, traduit du portugais par M. Landresse et précédés d'explication des Syllabaires japonais, par M. Abel Rémusat
	T.7	60	Nouvelles	Séance du 3 juillet 1825 : la publication de la Grammaire japonaise de Rodriguez
		243-250	M. Klaproth	Description des Îles Mou nin sima, c'est-à-dire des Îles inhabitées, traduite de l'ouvrage japonais intitulé San kokf tsu ran, imprimé à Yedo en 1785 par M.Klaproth
		252	Nouvelles	Proposition de Klaproth de l'impression d'un Dictionnaire Japonais
1826	T.8	188	Nouvelles	Séance du 6 mars : L'impression sur le Supplément de la Grammaire japonaise
		319	Nouvelles	Séance du 3 mai : Hoffmann, professeur à Stuttgart est admis au membre
1828	S.2 T.1	11	Notice	Japon : Le Koubo(empereur) règne depuis 1804
		91		Liste Générale des ouvrages relatifs à l'Orient publié en 1826 : Supplément à la Grammaire japonaise du P. Rodriguez, ou Remarques additionnelles sur quelques points du système grammatical des Japonais, titrées de la grammaire du P. Oyanguren, et traduites par M. Landresse; précédées d'une Notice comparative des grammaires japonaises des PP. Rodriguez et Oyanguren, par M. le baron G. De Humboldt
	T.2	1-25	M. Klaproth	Fookoua Siriak, ou Traité sur l'origine des richesses au Japon, écrit en 1708 par Arrai Tsikougo no Kami Sama, autrement nommé Fak sik sen see, instituteur du daïri Tsuna Ioosi et Yeye mio tsou ; traduit de l'original japonais-chinois et accompagné de notes par M. Klaproth

年月	巻・号	頁	項目・筆者	題目・見出し
1828	T.2	81	Abel-Rémusat	Extrait d'un Mémoire intitulé Observations sur l'état des Sciences naturelles chez les peuples de l'Asie orientale
		314	Bibliographie	Ouvrages nouveaux : Histoire du christianisme au Japon par P. De Charlevoix
		400	Nouvelles et Mélanges	Séance du 6 octobre 1828 : Publication de Mémoire relatif à l'Asie de Klaproth : La Notice d'une Mappemonde japonaise apportée en Europe par le célèbre voyageur E. Kaempfer
1829	T.3	19-48	M. Klaproth	Sur l'introduction et l'usage des caractères chinois au Japon, et sur l'origine des différents syllabaires japonais, par M.Klaproth
		19	Notice	Japon : Le daïri actuel règne depuis 1804
		87	Nouvelles et Mélanges	Séance du 4 février 1829 : les grains de plantes économiques du Japon
		237-240	M. De Siebold	Lettre de M. de Siebold à MM. Les membres de la Société asiatique de Paris
		385-405	M. Klaproth	Rapport sur un Mémoire relatif à l'origine des Japonais, par M. de Siebold. Rapporteur M.Klaproth
		405-408	M. De Siebold	Notice de quelques ouvrages japonais et coréens mentionnés par M. de Siebold
	T.4	160	Nouvelles et Mélanges	Séance du 6 juillet 1829 : Rapport par Klaproth sur l'Origine des Japonais de Siebold
1830	T.5	225	M. E. Jaquet	Notice sur les accouchements au Japon
		396	Nouvelles et Mélanges	Séance du 1er avril 1830
1830	T.6	475-480		Rapport sur le projet de voyage autour du monde par M. Buckingham
1831	T.7	73-80	M. De Siebold	Mœurs et usages des Aïnos, par M. de Siebold
		55-57		Rapport lu par le secrétaire de la société: le 28avril 1831
	T.8	349	M. E.Jaquet	Ethymologie du nom de Zigatara, que les Japonais donnent à l'Euorpe
1832	T.10	384	Nouvelles et Mélanges	Séance du 1er octobre 1832
1833	T.11	160-177	M. Klaproth	Sur les Daïris ou empereurs du Japon
		531		Rapport lu le secrétaire de la Société, le 29 avril 1832
	T.12	402-427	M. Klaproth	Notice d'une chronologie chinoise et japonaise
1835	T.15	552	Rapport	Rapport de M. Stahl
	S.2 T.16	588	Nouvelles et Mélanges	Ouvrages offerts à la société : Séance du 11 décembre, Mémoire sur l'origine japonais, arabe et basque de la civilisation des pays du plateau de Bogota d'après les travaux récents de MM. De Humbert et Siebold par M. De Paravey, Paris, 1835

年月	巻・号	頁	項目・筆者	題目・見出し
1836	S.3 T.1	77	Nouvelles et Mélanges	Séance du 15 janvier : ouvrages offerts à la société : Annales des empereurs du Japon de Titsingh, complété et corrigé sur l'original japonais-chinois, accompagné de notes, et précédé d'un aperçu de l'histoire mythologique du Japon par J. Klaproth, Londres, 1834
1838	T.6	7		Séance du 25 juin : les ouvrages suivants sont déposés au bureau : An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary, Batavia, 1830 par H. Medhurst
1840	T.9	154-156	Chevalier De Paravey	Lettre à M. Président de la Société asiatique de Paris
		157	Bibliographie	Ouvrages de M. le Chevalier De Paravey
			Publications diverses	Journal of an expedition from Singapore to Japan with visit to Loo-choo, Parker, Londres ; 1839
1843	S.4 T.1	472	Nouvelles et Mélanges	Séance du 10 mars 1843 : M. Léon Pagès démissionne le bibliothécaire
1846	T.8	65	Rapport par Jules Mohl	Séance générale du 16 juin 1846 : Annonce de la publication du Catalogue des livres et manuscrits japonais de la bibliothèque de Leyde
1847	T.10	19	Rapport par Jules Mohl	Séance générale du 14 juin 1847
1848	T.12	170-172	Rapport par Jules Mohl	Séance générale du 17 août 1848
1851	T.17	303	Nouvelles et Mélanges	La société biblique de Norwège annonce l'envoi d'un Nouveau Testament Japon
1852	T.19	562	Nouvelles et Mélanges	Procès-verbal de la séance du 12 mars 1852
		563	Nouvelles et Mélanges	Ouvrages présentés à la société : Io-san-fi-rok. L'art d'élever les vers à soie au Japon, par Bonafous, ouvrage traduit du texte japonais, par M. Hoffmann. Paris. 1848
	T.20	250	Nouvelles et Mélanges	Ouvrage offert à la société par Mlle Hedwig Comtesse Dzialynska : Nifon-o-DayItsi-ran
		257	M. Hoffmann et M. Schultes	Noms indigènes d'un choix de plantes du Japon et de la Chine, déterminés d'après les échantillons de l'Herbier des Pays-Bas
1853	S.5 T.1	573		Procès-verbal de la séance du 13 mai 1853: M. Léon de Rosny est nommé membre
	T.2	529		M. Léon de Rosny donne lecture d'un mémoire sur la littérature japonaise
1854	T.3	363	l'éditeur	Yo han fou in tchi tchouen, évanville de saint Jean en japonais, fragment spécimen, contenant les chapitres I et II, suivis de la deuxième épître de saint Jean, publié par M. Léon de Rosny, Paris 1854
1854	T.4	431		M. Léon de Rosny présente à la Société une première épreuve de nouveaux caractères japonais gravés par Marcellin Legrand, sous direction

年月	巻・号	頁	項目・筆者	題目・見出し
1855	T.5	198	M. Hoffmann	Les principales fabriques de porcelaine au Japon, traduit de japonais par M. J. Hoffmann
1855	T.6	6		Il est déposé sur le bureau une collection de deux corps de caractère japonais hiragana, gravés par Marcellin Legrand, graveur de l'Imprimerie impériale, d'après les dessin de M. L. Léon de Rosny
		8		Bibliothécaire ajoint : M. Léon de Rosny
		15		M.J. Hoffmann, à Leyde, a traduit du japonais une Notice sur les fabriques de porcelaine du Japon
		562		M.de Rosny annonce la prochaine publication de son Introduction à l'étude de la langue japonaise
1858	T.11	256-277	M. Rosny	Remarques sur quelques dictionnaires japonais-chinois, et la nature des explications qu'ils renferment
1859	T.13	555		Procès-verbal de la séance du 13 mai 1859 : Le départ de M. De Siebold pour le Japon
	T.14	271		Le Japon et ses derniers traités avec les puissances européennes par Léon Pagès
1860	T.16	550		Lettres à M. De Rosny sur l'Archipel Japonais, La Tartarie orientale par le P. Furet, missionnaire, Paris, Maisonneuve, 1860
1861	T.17	357	M. Rosny	Notice sur les îles de l'Asie orientale, extraites d'ouvrage chinois et japonais, traduites pour la première fois sur les textes originaux
1862	T.19	225	M. Rosny	Procès-verbal de la séance du 10 janvier 1862 : L'Empire japonais et les archives de M. de Siebold
		532	Nouvelles et Mélanges	Dictionnaire Japonais-Français de Léon Pagès, Paris
				A Residence at Nagasaki and Hakodate in 1859-1860, with an account of Japan generally by C. Pemberton Hodgson, Londres, 1861
	T.20	390		Ten weeks in Japan, by G. Smith, Bishop of Victoria (HongKong), Londres, 1861
				1822-1827 Première Série Tome I-XI
				1828-1835 Deuxième Série Tome I-XVI
				1836-1842 Troisième Série Tome I-XIV
				1843-1852 Quatrième Série Tome I-XX
				1853-1862 Cinquième Série Tome I-XX

Investigating Attitudinal Change Arising from a Content and Language Integrated Learning (CLIL) History Curriculum in Japan

Thomas Lockley

Simon Cooke

Abstract

This study follows a research trajectory undertaken by one of the authors over the past few years (see Lockley, 2014; 2015) in investigating the outcomes of a *content and language integrated learning* (CLIL) curriculum taught in a Japanese university. The curriculum under investigation teaches Japanese history from an international perspective and aims among other things to foster foreign language learning through Yashima's (2002) concept of *international posture*, feelings of connection to a real or imagined international community which contributes to second language motivational constructs such as *willingness to communicate* (MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels, 1998).

Previous studies (Lockley, 2014; 2015) have been qualitative in nature, so it was decided to attempt to strengthen findings and conclusions through quantitatively analyzed numerical data. Therefore, this study used paired-samples t-test (carried out on SPSS) and additional qualitative data collected in the same questionnaire, to attempt to answer the research question: *Does a*

CLIL class with internationally focussed history as content promote attitudinal change towards a more internationally postured person in a Japanese context?

The findings were unexpected in that they indicated that little ‘attitudinal’ change was detectable, however, they did find that feelings of positiveness to the academic subject in question, history, had increased. *International posture* was high on the pre-test and similarly high on the post-test but did not rise significantly.

The study concludes with the authors urging future research to be undertaken within the paradigm of *complex dynamic systems* which may provide a more appropriate tool to research such a complicated and situationally fluctuating phenomenon.

1 . Introduction

This study will build on previous work by one of the authors (see Lockley, 2104; 2015) and examines the benefits and outcomes of teaching internationally focussed national history in the guise of content and language integrated learning (CLIL) in a Japanese context. Lockley’s previous studies investigated the language learning and motivational outcomes and the way this type of learning experience can build learners’ *international posture* (IP), feelings of belonging to and focusing towards an imagined international community which Yashima (2002; 2009; 2013) has shown both aids second language (L2) learning and *willingness to communicate* (WTC) with a ‘foreign other’.

This study will take the research trajectory one step further by

investigating the way in which learners' attitudes, measured by IP contributing factors, might be affected by this type of CLIL curriculum. This differs from previous studies in attempting to quantify the phenomenon numerically with quantitative data methods as well as triangulating findings with previously published work to establish in what way the change might manifest itself.

2 . Literature Review

2.1 Content and Language Integrated Learning

CLIL is a pedagogical method which combines content, cognition and communication with Foreign Language Learning (FLL) (Coyle, Hood & Marsh, 2010) and teaches content while fostering second and even first language learning opportunities and outcomes. Communicative competence is promoted through dialogic interaction in group work, cooperative learning and critical thinking exercises (Coyle et al., 2010; Moore, 2011). Curriculum designers envisage language usage outside the confines of the classroom and courses of study are designed to promote vocabulary acquisition with real-world applications that are not confined only to specific situations or uniquely classroom contexts (Coyle et al., 2010).

While studies on the content outcomes of CLIL seem to be sparse, the literature on its FLL outcomes is more prevalent. These FLL-focussed outcome studies seem to show that CLIL results in significantly higher L2 proficiency outcomes than traditional educational methods (Várkuti, 2011), even leading to concurrent L1 improvements (Coyle et al., 2010; Kong & Hoare, 2011). Learners seem to apply lexical knowledge better and in broader contexts (Grum, 2012) and employ higher level vocabulary more effectively (Naves & Victori, 2010; Várkuti, 2011); language strategies and other skills such

as reading seem to improve as a result of the wider range of input and cognitive engagement (Breidbach & Viebrock, 2012). As long as group work is targeted and meaningful, with adequately scaffolded L2 input, the temptation for learners to switch to L1 seems to be reduced (Nikula, 2012). Proponents of CLIL also argue that FLL outcomes are significantly improved (Várkuti, 2011), although its detractors point out that many learners in CLIL classes may have selected those very classes due to a higher interest in or propensity towards FLL.

Learners undertaking CLIL studies seem also to enjoy better motivation and possess a more positive attitude to the target language (Fehling, 2008). The methodologies used to promote this motivation include thought-provoking and stimulating content and small group work to encourage cooperative co-construction of knowledge and language (Moore, 2011; Nikula, 2012). CLIL curricular content should ideally be linked to linguistic learning objectives (Banegas, 2013), and aim to promote L2 WTC, a construct which refers to “the tendency of an individual to initiate communication when free to do so” (Yashima, 2002, p.55) through socio-culturally derived L2 motivation (Yashima, 2009; Banegas, 2013). Although studies on the link between L2 WTC and CLIL are few (Menezes & Juan-Garau, 2014 being an exception), those carried out suggest that learners have a significantly higher L2 WTC than non-CLIL learners. This could also be linked to the motivational factors deriving from CLIL, as motivation is also a key contributing factor in L2 WTC.

Várkuti (2011) suggested that CLIL might be particularly effective for FLL in largely monolingual societies where opportunities to use the L2 are limited through lack of ready L2 interlocutors.

While studies mentioned above strongly suggest CLIL’s effectiveness, it is necessary to be able to encompass curricular structures within a conceptual framework such as the “4Cs framework” developed by Coyle et

al. (2010, p. 41; see Figure 1.). 1) Content (subject matter), 2) Communication (language learning and usage), and 3) Cognition (learning and thinking processes) are, recognizing the complex but intangible link between language and cultures, enveloped within a circle of 4) Culture (global citizenship and intercultural understanding). Symbiosis is necessarily sensitive to context, which surrounds the whole.

It is suggested that this 4Cs conceptual framework (Coyle et al., 2010, p. 41) leads to effective CLIL through:

- Progression in knowledge, skills and understanding of the content;
- Engagement in associated cognitive processing;
- Interaction in the communicative context;
- Development of appropriate language-knowledge skills;
- The acquisition of a deepening intercultural awareness, which is in turn brought about by the positioning of self and ‘otherness’

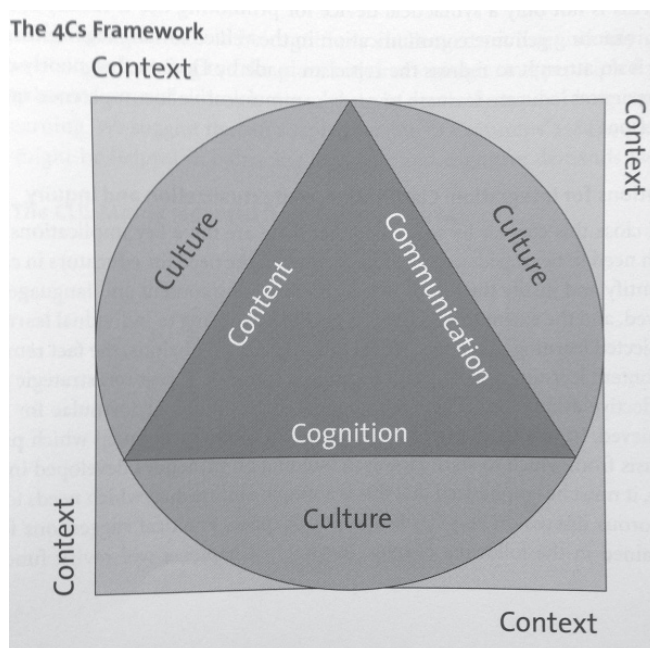


Figure 1. The 4C's Framework (Coyle et al., 2010, p. 41). Courtesy of Cambridge University Press.

2.2 *Motivation from content*

Previously reviewed studies have shown CLIL to be an effective L2 motivational tool, but why exactly is this motivation fostered through such methods? The conceptual framework behind L2 motivation will briefly be reviewed in this section.

As revealed in Dörnyei and Ryan's (2015) work, the study of motivation in L2 has a unique status in its pre-eminence of published works which have helped to reconceptualise the field. Dörnyei, Ryan and Boo (2015) have identified 3 phases in the development of motivation research over the last 30 years, which demonstrate the gaining influences of cognitive and educational psychology to the field. The first phase constitutes the social psychological perspective, characterized by the work of Gardner (1985), which emphasized the role of the individual's social context and social interactions. The next phase is made up of the cognitive-situative period and the process-oriented period. The former sought to draw on theories in cognitive psychology, while placing more focus on social constructivism and specific learning settings and situations (for example Dörnyei, 1994; Williams & Burden, 1997), while the latter sought to examine the dynamic nature of motivation, as illustrated by Dörnyei and Ottó's process model of L2 learning (1998). The final phase is characterized by even greater recognition and emphasis given to the complexity of the L2 learning process. One of the key developments in this phase was Dörnyei's (2005) *L2 Motivational Self System*. In revisiting the traditional definition of integrativeness, recognised as key to L2 motivation, and drawing on Markus and Nurius' 1986 psychological theory of "Possible Selves", Dörnyei's system examined how "self images develop and evolve in interaction with the complex constellations of internal and contextual processes shaping engagement in learning" (Ushioda & Dörnyei, 2012, p. 401).

More recent motivation research (Dörnyei, MacIntyre & Henry, 2015) has focused on the employment of dynamic complex systems. Research using complex dynamic systems seeks to examine the interplay and the changing nature among a variety of factors and processes. However, despite the attractiveness, due to the epistemological nature of the concept of motivation that complex dynamic systems theory (CDST) offers to L2 motivation studies, the complexities of unravelling just which variables are affecting and influencing other variables which are, in turn, affecting and influencing other variables, and so on, renders the use of CDST far from being a simple proposal and is beyond the scope of this article.

However, we can clearly see elements of Coyle's conceptual framework regarding effective CLIL, highlighted above, drawing on the theories presented in Dörnyei's *L2 Motivational Self System*, such as the importance of the interplay of external and internal influences and the importance of context.

2.3 English language learning and CLIL in Japan

Due to the connection between theoretical L2 motivational research and real-world CLIL pedagogical outcomes, it becomes necessary to hone the conceptual frameworks behind curriculum construction still further and look at pertinent contextual factors. As with L2 motivation, the research on 'context' and its role in FLL has blossomed greatly in the past decades, resulting in a far greater understanding of how individual educational contexts affect pedagogical outcomes, and the awareness that methodologies and policies developed for one context may not necessarily work elsewhere (Wedell & Malderez, 2013). As Yashima (2002, p. 62) writes, "a careful examination of what it means to learn a language in a particular context is necessary before applying a model developed in a different context." It is,

therefore, important to review the literature and identify notable characteristics from the context where this study took place, Japan.

Japanese formal L2 educational contexts have traditionally been regarded as being stronger in the passive language skills than the active ones, especially speaking (Lamie, 1998), although recent curricular reforms may be changing this (Lockley, Hirschel & Slobodniuk, 2012). Upon entering university, Japanese freshman learners might be tempted to select an English course as one of their elective subjects due to the continued push by the Japanese government for graduates to enhance their English skills and the spread of globalisation. However, as the saying goes, ‘you can lead a horse to water, but you cannot make him drink.’ Indeed, Japanese tertiary education has been described as an environment with a “...tendency for the learners not to exert extra effort beyond what is required to pass the course, unless a force, such as a strong incentive or a vision of the future, encourages them to do otherwise” (Yashima & Arano, 2014, p. 289-290; see also Nakata, 2006). A lack of chances for L2 integration in society, combined with the low apparent need to develop communicative dexterity in the language (Ryan, 2009), may well suggest a rather foreboding task of creating an environment which can engender motivation in such a context.

While there is no panacea for turning an unmotivated class into a motivated one, possibilities exist to generate positive attitudes to L2 learning. Consideration can be given to the roles that both extrinsic and intrinsic motivation can play in determining the value that learners place on learning tasks (Shernoff & Csikszentmihalyi, 2009), and also on how self-belief systems can regulate attitudes to both present and future learning (Dörnyei, 2009; Eccles, 2009; Grant & Dweck, 2003).

One strand of this idea can be found in the, above mentioned, concept of L2 willingness to communicate (WTC) and is seen by some as one of the

most desirable outcomes of the L2 teaching course (MacIntyre, Clément, Dörnyei & Noels, 1998). L2 WTC has been called “the main cause of second language use” (Yu, Li & Gou, 2011, p. 253) and L2 learners displaying higher WTC have been shown to be more active in L2 use. Several studies offer ways to enhance L2 WTC in Japan, such as the notion of engendering international posture (IP), defined as “openness and favourable disposition towards other languages and cultures, interest in foreign affairs and non-ethnocentric outlook on life” (Yashima, 2002, p. 57; see also Yashima, 2009; Lockley, 2015).

The implementation of methodology that aims at improving, for example, L2 proficiency in the Japanese context, must therefore be carried out with due consideration to some of the unique pedagogical challenges the context offers.

To date, most CLIL research has taken place in Europe (Coyle et al., 2010). Although there is increasing interest in CLIL in Japan, only a few studies specifically focussing on CLIL have so far been published. Pinner (2013) showcased the important link between authenticity of teaching materials and educational outcomes and, furthermore, demonstrated language learning motivation fostered by CLIL as presented in the above section concerning FLL motivation theory. Authentic materials were suitable for all levels of learners when appropriately chosen and scaffolded by the educator. Godfrey (2013) wrote that both learners and educators had been motivated through the implementation of a university-level CLIL curriculum. In line with other global research, CLIL in Japan seemed to promote better communication, critical thinking and to broaden the cultural scope of lessons.

Some researchers have questioned the ability of Japanese educators to incorporate both more communicative methodology and higher-order thinking skills into EFL curricula (see for example Sato & Kleinsasser, 1999; Goto

Butler, 2011) and the capacity of Japanese students to engage with them. However, recent studies on CLIL in the Japanese context seem to contradict this. Ikeda (2013) for example found that CLIL learners perceived their essay writing skills to have improved significantly and wrote that CLIL is perfectly feasible in Japan if teachers are trained properly and CLIL is practiced with sensitivity to contextual and cultural factors. Furthermore, Yamano (2013) found that CLIL-type lessons taught by Japanese teachers motivated EFL learners, and gave them more awareness and critical cognition of global issues. Language learning outcomes improved significantly in various ways, including accelerated vocabulary learning. Furthermore, Yashima (2009) found that learners who engaged in CLIL type activities “showed developmental profiles similar to students who had participated in a year abroad programme in terms of proficiency, international posture and self-initiated amount of communication” (p. 151).

2.4 International History taught through CLIL methodology

This study concerns the holistic educational outcomes of a curriculum that sought to teach internationally focussed history, as opposed to that which concentrates largely on history within the borders of a nation state from a largely ethnocentric perspective. The aims of the course, *A History of Japanese International Communication*, were twofold: 1) To stimulate critical thinking (CT) and reflection in students through challenging content, and 2) to balance this with the need to improve all four language skills at a lexically high level (Nation & Macalister, 2010). History taught as CLIL, lending itself as it does to dialogic methods, critical thinking and reflection on diverse cultures, seems particularly suitable for critical understandings of intercultural issues. Analysis of underlying assumptions, attitudes, feelings and interpretations can lead to critical cognition of the world, intercultural

understanding and connectivity (Mehisto Marsh, & Frigols, 2008; Sudhoff, 2010). As Barton and Levstik (2009) wrote, history education itself can not only contribute to the common good, but can also help forge a common or at least a more empathetic future.¹

Lockley (2014) found that history as CLIL proved to be popular among learners and in the vast majority of cases the self-perceived learning outcomes seemed to be positive. Linguistically, the overwhelming majority of learners reported improved L2 and associated skills, such as presentation, reflection and summarizing; peer teaching and dialogic co-construction of knowledge and conceptual understandings seem to have particularly resonated with learners.

The main contextual characteristic of note from Lockley's (2014) study was the necessity of sensitivity to cultural and national identity on the part of the instructor. Learners in the study overwhelmingly commented on the fact that they were being taught national history by a non-national, i.e. foreign, educator. While for some this engendered positive feelings of reflected appraisal and provided positive language-learning motivation, for others this was 'shameful' and for a small minority it provoked feelings of identity threat; paradoxically, these emotions may also have lead to a negative motivation by driving the students to learn more so that they did not feel at a knowledge disadvantage to the foreign educator.

1 It must be borne in mind that 'history' can be specifically 'modified' by governments or other organisations to act as a tool of control and social cohesion in unity against the 'other.' The contents of this paragraph only apply when students are allowed to form their own balanced opinions and debate historical issues impartially.

2.5 International posture

The data from Lockley's subsequent (2015) study, which specifically investigated CLIL's link to Yashima's (2002) IP construct, seemed to show that history taught through CLIL methodology, from a cooperative international standpoint, promoted feelings of closeness to other peoples and reduced feelings of global marginalization and insularism. Through this, varied FLL motivational constructs were stimulated and more positive and integrated feelings towards an imagined, or real, international community with which learners felt increased identification, were generated. This was not limited to Japanese learners. Learners of other nationalities who were present in the same classes also seem to have experienced similar learning outcomes, suggesting that this study may have implications for contexts other than the Japanese one.

Yashima herself found CLIL type lessons to be highly effective in promoting IP. "Through cognitively and emotionally involving content, learners are encouraged to form opinions and express themselves in English. [...] The imagined community becomes visible and concrete" (p. 149), a language becomes a tool for communication rather than just another subject to study at school to be tested and graded (Yashima, 2009). In Yashima's study, the students' *future L2 self* (defined by Dörnyei [2011] as playing a key role in determining motivated behaviour) is stimulated through learners being able to see themselves as part of an international community. Muto, Shinohara, Adachi and Kikuta (2012) also found data to support Yashima's findings, and their research participants, who were as young as 8-12 years old, "improved their international posture through activities and decreased their fear and anxiety about speaking English" (Muto et al., 2012, p. 541). Their correlational analysis established three important principles for fostering IP - reducing foreign language anxiety, increasing interest in foreign cultures

and customs and encouraging an awareness of personal goals and objectives as to why they are studying English.

2.6 History taught in the EFL context

Aside from Lockley's, there seem as yet to be no studies of history taught through CLIL methodologies at the university level, but one article on history's role in FLL does exist (Brooks-Lewis, 2010). The literature review commences, "this literature review will be brief because there has been so little published about the role of history in foreign language education" (p. 138), a problem which has largely necessitated a focus on general CLIL theory, motivation, and FLL learning outcome research in this review also. Brooks-Lewis (2010) found learners overwhelmingly positive towards history in FLL classes and that their cultural awareness, motivation and understanding of why English was worth studying improved. Perhaps the most striking learner comment was "to date no other professor has bothered to explain to me where this language came from and why it is so important" (p. 146), showing that learners might well benefit from not only instruction in language formation through the study of grammar etc., but to learn about the language's roots and histories as well. Brooks-Lewis (p. 148) concluded "history helps provide this panoramic vision, which creates a foundation for the constructing of learning, [language and history] is a learner need" (p. 148).

3 . This study

3.1 Context

This study investigated a one-semester elective English language-embedded CLIL course for third and fourth year (20-22 year old) international communication students in a university near Tokyo. Most were Japanese, a

minority were PRC and South Korean nationals. TOEIC levels were between 500 and 800; 'Independent User' on The Common European Framework of Reference for Languages. Although CLIL methods were generally new to them, most students had previously experienced content based lessons involving L2 discussion and writing at the university level. While specific data concerning L2 writing levels was not collected, it should be noted that students were required to submit an essay for assessment purposes, from which it can be inferred that writing skills were relatively high.

3.2 Curricular description

Individual lessons began with a mini-lecture of 15 minutes during which time students were required to take notes. At the end of this time, learners had five minutes in groups of three to initiate brief discussions and to formulate a relevant question about a point of interest from the mini-lecture.

The next part of the lesson was inspired by Shahini and Riazi's (2010) study. Each member of a group of three students received a 400-500-word reading regarding the period of history studied in that lesson to summarize in 20 minutes. Each student then created one or two discussion questions and subsequently the three group members then took 5-10 minutes to explain their text summaries to each other in turn. Finally, the group discussed and explored the themes using their discussion questions for around 10-15 minutes.

The last part of the lesson was spent in writing reflection logs in English about what the lesson meant to them before engaging once more in small-group discussions about understandings reached. The aim here was to ground new knowledge in existing knowledge (Black & Wiliam, 1998) using L2 writing and for students to share each other's opinions and feelings verbally, using and revisiting one last time both language and content from the lesson.

The grades were formulated thus: Reflection logs and vocabulary homework (40%), two presentations (20%), a participation grade (20%) and a final essay (20%). The two presentations involved group research on a topic of the students' own choice, to promote cooperation and communication. Examples of topics that students chose are *international trade in east Asia during the 15th and 16th century*, *Famous foreign people who lived in Japan during the Edo period*, *Japanese students in 19th century Europe*, *Japanese foods that have been influenced from abroad* (such as ramen) and *international marriage in Japanese history*. No restrictions were put on their choices besides those of practicality.

The final essay of between 500 and 1000 words consisted of overall learner reflections on the course. This was essentially the final reflection log and brought together critical thinking, L2 use, and knowledge development as the individual language and history learner experienced them.

4 . Research Question

In examining previous studies and judging that further insight into students' attitudes and their relationship to CLIL would be of benefit, the following research question was formulated:

Does a CLIL class with internationally focussed history as content promote attitudinal change towards a more internationally postured person in a Japanese context?

5 . Method

As no study similar to this had been conducted by any researcher up to

now, it was necessary to formulate a new data collection tool (N=28) to assess IP. A questionnaire was created through a qualitative analysis of 124 individual learner reflective accounts collected over two years (see Lockley, 2014; 2015) and conducting in-depth interviews with 9 learners who had taken the course to find significant seemingly IP-related factors for the questionnaire to measure. The instrument was piloted in July 2012 (N=65) and necessary modifications made.

The questionnaire, in both English and Japanese, was administered online twice, as pre-test and post-test, with the treatment being the CLIL course described above. The first administration was in September 2012 and the second in January 2013.

The questionnaire primarily collected quantitative data and was designed to investigate three factors from the literature, interviews and essays that were suggested to be contributing factors to IP and any other possible attitudinal related outcomes of the CLIL course: *Feelings relating to English*, *Feelings relating to Japan in History* and *Feelings relating to International Self*. These factors were turned into statements, which the participants rated on a 6-point Likert scale, with opposite statements included to increase data reliability.

6. Findings

6.1 Quantitative findings

Initially, eight items for each of the three scales (*Feelings relating to English*; *Feelings relating to Japan in history*; *Feelings relating to International Self*) were created. Analysis of responses to the questions indicated high reliability (.83, .83, .85, respectively). Item analysis was then carried out to evaluate whether each of the items were associated with their appropriate

scale. To achieve this, item analyses were conducted to assess the convergent and discriminant validity of the scales. Each item from the individual scales was correlated with the total score for the other scales (see Table 1). These initial results suggested that two items from each of the scales were associated with other items from the other scales. These six

Table 1. Correlations of each item with its own scale (in bold type) and with the other scales

Items	Factors		
	Feel Engl.	Feel Japn.	Int. self
Feelings relating to English items			
1. English is important for my life	.75	.25	.43
2. English is not important for my life	.75	.25	.51
3. I feel comfortable in English	.85	.43	.30
4. I do not feel comfortable in English	.89	.40	.39
5. I feel English is important to me	.75	.27	.51
6. I do not feel English is important to me	.83	.22	.35
Feelings relating to Japan in history items			
7. Japan is an international country	.50	.87	.24
8. Japan is not an international country	.29	.77	.13
9. Japanese people are international people	.45	.64	.25
10. Japanese people are not international people	.30	.51	.06
11. The world outside Japan has many Japanese influences	.11	.32	.21
12. The world outside Japan does not have many Japanese influences	.17	.54	.29
Feelings relating to International Self items			
13. I am an international person	.41	.18	.65
14. I am not an international person	.39	.19	.64
15. I feel part of a global society	.37	.16	.73
16. I do not feel part of a global society	.25	.09	.68
17. I want to share my culture with the world	.41	.15	.54
18. I do not want to share my culture with the world	.22	-.05	.48

Note: Feel Engl.= Feelings of English; Feel Japn.= Feelings of Japan in history; Int. self = International Self

items were removed and the reliability test was re-run. Responses to the questions again indicated high reliability (.92, .83, .84, respectively). The second item analyses revealed a number of correlations to be marginally less than .30 but these items were retained in that their content did not appear to differ markedly from the content of the other items in the scale. However, in future, improved wording of the existing items or the creation of additional items should be developed to increase these correlations. Analysis of the post-test responses similarly indicated high reliability (.89, .86, .81).

A paired-samples t-test was conducted to evaluate differences between the pre- and post-test scores allotted to the scales. The results indicated that there was no significant difference in the scores for *Feelings relating to English* pre-test ($M = 5.2$, $SD = .71$), and the post-test ($M = 5.1$, $SD = .69$), $t(27) = .61$, $p = .54$. The standardized effect size index, d , was .12, with considerable overlap in the distributions for the 6-point Likert ratings for both pre- and post-tests as shown in Figure 2. The 95% confidence interval for the mean difference between the two ratings was -.28 to .52.

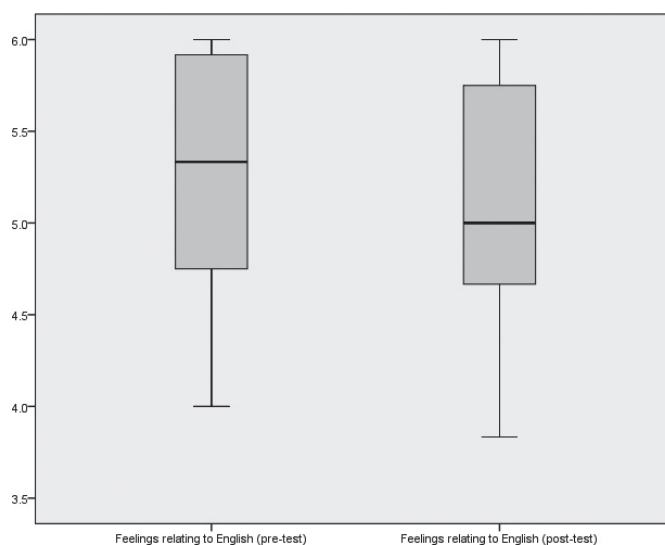


Figure 2. Boxplots of pre- and post-test responses to *Feelings relating to English*.

Additionally, the results indicated that there was no significant difference in the scores for *Feelings relating to Japan in history* pre-test ($M = 3.7$, $SD = .85$), and the post-test ($M = 3.8$, $SD = .82$), $t(27) = -.57$, $p = .65$. The standardized effect size index, d , was $-.11$, with considerable overlap in the distributions for the 6-point Likert ratings for both pre- and post-tests as shown in Figure 3. The 95% confidence interval for the mean difference between the two ratings was $-.59$ to $.37$.

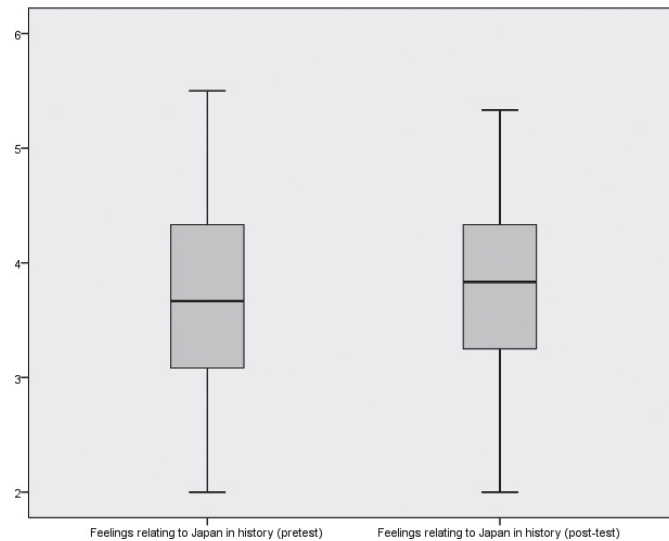


Figure 3. Boxplots of pre- and post-test responses to *Feelings relating to Japan in history*.

The results also indicated that there was no significant difference in the scores for *Feelings relating to International Self* pre-test ($M = 4.4$, $SD = .74$), and the post-test ($M = 4.8$, $SD = .55$), $t(27) = 2.29$, $p = .03$. The standardized effect size index, d , was $-.43$, with considerable overlap in the distributions for the 6-point Likert ratings for both pre- and post-tests as shown in Figure 4. The 95% confidence interval for the mean difference between the two ratings was $-.76$ to $-.04$.

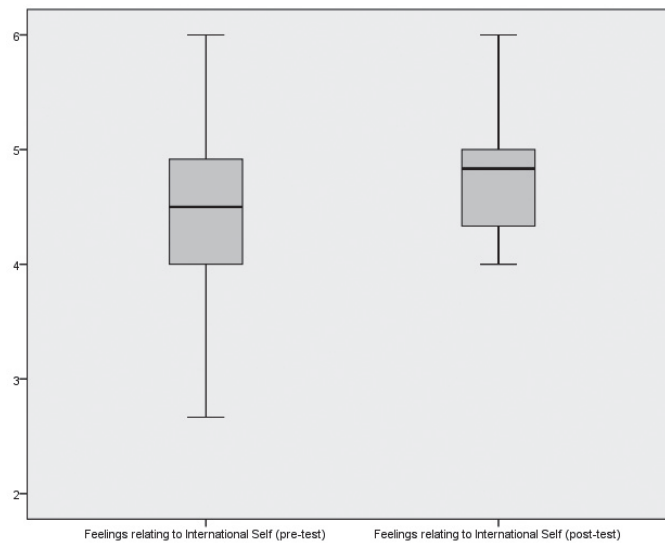


Figure 4. Boxplots of pre- and post-test responses to Feelings relating to International Self.

As indicated in the analyses above, the results of the responses given by the students to the questions indicate that although the data were indeed deemed to be reliable, the questions were inadequate to measure changes in students' attitudes to the concepts being measured. As a consequence, similar responses are manifest throughout the data both pre- and post-teaching.

Another interpretation could of course be that there was no attitudinal change related to the course, however, given that previous qualitative studies appear to reveal deep emotional responses related to the content of this particular history course and significantly raised self-perceptions of linguistic levels and outcomes (see Lockley, 2014; 2015), no effect whatsoever would seem to be unlikely or if confirmed, should be analyzed to establish why.

Re-wording of the existing items or the creation of additional items to elicit salient changes in students' attitudes should be pursued for future research, however, the lack of clear conclusions at this stage in the research persuaded the researchers to re-evaluate qualitative data from the same

questionnaire, previously partially published in another study, (Lockley, 2015), in order to bring to light pertinent changes which were perhaps not revealed in the quantitative data.

6.2 Qualitative data.

The data was collected as part of the questionnaire described above and then analyzed to reveal more information about the phenomenon being researched. The questions asked were directly related to the three scales being measured, *Feelings related to English*, *Feelings related to Japan in history* and *Feelings related to International Self*. The scale names were turned into questions to allow the data to be elicited from participants. The answers given were then compared to see whether there was any evidence of the attitudinal change sought by this study.

The comments presented below are those that were most representative of those expressed overall.

What does English mean to you? (Feelings related to English)

In September 2012, 23 out of 28 responses seemed to be indicative of higher IP as formulated through the above hypothesized factors and this had not changed by January 2013. Representative comments were, “I want to be able to communicate with people from other cultures,” “I would like to talk to many people around the world, so English is the tool for talking with them,” and “Learning English is the tool to communicate with foreigners. Even though I really want to be a friend with foreigners, it’s meaningless that we can’t communicate each other with the same language.” Comments indicating lower IP were, “English is just one of my tools for me” and “I learn English for my future job.” This suggests that the participants in general

already tended towards a high level of IP at the beginning of the course, which would not be surprising as they were majoring in International Communication and were likely to have chosen this due to higher levels of IP or their *L2 selves* envisaging a future in which English figured highly (Ryan, 2009).

Are you an 'international person?' (Feelings related to International Self)

In September 2012, 15 answered *Yes* and 13 answered *No*, while in January there was a slight change, with 16 answering *Yes* and 12 *No*. When asked for reasons why, those who answered *Yes* gave reasons such as, "I'm not perfectly an international person but I'm an international person a little bit because I could know the other countries sides of views and opinions," "Because I could learn Japanese history from many aspects from classes and international students," and "Because I study English and Chinese. And I'm interested in International things."

While there was little difference in the numerical total of *Yes* answers from September to January, there was a marked difference in reasons for those that answered *No* in January. In September they gave reasons such as "Because I can't speak English," "I don't have much knowledge about the world," and "I don't still have enough skill to communicate with foreigners." In January, answers were more positive and aspirational, for example "I don't know history well as yet, but I want to be an international person," "Because I don't have enough knowledge about the world," and "Because I don't know enough about my or other cultures." Although the numbers do not reveal much positive IP change, the comments seem to show that those who answered in the negative were showing clear signs of conceiving of an imagined *future L2 self* (Ryan, 2009) when they might be become

international people.

Has this course changed how you feel about Japan in history? (Feelings related to Japan in history)

In contrast to the above two questions, participants in this research gave what might be regarded as rather unfocussed answers to this question. Comments on both pre- and post-test were much the same and it was impossible to detect any change, improvement or otherwise, in the comments. Representative comments on the pre-test were “I do not have enough information about history as a Japanese[person],” “I am interesting in Japanese history. Because I majored it in my high school. On the other hand, I was hate world history especially Chinese History.” Also “It was hard to remember the difficult historical names in Chinese characters.” While these comments reveal a none too positive attitude to history in general at the start of the course, they reveal little about participants’ real feelings related to Japanese history. Comments on the post-test did not change much, but did appear to evince a more positive attitude to history in general, but not especially to Japan specifically. “I’ve learned history when I was junior high and high school student but I don’t remember most of them because I wasn’t interested in it that much. But since I started learning it again in university, it’s pretty interesting to learn because I could learn something I didn’t study when I was young.” “Before I took this class, I think the history is the subject to remember for the test” and “Before I took this class, I was not so much interested in history. Especially, I didn’t like Japanese history because it’s complicated and sometimes it has untruth things.” These comments appear to back up the previous findings that CLIL type lessons benefit content learning in that students appear to be showing that CLIL

methods helped them discover a fresh attitude to an academic subject in a more active, way (Lockley, 2014; 2015). Participants, however, showed no particular inclination to report any individual change in feelings to their country's history, nor did the non-Japanese students appear to either.

7 . Discussion

It appears that major changes in attitude to any of the three factors measured in this study did not occur; the data analyzed gave no real indication of its occurrence. There was, however, some minor indication that students did show higher levels of IP and rather marked increased positivity towards the content of the CLIL lesson, history, which is likely indicative of the power of the 4C's framework curriculum conceptualization (Coyle et al., 2010, p. 41) and previously recorded positive outcomes of CLIL curricula in general (Yashima, 2009; Breidbach & Viebrock, 2012). The levels of feelings for English were constant, but constantly high and most participants saw themselves as using English as an active tool for engaging in global communication rather than simply a means to an end. This seems to be indicative of higher IP (Yashima, 2002; 2009).

It is possible that the small change in IP levels may in fact tie into participants' personal feelings about Japan, however, the phenomenon was too complex to investigate thoroughly, perhaps indicative of the complex and dynamic, but as yet not fully understood nature of language learning (Dörnyei, MacIntyre & Henry, 2015). This could go some way towards explaining that although participants seemed to feel no different in their own minds about their attitude towards the international nature of their country, they did seem to feel personally more 'international.' Perhaps this, although unclearly defined or concretely established within this study, is a result of

knowing more about Japan as an international country and one which is intimately connected to, working within and key to, global currents and trends. This complex dynamic hypothesis is impossible to test at this stage, with these data collection tools, and will require a specially designed study at a later date.

8 . Conclusion

While the conclusions of this study are not as strong as the researchers would have wished, they do appear to show slightly increased feelings of IP and global connection on the part of participants. This must be contrasted with previous qualitative studies which appeared to show far more effect, although they largely concentrated on linguistic outcomes and FLL motivation through CLIL type classes and the emotions resulting from the historical content.

Perhaps the real conclusion of this study is that while the CLIL course may have been designed using the 4C's conceptual framework (Coyle et al., 2010, p. 41) with the aim of internationalizing students' attitudes to world and Japanese history, any intended effects do not seem to have been felt by participants in that way. Rather, they do appear to have felt some difference, but were unable to clearly express it in a way that the rather blunt quantitative research tools could detect. Even the more sensitive and personal qualitative tools picked up only a trace of this feeling of attitudinal change.

In this case, as shown by previous works (Coyle et al., 2010; Lockley, 2014; 2015), CLIL teaching methods were effective for FLL proficiency and motivational outcomes, but they do not seem to have had overtly detectable wider attitudinal repercussions, despite previous studies suggesting that this should have been the case.

9 . References

- Banegas, D. L. (2013). The Integration of Content and Language as a Driving Force in the EFL Lesson. In E. Ushioda (Ed.), *International Perspectives on Motivation* (pp. 82–97). Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Barton, K & Levstik, L. (2009). *Teaching history for the common good*. Routledge: New York.
- Black, P. & Wiliam, D. (1998). Inside the black box: Raising standards through classroom assessment. *Assessment in Education: Principles, Policy & Practice*, 5(1), 7–74.
- Boo, Z., Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). L2 Motivation research 2005–2014: Understanding a publication surge and a changing landscape. *System*, 55, 145–157.
- Breidbach, S. & Viebrock, B. (2012). CLIL in Germany – Results from Recent Research in a Contested Field of Education. *International CLIL Research Journal*, 1(4), 5–16.
- Brooks-Lewis, K. (2010). Learning about history in the foreign language classroom. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 4(2), 137–150.
- Coyle, D., Hood, P. & Marsh, D. (2010). *Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 40, 45–78.
- Dörnyei, Z., & Ottó, I. (1998). Motivation in action: A process model of L2 motivation. *Working Papers in Applied Linguistics*, 4, 43–69.
- Dörnyei, Z. (2005) *The Psychology of the Language Learner: Individual Differences in Second Language Acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

- Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 9–42). Bristol: Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow: Longman.
- Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). *The psychology of the language learner revisited*. New York: Routledge.
- Dörnyei, Z., MacIntyre, P.D., & Henry, A. (Eds.). (2014) *Motivational dynamics in language learning*. Bristol: Multilingual Matters.
- Eccles, J. (2009). Who am I and what am I going to do with my life? Personal and collective identities as motivators of action. *Educational Psychologist*, 44(2), 78–89.
- Fehling, S. (2008). *Language Awareness und bilingualer Unterricht: Eine komparative Studie (Language Awareness and bilingual teaching: A comparative study)*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Gardner, R.C. (1985) *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.
- Godfrey, C. (2013). Readdressing EFL approaches: CLIL curriculum in a Japanese medical university context. *Asian EFL Journal*, 15(4), 365–371.
- Goto Butler, Y. (2011). The implementation of communicative and task-based language teaching in the Asia-Pacific region. *Annual Review of Applied Linguistics* 2011, 31, 36–57.
- Grant, H., & Dweck, C. (2003). Clarifying achievement goals and their impact. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(3), 541–553.
- Grum, U. (2012). *Mündliche Sprachkompetenzen deutschsprachiger Lerner des Englischen: Entwicklung eines Kompetenzmodells zur Leistungsheterogenität (Oral competencies of German speaking learners*

- of English: Development of a competence model for performance heterogeneity*). Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Ikeda, M. (2013). Does CLIL work for Japanese secondary school students? Potential for the ‘weak’ version of CLIL. *The International CLIL Research Journal*, 2(1), 31 – 43.
- Kong, S. & Hoare, P. (2011). Cognitive Content Engagement in Content-based Language Teaching. *Language Teaching Research*, 15(3), 307 – 324.
- Lamie, J. (1998). Teacher education and training in Japan. *Journal of In-service Education*, 24(3), 515 – 534.
- Lockley, T., Hirschel, R., & Slobodniuk, A. (2010). Assessing the action plan: Reform in Japanese high school EFL. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 9(2), 152 – 169.
- Lockley, T. (2014). Some learning outcomes and contextual factors of history as content and language integrated learning (CLIL) in a Japanese context. *Studies in Linguistics and Language Teaching*, 25, 165 – 188.
- Lockley, T. (2015). Promoting International Posture through History as Content and Language Integrated Learning (CLIL) in a Japanese Context. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 5(1), 87 – 108.
- MacIntyre, P., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, 82(4), 545 – 562.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist*, 41(9), 954 – 969.
- Mehisto, D., Marsh, D., & Frigols, M. J. (2008). *Uncovering CLIL: Content and Language Integrated Learning in Bilingual and Multilingual Education*. Oxford: Macmillan.

- Menezes, E., & Juan-Garau, M. (2014). English learners' willingness to communicate and achievement in CLIL and formal instruction contexts. In M. Juan-Garau & J. Salazar-Noguera (Eds.), *Content-based language learning in multilingual educational environments* (pp. 221 – 236). Heidelberg: Springer.
- Moore, P. (2011). Collaborative interaction in turn-taking: A comparative study of European bilingual (CLIL) and mainstream (MS) foreign language learners in early secondary education. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14(5), 531 – 549.
- Muto, K., Shinohara, T., Adachi, M., & Kikuta, M. (2013). English immersion camp and international posture. In N. Sonoda & A. Krauze (Eds.), *JALT 2012 Conference Proceedings* (pp. 536 – 543). Tokyo: JALT.
- Nation, P. & Macalister, J. (2010). *Language curriculum design*. Routledge: New York.
- Nakata, Y. (2006). *Motivation and experience in foreign language learning*. New York: Peter Lang International Academic Publishers.
- Navés, T., & Victoria, M. (2010). CLIL in Catalonia: An overview of research studies. In D. Lasagabaster & Y. Ruiz de Zarobe (Eds.), *CLIL in Spain: Implementation, Results and Teacher Training* (pp. 30 – 54). Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Nikula, T. (2012). On the role of peer discussions in the learning of subject-specific language use in CLIL. In E. Soler, & M. Safont-Jordà (Eds.), *Discourse and Language Learning Across L2 Instructional Settings* (pp. 133 – 153). Amsterdam: Rodopi.
- Pinner, R. (2013). Authenticity of Purpose: CLIL as a way to bring meaning and motivation into EFL contexts. *Asian EFL Journal*, 15(4), 137 – 158.
- Sato, K. & Kleinsasser, R. (1999). Communicative language teaching (CLT) : Practical understandings. *Modern Language Journal*, 83, 494 – 517.

- Ryan, S. (2009). Self and identity in L2 motivation in Japan: The ideal L2 self and Japanese learners of English. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. Bristol: Multilingual Matters.
- Shahini, G. & Riazi, M. (2010). A PBLT approach to teaching ESL speaking, writing and thinking skills. *ELT Journal*, 65(2), 170 – 179.
- Shernoff, D. J., & Csikszentmihalyi, M. (2009). Flow in schools: Cultivating engaged learners and optimal learning environments. In R. Gilman, E. S. Huebner, & M. Furlong (Eds.), *Handbook of Positive Psychology in Schools* (pp. 131 – 145). New York: Routledge.
- Sudhoff, J. (2010). CLIL and intercultural communicative competence: Foundations and approaches towards a fusion. *The International CLIL Research Journal*, 1(3), 30 – 37.
- Ushioda, E., & Dörnyei, Z. (2012). Motivation. In S. Gass & A. Mackey (Eds.), *The Routledge handbook of second language acquisition* (pp. 396 – 409). New York: Routledge.
- Várkuti, A. (2011). Linguistic benefits of the CLIL approach: Measuring linguistic competences. *The International CLIL Research Journal*, 1(3), 67 – 79.
- Wedell, M. & Malderez, A. (2013). *Understanding Language Classroom Contexts: The Starting Point for Change*. London: Bloomsbury Academic.
- Williams, M. & Burden, R. (1997). *Psychology for language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamano, Y. (2013). CLIL in a Japanese primary school: Exploring the potential of CLIL in a Japanese EFL context. *The International CLIL Research Journal*, 2(1), 19 – 30.
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86(1), 54 – 66.

- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (pp. 144–163). Bristol: Multilingual Matters.
- Yashima, T. & Arano, K. (2014). Understanding EFL learners' motivational dynamics: A three-level model from a dynamic systems and sociocultural perspective In Dörnyei, Z., MacIntyre, P.D, & Henry, A. (Eds.). *Motivational dynamics in language learning* (pp. 285–314. Bristol: Multilingual Matters.
- Yu, H., Li, H., & Gou, X. (2011). The personality-based variables and their correlations underlying willingness to communicate. *Asian Social Science*, 7(3), 253–257.

The Oedipal Aestheticism of Yeats and Joyce

Hiroki Matsuyama

To-day the man who finds belief in God, in the soul, in immortality,
growing and clarifying, is blasphemous and paradoxical.⁽¹⁾

W.B.Yeats, *Explorations*.

Introduction

For James Joyce (1882–1941), Irish novelist and poet, his first known encounter with William Butler Yeats (1865–1939), Irish poet and playwright, seems superficially to have been a bitter one, and this was so for Yeats as well.

Presently he got up to go, and, as he was going out, he said, “I am twenty. How old are you?” I told him, but I am afraid I said I was a year younger than I am. He said with a sigh, “I thought as much. I have met you too late. You are too old.”⁽²⁾

According to this legendary episode, young Joyce confronted a person sixteen years his senior in an absurd acrimonious manner, in spite of his wish to become renowned in Irish literary circles. Was Joyce, who always

had a humorous sharp tongue, really, being malicious to Yeats? Before this uncomplimentary meeting, he was already known to the literary republic in Ireland, including A.E., the pseudonym of George William Russell (1867–1935), who appears in Joyce’s texts. A.E. sarcastically introduced the ambitious young man of letters, who by this time had a certain degree of reputation for his ability, to the senior literary celebrity: “The first spectre of the new generation has appeared. His name is Joyce. I have suffered from him and I would like you to suffer.”⁽³⁾ Yeats was a legendary symbol of Irish literature that Joyce respected, as he had a passionate aspiration to be distinguished in the literary groups, but, at the same time, Yeats was just an old advocate of the unrealistic Irish Literary Revival for Joyce to overcome. After the first uncomfortable encounter, the twenty-year-old writer apologized for his impertinence in a sarcastic manner, saying “after all both you and I will be forgotten.”⁽⁴⁾

Beginning when he was a young student and just a would-be author, Joyce was always greatly interested in creating his own literary esthetic theory: “My book of songs will be published in the spring of 1907. My first comedy about five years later. My ‘Esthetic’ about five years later again.”⁽⁵⁾ He sometimes even put his esthetic theory forward in his texts as a main theme, particularly in his autobiographical novels, including *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1914), *Ulysses* (1922), *Stephen Hero* (1944), and many critical essays. Stephen Dedalus, who is Joyce’s doppelganger in the series of these novels, is always enthusiastically involved in “the building of an entire science of esthetic”⁽⁶⁾ as an artist.

In fact, as we will see in this study, Yeats became the greatest source for literary esthetics for Stephen and Joyce himself. In spite of his excessively harsh and critical attitude toward Yeats, Joyce repeatedly mentions him in his texts. Yeats seems to be a literary father figure for him

to admire and defeat, the object of contradictory complicated feelings, respect and hostility. This paper will concentrate on Joyce's ambivalent mental conflict with Yeats, which could also be called an Oedipal quasi-father-child relationship if it is examined in terms of psychoanalysis, also exploring Yeats's influence on Joyce from the point of view of their esthetic theories.

Joyce's and Yeats's Aestheticism

On his the course from the draft *Stephen Hero* to the revised complete *Portrait*, Joyce advanced his thesis on aestheticism, using specifically, besides Yeats, St. Thomas Aquinas (1225–1274), who was an Italian Catholic priest, scholastic philosopher and theologian: “my esthetic theory applied Aquinas”⁽⁷⁾:

They argued very acutely of the beautiful and the good. Stephen wished to amend or to clarify scholastic terminology: a contrast between the good and the beautiful was not necessary. Aquinas had defined the good as that toward the possession of which an appetite tended the desirable. But the true and the beautiful were desirable, were the highest, most persistent orders of the desirable, truth being desired by the intellectual appetite which was appeased by the most satisfying relations of the intelligible, beauty being desired by the esthetic appetite which was appeased by the most satisfying relations of the sensible.⁽⁸⁾

——Aquinas, said Stephen, says that is beautiful the apprehension of which pleases.

Lynch nodded.

——I remember that, he said, *pulcra sunt quae visa placent*.⁽⁹⁾

Stephen's significant reliance upon Aquinas is often illustrated in these texts. However, in fact, Aquinas himself never comprehensively developed esthetic philosophy of his own, in spite of Stephen's zealous tenacious argument employing him. In addition, indeed, Joyce seems to have just arbitrarily synthesized Aquinas's fragmented esthetic theories. As a logical outcome, he misunderstood them.

—The Church differentiates between the good which this man seeks and the good which I seek. There is a *bonum simpliciter*. Then men you mention seek a good of that kind because they are impelled by passions which are direct even if they are menial, lust, ambition, gluttony. I seek a *bonum arduum*.

—It might be a *bonum* very much *simpliciter*. I don't think you know, said Cranly.⁽¹⁰⁾

Stephen is here accused of confounding the esthetic notions of the good and the beautiful. This means he attempts to incorporate his antecedent's including Aquinas's variety of theoretical fruits to suit his literary dogma. He has inherited an esthetic theory from his literary ancestors, just as if he had received a metaphysical gene.

In his Thomistic aestheticism, above all, two famous phrases are important: "*Bonum est in quod tendit appetitus*" and "*Pulchra sunt quae visa placent*." The former means that the good is that toward which the appetite tends, and the latter means that the beautiful is that which gives pleasure to the eye. Joyce as well as Aquinas seems to be quite interested in the relation among the three esthetic concepts as the Holy Trinity of the art: the true, the good, and the beautiful. These two Latin phrases are recurrently repeated in Stephen's interior monologue. In fact, Joyce seems to be

unfamiliar with Aquinas's complete perspective on the three notions despite his long detailed elucidation. In his critical essay "Aesthetics" (1903–1904), Joyce cites again Aquinas's words on theoretical aesthetics, just as he does in *Portrait* and *Stephen Hero*:

Bonum est in quod tendit appetitus

S. Thomas Aquinas

The good is that toward the possession of which an appetite tends: the desirable. The true and the beautiful are the most persistent orders of the desirable. Truth is desired by the intellectual appetite which is appeased by the most satisfying relations of the intelligible; beauty is desired by the esthetic appetite which is appeased by the most satisfying relations of the sensible. The true and the beautiful are spiritually possessed, the true by intellection, the beautiful by apprehension; and the appetites which desire to possess them, the intellectual and esthetic appetites, are therefore spiritual appetites.⁽¹¹⁾

Joyce's logical statement here about the esthetic and cognitive relation among the true, the good and the beautiful is too metaphysical and complicated to comprehend. However, certainly, his esthetic conclusion results in dialectic between the true and the beautiful, excluding the good, together with the ethical problem, from art, although he made a slight concession to it here. The true and the beautiful are synthesized into spiritual joy like the Holy Trinity: "the appetites which desire to possess them, the intellectual and esthetic appetites, are therefore spiritual appetites."

Although his aestheticism is often expounded with religious words due to his Irish cultural background, ethical and religious matter that values the

good is essentially and deliberately disqualified in Joyce's texts. Instead, the true and the beautiful seem to be indispensable for Joycean esthetics. In his other essay, "Drama and Life" (1900), Joyce objurgated the esthetic ideas of Walter Pater (1839–1894), whose appreciation of the beautiful he characterized as the "swerga of the esthete."⁽¹²⁾ He saw this as the literary root of the Irish Literary Revival, in which Yeats had an immense part as a legendary man of letters. Because of its unrealistic and narrow parochialism, Joyce kept a distance from the Irish Literary Revival, which played a great role in the independence movement in Ireland. In his political and literary essay, "The Day of the Rabblement" (1901), Joyce refers to the differences between Yeats's and his own aestheticism, relating this dispute to the problem of the blind nationalism of the Irish independence movement. For Joyce, Yeats and George Augustus Moore (1852–1933), an Irish dramatist, should be held to account for flattering and ingratiating Irish people.

Meanwhile, what of the artists? It is equally unsafe at present to say of Mr. Yeats that he has or has not genius. In aim and form *The Wind among the Reeds* is poetry of the highest order, and *The Adoration of the Magi* (a story which one of the great Russians might have written) shows what Mr. Yeats can do when he breaks with the half-gods. But an esthete has a floating will, and Mr. Yeats's treacherous instinct of adaptability must be blamed for his recent association with a platform from which even self-respect should have urged him to refrain. Mr. Martyn and Mr. Moore are not writers of much originality.⁽¹³⁾

Joyce asks an esthetic question: "What of the artists?" He evaluates Yeats as great, but with a floating will, a paradoxical aesthete, in his relation to political issues. Esthetic problems are often connected to nationalism in

Joyce's texts, as is true of the Irish Literary Revival's arising as a half-political movement.

If an artist courts the favour of the multitude he cannot escape the contagion of its fetichism and deliberate self-deception, and if he joins in a popular movement he does so at his own work. Therefore, the Literary Theatre by its surrender to the trolls has cut itself adrift from the line of advancement. Until he has freed himself from the mean influences about him——sodden enthusiasm and clever insinuation and every flattering influence of vanity and low ambition——no man is an artist at all. But his true servitude is that he inherits a will, which is broken by doubt and a soul that yields up all its hate to a caress; and the most seeming-independent are those who are the first to reassume their bonds. But Truth deals largely with us. Elsewhere there are men who are worthy to carry on the tradition of the old master who is dying in Christiania. He has already found his successor in the writer of *Michael Kramer*, and the third minister will not be wanting when his hour comes. Even now that hour may be standing by the door.⁽¹⁴⁾

For Joyce, Yeats was absolutely not true to the true of the art. Yeats's esthetic theory is here regarded as the counterpart of that of Henrik Johan Ibsen (1828–1906), who was a 19th century Norwegian playwright and, for Joyce, another literary father, given high respect in some of Joyce's texts. Ibsen wrote, "Art is true to itself when it deals with truth,"⁽¹⁵⁾ and he is called the father of realism. Joyce opposes his work to Irish writers' excessive obedience to the religious power that values the beautiful. He calls himself the successor of Ibsen, who is "the old master" here, and says he "will not be wanting when his hour comes." Joyce criticized Yeats's flattering to

the unreasoning multitude. He detested the insularity of the Irish people in comparison with Europeans: “the Irish Literary Theatre must now be considered the property of the rabblement of the most belated race in Europe.”⁽¹⁶⁾ Indeed, his esthetic theory is related to political issues, including nationalism: “A nation which never advanced so far as a miracle-play affords no literary model to the artist, and he must look abroad.”⁽¹⁷⁾

On the other hand, the beautiful is also incorporated in aestheticism of Joyce, Yeats and Ibsen in an inconspicuous manner, even though their theories seem to be mutually exclusive. Joyce’s dialectic between the true and the beautiful comes to resolve the contradiction between them with a third element, in spite of his submission to Ibsen’s truth. Ibsen certainly considered that the beautiful is an indispensable companion of the true in literature, as he writes in *When We Dead Awaken* (1899) :

Beauty, the splendour of truth, is a gracious presence when the imagination contemplates intensely the truth of its own being or the visible world, and the spirit which proceeds out of truth and beauty is the holy spirit of joy.⁽¹⁸⁾

The two essential esthetic notions are combined here in dialectical manner into the “holy spirit of joy.” Joyce’s esthetic synthesis is here expressed in religious terms, like those of Aquinas and Pater, although as a result, he avoided ethical results, as did Ibsen.

In fact, this definitely parallels the Yeats’s thesis. In *The Wind Among the Reeds* (1899), Yeats pursued the true as his main theme, examining its relation with the beautiful. This double angle enabled Yeats to explore his aestheticism in spite of his Irish background, which regards religious values as highly as the beautiful, as going along with the European esthetic values

of Ibsen, who pursued the true. This is also the way that Stephen traces in Joyce's texts, regardless of his ostensible rebellion against Yeats. Despite Joyce's superficially rebellious attitude to Yeats, his aestheticism is, in fact, definitely, Yeats's legitimate child.

Joyce's and Yeats's Aestheticism against the Church

In its Irish historical and social background, Joyce's and Yeats's aestheticisms also unavoidably interacted with the religious issue of Catholicism. In *The Secret Rose* (1897), Yeats concentrated on the contradictions in religious matter and argued for esthetic theory through fictional personae. Stephen exclusively seems to have studied *The Tables of the Law*, included in *The Secret Rose*.

He had found on one of the carts of books near the river an unpublished book containing two stories by W. B. Yeats. One of these stories was called *The Tables of the Law* and in it was mentioned the fabulous preface which Joachim, abbot of Flora, is said to have prefixed to his Eternal Gospel.⁽¹⁹⁾

Actually, it is in Yeats's texts that Stephen finds the way to escape the church. In *The Tables of the Law*, the authority of the Catholic Church is pungently criticized. Two protagonists, Robartes and Aherne, discuss the mystical esthetic theory of Joachim of Flora (1135–1202), Italian theologian, who advanced his denounced heterodox eschatology.

He considered that those, whose work was to live and not to reveal, were children and that the Pope was their father; but he taught in secret that certain others, and in always increasing numbers, were

elected, not to live, but to reveal that hidden substance of God which is colour and music and softness and a sweet odour; and that these have no father but the Holy Spirit.⁽²⁰⁾

Yeats suggests that, although Joachim's writings were burned by the Catholic Church because they broke commandments, Joachim explored the truth he believed in, which is to be sublimed dialectically as "the Holy Spirit."

Stephen seems to have learned from Yeats's text about Joachim's anti-Catholic aestheticism, which primarily values "the Holy Spirit" sublimed from the integration of the Son and the Father. In the "Proteus" episode of *Ulysses*, Stephen almost completely follows Yeats's theory on the Joachimites:

Come out of them, Stephen. Beauty is not there. Nor in the stagnant bay of Marsh's library where you read the fading prophecies of Joachim Abbas. For whom? The hundred-headed rabble of the cathedral close. A hater of his kind ran from them to the wood of madness, his mane foaming in the moon, his eyeballs stars. Houyhnhnm, horse-nostrilled.⁽²¹⁾

Stephen refers here to Jonathan Swift (1667–1745) as well as Joachim. Swift was an Anglo-Irish satirical poet and novelist, and the Dean of St Patrick's Cathedral in Ireland. Likewise, in Yeats's *The Tables of the Law*, Swift is discussed, along with Joachim, in relation to his irreverent manner toward the church. In fact, Yeats was accused of "anti-Catholicism" in the Irish Literary Revival movement. He encountered strong opposition from the Catholic Church over The Literary Theatre, which was founded in 1898 due to his efforts. Yeats's *The Countess Cathleen* (1892) was the first drama

played at the theater, amid public repudiation in 1899. Although Cardinal Michael Logue (1840–1924) and his followers accused Yeats of its heresy, Joyce strongly supported the play.

Joyce also encountered the opposition of the church. When he was a student, his “Drama and Life” and “The Day of the Rabblement” were also not allowed to be printed at the college by Fr. William Delaney and Fr. Henry Browne for ethical and religious reasons, which were trivial. Joyce resisted his immovable religious antagonists by directly approaching the dean of the college, although it was in vain. Stephen always resists what makes him suffer in Joyce’s texts:

—The soul is born, he said vaguely, first in those moments I told you of. It has a slow and dark birth, more mysterious than the birth of the body. When the soul of a man is born in this country there are nets flung at it to hold it back from flight. You talk to me of nationality, language, religion. I shall try to fly by those nets.⁽²²⁾

He is oppressed by various social “nets” of traditional conventions, including the older generations, religion and the nation, reflecting Joyce’s real problems in life. In fact, Aquinas, who is another literary father of Stephen, combined conventional principles of theology with modern theoretical thought in his texts to question medieval church authorities. Joyce, like Yeats and St. Thomas, questioned the parental authority of the unreasonable people, intolerant nationalism and authoritarian Catholicism. Stephen lays bare his heart to a friend about the patriarchy, strongly rooted in Ireland which has considerably restricted his life:

—I tried to love God, he said at length. It seems now I failed. It is

very difficult. I tried to unite my will with the will of God instant by instant. In that I did not always fail. I could perhaps do that still——

Cranly cut him short by asking:

——Has your mother had a happy life?

——How do I know? Stephen said.⁽²³⁾

Stephen evokes the intense antipathy with which he eavesdropped on Irish playgoers. He almost certainly is thinking here of Yeats's esthetic conflict here with the bigoted Catholic Church:

The verses crooned in the ear of his memory composed slowly before his remembering eyes the scene of the hall on the night of the opening of the national theatre. He was alone at the side of the balcony, looking out of jaded eyes at the culture of Dublin in the stalls and at the tawdry scene-cloths and human dolls framed by the garish lamps of the stage. A burly policeman sweated behind him and seemed at every moment about to act. The catcalls and hisses and mocking cries ran in rude gusts round the hall from his scattered fellow students.

——A libel on Ireland!

——Blasphemy!

——We never sold our faith!

——No Irish woman ever did it!⁽²⁴⁾

Joyce, consciously or unconsciously, with some respect despite his defiance, followed in Yeats's footsteps in his literary life, filled with many struggles. Joyce's attitude toward him is always ambivalent, divided into approval and disapproval, and, sympathetic and antipathetic feelings, just as if he were his real father.

Joyce's and Yeats's Aestheticism against the Literary Patriarchy

Stephen develops his esthetic theories further in *Ulysses*, which is regarded as a sequel to *Portrait*, bothering with the patriarchal Irish “nets” that restrict him spiritually. In *Ulysses*, exclusively, above all, Stephen seems to have distrust of the father-son relationship. His father disapproves of his esthetic ambition to be a writer, and, what is more, cannot feed a large family, being addicted to alcohol. This is the exact mirror of Joyce's miserable real life. He is obviously contemptuous of his father: “What links them in nature? An instant of blind rut.”⁽²⁵⁾

As the title hints, every episode of Joyce's *Ulysses* has a correspondence to Homer's *Odyssey*. Stephen appears in the first episodes of *Ulysses*, including the “Telemachus” episode. Telemachus is the name of Odysseus' son in Homer's *Odyssey*. The first books of *the Odyssey* concentrate on Telemachus's search for information on whether his father survive, who has been missing since the Trojan War. Telemachus, who lost his real father, represents Stephen and Joyce. Odysseus may symbolize the imaginary ideal father figure for them to discover instead of their real father. In Joyce's texts, the father figure image is always ambivalent.

In “Scylla and Charybdis” episode, Stephen engages in a heated debate about his own esthetic dogma with literary luminaries, including A.E. and John Eglington, the pseudonym of William Kirkpatrick Magee (1868–1961), who all actually existed in Ireland at Joyce's time. They are, of course, peers of his literary father, Yeats. Stephen expounds an esthetic theory with a hypothesis about William Shakespeare (1564–1616), a biographical interpretation of his famous play, *Hamlet*:

Fatherhood, in the sense of conscious begetting, is unknown to man. It is a mystical estate, an apostolic succession, from only begetter to

only begotten. On that mystery and not on the Madonna which the cunning Italian intellect flung to the mob of Europe the church is founded and founded irremovably because founded, like the world, macro and microcosm, upon the void. Upon incertitude, upon unlikelihood...Paternity may be a legal fiction. Who is the father of any son that any son should love him or he any son?⁽²⁶⁾

The son unborn mars beauty: born, he brings pain, divides affection, increases care. He is a new male: his growth is his father's decline, his youth his father's envy, his friend his father's enemy.⁽²⁷⁾

Although despised and sometimes even ignored by the older men of letters, his esthetic theories on *Hamlet* refer with eagerness to the theme of the father-son relation. He regards Shakespeare as the assassinated King Hamlet, and Shakespeare's dead son as Prince Hamlet, but it is clear that he also recognizes himself as the depressed son Hamlet and his father as the simple Claudius, Hamlet's uncle, who is a heavy drinker and forces Hamlet to recognize him as a father figure. Hamlet resists Claudius, longing for the lost great King Hamlet. Stephen's ideal father figures in the Irish literary cliques, including Yeats, are also lacking here. Yeats was already an established poet and dramatist for Joyce to admire. However, Yeats is also a literary father not only for him but for the clannish group which excludes him and Stephen. Joyce and Stephen paradoxically resist the entire paternal establishment in spite of their affection for it.

Joyce's and Yeats's Aestheticism Thorough the Oedipus Complex

In *Portrait*, Stephen interprets his friend's essential question about his father's occupation in a very literal sense and is at a loss at what to answer

to “What is your father?”⁽²⁸⁾

Sheldon Brivic scrutinized the content and structure of *Portrait* from a literary psychoanalytical point of view. In his analysis, each chapter can be classified according to its ideas in the context of the Oedipus complex: “new world,” “maternal goal,” “paternal threat,” “wandering,” “disorder,” “triumph,” “nursing image.”⁽²⁹⁾ The Oedipus complex, as advanced by Sigmund Freud (1856–1939), is a theory of the psychoanalytic stages of the development of boys. It explains their sexual desire for mothers, and their jealousy and competitive feelings toward fathers. In order to overcome mental conflict, boys identify themselves with fathers. They repeat this ambivalence toward their fathers again and again through all their life, especially at spiritual crises.⁽³⁰⁾

In *Portrait*, a church sermon on the good, which is given together with a frightful description of hell, weighs excessively heavily on Stephen’s spirit. He suffers afterwards even from simple relationships with women. This means that the church, symbolizing patriarchal power, instills in him a sense of guilt for his mother-child relation. This is a typical case of the Oedipus complex, as is the Shakespearean case in Stephen’s hypothesis. Stephen has feelings of competitiveness and affection with regard to the patriarchy: his real father, the church, and the nation. Even though he was pleased to be invited to join the priesthood, he finally rejects this:

The voice of the director urging upon him the proud claims of the church and the mystery and power of the priestly office repeated itself idly in his memory. His soul was not there to hear and greet it and he knew now that the exhortation he had listened to had already fallen into an idle formal tale. He would never swing the thurible before the tabernacle as priest. His destiny was to be elusive of social or religious

orders. The wisdom of the priest's appeal did not touch him to the quick. He was destined to learn his own wisdom apart from others or to learn the wisdom of others himself wandering among the snares of the world.⁽³¹⁾

At the end of *Portrait*, Stephen gains an esthetic mission to flee to Europe to be an artist, freeing himself from the Irish "nets" that have always held him back:

APRIL 26. Mother is putting my new secondhand clothes in order. She prays now, she says, that I may learn in my own life and away from home and friends what the heart is and what it feels. Amen. So, be it. Welcome, O life, I go to encounter for the millionth time the reality of experience and to forge in the smithy of my soul the uncreated conscience of my race.

APRIL 27. Old father, old artificer, stand me now and ever in good stead.⁽³²⁾

Stephen's attitude toward the patriarchy remains ambivalent here, split between affection and contempt. His firm resolution to fly to be an artist through making a break with customary restrictions is described in his diary, whereas he clearly preserves his love for his mother. However, he also keeps his fondness for his father figure: "Old father," the nation. "my race," and religion, "Amen. So, be it."

In *Ulysses*, Stephen recalls repeatedly Yeats's a poem, *Who Goes with Fergus?* which is included in *The Countess Cathleen*.

And no more turn aside and brood

Upon love's bitter mystery

For Fergus rules the brazen cars.⁽³³⁾

The phrase “love’s bitter mystery” here reminds him of the Latin phrase “amor matris” which means a mother’s love, and makes him identify his mother with Cathleen. Stephen may also recall another of Yeats’s poems, *Fergus and the Druid*. This focusses on a dialogue between a druid and Fergus, who is, according to Irish legend, a king of Ulster. Fergus attempts to abdicate his throne in favor of his son to wander for spiritual exploration. Stephen may identify Fergus with lost and usurped father figures, including Odysseus, King Hamlet, and his own father. He feels a strong tie with his mother, while he avoids the bond with his father, as the Oedipus complex shows. In Joyce’s texts, Yeats embodies Joyce’s ambivalent views against the patriarchy: narrow Catholicism, provincial nationalism and his father.

Conclusion

Some of the essential literary themes of Joyce’s texts originate in Yeats’s aestheticism, in spite of Joyce’s apparent attitude against Yeats. Despite Joyce’s feelings, he followed Yeats’s hard literary life as a father figure, in the meaning of that term found in the psychoanalytic theory of the Oedipus complex. Joyce’s texts are the mirror of his anguished real life, filled with private problems rooted in overcoming various restrictions of the patriarchy. Furthermore, his relation with Yeats itself, described, directly and indirectly, in Joyce’s texts, also reflects a vital problem. Yeats was a profound literary source from which Joyce inherited much and, at the same time, surmounted with the paradoxical feelings.

Notes

- (1) Yeats, W.B. *Explorations*. Sel. Mrs. WB. Yeats. New York: Collier, 1962. p.334.
- (2) Ellman, R. *James Joyce: New and revised edition*. New York: Oxford University Press, 1982. p.103.
- (3) Ellman, p.100.
- (4) Ellman, p.101.
- (5) Joyce, James. *Letters II*. Ed. Richard Ellmann. New York: Viking Press, 1966. p.38.
- (6) Joyce. *Stephen Hero*. New York: New Directions, 1963. p.36.
- (7) Joyce. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. Chester G. Anderson. New York: Viking Press, 1968. p.209.
- (8) Joyce. *Stephen Hero*. pp.170-71.
- (9) Joyce. *Portrait*. p.261.
- (10) Joyce. *Stephen Hero*. p.180.
- (11) Joyce. *Critical Writings*. Eds. Ellsworth Mason and Richard Ellmann. New York: Cornell UP, 1989. p.105.
- (12) Joyce. *Critical Writings*. p.43.
- (13) Joyce. *Critical Writings*. p.70.
- (14) Joyce. *Critical Writings*. pp.51-52.
- (15) Joyce. *Critical Writings*. pp.43-44.
- (16) Joyce. *Critical Writings*. p.70.
- (17) Joyce. *Critical Writings*. p.70.
- (18) Joyce. *Critical Writings*. p.83.
- (19) Joyce. *Stephen Hero*. p.176.
- (20) Yeats. *Short Fiction*. Ed. G.J. Watson. New York: Penguin Books Ltd., 1995. p.206.
- (21) Joyce. *Ulysses*. New York: Random House, 1961. p.49.
- (22) Joyce. *Portrait*. p.216.
- (23) Joyce. *Portrait*. p.302.
- (24) Joyce. *Portrait*. p.226.
- (25) Joyce. *Ulysses*. p.267.
- (26) Joyce. *Ulysses*. p.266.
- (27) Joyce. *Ulysses*. p.266-67.
- (28) Joyce. *Portrait*. p.6.
- (29) Brivic, Sheldon. "The Disjunctive Structure of Joyce's *Portrait*." *A portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. R. Brandon Kershner. Boston: Bedford/St. Martin's, 2006. p.291.
- (30) Freud, Sigmund. *The Complete Psychological Works Vol. xxi*. London: Hogarth Press, 1975.

(31) Joyce. *Portrait*. p.136.

(32) Joyce. *Portrait*. p.318.

(33) Joyce. *Ulysses*. p.9.

フランソワ・ボードワン（1520－73）

—— 歴史と法学の結合 ——

志々見 剛

16世紀後半のフランスで法律家たちが主導した歴史論の革新において、決定的な役割を果たしたのは疑いもなくジャン・ボダンの『歴史を容易に理解する方法について』（1566）であるが、その方法上・主題上の先蹤として、フランソワ・ボードワンの『全体史教程、並びにそれと法学との結合についての序説二卷⁽¹⁾』（1561）もまた重要である⁽²⁾。ここには、ボダン以降に継承される種々の論点の萌芽が見られるだけでなく、その中では次第に切り捨てられていく要素も内包する点、大変興味深い。

ボードワンはアラス生まれの人文主義者・ローマ法学者である⁽³⁾。ルーヴァンでエラスムス的な人文主義の薫陶を受けた彼は、法学を修めた後、パリに上ってシャルル・デュムーランの下で働き——ここでフランソワ・オトマンとも出会う⁽⁴⁾——、間もなくアラスに戻って弁護士となる。1545年、改革派に親近して亡命を余儀なくされる。一時はジュネーヴでカルヴァンの秘書を務めさえするが、やがてその排他性に嫌気して袂を分かち、1563年にカトリックに再改宗する。ただ、彼の立場は一貫して、宗派の対立に起因する政治的・社会的混乱を憂慮するもので⁽⁵⁾、ポワシー会談（1561年9－10月）の際にはカトリクス・ド・メディシスの意を汲んで奔走している⁽⁶⁾。これと並行して、パリ、ブルジュ、ストラスブール、ハイデルベルク、アンジェ等と転じながら、大学やコレージュで、あるいは私的教授として法学を講じた。モンテーニュ⁽⁷⁾やパーキエ⁽⁸⁾も彼の講筵に連なったことがあるという。学問の面でも、様々

な立場や分野の調和と統一を求める態度は一貫していた。彼は古代とキリスト教の調和を求める人文主義的理想を堅持し、法学を歴史研究や文献学と結びつける「フランス派 *mos gallicus*」の流れに連なり⁽⁹⁾——彼が一時教鞭を取ったブールジェ大学は、アルシアート以来、その中心地だった——、ストラスブールやハイデルベルクではルター派の学者たちの新しい歴史論を吸収した⁽¹⁰⁾。常にラテン語で著述し、各国・各都市を渡り歩きながら新旧両派の知識人たちと交わった彼は、まさに「文芸共和国」の一員だったのである。

1561年春、ボードワンはハイデルベルク大学で歴史に関する講義を行った⁽¹¹⁾。このこと自体、歴史というものが学問分野として未確立だった当時としては画期的な事態である⁽¹²⁾。この講義を元に同年夏に上梓されたのが、本稿で扱う『全体史教程』である。ナヴァール王アントワヌ・ド・ブルボンと大法官ミシェル・ドピタルに献呈されている⁽¹³⁾。

本稿では、必ずしも体系的とは言えないこの著作の主要な論点を整理し、明確化することを試みる。第一に、彼の唱道する「完全史 *historia integra*」という概念について。次いで、歴史において真実をどう探究するかという問題について。第三に、法学との結合によって齎される歴史の有用性について。最後に、古今の歴史書を実際に学ぶための方法について。これらを順に示したい。

「完全史」という概念

第一部の劈頭でボードワンは、神が人間を作ったのは世界という巨大な劇場で「観客 *spectatores*」, 「役者 *actores*」, 「批評家 *iudices*」の三つの役割を果たさせるためだった、と述べる⁽¹⁴⁾。このうち、第一部は主に「観客」としての役割を論じる。人は、世界という舞台それ自体——これに関する知識は「自然史」に属する——よりも、そこで繰り広げられる劇、とりわけ世界創造から現在まで人間が連綿と繰り広げてきた歴史という劇に目を向けるべきだとされる。というのも、「人間が人間に関わる事柄に無知であるのは相応しくない⁽¹⁵⁾」のだ。確かにそこには多くの醜陋な事柄があり、また無秩序が支配しているようにも見える。だが、悪しき事例は避けるべき範例として役立つし、何よりも、

「人間の事柄の混乱のただ中にさえ、すべてを適切に支配する神の讃嘆すべき摂理を認めうると聖書によって知りうるし、それこそ歴史を正しく考察するための至高の光である⁽¹⁶⁾」のだ。神意に背くように見える出来事さえも、実は「神の無限の叡智、善性、権能⁽¹⁷⁾」の表れであり、我々を神への讃仰に駆り立ててくれる。

こうした前提の上、ボードワンは「完全史 *historia integra*」という概念を提起する。これは、ポリュビオスの「全体史 *κοινή ιστορία*」が一つの地域や民族に限定されない既知の世界全体を扱おうとしたのに想を得ながら⁽¹⁸⁾、さらに多層的な意味での全体性を要求するものである。曰く、これは「時間の上でも場所の上でも事柄の上でも普遍的な歴史 *histori[a] univers[a], et temporum et regionum et rerum ratione*⁽¹⁹⁾」である。

このうち「事柄」は宗教、内政、外政の三つの下位区分を持ち、それぞれ聖史 (*historia sacra*)、政治史 (*civilis*)、軍事史 (*militaris*) に対応する⁽²⁰⁾。但し、「事柄」を扱う上では、古代人——端的に言えばポリュビオス——が「実践的な歴史 *historia πραγματική*⁽²¹⁾」と呼んだものに従って、「単に出来事だけでなく、それらの原因や、熟慮によってなされた事柄をも描き出せるように、叙述する対象を熱心に提示し、賢明かつ有益に示す」必要があるという⁽²²⁾。これこそ全体史の主要な特性なのだ⁽²³⁾。

「事柄」のうちに聖史を含めるのは、ボードワンの大きな特徴である⁽²⁴⁾。

私が歴史と述べる時、それは完全で完璧な (*integra et perfecta*) ものことだ。そこでは神の摂理を考慮しなければならない。この世界における重大な事柄、すなわち人間の事柄に驚嘆すべき方法で結び付けられている神的な事柄を正しく見るためにである⁽²⁵⁾。

とはいえ、ボードワンは神の摂理を歴史の動因や説明原理と見做すわけではない。ただ、神的な事柄が人間の事柄と不可分に結びつき、全体史の重要な一部を構成すると考えるのである。「世俗史」と「教会史」を結合させない限り、

歴史は「完全で完璧な」ものたりえない。それゆえ彼は、古代以来の歴史礼賛の中でキケロの「時代の証人、真実の光、記憶の生命、人生の教師、古代の使者⁽²⁶⁾」という言葉こそが他にまして偉大で優雅で真実なものだと述べた上で、そこに一言付け加える必要があるという。すなわち、

「歴史は」神的な事柄と人間の事柄についての知識に達しうる唯一の道であり方法である、と私は言う。それは我々の魂を見張り塔の上のように高く置くことができる。そこから我々は、この世界の中で創造以来起こった、我々の観察と記憶に値するあらゆることを見はるかすのである⁽²⁷⁾。

「時間」と「場所」についてはどうだろうか。この点、「全体史 *historia universa*」は、「全体的な *καθολική*」歴史を提起したポリュビオスや、すべての史書を渉獵すべきだと述べたエウセビオスに従って、人間の知りうる一切を包含しなければならないとされる⁽²⁸⁾。ポリュビオスが生物の体に擬えて言うように、歴史の各部分は有機的に連関しており、一部だけを切り離すことはできない⁽²⁹⁾。だが、一切を含むというのは恐ろしく野心的な企てである。古代の歴史家たちもこれを十全には実現できなかった。ポリュビオスは限られた時代、トログス・ポンペイウスは限られた地域しか扱っていない。シチリアのディオドロスは太古の時代をも扱うが、神の啓示を知らなかったゆえに嘘八百を並べるだけである。ルクレティウスやプルタルコスも、トロイ戦争やテーセウスの時代以前には遡れない、と述べている⁽³⁰⁾。これに対しボードワンは、彼の時代には全体史を実現するより良い条件が揃っていると言う。時間的には、神の啓示によって世界および人間の歴史の起源についての正しい知識があり⁽³¹⁾、古代以来、現代までの千年余についても十分な資料を有し、さらに歴史という劇の「終幕」も迫っている⁽³²⁾。地理的には、古代人の知らなかった新大陸も含めてようやく世界の全体が発見され⁽³³⁾、「今や地理と世界誌の光のおかげで、あたかも一つの絵の中に見るように、また手で触れるように、世界を知ること

ができる⁽³⁴⁾」ようになった。サラセン人やトルコ人，ユダヤ人，ゲルマン人その他の「蛮族」の歴史も蔑ろにできない⁽³⁵⁾。ただ，このように述べながらも，ボードワンはボダンとは異なり，個々の民族の特異性やそれに基づいた政体の差異についてはあまり問題にしない。

歴史における真実の探求：読者の役割と証言の判断基準

だが，あらゆる時代と地域を包摂すると言っても，あらゆる証言，あらゆる伝承や伝聞を闇雲に受け入れればよいわけではない。ボードワンはここで，歴史における真実をいかに確証しうるか，歴史家の叙述の信頼性をいかに評価するか，という問題に逢着する。というのも，ポリュビオスが真実を「歴史の目」と呼んだように，歴史は常に真実を扱うべきものとされるが，それにもかかわらず歴史と虚偽はしばしば混淆しているからである⁽³⁶⁾。あまつさえ，故意に虚構を捏造したり喧伝したりするものさえある⁽³⁷⁾。

ただ，真実の確定がしばしば困難である以上，過度な厳格さもまた過ちの元である。少なくとも，僅かな誤りを口実に著作全体を捨ててしまうような「気難しく苛酷で極端な検閲者⁽³⁸⁾」に与するべきではない。タキトゥスがキリスト教について誤ったことを述べていてもそのローマ史は貴重であるし，ヘロドトスにいくら虚構が多くともそれは太古の時代の貴重な史料である。歴史に混入する虚偽はできる限り取り除くべきだが，真実を虚偽と一緒にくたに捨てるのもよくない。「真実を追放することと虚偽を保存することは同じように危険⁽³⁹⁾」なのである。

結局の所，軽信と完全な不信の両極を避け，慎重に証言を吟味すべきである。

知恵の古えの第一の法は，無暗に信じないことだという。それゆえ愚劣で軽率な信じやすさを避けねばならない。法学者たちが正当にも述べるように，それを避けないのは有罪なのだ。しばしば著者たちが誤りを犯すだけでなく，彼らの書いてもいないことが彼らに帰されることもあるから，非常に注意深い考究が必要だ。反面，余りに気難しく疑い深い不

信もある。これを避けぬ限り、歴史にはどんな余地も残されない。だが、真剣な著者や証人に従って確からしいと言われている事柄について傲然と虚偽だと言ひ張るのは、低劣で無思慮で強情な人間の所業である。確証されたことを否定はできないし、それを斥ける理由も言ひえないのだから⁽⁴⁰⁾。

個別的な証言の真偽だけでなく、複数の歴史家の間での不一致が問われることもある。その場合、真実を弁別するための「技術と判断力 *ars atque iudicium*」が必要となる⁽⁴¹⁾。ポリュビオスの言うように、「歴史書を正しく賢明に判断するのが、歴史家の最も重要で最も困難な仕事」であり、そのためには「文章ではなく、証言およびその信頼の程度」を量らなければならない。歴史家だけでなく、歴史を読む者も同様である。我々は真実を第一に考えて、「歴史書が語ることを、敬意を保ちつつも虚心に、かつ自由に精査」するべきなのだ⁽⁴²⁾。実際、ボードワンはヴィテルボのアンニウスの捏造した『古代集成』所収のベロッソスの真正性に、ヨセフスと対照して疑義を呈している⁽⁴³⁾。さらには聖史についてさえも、例えば四福音書や教父たちの間にいくらかの相違があり、証言を受け入れる上では真偽を混同しない賢明さと慎重さが必要だと述べている⁽⁴⁴⁾。

では、歴史家を判定する上で、具体的にはいかなる基準を設けるべきか？

ボードワンは第一に、対象となる出来事との近接性、換言すれば媒介の少なさを挙げる。ポリュビオスの言うように自ら参加し目撃したことを語る証人が理想だが、それを欠く場合には、当事者から聴取したことを記録しているものを、記録者の資質を吟味した上で見ることになる⁽⁴⁵⁾。時代を経て多くの人の手を渡ったものはそれだけ毀損している恐れが高いゆえ、同じ出来事が様々に語られる場合、時代の古いものを優先するべきだとされる⁽⁴⁶⁾。法学者たちは口頭での直接の証言を文字に記録された証言よりも信頼できるとするが、過去の歴史の場合、証人の話を直接聞くのはしばしば困難、あるいは不可能である。その場合、ボードワンは公文書 (*publica acta*) がそれを代替しうると言う⁽⁴⁷⁾。

第二に、真実よりも文体の優雅さを追求する歴史家には警戒しなければならない。「歴史は言葉ではなく事柄によるもの」であり、それを学ぶのも「言葉を磨くためではなく精神を涵養するため⁽⁴⁸⁾」だからである。それゆえ、例えば中世の歴史書を、語法が稚拙で野蛮だといって顧みない人々が批判される⁽⁴⁹⁾。確かに、真実を墨守する限り、歴史が「すべての文芸の博学なコーラス *omnium literarum eruditus chorus*」で飾られるのは良いことである⁽⁵⁰⁾。だが些事や脱線、詩的な虚構にかかずらい、華麗な弁論のために改竄や歪曲も辞さない者は、歴史というものを履き違えている。

普遍史の言葉というものは、常に優雅で調和的なようには構成されても彫琢されてもいない。[…] 私が求めるのは真実の歴史であって、修辭学的な虚構でも学校臭のする演説でもない。他の者たちが、言葉の斉一な調和や磨きぬかれた弁論に似た均質さをそこに探し求めるのなら、勝手にすればよい。私は、一様で率直で単純で純粋な事柄の真実を何よりも歴史の中に探し求める⁽⁵¹⁾。

それゆえ、人文主義者たちがしばしば試みるように、過去の著作を優雅な言葉で書き換えようとすることは、全く誤っている⁽⁵²⁾。ボードワンはまた、歴史と弁論（特に顕彰弁論）、歴史と詩を混同してはいけないという。これらのジャンルはそれぞれ固有の規則を持つのである。無論、歴史を知る上で、それに材を取った詩（ルカヌスやシリウス・イタリクス）や悲劇、弁論を参照することもあるが⁽⁵³⁾、この場合も、真実の則を外れないよう注意しなければならない。

第三点として、証言者の年齢や立場、資質——とりわけ「真率さ *bona fides*」——を勘案しなければならない。これは法学者たちが証人の吟味について述べることと並行している。彼はまた、キケロが『弁論家について』で「歴史の規則」を述べた一節を丸ごと引用し——第一の規則は「敢えて偽りを言わないこと」、第二の規則は「敢えて真実を隠したままにしないこと」とい

う所から始まる一節である——，ここに語るべきことの一切が尽くされていると言う⁽⁵⁴⁾。この規則を十分に満たす歴史家は稀だろうが，歴史を読む者は，規則から外れるように見える歴史家も含めて慎重に検討するべきである⁽⁵⁵⁾。但し，ボードワンは「最も率直な証言を第一に採るべき」であるのと同様に，「他者の証言を語る際には真率さをもってしなければならない⁽⁵⁶⁾」とも述べている。彼はキケロの規則も「歴史を書く者たちだけではなく，歴史書を読む者たちの義務をも示している」とし⁽⁵⁷⁾，歴史を読むことと書くこととの平行関係を想定するのである。

全体的で真実の歴史について我々が注意すべきだと私が述べたことは，聴衆あるいは読者としての我々に関することだったが，これはまた歴史を書く者たちの義務についても述べている⁽⁵⁸⁾。

キケロが歴史家に課した規則には，時代と場所に関することも含まれる。ボードワン曰く，「歴史が事柄を正しく忠実に語る時，（証言においてと同様）時間と場所についても探求するのが相応しいし，そうせねばならない。さもなければ叙述は完全なものにならない⁽⁵⁹⁾」のである。これについて彼は仔細に論じるわけではないが，少なくともいくつかの例を挙げて，うまく用いれば真実を判定する基準たりうるとする。地理や年代学の知識は日進月歩であり，現代の学生さえも昔の大学者の誤りを正しうるのである⁽⁶⁰⁾。

以上のような基準を用いながら，歴史を読む者は可能な限り広く対象を渉猟し，真実を再構成するよう志さねばならない。

よい書物や古い記録の大部分は失われている。だが，難破の後にも残されたいくらかの板は存在する。それらを頼りにして，我々は広い海を航海し終え，港に辿り着くことができるだろう。まずは各々の歴史家たちが断片的に伝えていることのすべてを集め，熱心に繋げ合わせるのだ⁽⁶¹⁾。

無論、歴史の中には多くの欠落や不備や齟齬があるゆえ、この航海は決して容易なものではない。故意にせよそうでないにせよ、歴史家が隠蔽したり誤伝したりすることはあるし、後世の歴史家が古い著作を利用したために元のものが消滅することもある。こうした場合、歴史書やその断片にとどまらず、法律——これについては次節で見る——や他ジャンルの著作にも目を向けるべきである。例えばキケロは宿望していたローマ史をついに著しえなかったが、それでも彼の書簡や弁論などはローマ史を知る恰好の素材である⁽⁶²⁾。さらには絵画や彫刻、石碑やタピスリー⁽⁶³⁾、口承や詩歌の類も蔑ろにできない⁽⁶⁴⁾。また、公的なアーカイブも参照すべきである。ボードワンは特にパリの王宮・高等法院とヴァチカンの図書館を挙げ、これらの宝が万人に開かれるよう希求している⁽⁶⁵⁾。

歴史と法学の結合：歴史の有用性をめぐって

歴史の研究はまた、キケロの言う「人生の教師」として有用性を持つものであり、単なる暇潰しでも純粋な学問的探求でもない。ボードワンが「歴史という芝居の好劇家になり、そのためにその場に長く留まるべき」だと言うのは、人を「善良かつ自由で」あらしめるためなのだ⁽⁶⁶⁾。「歴史というアカデミアにおいてこそ、賢慮と知恵と叡智と正しい判断を学ぶことを探し求めうるし、またそうしなければならない⁽⁶⁷⁾」のである。

こうした有用性を得るためには、皮相な読書ではなく、それに見合うだけの「技術 *ars*」, 「叡智 *intelligentia*」, 「十分な観察 *observatio necessaria*」を身に着ける必要が生じる⁽⁶⁸⁾。この点において、ボードワンの主要なテーマの一つである「法学と歴史の結合 *Iurisprudentiae atque historiae coniunctio*」が前景に現れる⁽⁶⁹⁾。彼は両分野が「一つの体の分かちえない部分か肢体のように」不可分で、相互に役立つことを強調する⁽⁷⁰⁾。歴史を知るためには法学を参照しなければならない、法学を深めるためには歴史およびその中にある範例を考察しなければならない。彼はさらに、キケロが歴史を「弁論家の責務」としたのに対し、むしろ「法学者の責務」ではないかとすら述べる⁽⁷¹⁾。実際、古代

ローマでは、キケロが『ブルートゥス』で言及するように、ムキウス・スカエウォラを始め歴史の造詣の深い法学者たちが輩出し、スッラ、カエサル、アウグストゥスのように法と政務に携わる者が歴史書を著す例も多かった⁽⁷²⁾。ボードワンは、同時代についても、「我々の時代は、偉大で博学な人々、すなわち優れた歴史家である法学家や優れた法学家である歴史家で溢れている⁽⁷³⁾」とし、「我々」もそれに続くべきだと訴えている。

それでは、歴史を読むに当たって法学との結合はいかなる意義を持つのか？歴史家の証言を吟味するに際して、法学上の議論が陰に陽に参照されていたことは姑く措く。ボードワンはまず、歴史が、旧来の歴史書がしばしば行うように戦争の描写に傾注するのではなく、法の成立や発展をこそ自らの対象とすべきであり、また法の中に失われた過去の断片を探るべきだと言う。曰く、「万人が全体史 (*historia καθολική*) は実践的 (*πραγματική*) でなければならないと認めており、また実践的な歴史は——ギリシャ人たちが *περίστασις* と呼ぶ——出来事の状態を同時に提示しなければならないと知っているのだから、私は法の状態をこうした極めて重要な状況のうちに数えることを恐れない⁽⁷⁴⁾」。なお、ここでの「実践的」というのは、前出の箇所とは些か異なって⁽⁷⁵⁾、キケロの書簡での用法に従って、単に法に関わる出来事——法の制定、改廃や運用、それについての議論や判断——を叙述するもの、といった程度の意味である⁽⁷⁶⁾。

これに加えて、ボードワンは、歴史を読む際には事実問題 (*quaestiones facti*) と権利問題 (*quaestiones Iuris*) を峻別する必要があると言う。ある出来事が事実か否かを問うだけでなく、そうした事柄の正否や善悪を「法と慣用に従って *de Iure ac usu*」見極め、範例とするに足るかを考えなくてはならない⁽⁷⁷⁾。歴史を範例として用いるといっても、個別的な状況はそれぞれに異なる上、矛盾する様々な事例も存在するゆえ、過去の事例を画一的に現実に応用できるわけではない。従って、より安定した基準として、法に照らして判断することが必要になるのである⁽⁷⁸⁾。

ここで注意すべきこととして、ボードワンの言う「法学」は、彼に特有の理

解に基づいている。その定義は、「人間と神に関する事柄についての知識と、正と不正の知識⁽⁷⁹⁾」に関わるものとされ、彼はこれを神と人間のそれぞれの領域で歴史と結び付けようとするのである⁽⁸⁰⁾。

この点には少し説明が必要だろう。

神の法について、ボードワンはこれをさらに「宗教の本質に関わる永遠不変の *perpetuum & immutabile, quod ad ipsius religionis [...] substantiam pertinet*」ものと、儀式・典礼や教会の統治に関わる「政治的な *politicum*」ものに分け、その双方とも聖史と不即不離の関係にあるとする⁽⁸¹⁾。聖書は、世界創造以来の歴史的な出来事を叙述する部分に混ざって、神がモーゼに授けた法やダヴィデの定めた法を収めており、これらの法自体も、普遍的な格率と歴史的に限定された特定の集団に関わる規範との混合物である。「政治的な」法については、さらに公会議議事録や教会法、キリスト教の君主たちの定めた教会関連法なども含まれるが、これらを理解するためには世俗の政治と歴史に通暁することが不可欠である。

かくしてボードワンは次のように言う。

聖なる法は聖なる歴史に、また聖なる歴史は聖なる法に、驚くべき仕方
で結合していると私は言う。神学と呼ばれるものが、神によって歴史の
枠組の中に収められたと言われるが、それは聖書がまた歴史的なものだ
からだ。同様に、聖なる法学と歴史の結合は不可分なものだ、と正当に
言えるだろう⁽⁸²⁾。

ボードワンは、この「結合」が同時代の宗教的・政治的混乱を収めるのにも寄与しうると考えた。信仰の正しいあり方を明らかにする最良の道は、過去に遡ってその本来の姿を示すことだからである⁽⁸³⁾。彼はエラスムス的な諸宗派の平和と協調を常に希求し、とりわけ教父時代にその範を見出していた⁽⁸⁴⁾。ここで扱う『全体史教程』にもそうした考えの一端が窺えるが⁽⁸⁵⁾、それ以前にも、例えば『コンスタンティヌス大帝』（1556）等の著作で、繰り返しこの

考えを表明している。

人間の法についてはどうだろうか。ボードワンはローマ法を「偉大さ、豊かさ、多様さ、そしてそれゆえに困難さ⁽⁸⁶⁾」において傑出したものと見做すが、その一方で、「フランス派」法学の流れを汲んで、ローマ法全体を「一つの時代や一人の人物の所産ではない *non unius vel aetatis vel hominis*」, 「多数で多様で精妙で困難な *multae, variae, subtiles, acutae*」ものと考えた⁽⁸⁷⁾。とりわけユスティニアヌス法典は、ロムルス以来13世紀にわたるローマ法の集大成として多様な層を持つゆえ⁽⁸⁸⁾, 正しい理解のためには「歴史的な分析 *ἀνάλυσις historica*」が必要になるとする⁽⁸⁹⁾。なお、ボードワンは、ローマの法律や制度を記述する上でギリシャ語は貧弱で不適切だとして、ローマ法についてはギリシャよりもローマの歴史家を重視するという⁽⁹⁰⁾。

ボードワンはまた、ローマ帝国の滅亡以後の蛮族法や地域法、封建法にも重要性を認める。ローマ法ほどの洗練は望めないにしても、この時代の歴史を解き明かすために不可欠であるし、何よりも現在のヨーロッパ諸国の直接の祖先に当たるゆえ、君主の相続や領土の帰属といった現実の問題を扱う上で役立つ。

かくしてボードワンの想定する法学は、少なくとも理念上はローマ法に限定されず、むしろ「完全史」と同様の時間的・地理的な拡がりを包含し、聖俗の双方にわたるものとなる。このように広く捉え直した法学を「完全史」と接続するのが、彼の目的だった。

私が望むのは、普遍史が聖と俗、古いものと新しいもの、我々のものと異国のものとの歴史を結合させることである。同時に、昔と今の、神事と人事の法学が結び付くことを望む。そして、いわば歴史と法学というこれら二つの体から、一つの体が作られることを私は欲する⁽⁹¹⁾。

この結合は、両分野の知識を深めるだけではなく、歴史に即して言えば、実践上の——劇場の比喻で言えば「役者」としての人間に関わる——有用性を齎すものでもある。実際、ボードワンは歴史を読む者が単なる観客の立場に留ま

るべきではないとし、能動的な読解の重要性を強調する。歴史は「我々を高め、巡らせ、我々をある時代や別の時代に生きているように、ある場所や別の場所で我々が実際に行動しているように思わせてくれるべきものであり、またそうできるもの」だが、そのために我々は「そこにあるものをただ見るだけではなく、その中で、自分自身に関わるかのように行動するべき⁽⁹²⁾」なのだ。

では、ここで問題になるのはどのような有用性なのだろうか？ そもそも歴史を読むことは、個人のレベルにおいて、いかなる災厄や動乱の中でも「何事にも驚かぬこと *nil admirari*」を教え、大きな慰藉を与えてくれるものである⁽⁹³⁾。ローマの内乱下のキケロがまさにそうであったし、ボードワン自身もかつては同様だったという。だが、ボードワンはさらに進んで、個人の倫理的問題とは切り離された、政治的・公共的な有用性をそこに見出した⁽⁹⁴⁾。「歴史の研究はとりわけ王に属するが、王だけでなく、何らかの政務に携わるすべての者にとって極めて相応しいもの⁽⁹⁵⁾」なのだ。それゆえ、歴史の研究のためには私法だけでなく公法を知らなければならない。ボードワンによれば、法学もまた、「政治学 *civile studium*」へと発展して国家の舵取りを教えるべきなのである⁽⁹⁶⁾。

かくして、法学がその性質上理論だけでなく実践を考慮しなければならないのと同様に、歴史研究も現実の政治的問題への適用を視野に入れる必要がある⁽⁹⁷⁾。その場合、プルタルコスの言う「対比 *παράλληλα*⁽⁹⁸⁾」を用いて、「歴史は法が読まれるようなやり方で読まれなければならない。すなわち先例と後例を、また逆に後例と先例をうまく比較することによってである⁽⁹⁹⁾」。こうした読解の一つの好例としてボードワンは、マキャヴェッリ——「あるフィレンツェ人 *quidam Florentinus*」としか呼ばれないが——の『デイスコルシ』を挙げる。これがティトゥス・リウィウスに適用しているようなやり方を普遍史に適用し、必要とあれば「歴史的な推論から何らかの政治的理論を導く⁽¹⁰⁰⁾」べきである、とボードワンは主張する。これによって、ポリュビオスが述べるように、未来を予見し現実の問題を解決するすべを示すことができる⁽¹⁰¹⁾。諺にあるように経験が愚者の教師だとすれば、歴史は経験に先んじて教えを与えてくれるのである⁽¹⁰²⁾。

歴史を学ぶための方法

最後に問題とすべきは、具体的に、諸々の歴史家をいかに読み、どのような順序と方法で学ぶべきかという点である。

まず、大きな枠組として、「時間」と「場所」に関する概括的な知識が前提になる。

時間に関しては、年代記 (*Annales*) や日録 (*Diaria*) のようなジャンルを除くと、一般の歴史書は必ずしも綿密な時間記述 (*Chronologia*) を必要としない。そもそも時代の確定は非常に困難で、古代の多くの歴史家も過ちを犯している。ただ、出来事の前後を間違えると誤った因果関係や影響関係を想定してしまう虞があるので、これには用心しなければならない⁽¹⁰³⁾。

場所については、世界全体 (*Cosmographia*)、地域 (*Geographia*)、土地 (*Chorographia*) 等、様々な規模で考えうる⁽¹⁰⁴⁾。古代には「地理を歴史と結びつけた⁽¹⁰⁵⁾」ストラボンやパウサニアス、近代にはラファエル・ヴォラテラスの著作がある。ただ、ボードワンは、歴史上の出来事は一つの地域で完結することはないゆえ、地域や国ごとに歴史を分割して記述すべきではないと言う。「地理にいくらかの歴史への想起をまき散らすのと、全体史 (*historia perpetua*) に補遺のように地理を従わせるのは全く別のこと⁽¹⁰⁶⁾」なのだ。

具体的な歴史書を取り上げる段になると、さらに別の問題が現れる。「完全史」の理想に照らすと、実際に残されている歴史書には多くの不備や欠落があり、また限られた時代や地域しか扱わないものも多いのである。だが、ボードワンはこの点、楽観的である。曰く、「文芸すべてに対していかに敵対的な時代でも、我々から歴史の助けを奪いえなかったし、歴史はこのように野蛮さと闘ってきた」のであり、「この野蛮さは歴史を消滅させられなかったし、歴史は息絶えるどころか、最後には凱歌を上げるに至った」のだ⁽¹⁰⁷⁾。それゆえ、

我々の残された遺物がどれほどのものであれ [...], それでも十分に完全な歴史を構成できる。もし個々の歴史家から個別の記述を寄せ集めて

全体を探索し、個々のものを比較してうまく集めて繋ぎ合わせるならば⁽¹⁰⁸⁾。

ボードワンは、「探索のための熱心さ」と「得たものを正しく用いる技術」の両方をもって、これを実践するべきだと主張する⁽¹⁰⁹⁾。

もう一つ問題となりうるのは、全体史の膨大さがこれを学ぶ人を怯ませるかもしれない、ということである。世界の創造から今日まで「55世紀」を閲し⁽¹¹⁰⁾、また広大な地域に渡っている。それゆえ、手当たり次第に歴史家を漁るのではなく、「秩序と方法 *ordo et modus*⁽¹¹¹⁾」に則ってこれを学ぶことが重要になる。

ボードワンが推奨するのは、大まかな時代区分から初めて、徐々により細かい時代に分け入っていくことである⁽¹¹²⁾。彼曰く、歴史は地上を照らす太陽のように人間の出来事を教えてくれるが、太陽の明度が季節の推移に応じて変わるように、三つの段階で明らかさが変わる。初めは聖なる簡潔な歴史 (*sacra et brevis*)、次いで聖俗にわたって広がった歴史 (*sacra, civilis et diffusa*)、最後に野蛮で粗雑な歴史 (*barbara et horrida*) である⁽¹¹³⁾。但しこれは、エリアやダニエルが示したような別種の分割法を排除するものではないとする⁽¹¹⁴⁾。

ボードワンは続いて、この三つの段階のそれぞれで歴史は同じ密度で展開されるわけではない、と指摘する。例えば世界創造に続く30世紀強の歴史は聖書に収められ、しかも一つの地域に局限される。それ以外の地域の歴史は、我々の気が逸れぬようにと神が湮滅させたのである⁽¹¹⁵⁾。とりわけ最古の歴史家としてのモーゼは、神の靈感を受けて世界創造以来2000年の歴史を書いている⁽¹¹⁶⁾。ボードワンは「普遍史の前説 *proemium historiae universae*」という名目で、これに従って創造の七日間を歴史的な事実として縷説し、さらには歴史という劇の「役者」である人間の状態と性質——神に創造されたままの人間ではなく、原罪を負い、自由意思によって動く存在としての人間⁽¹¹⁷⁾——についても説明する⁽¹¹⁸⁾。歴史のこの段階について、ギリシャ・ローマの歴史家は沈黙するかせいぜい詩的な虚構を語るに過ぎないゆえ、聖書およびユダヤ史、特にヨセフスの著作を参照すべきである⁽¹¹⁹⁾。

これに続く約1000年間は、ギリシャ・ローマの盛期である。これは多くの地

域と民族を巻き込む広範で複雑なものだが、優れた人物を多数輩出し、読む者には大きな喜びを与えてくれる⁽¹²⁰⁾。この間、整然と続く軍列のように、あるいは次々と松明を渡していく競技者のように、陸続と歴史家たちが現れた⁽¹²¹⁾。ヘロドトスの後をトゥキュディデスが継ぎ、その後をクセノフォン、ハリカルナスのディオニシウス、ポリュビオス、ティトゥス・リウイウス、タキトゥス、アミアヌス・マルケリウスと続く。あるいはディオンのカッシオスの後をヘロディアヌスが継ぐ、という具合である⁽¹²²⁾。

その後の約1300年間は文芸の衰微した時代であったが、それにもかかわらず歴史の灯火は絶え果てなかった。「これほどの野蛮な時代の暴威と文芸の荒廃の後でも過去の遺物は残されている⁽¹²³⁾」のである。ボードワンはここでも歴史家を列挙する。教会史家、ビザンツの歴史家、紀行や見聞録の類に加え、欧州各国にも、寥々たるものはいえ各時代・各地域の歴史を記した者たちがいる。いかに粗野で野蛮に見えても、それらは技巧を弄さないゆえ真実を汲むのに適している、とボードワンは言う⁽¹²⁴⁾。その上、「我々」の祖国の歴史であるから、そこにある栄光と高貴を蔑ろにするべきではない。

我々は、祖国の歴史の歌を聴こうとしないほどに墮落してしまうのか？
それに、蛮族と呼ばれる人々の記憶を保持しなければ、我々はそれを理解できないだろう。我々はフランス人、ブリテン人、ドイツ人、スペイン人、イタリア人なのだから、自分自身のことを語りうるためには、フランク人、イギリス人、サクソン人、ゴート人、ロンバルディア人の歴史に無知であってはならないのだ⁽¹²⁵⁾。

なお、この最後の段階のうち、直近三百年の「我々のヨーロッパ」には格別の扱いがある。ほとんどは相も変わらず無知で蕪雑な作品しかないものの、「博学で文芸に通じた人々」の手になる優れた著作が残されている。特にイタリアでは、フラヴィオ・ビオンド、マルカントニオ・サベリコ、ピエトロ・ベンボ、パオロ・ジョッヴィオ、ポリドーロ・ウェルギリオ、パオロ・エミリオ

ら、錚々たる歴史家たちが輩出する⁽¹²⁶⁾。より近い時代には、イタリアの外にも、ようやくフィリップ・ド・コミーヌ、アエリウス・アントニウス、パンデュルフ・コリヌティウスが現れた⁽¹²⁷⁾。

この三分法は、さらに下位区分を設けて、9個、27個…とより細密なものとなしうる。ボードワンは、こうした枠の中に重要な出来事や著名な人物を当てはめることで、全体史を総覧する上で我々の記憶の助けとなるとする⁽¹²⁸⁾。

以上のように、ボードワンにとって、全体史を学ぶということは決して古今東西の全ての歴史について詳細かつ完璧な知識を手に入れるということではない。それが真実に基づいていることを前提としながら、現実への適用を念頭に置いた有用性の観点より、必要となる諸々の事例を整理し、利用可能なものとするのがその主要な目的だった。それゆえ彼は、例えばヴィヴェスやボダンのように個々の歴史家を評定して取捨選択を行おうとするよりもむしろ⁽¹²⁹⁾、歴史家同士の間の連続性や相補性を強調して、全体史を俯瞰しうるような視点を得ようと試みるのである。

結論にかえて：ボードワンの射程

ボードワンは、人文主義的な素養を基盤にし、文献学の方法論を血肉化した上で、歴史研究と法学およびその発展としての政治学の接続を説き、人間の関した経験の地理的・時間的な拡がり全体を対象としようとするなど、多くの点でボダン以降の法曹歴史家たちと共通する⁽¹³⁰⁾。だが、彼は、厳密で網羅的な理論の構築よりも、時には相矛盾する種々の要素の「結合」をあらゆるレベルにおいて志す点、極めて独特である。ここでは彼の歴史論について、四つの特徴を挙げることにしたい。

第一点は、キケロに対する極めて高い評価である。それは人文主義者たちが嘆賞した弁論家、美文家としてのキケロには留まらない。ボードワンは、『弁論家について』や『ブルートゥス』の記述を自らの歴史論の枠組とするだけでなく、『アッティクス宛書簡』や諸々の弁論、哲学的著作もローマ史に関わる資料として逐次参照し、さらにはキケロの人物についても、歴史と哲学に通暁

して未来を予見することができた人物として、また内乱の中で沈着かつ賢明な処世を果たした人物として称揚する。この点、ボダンなどが、歴史を「人生の教師」云々とするキケロの言葉を単なる口実として援用するだけなのとは一線を画する。

第二は、歴史における神および神的なものの重要性である。これは、中世の歴史記述におけるように神が人間の歴史のすべてを差配すると見做すものではなく、アウグスティヌス的な地上の国と神の国の不断の抗争を意味するものでもなく、むしろメランヒトンら改革派の歴史論に近接して、神の歴史と人間の歴史の統合を図ろうとするものである⁽¹³¹⁾。ボダンなどは、両者を分離して、人間の歴史を不確実なものと認めながらその独立性を承認しようと試みた⁽¹³²⁾。これに対し、ボードワンは、神的な要素を人間の歴史の説明原理とすることは拒みながらも、あくまで二つの歴史を包摂しうるような視点を模索している。

第三に、ポリュビオスの重要性である。ボードワンは概してギリシャの歴史家には冷淡だが、ポリュビオスだけは例外で、ギリシャ人ではあるがローマの法や政治に造詣が深く、実際に政務に携わり、世界を経巡って普遍史を物したと称揚している⁽¹³³⁾。その上、ポリュビオスの「実践的な歴史」や「普遍史」という概念は、本来の意味からは幾分ずれながらではあるが、ボードワンの歴史論の鍵概念となっている。ポリュビオスの影響は、イタリアでは既にブルーニやマキャヴェッリに見られ、またフランスでも特にボダン以降、顕著になるものであり⁽¹³⁴⁾、ボードワンも大きく言えばこの流れに掉さしている。但し、彼の場合、他の著作家たちが大きな問題とするポリュビオスの比較政体論にはほとんど顧慮を払っていない点が興味深い。

最後に、ボードワンが著作の題名でも挙げていた、歴史と法学の結合という考えがある。ただ、この点の評価は研究者の間でも分かれる。フランクリンはこれが「曖昧で発展されないまま」にとどまり、十分な発展はオトマンとボダンを待つと言う⁽¹³⁵⁾。ケレーはより肯定的に、この「おそらく最初にかかれた歴史的方法の手引き」は、「法学に特有の概念や技術に関する新しい利用法」を発見したと評価する⁽¹³⁶⁾。だが、いずれにしても、ボードワンは、法学研究

に歴史的な方法と視点を持ち込んだ「フランス派」の法学研究の流れを汲みながら、歴史論という枠組の中で法学との結合を説いた点、画期的であったと言える。

ボダンの『歴史の方法』を到達点として考えればボードワンを不徹底と言うこともできるだろうが、だからといって、ボダンにおいては切り捨てられてしまうような、そして彼の歴史論の特性をなすような要素を過小評価するべきではない。歴史と法学、神の領域と人間の領域の結合を模索し、学問においても政治や信仰の場においても平和と調和を希求した彼の試みは、それ自体として、16世紀後半のフランスの歴史論の一つの興味深い事例となっているのである。

〔註〕

本研究は、科研費若手研究 (B) 課題番号16K16807の助成を受けたものである。

- (1) *De institutione historiae universae et ejus cum jurisprudentia conjunctione* προλεγόμενων libri duo, Paris, Andréa Wechel, 1561. 以下 *De institutione* と略す。仏訳に *Plan d'une Histoire universelle – son alliance avec la Jurisprudence*, trad. Auguste Wicquot, *Mémoires de l'Académie d'Arras*, t. XXXVII, 1865, p. 387-623がある。この著作に関しては特に Julian H. Franklin, *Jean Bodin and the sixteenth-century revolution in the methodology of law and history*, Columbia University Press, 1963, p. 42-46 et p. 116-136 ; Donald R. Kelley, « *Historia integra* : François Baudouin and his Conception of History », *JHI*, XXV, 1964, p. 35-57 ; *Id.*, *Foundations of Modern Historical Scholarship : Language, Law, and History in the French Renaissance*, Columbia University Press, 1970, p. 116-148 ; Anthony Grafton, *What was history ?*, Cambridge University Press, 2007, p. 62-122を参照。なおボードワンという綴りは Bauduin, Baudouin など揺れがある。
- (2) この著作は、ヨハン・ウォルフが編んだ歴史論集成 (Bâle, 1576 ; 増補版1579) でも、巻頭を飾るボダンに続いて、パトリッツィの『歴史をめぐる対話十篇』と並ぶ重要な位置を与えられている。カルロ・ギンツブルグによれば、この集成を介してボードワンはフィリップ・シドニーらの詩論にも影響を与えたという (Carlo Ginzburg, *Nul île n'est une île*, trad. Martin Rueff, Verdier, 2005, p. 56-57)。
- (3) 彼の生涯は Michael Erbe, *François Baudouin (1520-1573). Biographie eines Humanisten*, Gütersloh, Gerd Mohn, 1978に詳しい。Emile et Eugène Haag, *La France protestante*, Slatkine Reprints, 1966, t. II, p. 27b-35a も参照。
- (4) カルヴァン派のイデオログとなりながら経済的困窮に逐われるオトマンと、カトリックに復帰して学者として、また王侯の政治顧問として順調に経歴を重ねる

ボードワンとの間には、感情的なものも含め、多くの葛藤があった (Kelley, *op. cit.*, p. 124, n. 18)。オトマンについては Id., *François Hotman : A Revolutionary's Ordeal*, Princeton University Press, 1973参照。

- (5) 彼の態度は、カルヴァンの一派からは欺瞞的で背教的なものに見做され、ポワシー会談の前後にはベーズやオトマンなどの攻撃的となる。ボードワンもこれに反論している (Mario Turchetti, *Concordia o tolleranza ? François Baudouin (1520-1573) e i « Moyenneurs »*, Droz, 1984, p. 332-390)。この論争の中で彼は特に、カルヴァンおよび一派の歴史 (特に教会史) に関する知識の欠如を槍玉に挙げる (*Ibid.*, p. 457-463)。
- (6) ポワシー会談前後のボードワンの活動については Mario Turchetti, *op. cit.*, p. 201-262参照。
- (7) Ingrid De Smet et Alain Legros, « Un Manuscrit de François Baudouin dans la librairie de Montaigne », *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, LXXV, 2013, p. 105-111.
- (8) Lettre à Antoine Loysel in Estienne Pasquier, *Œuvres complètes*, Slatkine Reprints, 1971, t. II, Livre XIX, Lettre XIII, col. 568B.
- (9) 「フランス派」の法学者たちは、ユスティニアヌス法典を普遍法の体現として絶対視するのではなく、社会の変遷を背景とした複数の層を持つとする観点から再検討しようと試みた。そのためには、言語に精通して文献学的手法を法文に適用するだけでなく、歴史書や文学作品も含めたあらゆる古典テキストを動員してローマの社会・法制・文化の変遷を明らかにしようとした。先行するイタリアの註釈学派が『法典』を恣意的に利用していることへの批判に加えて、編纂者たるトリボニウスによる「改竄」も大きな議論的だった。これについてのボードワンの立場は、Kelley, *op. cit.*, p. 119-122 ; Grafton, *op. cit.*, p. 73-76を参照。
- (10) ストラスブールではスライデヌスの知己を得ている。ボードワンはまた、改革派による最初の教会史たる『マグデブルク諸世紀史』(1559-)に関し、主要な著者たるマティアス・フラキウスらと手紙を交わしている。そこでは教会史を編む上で法律書や世俗史を参照すべき事、資料批判の方法などを論じており、実際に『諸世紀史』にも反映された。本稿で見る『全体史教程』は、この経緯に言及しているだけでなく (*De institutione*, p. 109), いくつかの論点をほぼそのまま踏襲しているという。ただ、フラキウスは歴史の展開を真の信仰と偽の信仰との戦いとする点、必ずしもボードワンの融和的な立場とは相容れなかった。ボードワンはヴォルムス会談(1557)を機に、メランヒトンやカッサンデルら、より穏健なルター派に近づくようになる。この詳細は Gregory B. Lyon, « Baudouin, Flacius, and the Plan for the Magdeburg Centuries », *JHI*, 64, 2003, p. 253-272参照。
- (11) 彼はこの大学で1556-61年の間、教鞭を取った。同年9月に帰仏、ポワシー会談のために奔走することになる。
- (12) メランヒトンの影響の下、それまでの大学では学科としてほとんど存在しなかつ

た詩学や歴史の講座が設けられた。但しこれは散発的な試みに留まり、歴史学が大学の正式な講座として地位を確立するのは19世紀を待たなければならない。

- (13) この献呈先の選択自体がボードワンの態度を表明している。アントワヌ・ド・ブルボンがブルボン家当主だが、改革派に傾倒しつつも結局は旧教の信仰を護持した人物で、ボードワンはポワシー会談に前後して彼に仕えている。ミシェル・ドピタルは、大法官としてカトリーヌ・ド・メディシスと手を携えて新旧両派の調停に当たった。後者はまた、フランスの新しい法学や歴史論の良き理解者であり庇護者であったため、オトマンの『反トリボニウス論』やボダンの『歴史の方法』を初め、多くの著作の献呈を受けている。
- (14) *De institutione*, p. 1. 演劇の比喻は後でも繰り返される (*Ibid.*, p. 191-192)。世界を劇場に擬えることはデモクリトスに遡るもので、ストア派、新プラトン主義、教父たちなどの変奏を経て、人文主義者たちも好んで用いた (Ernst Robert Curtius, *La Littérature européenne et le Moyen Âge latin*, trad. Jean Bréjoux, PUF, 1956, p. 170-178 ; Jean Jacquot, « Le Théâtre du monde, de Shakespeare à Calderon », *Revue de littérature comparée*, XXXI, 1957, p. 341-372)。ただ、多くの場合、キケロのように「観客」を観想的な生活を送る哲学者に擬えるか (*Tusc.*, V, 3, 9), あるいは神をこの劇の作者兼観客、人間を俳優とするものである (時として「運命」が演出家に挙げられる)。ボードワンは、「役者」としての人間にも高い価値を置く点、そして「観客」と「批評家」を区別する点、特異である。
- (15) « *homine indignam esse existimo rerum humanarum ignorationem* » (*De institutione*, p. 6). 本著作の結びにも次のようにある。「人間は神によって創造され、この世界に住まわされたが、それは単に観客や批評家としてだけでなく、役者としてでもある。神によって創造された事物の観客としてよりも、人間の間の、人間に対して行われる行為の観客としてである」 (« *hominem [est] a Deo creatum, & in hoc mundo collocatum non modo ut spectator & interpret sit, sed etiam ut sit actor. Deinde ut non solum rerum a Deo creatarum, sed & multo magis actionum inter homines & cum hominibus transactarum spectator sit* » : *Ibid.*, p. 214)。
- (16) « *Nos, ut in media etiam rerum humanarum perturbatione agnoscamus Dei omnia certa ratione regentis admirabilem prouidentiam, literis sacris satis praemoniti sumus. Estque hoc summum ad historiam recte considerandam lumen* » (*Ibid.*, p. 7).
- (17) « *multipl[ex] su[a] sapienti[a], bonit[as], potenti[a]* » (*Ibid.*, p. 14).
- (18) Polybe, VIII, 2, 11に « καθολική καὶ κοινὴ ἱστορία » とあるのを受ける。この概念は、シチリアのディオドロス、エウセビオスへと受け継がれていく。
- (19) *Ibid.*, p. 22. ケレーはここにアリストテレスの悲劇論を念頭に、全体史の「美学的な」統一を認めるが (art. cité, p. 51 ; *op. cit.*, p. 135), 少し穿ちすぎである。
- (20) *De institutione*, p. 41.
- (21) Polybe, I, 2, 8 ; IX, 2, 4. この語の解釈については Paul Pédech, *La Méthode historique*

de Polybe, Les Belles Lettres, 1964, p. 21-32参照。

- (22) « *histori[a] πραγματικ[ή], quae quod narrat, diligenter exponit, & sapienter utiliterque demonstrat, ut non solum euenta, sed & causas eorum & cum consiliis facta describat* » (*De institutione*, p. 29).
- (23) « *Talem ergo πραγματείαν, esse eius uniuersitatis [...] partem praecipuam profiteor* » (*Ibid.*).
- (24) Cf. Claude-Gilbert Dubois, *La Conception de l'histoire en France au XVI^e siècle (1560-1610)*, Slatkine Reprints, 2011, p. 76.
- (25) « *cum de historia loquor, de integra & perfecta loquor : in qua dico diuinae prouidentiae rationem habendam esse, ut recte spectemus res in orbe terrarum maximas, & quidem diuinas cum humanis admirabili ordine atque ratione commixtas* » (*De institutione*, p. 9).
- (26) *Ibid.*, p. 16 ; *De Orat.*, 2, 36.
- (27) « *dico hanc [=historiam] unam demum esse viam & rationem, qua euadere possimus ad illam rerum diuinarum, humanarumque cognitionem, quae nostros animos alte sublatos in excelsa quadam veluti specula collocare possit, ex qua circumspiciamus, quicquid in orbe terrarum iam inde, ex quo ille est conditus, gestum est, quod quidem sit dignum animaduersione, memoriaque nostra* » (*De institutione*, p. 16). ここでボードワンの述べる俯瞰的視点の背景については Marie-Dominique Couzinet, *Histoire et méthode à la Renaissance : une lecture de la Methodus de Jean Bodin*, Vrin, 1996, p. 278-284参照。
- (28) *De institutione*, p. 24. Polybe, VIII, 2, 11 (voir *supra* note 18) ; Eusèbe, *Hist. eccl.*, I, 1, 4.
- (29) *Ibid.*, p. 23; Polybe, I, 3, 4.
- (30) *Ibid.*, p. 23-25 ; Lucrèce, V, 326-327 ; Plutarque, *Vie de Thésée*, 1.
- (31) *Ibid.*, p. 25.
- (32) *Ibid.*, p. 31. 天文学の進展の結果、太陽が徐々に地球に接近していることが発見され、もしこれが続けば、あと5世紀で地球は焼け果ててしまうという。その場合、これこそ「全体史の自然的な終わり *historiae universae [...] naturalis finis*」ということになる (*Ibid.*, p. 206)。
- (33) *Ibid.*, p. 25-26 ; p. 31 ; p. 205.
- (34) « *nunc Geographiae & Cosmographiae eam esse lucem, ut eum [globum] veluti spectandum in tabula offerat, & prope manu tenendum tradat* » (*Ibid.*, p. 205).
- (35) *Ibid.*, p. 37-39.
- (36) *Ibid.*, p. 41-42 ; Polybe, I, 14, 6 ; XII, 12, 3. なお、ボードワンは、古代の歴史家たちが誤って混入させた「驚異 *prodigia*」を排斥すべきだとする一方、聖史に見られる「奇跡 *miracula*」については、人間の理性を超えてはいるが、真実の出来事として正しく歴史の中に留めねばならないと付言する (*Ibid.*, p. 43)。

- (37) *Ibid.*, p. 43-44.
- (38) « *morosi [...] importuni & intemperantes Censores* » (*Ibid.*, p. 44).
- (39) « *Scio & profiteor, nos, quantum fieri potest, curare debere, ut fabulas, quae historiam plerunque obsident, eamque clam perua ferunt, depellamus. Sed rursus cauere oportet, ne sic omnia ad viuum resecemus, ut etiam verum cum falso temere abiiciamus. [...] non minus est periculi in vero repudiando, quam in falso complectendo* » (*Ibid.*, p. 45).
- (40) « *Vetus & prima sapientiae lex esse dicitur, non temere credere. Ergo facessat fatua temerariaque credulitas. Nam & eam culpa non carere, Iurisconsulti recte pronunciant : & toties non solum falluntur qui scribunt, sed & iis affingitur, quod nunquam scripserunt, ut cauta inquisitio valde sit necessaria. Caeterum est etiam quaedam nimium morosa, nimiumque diffidens ἀπιστία. Quae quidem nisi simul facessat, nullum ulli historiae locum relinquet : & vero non ingenui, sed impudentis atque prae fracti hominis est, etsi quid probabiliter dicatur quod & grauem auctorem, testemque habeat, tamen id contumaciter tanquam falsum repudiare, cum quidem neque quod affirmatur, refellere, neque cur illud repudiet, causam dicere possit* » (*Ibid.*, p. 50). ボードワンはまた、アリストテレスの表現を引いて、歴史を読む上では「幼児でも老人でもないこと」、すなわち「信じやすくも疑い深くもないこと」が大切だとする (*Ibid.*, p. 52 ; Arist., *Rhet.*, 1390a)。Cf. Jean Bodin, *La Méthode de l'histoire*, in *Œuvres philosophiques de Jean Bodin*, éd. et trad. Pierre Mesnard, PUF, 1951, p. 294a.
- (41) *De institutione*, p. 50.
- (42) « *Memini Polybium scripsisse maximam & difficillimam partem historici operis esse, recte & sapienter iudicare de scriptoribus historicis. De eorum oratione non loquitur, sed de testimonio, & ea, qua digni sunt, fide. Quid nos ? verecunde quidem [...] sed ingenue tamen & libere (veritatis enim maior semper cura esse debet) quod libri nobis narrant, excutiamus* » (*Ibid.*, p. 51 ; Polybe, XII, 4c, 3-5).
- (43) *Ibid.*, p. 48-49. Cf. Grafton, *op. cit.*, p. 99-105.
- (44) *De institutione*, p. 59.
- (45) 「私が望むのは、著者たちが自分の見たことか参加したことのみを叙述することだ。[...] だが、αὐτόπτης と呼びうる目で見た証人たる著者がいないのだったら、他の者から知ったことを真率に叙述する者を聞くのが良い。とりわけ、そうした者たちの年齢や時代の古さや徳性が、彼らに信用と権威を与えうるのであれば」(« *Equidem optarem, ut scriptores ea demum narrarent, quae viderunt, quibusque interfuerunt. [...] Verum si ii auctores non occurrant, qui testes oculati sint, & possint dici αὐτόπτον : proximum est, ut eos, qui quod ab aliis acceperunt, bona fide narrant, audiamus, praesertim si & iis aetas ipsa & antiquitas & virtus fidem atque auctoritatem conciliet* » : *Ibid.*, p. 54)。Cf. Polybe, XII, 4c, 4-5.

- (46) 「第一に最古のもの、次いでそれに近い時代のものについて、その配置と順序に応じて、それが聴衆に不適なものでなければ、聞き、後代のものが何か前のものにつけ加えていないかを見るのが望ましい」(« *imprimis antiquissimos : post vero, ut quisque illis proximus aetate est, suo quenque loco & ordine, si hoc auditorio non sit indignus, audiri, & quid priori posterior addiderit, observari cupio* » : *Ibid.*, p. 56)。
- (47) *Ibid.*, p. 54. Cf. Bodin, *La Méthode de l'histoire*, éd. citée, p. 296b.
- (48) « *velim eos meminisse, historias non esse verborum, sed rerum : neque unius alicuius linguae expoliendae tantum causa comparari, sed mentis erudiendae* » (*De institutione*, p. 33).
- (49) *Ibid.*, p. 34.
- (50) *Ibid.*, p. 100.
- (51) « *non po[ssunt] una aliqua historiae uniuersae perpetua oratio eleganter & aequabiliter contexi atque perpoliri. [...] Sed historiam veram, non Rhetoricam fabulam aut scholasticam declamationem expeto. Quam alii verborum continuam concinnitatem ac semper similem perpetuae politaeque dictionis aequabilitatem hic requirant, ipsi viderint. Ego rerum & constantem & sinceram & simplicem & castam veritatem in historia imprimis requiro* » (*Ibid.*, p. 56-57).
- (52) *Ibid.*, p. 57. 同様に「私は真実を擁護する。事実と法、重要な事柄について歴史の中で求める。ただ言葉の優雅さしか求めないのは愚かだと思う。そして、言葉を事柄に従わせるのではなく事柄を言葉に従わせるのなら、どこに信頼と法と判断が存するのか？ 少なくとも良き証人の言葉よりも我々の言葉を優先するのは良いことではないと思う」(« *Ego nunc veritatis causam ago. Et cum de facto ac Iure, maximisque de rebus in ea quaeritur: ineptum esse puto de sola verborum elegantia quaerere. Et cuius tandem erit aut fidei aut juris aut iudicii, res verbis, potius quam verba rebus subiicere ? Saltem fas non esse puto, bonorum testium verbis anteponeere nostra* » : *Ibid.*, p. 58-59)。
- (53) *Ibid.*, p. 101.
- (54) *Ibid.*, p. 62-63 ; Cic., *De Orat.*, II, 15, 62-64.
- (55) *Ibid.*, p. 68.
- (56) « *ut in recitatione tamen alieni testimonii, esse debemus bonae fidei : sic testimonia quae sinceriora sunt, imprimis sunt proponenda* » (*Ibid.*, p. 55).
- (57) « *non modo eorum, qui scribunt, sed etiam aliorum, qui legunt ab aliis scriptas historias, officium exponunt* » (*Ibid.*, p. 63).
- (58) « *Quod dixi uniuersae & verae historiae operam dare nos debere, ut de nostro, qui auditores aut lectores sumus, sic & de scriptorum historicorum officio loquitur* » (*Ibid.*, p. 62).
- (59) « *Ubi factum aliquod historia vere & fideliter narravit, protinus (ut in*

testimoniis sit) quaeri solet ac debet de tempore & loco. Nam neque alioqui integra narratio esset » (*Ibid.*, p. 95).

(60) *Ibid.*, p. 97.

(61) « *Nam etsi maxima facta sit bonorum librorum veterumque monumentorum jactura : tamen eae tanquam ex naufragio superstites tabulae sunt, quibus si innitatur, in tam vasto Oceano navigationem conficere atque etiam ad portum appellere poterimus : colligamus modo omnia & cogamus studiose, quae singuli scriptores sparsim tradunt* » (*Ibid.*, p. 72).

(62) *Ibid.*, p. 68-71.

(63) *Ibid.*

(64) *Ibid.*, p. 73-75. ボードワンは、新大陸、ゲルマニア、黎明期のローマ等の具体例を挙げる。カルロ・ギンズブルグは、新大陸の発見が過去のヨーロッパに投影されているとして、ここに「確固たる反ヨーロッパ中心的態度」の表れを見るが (Carlo Ginzburg, *op. cit.*, p. 60), 少なくともこの著作の全体において、ローマの歴史と法学は常に最重要の参照項となっている。Grafton, *op. cit.*, p. 112-117も参照。

(65) *De institutione*, p. 81.

(66) « *si bene & liberaliter institui velint, in historiae ludo sint φιλοθεωροί, in eoque propterea diu immorentur* » (*Ibid.*, p. 13).

(67) « *consilii, prudentiae, sapientiae, iudicii recti institutionem ex una veluti academia Historiae repeti posse & debere* » (*Ibid.*, p. 179).

(68) *Ibid.*, p. 178-179.

(69) *Ibid.*, f. a iii^l.

(70) « *sentiemus tam eam [coniunctionem] esse necessariam, quam unius corporis indiuisae partes aut membra diuelli neque possunt neque debent* » (*Ibid.*, p. 104).

(71) « *Age vero : dicat Cicero, maxime esse Oratorium opus, historiam scribere. An Iure dicere non potero, non minus hoc esse Iurisconsultorum ?* » (*Ibid.*, p. 135-136).

(72) *Ibid.*, p. 141.

(73) « *nostra tempora, quae maximis & doctissimis hominibus, hoc est, Iurisconsultis ιστορικωτάτοις, & historicis Iurisconsultissimis abundant* » (*Ibid.*, p. 148).

(74) « *cum omnes fateantur historiam καθολικῆς, debere esse πραγματικῆς [...] : & πραγματείαν illam hoc postulare sciant, ut rerum gestarum circumstantiae, quae abs Graecis περιστάσεως appellantur, simul exponantur : ego non verebor Iuris statum inter praecipuas illas circumstantias referre* » (*Ibid.*, p. 117).

(75) *Ibid.*, p. 29. Voir *supra* note 22.

(76) *Ibid.*, p. 117 ; *Ad Atticum*, XIV, 3, 2. ここでは、キケロが同時代の法的な出来事について述べていたことを、過去の歴史へと拡大して適用している (Grafton, *op. cit.*, p. 73)。

(77) « *Ubi factum aliquod historia recitauit, excutiendum nobis illud iterum est : &*

de Iure ac usu est quaerendum », *Ibid.*, p. 102-103. キリスト教の正しさを示す上で、そもそも聖書に拠らない異教徒や蛮人に対しては事実問題として歴史書としての聖書の古さを持ち出せば十分だが、聖書を受け入れるユダヤ人や異端に対しては、教会史を参照して、聖書の解釈に関わる権利問題を問わなければならないとする (*Ibid.*, p. 108-109)。

(78) *Ibid.*, p. 104.

(79) « *rerum diuinarum atque humanarum noticia, justi atque injusti scientia* » (*Ibid.*).

(80) *Ibid.*, p. 106.

(81) *Ibid.*

(82) « *Dico Ius sacrum cum historia sacra, & hanc cum illo mirifice esse coniunctam. Ut itaque Theologiam quam vocant, Deus in historiae schola veluti inclusisse dicitur, quia literae sacrae sint etiam historicae : sic & huiusce diuinae Iurisprudentiae atque historiae indiuiduam esse coniunctionem, iure aliquis dixerit* » (*Ibid.*, p. 107).

(83) *Ibid.*, p. 109

(84) Kelley, art. cité, p. 41.

(85) Kelley, *op. cit.*, p. 128.

(86) « *& amplitudo & copia & varietas, & propterea difficultas* » (*Ibid.*, p. 112).

(87) *Ibid.*, p. 113.

(88) *Ibid.*, p. 127.

(89) *Ibid.*, p. 128.

(90) *Ibid.*, p. 115-116.

(91) « *Opto historiam uniuersam, sacram & ciuilem, veterem & nouam, nostram & peregrinam colligi : & simul Iurisprudentiam priorem & posteriorem, diuinam & humanam, coalescere. Denique ex duobus istis veluti corporibus historiae & Iurisprudentiae unum conflari velim* » (*Ibid.*, p. 129).

(92) « *[Historiae] nos attollere, circumagere, afficere ita debent & possunt, ut modo hac, modo illa aetate viuere nos, & modo hic, illic modo agere nobis plane videamur : neque modo res spectare tanquam presentes, sed & in iis partes veluti nostras agere* » (*Ibid.*, p. 21).

(93) *Ibid.*, p. 163.

(94) *Ibid.*, p. 167.

(95) « *studium historiarum multo [est] regalius : neque Regibus modo, sed & omnibus, qui aliquam alicuius Reip. partem gubernandam susceperunt, imprimis dignum [est]* » (*Ibid.*, p. 146). 王に関しては、カステイーヤ王アルフォンソ八世とナポリ王アルフォンソ一世、ハンガリー王マティアス・コルヴァンが歴史書と文芸を好んだ名君として挙げられ、現今の君主たちの従うべき模範とされる (*Ibid.*, p. 150)。

- (96) *De institutione*, p. 150.
- (97) « *non modo, quod Polybius desiderat, desidero historiam esse πραγματικὴν : sed ut nostri dicere solent, Iurisprudentiam non solum θεωρητικὴν, sed etiam πραγματικὴν esse, esseque debere : sic ego historiam* » (*De institutione*, p. 170).
- (98) *Ibid.*
- (99) « *historiae, quodammodo ut leges, legendae sunt, hoc est, ut priores ad posteriores, & rursus posteriores ad priores apta quadam collatione trahantur* » (*Ibid.*).
- (100) « *ex hypothesis historica saepe colligenda est politica veluti thesis* » (*Ibid.*).
- (101) *Ibid.*, p. 171 ; Polybe, XII, 25b, 3.
- (102) *Ibid.*, p. 177. Cf. Polybe, I, 35, 7-9.
- (103) *Ibid.*, p. 96.
- (104) *Ibid.*, p. 98.
- (105) « *Geographiam cum historia coniunxit* » (*Ibid.*, p. 99).
- (106) « *Certe aliud longe est, Geographiae aliquam historiarum memoriam aspergere : aliud, historiae perpetuae Geographiam veluti appendicem subiicere* » (*Ibid.*, p. 100). ボードワンは地理を歴史に従属させている点、両者を対等な関係で結びつけようとするボダンとは異なる。歴史の優位は、地理が視覚的なイメージの域を出ないのに対し、その描写において修辞学上の技法を駆使することで、効果的に精神的イメージを喚起できる点にあるとする。(Marie-Dominique Couzinet, *op. cit.*, p. 231-238)。
- (107) « *Nunc dico, ne tempora quidem literis omnibus inimica potuisse nobis earum praesidia eripere, & historiam sic certasse cum barbarie, ut haec illam opprimere non potuerit, ut huic illa minime cesserit, denique ut hanc illa veluti in triumpho circumduxerit* » (*De institutione*, p. 84).
- (108) « *Qualescunque reliquiae nobis relictæ sunt [...] historiam satis integram conflare utcunq̃ue possunt, si abs singulis scriptoribus singula corrogando, omnia peruestigemus, & quod singuli conferent, apte colligamus atque coniungamus* » (*Ibid.*).
- (109) « *& diligentiam perquirendi, & artem quandam quaestis recte utendi, necessariam esse profiteor* » (*Ibid.*).
- (110) *Ibid.*, p. 180. 世界の創造の年代については、諸説紛々としており、ギリシャ・ローマとユダヤは互いの歴史に無知だった故に双方とも誤っている (*Ibid.*, p. 184)。歴史の精査と数学的な計算の結果、世界創造からキリストの誕生まで3962年というのが最も真実に近いものとされる (*Ibid.*, p. 185)。
- (111) *Ibid.*, p. 192.
- (112) *Ibid.*, p. 194.
- (113) *Ibid.*, p. 196-197.

- (114) とりわけ『ダニエル書』に基づく「四つの帝国」論は、スライデヌスを初め、改革派の歴史論の中でしばしば援用された。Claude-Gilbert Dubois, *op. cit.*, p. 387-500 参照。
- (115) *Ibid.*, p. 188.
- (116) *Ibid.*, p. 75. モーゼを最古の歴史家とするのは、セヴィリアのイシドロス『語源』I, 42に遡る。
- (117) *Ibid.*, p. 210 ; p. 213.
- (118) *Ibid.*, p. 198.
- (119) *Ibid.*, p. 39.
- (120) *Ibid.*, p. 189.
- (121) « *veterum omnibus seculis historicorum, qui in hoc genere scriptionis, tanquam in acie alii alliis successerunt, & quasi in decursu lampada acceperunt abs decedentibus, continuam atque conspirantem fuisse contentionem* » (*Ibid.*, p. 84).
- (122) *Ibid.*, p. 83.
- (123) « *post tantam barbarorum temporum tempestatem, atque adeo literarum vastitatem, tantum esse reliquum veterum monumentorum* » (*Ibid.*, p. 84).
- (124) *Ibid.*, p. 94-95.
- (125) « *Et nos erimus tam degeneres, ut ne audire quidem velimus patriae historiae carmen ? Caeterum id intelligere non possumus, nisi si & eorum, qui Barbari dicuntur, memoriam teneamus. Si Galli, vel Britanni, vel Germani, vel Hispani, vel Itali sumus : ut de nostris loqui possimus, necesse est nos Francorum, Anglorum, Saxonum, Gothorum, Longobardorum historiam non ignorare* » (*Ibid.*, p. 37).
- (126) *Ibid.*, p. 95.
- (127) *Ibid.*, p. 147. ボードワンは三者のうちでコミーヌが傑出していると言う。
- (128) *Ibid.*, p. 197.
- (129) Voir Juan Luis Vives, *De Disciplinis*, éd. et trad., Tristan Vigliano, Les Belles Lettres, 2013, p. 440-450 ; Bodin, *Méthode de l'histoire*, éd. citée, p. 293-313.
- (130) ボードワンとボダンの共通点については Grafton, *op. cit.*, p. 68-69 参照。
- (131) ケレーは、ボードワンについて「アウグスティヌス的な」世界観と形容するが (Kelley, *op. cit.*, p. 135), これは些か不正確である。
- (132) ボダンは「歴史」を三分割して「神の歴史」・「自然の歴史」・「人間の歴史」とし、信仰および理性に基づく確実な知識を有する前二者に対し、「人間の歴史」は「不確実で混乱した」もので、「真実らしさ」しかありえないとした (Bodin, *La Méthode de l'histoire*, éd. citée, p. 281a-b)。その上で、「人間の歴史」に固有の方法を定立しようとするのである。
- (133) *De institutione*, p. 137.
- (134) Voir Arnaldo Momigliano, « Redécouverte de Polybe en Europe occidentale »,

in *Problèmes d'historiographie ancienne et moderne*, trad. Alain Tachet, Gallimard, 1983, p. 186-209.

(135) Franklin, *op. cit.*, p. 46

(136) Kelley, *op. cit.*, p. 131.

La *Bible de l'humanité* de Jules Michelet

—— Celle de tout le genre humain ? ——

Yasuko ESHIMA

Quinet et Michelet ont écrit tous les deux sur les religions, l'un est l'auteur du *Génie des religions* (1842) et l'autre de la *Bible de l'humanité* (1864). Ils sont l'un et l'autre historiens de la Révolution, l'un avec *La Révolution* (1865) et l'autre *Histoire de la Révolution française* dont le premier tome a paru en 1847.

« Dans ma *Révolution* et ma petite *Bible* j'ai suivi une ligne religieuse qui n'est pas la vôtre. Et en politique aussi, nous nous sommes trouvé écartés pour ces points où nos ennemis se sont armés de votre livre, disant, comme Renan : “ La révolution est une affaire avortée ” »¹.

Comme le signale Louis Le Guillou dans la note ajoutée à cette missive de Michelet à Quinet (9 septembre 1868), les deux amis s'opposent sur l'interprétation de l'événement de 1789 : dès son cours au Collège de France, publié sous le titre du *Christianisme et la Révolution française* (1845), Quinet niait le caractère religieux de la Révolution: elle n'est pas « la justice, l'Évangile éternel, la Religion absolue »². Elle se voua politiquement à l'échec, faute de remplacer l'ancienne croyance par un nouveau culte³, faute donc d'une foi unificatrice du peuple pour la fondation d'une nouvelle société. Un

écart irréductible semble s'installer entre les deux penseurs, malgré l'objection épistolaire (18 septembre), par laquelle Quinet tente de minorer la divergence de leurs points de vue : (« *Je ne vois pas les dissidences* dont vous parlez sur la *religion* et la *politique*. La *religion de la nature* est bien vaste ; elle a plus d'une chapelle »⁴). Nous allons essayer, par une relecture de la Bible micheletiste, de relever des points de litige entre les deux historiens, et cela afin de nous rendre compte, en premier lieu, de la dichotomie existant entre « les races de la lumière » et « les races de la nuit », et, en second lieu, de la mise en contraste de la masculinité et de la féminité, intimement liée à la problématique des races.

L'édition critique de la *Bible de l'humanité*, parue en 2009, donne un éclairage nouveau sur l'œuvre de 1864 avec d'importantes variantes⁵. Nous nous appuierons ici sur cette édition.

1. “ La race de 89 ”

“ La race de 89 ” : cette expression que l'on découvre dans la conclusion de la *Bible de l'humanité* (« Et ta race est 89 ») suscite l'interrogation sur le sens du mot « race ». Que signifie-t-il dans le vocabulaire micheletiste ? Si nous cherchons ce terme dans les dictionnaires, des deux significations de celui-ci : d'abord, la lignée (« tous ceux qui viennent d'une même famille ») et ensuite, la subdivision de l'espèce, la première domine dans les dictionnaires des XVII^e et XVIII^e siècles, bien que la distinction en trois catégories (races blanche, noire et jaune) y ait fait déjà son apparition. La seconde acquiert son importance au siècle suivant, avec l'émergence d'expressions telles que « la race germanique », « la race juive », etc. Cette nouveauté caractéristique du XIX^e siècle et fondée sur la notion d'hérédité des caractères à la fois physiques et mentaux, prépare au glissement vers la hiérarchisation des races⁶. Il s'ensuit qu'il existe diversifications et

gradations dans l'emploi que chaque écrivain fait de ce terme, comme le montre bien “ la race de 89 ” dans le livre de Michelet⁷.

Pour le titre de son ouvrage, Quinet a préféré le mot « génie » : son propos de découvrir l'originalité propre de chaque religion révèle du même coup celle de chaque race : « À peine sortie du limon, chaque race porte, dans ses traits, dans son cœur et dans ses pensées ébauchées, l'empreinte ineffaçable d'un sceau particulier (...) ; depuis sa naissance, jusqu'à sa mort chaque peuple gardera sur son visage le masque de son dieu »⁸. La race semble y être avant tout une entité spirituelle, — d'ailleurs comme chez Michelet —, sans qu'elle perde pour autant son enracinement charnel.

Un point crucial sépare toutefois les deux historiens sur la conception de la race : par sa tentative de démontrer la concordance des deux composantes de la Terre, l'Asie avec l'Europe, Michelet se pose en continuateur de la pensée des Lumières, à la suite de la redécouverte de « la moralité de l'Asie » et de « la sainteté de l'Orient » qu'a faite le siècle précédent⁹. Il est à noter que “ l'Asie morale ” ou “ l'Orient saint ” se situe dans l'Inde et la Perse, dont les langues se trouvent dans la lignée des langues indo-européennes, filiation découverte par William Jones à la fin du XVIII^e siècle et désignée comme telle par Thomas Young en 1813. On voit que, dans la *Bible de l'humanité*, c'est tout d'abord le groupement linguistique, découvert grâce à la philologie comparée, qui unit ces deux parties du monde, l'Asie et l'Europe ; cette dernière étant représentée par la Grèce, dont la langue est qualifiée par Michelet de « vrai verbe humain » ou de « langue de la lumière »¹⁰. Ce qui vient appuyer ce rapprochement, c'est la contribution de la mythologie comparée, telle qu'on peut la vérifier chez Max Müller à qui il se réfère plus d'une fois dans sa *Bible* : « Hegel appelle la découverte de l'origine commune du grec et du sanscrit la découverte d'un nouveau monde ; la même chose peut se dire aussi de l'origine commune de

la mythologie grecque et de la mythologie sanscrite. La découverte est faite, et la science de la mythologie comparée s'élèvera bientôt à la même importance que la philologie comparée »¹¹. Pour le mythologue allemand, la meilleure consécration en langue et en mythologie de « la race aryenne » se constate chez les Grecs¹². Pour Michelet, « le peuple des Aryâs » qu'il qualifie de « notre légitime ancêtre » apporte, d'un côté au bassin du Gange et de l'autre à la Perse, la Grèce et Rome, une identité commune, une communauté d'idées, d'arts et de religions.

« (...) l'Inde primitive, en son berceau originaire, fut la matrice du monde, la principale et dominante source des races, des idées et des langues, pour la Grèce et Rome, l'Europe moderne (...) »¹³.

Fondée sur l'apport de la philologie, cette thèse suppose une profonde parenté entre la langue et le mythe, voire entre la langue et la race. Et elle regroupe l'Europe et un “ certain ” Orient représenté par l'Inde et la Perse. L'idée de Michelet s'accorde parfaitement avec la théorie linguistique, devenue dominante au milieu du siècle, qui admet la dichotomie des races — indo-européennes et sémitiques — suivant celle de leurs langues :

« À côté de cette grande et forte race des Aryas et des Iraniens apparaît, dès la plus haute antiquité, une autre race dont les conquêtes devaient être moins étendues et moins durables, mais dont les destinées n'ont guère été moins glorieuses : c'est la race sémitique ou syro-arabe »¹⁴.

Dans cet article d'Alfred Maury paru dans la *Revue des deux Mondes* en 1857, apparaît très nettement la démarcation des deux races, qui est de

nature à diviser en deux l'Orient.

Une thèse qui contraste avec celle du *Génie des religions*, dont le dessein semble pourtant similaire à celle de la *Bible* : révéler les cultes de l'Orient et leurs rapports notamment avec ceux de la Grèce¹⁵. L'ouvrage de Quinet (paru en 1842) fait voir nettement que l'auteur appuyait son raisonnement sur l'hypothèse de la lignée linguistique indo-européenne — qu'il croit d'ailleurs probable— afin d'en déduire, pourtant, une tout autre conclusion que Michelet : la possibilité d'une origine commune de toutes les races (« il résulte évidemment de là que les peuples aujourd'hui les plus étrangers les uns aux autres ont vécu à l'origine dans une relation intime et qu'ils ont composé d'abord une grande famille »)¹⁶. En effet, est absente chez Quinet la mise en opposition de la langue indo-grecque et de la langue sémitique. Quinet, traducteur des *Idées pour une philosophie de l'histoire de l'humanité* de Herder (parues en 1827), demeure fidèle dans son ouvrage de 1842 à l'hypothèse linguistique du philosophe allemand et vise à faire une histoire des religions, qui n'est pas, pour lui, autre chose que « la généalogie de l'Éternel ». De son point de vue, qui admet dans sa perspective les manifestations divines, les croyances des Indiens et des Persans ont des éléments révélés communs avec ceux des Hébreux¹⁷. Son affirmation : « L'Orient avait développé le dogme de l'incarnation dans la Trinité divine, la Judée avait ramené cette Trinité à l'unité ; la Grèce y joint l'idée du Dieu dans l'homme. Ainsi s'achève l'Ancien Testament du monde sacré et profane »¹⁸ révèle clairement un fossé, remarquons-le, qui se creuse entre les deux hommes au sujet de la religion des Hébreux.

Autre point de litige entre eux : la *Bible* n'est pas, selon la déclaration de son auteur, « une histoire des religions », en opposition à l'ouvrage de son ami Quinet. Pour celui-ci, la religion est « la substance de l'humanité », la source fondamentale, d'où découle la société politique et civile¹⁹. Tandis

que, chez Michelet, elle demeure certes un élément majeur qui entoure, véhicule ou dilate la vie humaine, mais, elle ne peut la ressourcer qu'une fois mise en faisceau avec ses autres composantes — « amour », « famille », « droit », « art » et « industrie ». Celles-ci constituent autant de critères de jugement dont Michelet se sert dans son analyse des religions. Cette divergence de points de vue provient du fait que pour lui la religion aussi est une création de l'homme. Ce qu'il magnifie tout d'abord chez le peuple des Aryâs, c'est que celui-ci fut capable de percevoir que les dieux étaient « les fils de l'âme humaine » : « C'est le caractère grandiose de cette race, la première du monde, qu'en adorant, toujours elle sait bien qu'elle a fait ses dieux »²⁰. De son côté, la Grèce va plus loin et fait encore mieux que son ancêtre en « éduquant » ses dieux dans le sens du progrès moral²¹.

Irréalisable sous la double contrainte d'une contrée chaude et d'une race en voie de perfection, la haute spiritualité du peuple de l'Inde verra son accomplissement se faire ultérieurement et par un autre peuple. Pourtant, l'essentiel est le fait qu'il a conçu des idéaux. C'est justement par la proclamation de ceux-ci que vaut également l'histoire de Râma, en particulier celle du second Râma, créée par les chatryas (« guerriers »), pour laquelle l'admiration de Michelet demeure sans borne. Pour lui, ce qui fait le fond même du Râmâyana, c'est son caractère universel : il n'est pas seulement destiné aux deux classes supérieures dans la hiérarchie des castes, au brahmane et au chatrya, mais aussi au Vêsyâ (le marchand, c'est-à-dire le peuple), et même au plus bas des catégories humaines : « Si par hasard un esclave l'entend, il est ennobli »²². Pour Michelet, la ségrégation opérée par la hiérarchisation en castes subsiste dans la réalité, mais son abolition future se voit proclamer par le haut idéal du poème et son caractère sacré.

Selon lui, cette continuité à la fois spirituelle et géographique désigne véritablement l'apanage de la « race indo-grecque » et témoigne de la

prééminence de la Grèce en tant que consécration de cette lignée. Il trouve les meilleurs modèles de cette éducation dans les figures d'Hercule et de Prométhée. Le premier, par la légende de ses douze travaux, représente la « glorification du Travail », à travers laquelle s'opère la réhabilitation de l'esclave comme travailleur. Un Hercule qui acquiert par ses propres efforts sa divinité, sa place à l'Olympe symbolise également le stoïcien²³. Il personnifie le Droit de l'Homme contre toutes les tyrannies.

Quant à Prométhée, il se voit lier au « triomphe de la Loi ». Chez Eschyle, dans le *Prométhée enchaîné*, le titan est l'image de « l'anti-tyran »²⁴ se dressant contre le pouvoir de Jupiter au nom de la pitié pour les hommes: il incarne l'idéal de la justice et la révolte de l'homme contre la puissance de l'arbitraire. Michelet trouve en sa figure cet enseignement suprême : l'homme est son propre Prométhée, son propre Sauveur. Le drame eschylien a consacré le culte de l'Homme, culte rendu à lui-même, au Dieu en lui. L'auteur acquiert ainsi le titre de « prophète », et ses tragédies celui de « la Bible grecque »²⁵. Elle achève en apothéose l'Ancien Testament des peuples de la lumière.

Le curieux usage du mot « race » dans « ta race est 89 », apprend au lecteur que, pour Michelet, la Révolution française se proclame le dénouement, l'ultime étape de la généalogie spirituelle mythiquement interprétée, qui, en partant de l'Inde et en passant par la Perse, la Grèce et Rome, descend jusqu'au seuil de son siècle. La Révolution marque le commencement de “ notre temps ” et éclaire l'avenir, non seulement de la France, mais de l'humanité tout entière. Pour lui, la Révolution est une nouvelle religion, une religion de la Justice et de la Fraternité²⁶, une « église universelle »²⁷ : celle qui remplace la religion judéo-chrétienne.

2. Une autre race

Dans une lettre de 1864, Michelet présente sans ambiguïté le schéma fondamental de son œuvre :

« J'ai été absorbé cette année par une œuvre énorme (la *Bible de l'humanité*), où je montre le genre humain faisant son *Testament*. L'Inde Védique, la Perse, la Grèce y sont les versets de lumière, le crescendo ascendant d'énergie, le monde sémitique et le moyen-âge sont la nuit ou le clair-obscur, le decrescendo d'énergie, jusqu'au retour victorieux de la lumière »²⁸.

Un canevas biparti qui éclaire explicitement sa différence avec Quinet, pour qui la religion de l'avenir, celle de règne de l'Esprit, ne pourrait qu'être issue du christianisme.

Le philhellénisme de Michelet, renforcé par l'idée de généalogie indo-grecque, place dans le camp antagoniste le Juif dont le Livre Sacré est le fondement même de la religion chrétienne. La tentative de remonter à l'origine qu'il fait sienne dans son œuvre lui impose le retour à la source de l'autre lignée.

Déterminé par son esprit nomade, le peuple sémite n'accepte le travail manuel et le labeur au sol que sous la contrainte que lui impose son destin : « Jamais il n'aima le travail », écrit-il dans son manuscrit²⁹. Selon lui, le métier de colporteur, banquier ou brocanteur que le Juif exercera ultérieurement porte la marque indéniable de sa préférence pour la vie errante. L'épisode de Tubalcain, descendant de Caïn, est la preuve que, chez le peuple juif, sont condamnés l'art, l'industrie et l'agriculture, composantes majeures de la vie humaine. Jacob, qui prendra le nom d'Israël, est

l'archétype du peuple : « le vrai Juif », défini comme « berger spéculateur »³⁰. Par ailleurs, en pensant à ses rapports avec son frère Ésaü, il le qualifie d'« étonnamment femme »; “ femme ” signifiant ici prudence, apparence trompeuse et fraude³¹. Le peuple juif se voit esclave dans la figure de Joseph, esclave d'une tout autre manière qu'Hercule : si ce dernier, esclave d'Eurysthée, s'anoblit par l'accomplissement de ses durs travaux et s'acquiert le titre de dieu par ses propres efforts en bouleversant l'ordre de l'Olympe, le premier doit son succès à son talent d'oniromancien et à sa soumission au roi : c'est un esclave allié au Puissant. « La foi au gain, à l'argent »³², conséquence naturelle de l'esclavage, caractérise le Juif. Michelet prétend puiser ces traits du peuple dans leur Bible.

La vie de Joseph fils de Jacob, Michelet la qualifie de « roman » avec certains autres récits bibliques, dont la trame se décide par l'intervention divine ou les prouesses d'une femme — femme aimée de Dieu —. Malgré sa prétention à l'historicité, le « roman » dans la Bible, dominé par l'amour de Dieu, la Grâce, — qu'il considère comme « une loterie », un coup de dés —, s'oppose à l'histoire, pénible et persévérante construction de l'homme. Ici se reflète la méfiance de Michelet pour ce genre littéraire, qu'il compare à « une jolie petite poupée » aux mains de la femme³³.

Sa lecture de l'Ancien Testament fait du Juif l'anti-valeur : l'antipode, le négatif du peuple indo-grec, porteur de ce qui est valorisant à ses yeux. Ce que semble révéler également un passage de son manuscrit cité par L. Rétat au sujet de la langue hébraïque : « Juifs /*l'obscurité de leur langage*/ les prédestinaient à être les plus puissants instruments de fanatisme, /les plus vigoureux *adver*[aires] *de la lumière* qui aient existé, / les mortels ennemis de l'esprit grec »³⁴. Un passage du 4^e chapitre de l'Exode, où Moïse dit à Dieu : « Seigneur, je vous prie de considérer que je n'ai jamais eu la facilité de parler ; et depuis même que vous avez commencé à parler à votre

serviteur, j'ai la langue encore moins libre et plus empêchée »³⁵ lui suggère un argument convaincant de poids, susceptible de prouver que l'hébreu « essentiellement fragmentaire, sec, elliptique »³⁶ est « une langue impossible » à parler. Malgré les efforts désespérés qu'ils font pour la maîtriser, tous les prophètes “ bégaiement ” comme Moïse. Michelet fait ici une lecture partielle de l'Ancien Testament, lecture orientée par ses choix et son engagement. Dans la Bible, en effet, le « bégaiement » des prophètes n'est nullement une preuve d'infériorité. Il prouve au contraire leur grandeur, qui est de reconnaître par tout leur être la grandeur incommensurable de Dieu. Selon Michelet, rebelle à l'usage de l'homme, l'hébreu, resté déficient par son inadaptabilité au raisonnement et à la déduction, et par son incapacité d'exprimer le temps, sert à créer le mystère religieux dans son obscurité même. Le Dieu du peuple d'Israël est donc le fruit de sa langue sacrée, et l'insaisissabilité qui le caractérise, les ténèbres qui l'enveloppent, ont été engendrées par elle.

Michelet insiste sur le perpétuel conflit entre les prophètes et le peuple : les premiers luttèrent contre l'invasion de divers cultes, apportés par d'autres races. Pour la sauvegarde de l'unicité de Dieu menacée par deux lignées de cultes coexistant au sein de l'Ancien Testament : ceux d'Éloïm et de Jéhovah, ils tentent d'épurer l'un et d'humaniser l'autre ; et à cause de leurs efforts, ils sont loués comme de « vrais bienfaiteurs du genre humain »³⁷. Représentant « le vrai esprit juif », esprit foncièrement monothéiste, ils contribuèrent à la conservation d'un Dieu unique. L'unité de Dieu demeure le lot du Juif, comme le reconnaît Quinet³⁸. Et pourtant, ainsi préservée, elle ne sert qu'à éterniser « l'unité de haïr » chez le peuple³⁹. Au fond, ce Dieu tout-puissant, ce Dieu transcendant, entrave la liberté humaine, pulvérise les efforts de l'homme : Michelet l'identifie au Tyran. La religion du Dieu unique est celle de la « *miséricorde gratuite* », convenable à l'esclave, qui,

convaincu de son impuissance, renonce à se révolter contre son sort. C'est la doctrine de celui dont le cruel destin donne à croire qu'il ne peut compter que sur le hasard, sur l'intervention aléatoire d'une Providence, que Michelet définit comme celle de « la fantaisie féminine », du « caprice de la femme »⁴⁰. À travers les désastres historiques qui se succèdent, le peuple juif s'épuise : « Tout peuple devint femme, perdit le nerf des mâles, devint un triste Attis » écrit-il dans son manuscrit⁴¹. Il dit, citant Vico, que le « vaincu » et la « femme » sont synonymes dans « le langage antique »⁴².

On sait que sa critique de la religion judéo-chrétienne va jusqu'à montrer quelques points similaires avec celle de Nietzsche : « Dieu choisit de préférence, au sein du peuple choisi, pour manifester sa gloire, *le faible plus que le fort, le petit plus que le grand*, (...). Il (Dieu) aime, pour la même raison, il s'est choisi, approprié, un petit peuple, seul élu. Le genre humain est rejeté »⁴³. Le philosophe allemand, dans *La Naissance de la tragédie*, compare le drame eschyléen de Prométhée au mythe sémitique de la Chute : l'acte du Titan en tant que « *péché actif* », en tant que sacrilège, contraste avec le péché d'Ève dans la Genèse, provoqué par « la curiosité, les faux-semblants et le mensonge, la séduction, la concupiscence », qui sont autant de défauts, « essentiellement féminins »⁴⁴. Remarquons que, chez Nietzsche s'observent la mise en parallèle du mythe eschyléen de Prométhée et de la genèse judéo-chrétienne, et l'opposition du masculin et du féminin.

Le peuple sémitique est considéré par l'auteur de la nouvelle *Bible* comme foncièrement marqué par une longue histoire d'assujettissement et de servitude, par son esclavage, comme le montre le titre du chapitre V de la deuxième partie : « Le Juif. L'Esclave ».

Il est indéniable que le Juif est victime du christianisme d'une double manière : on sait la persécution qu'il subit du Chrétien, mais il en existe une autre infligée par les adversaires de l'Église : dans sa *Bible*, Michelet l'analyse

en s'appuyant sur l'Ancien Testament, presque sans tenir compte du développement de sa religion ni de l'histoire de la diaspora dans notre ère. Il juge le Juif sur les Écritures Saintes du Chrétien, que ce dernier partage avec lui, et dont le culte a connu toutefois son déploiement philosophique dans les siècles postérieurs à Jésus-Christ grâce à des penseurs tels que Moïse Maïmonide (1135-1203). Quant à Quinet, dans son histoire religieuse, il conclut ainsi la décrépitude du credo du peuple juif : « lorsqu'après avoir suivi ce peuple frappé de verges jusqu'au bout dans sa voie douloureuse, vous entendez, pour dénoûment de tant d'espérances surhumaines, ces mots sortir du temple : *Vanité des vanités, tout est vanité ; rien n'est nouveau sous le soleil*, il semble que ce soit là le *consummatum est* de l'Ancien Testament, (...) Il est temps que le Fils arrive pour recueillir son héritage. L'Orient s'abandonne ; il s'affaisse sur lui-même. L'ancienne loi se meurt : quand viendra la nouvelle ? »⁴⁵. D'une tout autre manière que Michelet, lui aussi ensevelit ainsi la foi d'Israël, religion du Père, au profit du christianisme, religion du Fils. Il reste néanmoins que pour lui le peuple juif est initiateur.

3. Le mythe de la féminité contre le mythe de Prométhée

La subdivision binaire sans cesse entretenue — masculinité et féminité — dans l'œuvre de Michelet surprend quelque peu. Schéma certes personnel, mais dont le fondement semble s'enraciner dans la mentalité de son temps. Les articles sur la femme dans les dictionnaires représentatifs du XIX^e siècle signalent l'évolution des idées par rapport au siècle des Lumières et permet de mieux cerner le raisonnement de l'auteur de la *Bible de l'Humanité* dans le contour idéologique de son temps.

Abordons d'abord *Le Dictionnaire universel* de Pierre Larousse (1864-1876) : « Femelle de l'homme, être humain organisé pour concevoir et mettre au monde des enfants », cette définition du début annonce la

résonance générale de l'article « Femme ». Ajoutons que *Le Dictionnaire des Sciences médicales* de Panckoucke (1812) réduit encore plus strictement le rôle de l'être féminin à la procréation: « Elle (la femme) ne vit pas pour elle-même mais pour la multiplication de l'espèce, conjointement avec l'homme. Voilà le seul but que la Nature, la Société et la Morale avouent »⁴⁶.

Ce parti-pris est largement partagé au XIX^e siècle. En opposition à l'*Encyclopédie* de Diderot, le dictionnaire de Pierre Larousse présente une perspective bien différente en consacrant de nombreuses lignes à sa description physique et ses attributs sexuels. Elle s'y voit représenter à travers l'insatiable curiosité masculine pour les organes féminins, curiosité accrue en partie par la vulgarisation des données anatomiques et physiologiques, et définie dans des citations à tendance misogyne. Foncièrement sexualisée, elle voit son corps et son ardeur amoureuse soumis à une classification conforme à la théorie des climats⁴⁷. D'après Th. Moreau, Michelet tente, par la rédaction de *L'Amour* et *La Femme*, une réhabilitation de la femme en réaction au dictionnaire de Larousse, représentatif de l'idéologie de la bourgeoisie libérale sous le Second Empire⁴⁸. Toutefois, lui-même n'échappe pas à certains préjugés de son siècle ; sa fréquentation du cours d'anatomie et sa visite à la morgue, attestées dans un passage de son *Journal*⁴⁹, l'avaient initié à une vision biologique et physiologique de l'être féminin, relatée dans *La Femme*.

On trouve, dans la *Bible de l'humanité*, une différenciation en trois catégories des êtres humains selon la couleur naturelle de leur peau, particulièrement accentuée au sujet de la femme. Michelet écrit que le peuple des Aryâs, migrant sur la terre d'Inde, put préserver son identité, grâce à la barrière des castes et à la législation brahmanique, contre « la redoutable absorption » de la femme jaune et de la femme noire : des « femmes inférieures »⁵⁰. Chez Sîtâ, l'héroïne du Râmâyana, la femme de

Râma, Michelet soupçonne une origine chinoise : elle entraîne le malheur de son mari par un caprice, convoitant une gazelle dont le magnifique pelage lui donne le désir d'en faire son lit, « sa couche d'amour »⁵¹. Bien que dans le poème ses racines demeurent obscures, il est tenté de voir en cette « Ève indienne » une séductrice dont l'exotisme lié à la « race » renforce encore les charmes : « une métis qu'un roi eût d'une captive ? de cette douce race chinoise, si recherchée dans les sérails et dont la grâce, l'œil oblique, fin, demi-clos, trouble les saints, les démons même, avec qui elle a peut-être un peu de parenté ? »⁵². Comparée à la Sulamite du *Cantique des Cantiques*, qui captive l'homme par sa passion dévorante, elle a évidemment la prédilection de Michelet, mais ne partage-t-elle pas avec la fille de Syrie une sensualité féminine, qui, liée au climat et à la race, constitue un inéluctable risque pour l'homme ? La crainte que celui-ci éprouve vis-à-vis du pouvoir féminin va, toutefois, au-delà du clivage racial, comme en témoigne son analyse de la loi brahmanique : celle-ci craint, même chez la jeune épouse encore enfant (de la race blanche), la menace virtuelle de la puissante féminité : « la loi sent en elle », écrit Michelet, « une puissance infinie d'absorption »⁵³. Ne s'agit-il pas ici de « la construction d'une image de la femme »⁵⁴, une image qui lui est propre et qu'il croit avoir devinée dans la législation des lointains ancêtres indiens ? L'auteur de *L'Amour*, adresse au jeune époux ce conseil : « Bien, mais ainsi averti, tu dois de bonne heure faire tienne cette jeune et grande puissance, qui, en peu d'années, sans art, sans manège, à force d'amour, va te conquérir, t'absorber. Cette absorption serait le dernier malheur pour tous les deux (...) »⁵⁵. Le seul moyen d'éviter cet accaparement féminin est la « transhumanation » de la femme opérée par le mari : « L'épouse imprégnée se fait homme. Envahie de la force mâle qui une fois a mordu en elle, elle y cédera de proche en proche. L'homme gagnera, la pénétrera. Elle sera *lui* de plus en plus »⁵⁶. Dans *Le prêtre, la*

femme et la famille, il s'agissait également de la « transhumanation », mot de Dante dans la *Divine Comédie*. Michelet avait protesté contre l'homme d'Église, dont le pouvoir spirituel s'exerce sur la femme notamment à travers la confession⁵⁷. Au sein de la famille, l'absorption de l'homme, une abomination pour Michelet. Il faut que la femme soit imprégnée par l'homme, qu'elle soit l'homme.

La femme est toujours liée aux forces obscures que l'Antiquité symbolisait en Bacchus, dieu que Michelet réunit avec Attis et Adonis dans la catégorie des dieux d'Orient. Ce dieu d'ivresse, qu'il qualifie de féminin et de furieux, se montre l'ennemi d'Hercule le travailleur⁵⁸. Abandonnée à elle-même, par le départ en guerre de son époux, la femme se jette à la suite de ce dieu de frénésie. Sous la plume de Michelet, la bacchanale matérialise l'engouement charnel de tout l'être féminin. La folie sensuelle de la Bacchante incarne la féminité livrée à elle-même. Le XIX^e siècle regarde la nymphomanie comme un fait scientifique, observable potentiellement chez toute femme⁵⁹. Michelet est persuadé qu'en profonde concordance avec la Nature, elle n'échappe pas à son animalité sous l'impulsion de son désir sexuel et par son « besoin du mâle »⁶⁰.

Le bannissement frappe ainsi la femme de toute part: en Grèce, mise en écart par la vie foncièrement virile de la Cité, elle se jette au pied des dieux efféminés d'Asie. Du côté de la Grèce, masculinité et pureté, la Raison et la Sagesse, valeurs fondamentales de l'Être humain, d'où elle se sent éloignée ; et du côté de l'Orient — d'un certain Orient (car l'Orient est multiple) —, auquel, rejetée de l'autre, elle se réfugie : féminité et sensualité, la Rêverie chimérique et le miracle⁶¹. Michelet introduit ainsi dans l'histoire une bifurcation clairement prononcée comme s'il s'agissait d'un conflit entre masculinité et féminité : n'est-il pas écrit dans son journal « l'histoire est dominée par la loi générale des sexes »⁶² ?

Du travail, apanage de l'homme, que Michelet définit comme « le grand viatique de la vie qui la maintient, sereine et forte »⁶³, la femme demeure exclue en raison de sa condition biologique et physiologique⁶⁴. Les activités féminines, filage et tissage, étrangères à la catégorie de travail ainsi définie, l'incitent à la rêverie par leur immobilisme et leur monotonie. Michelet évoque, suivant certains Évangiles apocryphes, le « roman » de Marie tissant pour le Temple : de cette « rêveuse de la Judée », de sa puissante rêverie maternelle est née la religion chrétienne. Une tout autre parthénogenèse que celle de *La Sorcière*⁶⁵, et Michelet la repousse, car elle exalte une maternité qui accapare son enfant en lui infusant la féminité. La « féminité » du christianisme est triple : engendré par le judaïsme, essentiellement marqué par l'idée de la Grâce, « l'élément féminin », il est aussi à ses yeux le fruit d'« une longue incubation féminine », porté par les rêves successifs de la Femme juive dans le climat de l'attente fiévreuse d'un Messie. Et il doit principalement son essor à la contribution féminine : « elle (la femme) *est prêtre* <et diaconesse> officie, communie et fait Dieu » pendant les quatre premiers siècles⁶⁶.

4. Le sens du mot « humanité »

Au seuil de son livre, Michelet précise qu'il éloigne de son plan certains éléments auxquels il ne peut pas fournir un éclaircissement suffisant. Ainsi l'Extrême-Orient, dont la Chine est écartée, en tant que « monde excentrique », et les Celtes, en tant que « monde qui a laissé peu »⁶⁷. Due au manque de données nécessaires sur la première ou à l'importance restreinte à laquelle il réduit les seconds, leur élimination annoncée dès le début de l'ouvrage ne contredit pas sa visée universaliste. Contrairement à Quinet qui a traité de la Chine dans son *Génie des religions*, Michelet ne s'y aventure pas, encore qu'il prétende conserver à son œuvre une portée

planétaire — la note explicative sur ces éradications en étant la meilleure preuve. Par conséquent, on pourrait, au premier abord, comprendre le mot « l'humanité » dans le sens d' « une entité composée de tous les peuples du passé, du présent et de l'avenir ».

Par ailleurs, on sait que la perfectibilité du genre humain est une doctrine qui imprègne fortement l'idéologie du XIX^e siècle et que partagent de nombreux penseurs. De l'idée de progrès découle nécessairement celle de finalité, ou plutôt c'est l'inverse (ces deux notions, à vrai dire, se fondent l'une et l'autre circulairement). Renan dira : « L'humanité fait du divin comme l'araignée file sa toile ; la marche du monde est enveloppée de ténèbres mais il va vers Dieu »⁶⁸. Son histoire va donc, selon le traducteur du *Livre de Job*, vers un but suprême, en un sens, vers la fin de l'Histoire⁶⁹. Or même s'il est lui-même perfectible, l'individu ne peut évidemment pas accomplir ce long itinéraire. Par rapport à celui-ci, Pierre Leroux définit l'humanité comme « *un être idéal composé d'une multitude d'êtres réels qui sont eux-mêmes l'humanité en germe, l'humanité à l'état virtuel* »⁷⁰. Chaque homme participe donc de cette humanité-là, porteuse d'idéalité, d'un sens en soi. Mais, elle seule parvient à la fin de l'aventure humaine. On pourrait donc imaginer que, chez Michelet également, l'humanité est un Être organique fortement dirigé vers l'avenir. Il s'agit d'une histoire téléologique, au cours de laquelle les apports des races concourent au développement et à l'achèvement de l'ensemble de l'Unité en perpétuel devenir. Il y en a qui contribuent pleinement à la faire avancer, et d'autres qui y contribuent moins ou même freinent sa marche ; mais le travail de ce que Hegel nomme le négatif n'est-il pas lui aussi essentiel ?

Dans le *Dom Juan* de Molière, le héros exige d'un mendiant un

blasphème en échange d'un louis d'or. L'idée de rémunérer le malheureux pour une insulte contre Dieu porte le signe d'un libertin athée. Face au refus de cet indigent, il lui jette l'argent en disant : « Va, va, je te le donne pour l'amour de l'humanité »⁷¹. Dans la pensée chrétienne, c'est “ pour l'amour de Dieu ” que l'on fait un acte de charité ; il est évident que le héros de la pièce moliéresque, avec cette “ flèche du Parthe ”, remplace Dieu par l'humanité en accordant au pauvre une pièce d'or que la Miséricorde divine ne lui octroie pas toujours. Ici, « l'humanité » semble l'antithèse du Dieu chrétien. Dans *l'Histoire de la Révolution française*, Michelet, après avoir énuméré les bienfaits de la Commune en 1793 (inscrits dans ses registres), cite le crédo d'Anacharsis Clootz : « Notre Seigneur Genre Humain »⁷². Un peu plus loin, il précisera lui-même le sens du mot « l'Humanité » comme “ l'incarnation permanente de Dieu ”⁷³. Ce qui fait que “ l'humanité-Dieu ” se dresse contre “ l'homme-Dieu ” qu'est le Christ ; et ce Dieu, à la fois processus et but de l'histoire humaine, s'écarte radicalement d'un Dieu chrétien en se dressant contre lui.

* * *

« Il (Dieu) constitue le peuple même. Il lui donne une unité qu'il n'a nullement dans la race, mêlé qu'il est, traversé par toutes les races du monde », écrit Michelet dans son manuscrit⁷⁴. Ici, les mots « peuple » et « race » contrastent : le premier désigne une entité conservant son identité communautaire grâce à sa religion, tandis que le second semble signifier la lignée du sang et les données physiques et mentales qui en résultent. Chez lui, les Juifs ne sont pas traités en tant que race au sens problématique du mot. Il existe toutefois un passage où le mot “ race ” exprime un insurmontable sentiment d'écart : « Le jour où nos Bibles parentes ont

éclaté dans la lumière, on a mieux remarqué combien la Bible juive appartient à une autre race »⁷⁵. Perce ici une irréductible sensation de l'Autre. Le Juif n'apparaît-il pas, dans certains endroits de sa *Bible*, comme « un merveilleux antipode du *Nous* essentiel »⁷⁶ ?

Son œuvre de 1864, initialement intitulée « Bible humaine », érige l'humanité contre le Dieu judéo-chrétien ; toutefois, parfaitement apaisé dans sa Conclusion, l'auteur nous propose tout simplement d' « oublier » le Moyen-Âge qu'il qualifie d' « étranger ». L'historien peut-il condamner à l'oubli un passé, même s'il est odieux, même s'il est détestable ? En fait, il prétend ne pas en être l'auteur : « l'auteur, c'est le genre humain ». À l'interrogation posée dès le préambule de cet article, nous pourrions donc donner, avec Michelet, une réponse affirmative. Cependant, ne serait-il pas possible de se demander si cette humanité-là n'est pas « chose d'une race de lumière »⁷⁷ ?

Ce que Michelet attendait de cette œuvre était immense : « Si j'avais réussi, ce petit livre serait dans chaque famille le point de départ d'un enseignement intérieur, d'un pontificat domestique, varié selon les nations, les familles, etc. »⁷⁸. Manuel d'éducation nationale et familiale, la *Bible* s'adresse à une humanité future, celle dont il rêve l'avènement.

Notes

- 1 Michelet, *Correspondance générale*, Paris, Honoré Champion, t.XI, pp.439-440.
- 2 *Le Christianisme et la Révolution*, Paris, Au comptoir des imprimeurs unis, 1845, p.401.
- 3 Quinet, *La Révolution*, t.II, p.256 (*Œuvres d'Edgar Quinet*, 14^e éd., Paris, Hachette, 1857).
- 4 Michelet, *Correspondance générale*, t.XI, p.444.
- 5 *Bible de l'humanité* (l'édition critique de Laudyce Rétat), Paris, Honoré Champion, 2009.
- 6 Sylvianne Rémi-Giraud, « Le mot race dans les dictionnaires français du XIX^e

- siècle », in *L'idée de « race » dans les sciences humaines et la littérature (XVIII^e et XIX^e siècles)*, sous la direction de Sarga Moussa, Paris, L'Harmattan, 2003, pp.205-220.
- 7 *Bible de l'humanité*, p.341.
- 8 *Le Génie des religions*, pp.27-28 (*Œuvres complètes d'Edgar Quinet*, Paris, Hachette, 1857). Lors de sa parution, l'œuvre s'intitulait *Du Génie des religions*.
- 9 *Bible de l'Humanité*, pp.93-95.
- 10 *Ibid.*, pp.194 et 200.
- 11 Max Müller, *Essai de mythologie comparée* (traduit de l'anglais), Paris, A. Durand, 1859, pp.98-99.
- 12 « La riche imagination de la nation grecque, sa prompte perception et sa vivacité intellectuelle font comprendre facilement comment, après la séparation de la race aryenne, aucune langue ne fut plus riche et aucune mythologie plus variée que celle des Grecs » (*Ibid.*, p.59).
- 13 *Bible de l'humanité*, p.97.
- 14 Alfred Maury, « La philologie comparée et ses principes et ses applications nouvelles », *Revue des Deux Mondes*, 2^e période, t.VIII, 1857, p.925.
- 15 *Le Génie des religions*, p.V.
- 16 *Ibid.*, p.32.
- 17 *Ibid.*, pp.147 et 167.
- 18 *Ibid.*, p.493. L'idée de « la Trinité divine » chez les Indiens est celle de « Trimurti », c'est-à-dire la « Trinité » correspondant à la différenciation des trois composantes de l'univers, représentées par Shiva, Vishnou et Brahaman.
- 19 *Ibid.*, p.III. Sur ce sujet, voir l'article de Simone Bernard-Griffiths : « Rupture entre Michelet et Quinet, à propos de l'histoire de la Révolution », in *Michelet Cent ans après* (études et témoignages recueillis par Paul Viallaneix), Presses universitaires de Grenoble, 1975. L'auteur signale que Quinet reconnaissait dans la religion « une structure spécifique, irréductible à tout autre » (p.153).
- 20 *Bible de l'humanité*, pp.108 et 122.
- 21 *Ibid.*, pp.158 et 175. « Toute sa mythologie est très réellement une éducation de l'Olympe » écrit-il dans son manuscrit (p.367).
- 22 *Ibid.*, p.89.
- 23 *Ibid.*, pp.306-307. Quinet dit lui aussi que « Cet Hercule spirituel, qui par ses travaux se divinise sans perdre de sa personnalité, est le patron, l'image des grandes écoles d'Occident » (*Le Génie des religions*, p.490).
- 24 *Bible de l'humanité*, pp.204, 224, 305 et 375. En ces héros mythiques s'incarnent « les forts travaux », « les résolutions viriles » et « l'héroïque élan » (p.228). Ce n'est pas seulement Michelet qui s'est emparé en son siècle de la figure

prométhéenne pour proclamer l'avènement d'un temps nouveau (voir Élise Radix, *L'Homme-Prométhée vainqueur au XIX^e siècle*, Paris, L'Harmattan, 2006).

- 25 *Bible de l'humanité*, p.228.
- 26 *Histoire de la Révolution française*, t.II, p.616.
- 27 *Ibid.*, t.I, p.331. Voir la note 1 de la *Correspondance générale*, t.XI, p.55.
- 28 *Correspondance générale*, t.X, pp.662-663.
- 29 *Bible de l'humanité*, p.388.
- 30 *Ibid.*, p.279.
- 31 La prudence est ici l'antonyme de « l'imprudence » des races indo-celtiques (« Les juifs sont entièrement étrangers aux sentiments chevaleresques de l'Arabe, encore plus à la grandeur généreuse, souvent imprudente, des races Indo-celtiques, qui éclate dans leur poésie, du Ramayana au Shah Nameh, des Niebelungen aux chants français de Roland et de Merlin » (p.279).
- 32 *Ibid.*, p.286.
- 33 *Ibid.*, p.299.
- 34 Cité dans l'*Introduction* de l'édition de L.Rétat (p.27).
- 35 Exode 4, 4-10 (*La Bible* <traduction de Lemaître de Sacy>, Paris, Robert Laffont, 1990).
- 36 *Bible de l'humanité*, p.390.
- 37 *Ibid.*, p.283.
- 38 *Supra*, p.143.
- 39 *Bible de l'humanité*, pp.282-283.
- 40 *Ibid.*, p.284.
- 41 *Ibid.*, p.393. Dans le texte définitif : « Tout peuple perd le nerf des mâles » (p.298).
- 42 *Ibid.*, p.298.
- 43 *Ibid.*, p.283.
- 44 *La Naissance de la tragédie, Œuvres*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2000, p.57.
- 45 *Le Génie des religions*, p.412.
- 46 Nicole Edelman, « Médecine, femme et Sorcellerie selon Michelet », in *La Sorcière de Jules Michelet. L'envers de l'Histoire* (sous la direction de Paule Petitier), Paris, Honoré Champion, 2004, p.112.
- 47 Thérèse Moreau, *Le Sang de l'Histoire. Michelet, l'histoire et l'idée de la femme au XIX^e siècle*, Paris, Flammarion, 1982, pp.46-48.
- 48 *Ibid.*, p.55.
- 49 *Journal*, Paris, Gallimard, 1962, t.II, p.325.
- 50 *Bible de l'humanité*, p.111 (« La jaune, avec ses yeux obliques et sa grâce de chat, son esprit médiocre et fin, eût aplati l'Indien au niveau du Mongol, eût ravalé la

race des profondes pensées aux talents inférieurs de l'ouvrier Chinois, éteint le génie des hauts arts qui ont changé toute la terre »).

51 *Ibid.*, p.123.

52 *Ibid.*, p.119. La catégorisation des femmes se constate également dans les pages sur l'Égypte : par rapport à l'Égyptienne appréciée en raison de sa bonté, son ardeur en amour et sa docilité, l'Asiatique est qualifiée de « servile », et l'Européenne de « demi-mâle » (« ce fier demi-mâle qu'on appelle femme en Europe ») (p.238).

53 *Ibid.*, p.113 (note 27).

54 Nicole Edelman, *op. cit.*, p.124.

55 *L'Amour, Œuvres complètes*, Paris, Flammarion, 1985, t.XVIII, p.158.

56 *Ibid.*, p.147.

57 *Le prêtre, la femme et la famille*, Paris, Chamerot, 1862, p.250.

58 On constate au sujet de Bacchus (ou Dionysos) la divergence de point de vue entre Michelet et Nietzsche.

59 Th. Moreau, *op.cit.*, pp.38-39.

60 *Journal*, t.II, p.522.

61 *Bible de l'humanité*, pp.230-233.

62 *Journal*, t.II, p.117. Th. Moreau suggère une relecture possible des textes de Michelet comme le récit d'une lutte entre les deux sexes (Th. Moreau, *op.cit.*, p.151).

63 *Bible de l'humanité*, p.205.

64 *La Femme, Œuvres complètes*, Paris, Flammarion, 1985, t.XVIII, pp.62-63.

65 Cf : Claude Rétat, « Quand Médée eut le ténia, une page de l'histoire de France », in *La Sorcière de Jules Michelet L'envers de l'histoire*, p.157.

66 *Bible de l'humanité*, pp.321, 324 et 396.

67 *Ibid.*, p.86. Les autres éléments qu'il a écartés sont : « les essais de la vie sauvage », « le monde qui a laissé peu, ou dont l'âge est encore discuté (Celtes, etc.) » et « la haute abstraction ».

68 *Étude* ajoutée au *Livre de Job*, Paris, Alréa, 1991, p.171.

69 « Et quand l'humanité ne sera plus, Dieu sera, et l'humanité aura contribué à le faire, et dans son vaste sein se retrouvera toute vie... » (Renan, *L'Avenir de la science, Œuvres complètes*, Paris, Calmann-Lévy, 1949, t.III, p.905).

70 Pierre Leroux, *De l'Humanité*, Paris, Fayard, 1985, p.196.

71 Molière, *Dom Juan*, Gallimard, 1973, p.190.

72 *Histoire de la Révolution française*, t.II, p.621.

73 *Ibid.*, p.625.

74 *Bible de l'humanité*, p.388.

75 *Ibid.*, p.75.

76 Michel Winock, *La France et les Juifs de 1789 à nos jours*, Paris, Seuil, « Collection

Points », p.84.

77 C. Rétat, « Jugement des dieux, triomphe de l'humanité, Charles Français Dupuis, Jules Michelet », in *L'idée de « race » dans les sciences humaines et la littérature (XVIII^e et XIX^e siècles)*, p.201.

78 *Correspondance*, t.X, p.631.

成年後見における本人の意思決定

——「“民”法と心理学」序説も兼ねて——

清水 恵 介

第1 序 説

「法と心理学」の歴史は、19世紀末にまで遡ることができるとされる⁽¹⁾。法学の歴史は古く、心理学の歴史はそれよりは新しいとすれば、両者の接点を扱う「法と心理学」は、心理学の確立を待って発展を遂げたこととなる。

もともと、2つの異なる学問は、それぞれが別々の発展を遂げてきたものであるがゆえに、少なくとも表面上はさほど多くの接点を見出し難い。法学と心理学との接点については、人間の心理が法制度の運用において及ぼす影響といった切り口が比較的に見出し易く、従来は、とりわけ刑事法の運用に着目し、目撃証言の信用性といったような研究が志向されてきたように思われる⁽²⁾。人間の直観的な経験則を、より客観的な心理学の知見によって是正していくといった類の研究といえる。

そして、現在では、「法と心理学」は、「法と経済学」などと並んで、基礎法学の一分野として確立してきている。わが国でも、2000年における法と心理学

(1) 佐藤達哉「法と心理学の歴史—第二次世界大戦前までを中心に」菅原郁夫ほか『法と心理学のフロンティアⅠ巻』13頁以下（北大路書房、2005年）参照。

(2) こうした研究につき、すでに供述心理学なる学問領域が形成されている。この領域に関する近時の文献として、大橋靖史ほか『心理学者、裁判と出会う—供述心理学のフィールド』（北大路書房、2002年）などがある。

会⁽³⁾の設立を機に、これを正面から研究領域として承認する動きが活発化してきた⁽⁴⁾。そこでは、少しずつではあるものの、刑事法以外の法領域もまた心理学との間に接点を見出し得ることが示唆され、研究が深められてきている⁽⁵⁾。

本稿では、こうした動向を受けて、筆者が専門とする民法学につき、これと心理学との接点として、法律行為法上の問題である「成年後見における本人の意思決定」を主に取り上げ、検討を加えるが（第3）、その前に、「法と心理学」の一分野として捉えられる「“民”法と心理学」の近時の展開を概観することとしたい（第2）。

第2 「民法と心理学」の展開

1 民法と心理学・精神医学

民法学の領域においては、従来から、民事責任能力や行為能力の判断において要求される精神鑑定のある方をめぐって、心理学との接点を多くもつ精神医学の知見が活かされてきた⁽⁶⁾。

また、前述の法と心理学会の成果物からは、多くないとはいえ、民法と心理学との対話を試みた研究が散見される。和解における心理⁽⁷⁾、離婚の心理⁽⁸⁾、高

(3) 法と心理学会のホームページ (<http://jslp.jp/>) 参照。

(4) 菅原郁夫ほか・前掲注(1)法と心理学のフロンティアⅠ巻、菅原郁夫ほか『同Ⅱ巻』（北大路書房，2005年），藤田政博編著『法と心理学』（法律文化社，2013年）など。

(5) 山本顯二「投資行動の消費者心理と民法学《覚書》」山本顯治編『紛争と対話（法動態叢書・水平的秩序4）』77頁（法律文化社，2007年），松本克美「時効論・損害論への法心理学的アプローチ」立命館人間科学研究33号3頁（2016年）など。

(6) 前田泰『民事精神鑑定と成年後見法』（日本評論社，2000年），西山詮『民事精神鑑定の本質』（新興医学出版社，2015年）など。

(7) 田中堅一郎「民事裁判における和解過程に影響を及ぼす社会心理学的要因についての考察」法と心理1巻1号28頁（2001年），齋藤哲「民事紛争解決における合意をめぐる諸問題—和解と納得を中心にして」同号39頁（2001年）。

(8) 菅原郁夫ほか「特集・離婚の心理学と法的問題」法と心理13巻1号1頁（2013年）。

齢者・障害者の心理⁽⁹⁾，親子法と心理学⁽¹⁰⁾といったものである。

2 民法における心理的要素

さらには、心理学的知見が現に活かされているとはいえないまでも、人の心理状態などの心理的要素が民法上の法律効果に影響を及ぼす場面は多い。以下、現行法制度・判例・現代的課題に分けて概観する。

(1) 現行法制度における心理的要素

まず、精神的損害を加害者に賠償させる慰謝料（民法710条）の制度は、心理的要素を賠償額の算定に反映する典型的な法的仕組みである。そこでは、不可視的な精神的損害なるものを客観的な賠償額の算定に結び付け得る指標や計算式のようなものが、暗黙裡に模索されているものとみられる。

また、民法上の担保物権の一種である留置権（民法295条以下）は、目的物を取り上げて債務者に不便・苦痛というような心理的圧迫を加えることで債務の弁済を促す法的手段として説明される。同様に、強制執行手段としての間接強制（民事執行法172条）も、履行の遅延に応じた一定額の金銭の支払を付加的に課すことで、債務の弁済を心理的に促す法的手段である。

このような、現行法制度の趣旨として指摘される心理的要素については、当該制度の実効性を基礎づけるものとして、その射程範囲や運用のあり方をめぐる議論の中で、心理学的知見を活用する余地があるように思われる。例えば、慰謝料の算定において、精神的被害の程度を計量化することができるならば、現在、裁判官の裁量判断に委ねられている算定をより客観化することが可能となるところ、この計量化につき、心理学や精神医学などの知見を活かす余地はないであろうか。

(2) 判例における心理的要素

他方、現行法制度が明示的に規律するもの以外にも、判例法理において心

(9) 田垣正晋ほか「高齢者／障害者の心理と法的問題」法と心理13巻1号61頁（2013年）。

(10) 青木聡ほか「離婚による親子引き離しの問題点と共同親権の可能性—法と心理学の対話」法と心理13巻1号76頁（2013年）。

理的要素が考慮されるものがみられる。

例えば、不法行為による損害賠償請求において、身体に対する加害行為と発生した損害との間に相当因果関係がある場合、その損害がその加害行為のみによって通常発生する程度、範囲を超えるものであって、かつ、その損害の拡大について被害者の心因的要因が寄与しているときは、損害を公平に分担させるという損害賠償法の理念に照らし、裁判所が損害賠償の額を定めるに当たっては、民法722条2項の過失相殺の規定を類推適用して、その損害の拡大に寄与した被害者の事情を考慮し、賠償額を減額できるとするのが判例である⁽¹¹⁾。

いわゆる素因減額と呼ばれる判例法理であるが、被害者のいかなる心因的要因が損害の拡大に寄与したものとして賠償額の減額を基礎づけるのかについては、心理学的知見による裏付けが求められるように思われる。

(3) 現代的課題における心理的要素

他にも、近年では、自殺や孤独死のあった家屋について売却・賃貸をするような場合に、その説明を受けなかった買主・賃借人が売主・賃貸人の責任を追及できるかなどといった、不動産取引における、いわゆる心理的瑕疵の問題が採り上げられている⁽¹²⁾。

また、伝染病や放射能汚染などの事件の発生に起因した、いわゆる風評損害の問題も指摘できる⁽¹³⁾。これも、そのような事件の発生がマスメディアを通じて他者の心理に働きかけ、その購買意欲を大きく減退させることで、企業の営業活動に甚大な悪影響を及ぼすことを法的にどう評価するかといった問題といえる。

このように、民法学の領域でも多くの心理的要素が取り込まれており、そ

(11) 最判昭和63年4月21日民集42巻4号243頁など。

(12) 宮崎裕二ほか『不動産取引における心理的瑕疵の裁判例と評価』（プロGRESS、2014年）参照。

(13) 升田純『風評損害・経済的損害の法理と実務〔第2版〕』（民事法研究会、2012年）参照。

の考察において、心理学的知見（あるいは精神医学的知見）を活かす余地は十分に認められるであろう。

3 補 説——フランスにおける「法と心理学」

ここで、他国における「法と心理学」の動向として、フランスの動向を紹介したい。フランスの民法は、日本民法の母法の1つであり、そのフランスにおける「法と心理学」をめぐる議論動向が、日本と同様に、刑事法中心であるのか否かを知ることは有益と思われるからである。

この点、興味深いのは、フランスの「法と心理学」に相当する法心理学（psychologie juridique）の展開を語る上で、しばしば民法学者であるジャン・カルボニエ（Jean Carbonnier）氏の名が挙げられるということである。

カルボニエは、フランス第5共和政下の1960年代以降に民法典中の家族法規定を次々に改正した、いわゆるカルボニエ改革の指導者として知られるが、このカルボニエが、民法学の周辺学問として、法心理学の存在を指摘し、これを自身の民法体系書に記していた⁽¹⁴⁾。

これによれば、法心理学は、当初、証言の精神医学的鑑定を先導する、司法官の補助としての司法心理学であったものが、やがて別個の科学として構成されたとし、法社会的な社会心理学からも離れて、法現象の心理的作用や、法により決定された意識の状態を検討する学問として、自律的意義をもつものと説く。

そして、かかる法心理学の検討素材として、カルボニエは、自身の専門である民法学・家族法学に引き寄せ、離婚や相続人間の訴訟の根源や、法に違反する者の悪い意識を探る研究があり得ることを示唆する。例えば、フランス民法典350条2項⁽¹⁵⁾が、完全養子縁組⁽¹⁶⁾の要件である子の遺棄を判断する基準の

(14) Jean Carbonnier, *Droit civil*, p. 61 et 70, PUF, 1955-1956

(15) フランス民法典350条は、子の保護に関する2016年3月14日の法律第2016-297号40条により削除された。もっとも、民法典中には、現在もなお、親権に関する371-4条2項、及び、未成年後見に関する399条4項において、「情愛のつながり（liens affectifs）」なる概念が用いられている。

(16) フランスの完全養子縁組（adoption plénière）は、日本の特別養子縁組（民法817条2以下）に相当する、養親子関係が実親子関係に取って替わる養子縁組である。

1つとして、「情愛のつながり (liens affectifs)」といった概念を用いるなど、民法・家族法が、人の一定の感情をすでに取り込んでいる点などを指摘する。

このような伝統は、2013年5月、パリ第11大学に置かれたフランス法心理学協会 (Société Française de Psychologie Juridique [SFPJ]) の設立へと結実する。その名誉会長であるフランソワ・テレ (François Terré) 氏もまた、カルボニエと同じ著名な民法学者であり、2016年2月に創刊された心理—法雑誌 (revue Psycho-Droit) の巻頭論文となる小稿を記している⁽¹⁷⁾。この小稿は、モースからレヴィ＝ストロースへと連なる、1世紀にも及ぶ心理学・性格学・言語学・人類学などの社会科学の発展の中で、法学が多く取り残されてきた点を問題視し、この小稿に、「カルボニエは正当であった…—法心理学に関して」とのタイトルを付した。

以上の動向から判明するのは、フランスもまた、むしろ日本よりも遅く、近時に至って「法と心理学」の本格的な研究を開始したということ、しかしながら、そのような動向を牽引してきたのは、世界的な趨勢ともいえる刑事法学の領域ではなく、カルボニエやテレなどといった民法学の領域に属する傑出した法学者であったということである。

したがって、フランスは、日本と比べ、「“民”法と心理学」に向けた議論を展開する素地がより広いとはいえそうである。ただ、本格的な議論は緒に就いたばかりであり、その分析や日本への示唆については、今後の動向も注視しつつ、他日を期すこととしたい。

第3 成年後見における本人の意思決定

本稿では、以下、民法学の中でも、近時、障害者権利条約の批准により議論が活発化している成年後見法の領域に着目し、そこでの導入が強調されている意思決定支援の法理につき、それが重視する本人の意思決定（ないしは自己決

(17) この雑誌は、同協会のホームページ (<http://psycho-droit.com/index.php/revue-psycho-droit>) で公開されている。

定) という概念ないしは理念について、法定代理の再構成という視角から考察を加え、心理学に向けての問題提起を試みることにする。

1 意思表示理論と心理学

一般に、法律行為とは、意思表示を要素とする法律要件であると説かれ、いわゆる「意思表示理論」を中核とする。これは、私権の変動などといった法律効果の発生を欲する意思を意味する“効果意思”を出発点に据え、これを外部に表示する行為が意思表示であるとするモデルである。

もっとも、この「意思表示理論」自体は、19世紀のドイツにおいて、当時の心理学の成果を取り入れ、意思表示のプロセスの分析から形成されたものとされる⁽¹⁸⁾。近代臨床心理学がドイツのヴントによる心理学実験室の創設により始まったものと説かれるのも19世紀末(1879年)とされ⁽¹⁹⁾、この時期は、ドイツ民法典の制定に向けての動向がみられた時期とも重なる。日本の現行民法が梅謙次郎らによって起草され、その際、当時最新式であったドイツ民法典の草案に強い影響を受けたのもこの時期であった。

したがって、このような歴史的符合を契機として考案され、わが国に継承された意思表示理論は、日本民法が制定されてから120年近くが過ぎようとしている現在において、もはや絶対的な必然性を示す理論ではなくなっているともいえる。民法学者の大村敦志教授は、この点に関し、以下のように指摘する⁽²⁰⁾。

「意思表示理論は古くから変わらない理論であるように思われる。この印象は、ある意味では正しく、ある意味では誤っている。確かに、錯誤・詐欺・強迫という制度はローマ法以来存在する。この意味では先の印象は正しい、しかし、現在のような理論構成はドイツ普通法学に由来するものであり、百年あまりの歴史を持つに過ぎない。この理論は、既存の制度を整理して体系化するためのものであったが、この理論による体系化が唯一のものであるわけではない。

(18) 大村敦志『消費者法〔第4版〕』76頁（有斐閣，2011年）参照。

(19) サトウタツヤほか『流れを読む心理学史』25頁（有斐閣，2003年）参照。

(20) 大村・前掲注(18)消費者法77頁以下。

また、この理論は当時のドイツ心理学の知見を背景にしているが、その後、百年の間に心理学はずいぶんと進歩した。

そうだとすると、現在の状況（判例の状況や解決すべき事件の状況）にあわせて、かつ、最近の心理学の知見を考慮して、別の体系化をはかるという試みがなされてもよい時期がきているのではないかと思われる。」

本稿では、この点に関する考察は行わないものの、かかる意思表示理論自体、先に掲げたものに加えて、心理学的知見を活かす余地のある民法上の課題といえよう。

2 障害者権利条約と成年後見法上の法定代理

以下では、意思表示理論の応用ともいうべき代理理論に目を転じ、その中でも、2014年にわが国が批准した障害者権利条約の12条が要求するものとされる意思決定支援の理念との関係で重要な、成年後見法上の法定代理のあり方について検討する。

(1) 法定代理と使者——従前の理解

現行法上、成年後見人には、精神上的の障害により事理弁識能力を欠く常況にある成年被後見人の財産管理につき、包括的な代理権が与えられている（民法824条）。これは、本人の意思に基づかない代理権との意味で、法定代理権であると説かれる。

ところが、障害者権利条約12条は、成年後見法の適用対象たる障害者が障害のない者との間で法的能力を平等に享有することとなるよう締約国に求めており、この観点からは、わが国の現行成年後見法は、法定代理権を有する成年後見人において、本人の意思とは切り離して、また、その必要性とは無関係に、一律に包括的な代理権を行使することを認めている点において条約に抵触する可能性が高い。そこで、近時、かかる法定代理制度の見直しが求められるに至っている。

この点、確かに、従来の法定代理においては、本人は行為“無”能力者であって、自ら法律行為をすることができないがゆえに、法定代理人自身が決定した意思を代理人の立場で相手方に表示することで、その効果を成年被後

見人（本人）に帰属させる法的仕組みとして理解されてきた。

もちろん、第三者を用いた意思表示の方法（いわゆる意思表示の補助者）としては、代理だけではなく、その他にも、郵便事業者を用いた意思表示書面の配達のようなものがあり、これは講学上、「使者」と呼ばれている。「代理人」と「使者」との違いは、代理の場合は「代理人」が意思決定をするが、「使者」の場合はあくまで本人自ら意思決定したものを「使者」において伝達ないしは表示するにすぎないものと説かれる。本人が意思決定するのか、それとも第三者（代理人・使者）が意思決定するのかといった意思決定主体の相違である。

（2）法定代理の正当化

もっとも、障害者権利条約は、少なくとも成年後見法の領域においては、あくまで本人が意思表示上の意思決定主体であることを求めている。そうすると、代理と使者との区別に関する以上の理解を前提とする限り、そもそも、現行成年後見法が法定代理権を認めていること自体が条約違反であるとの理解に達することとなる。

しかしながら、こうした理解に対しては、いくつかの異なる視点からの反論が可能である。

すなわち、第1に、意思の表明すら不可能な重度の障害者については、法定代理人による意思決定とそれに基づく代理行為が要求されざるを得ないのではないかということ、第2に、一般的意見（general comment）第1号（障害者権利委員会が採択した条約12条の解説）が要求する「意思と選好の最善の解釈」基準は、結局のところ、他者によって本人の意思と選好を解釈し、その結果に従って当該他者が最終的な決定を下すような場面を想定しているが、このことは、法的には代理にほかならず、したがって、一般的意見は、代理を一定程度許容していると思われること、第3に、条約下においても本人の意思に基づく任意代理や任意後見は許容されるものと思われるところ、これと法定代理や法定後見との間で、前者を許容し後者を廃止するといった形で

区別するほどの有意な差はないのではないかということである⁽²¹⁾。

また、これらに加えて、法定代理の積極的基礎づけを試みる上では、以下の指摘もまた重要であろう。

すなわち、第4に、取引の相手方にとって、本人との直接の契約は意思無能力無効のリスクを伴うがゆえに、本人に効果を帰属させる権限となる法定代理権が成年後見人等に付与されていれば、その者と契約をすることでかかるリスクを回避でき、このことは、本人が取引社会から忌避されないようにする上で、本人にとっても有益であるということである。

(3) 法定代理の再構成

それゆえ、障害者権利条約の下でも、成年後見法上、一定程度の法定代理権は維持すべきものと思われる⁽²²⁾。おそらく、同条約によって改められるべきは、法定代理の仕組みを用いるものといえども、本人は行為無能力者であって代理人が意思決定を行うとの前提を捨て去り、あくまで本人が意思決定を行うとの前提をとることであろう。

そうすると、その場合の法定代理は、前述した「使者」に限りなく近づくこととなる。この点、第三者を用いた意思表示が代理人によるものか使者によるものかは、意思決定主体の何人たるかが元来不可視的なものであるがゆえに、あくまで取引の相手方から客観的にみたとき、いずれが意思決定主体と映るかによって決するものと解されてきた⁽²³⁾。そのため、障害者権利条約の下、本人自らの意思決定を前提とする限り、相手方からみれば、意思表示を媒介する第三者は、客観的には使者とみるべきこととなり、仮に第三者が法定代理人としての意思で行動していたとしても、なお使者による意思表示と解すべきこととなる。しかし、そのように解した場合、今度は、本人と直

(21) 以上の第1から第3までは、拙稿「障害者権利条約からみた日本の成年後見制度の課題」実践成年後見61号76頁（2016年）で指摘した点である。

(22) 法定代理肯定論として、ミヒャエル・ガナー（藤原正則訳）「成年者保護の比較法的展望と意思決定支援のいくつかのモデル」成年後見法研究13号47頁以下（2016年）参照。

(23) 鳩山秀夫「使者及び代理人」『民法研究第1巻』165頁以下（岩波書店、1925年）。

接契約した場合と同様に、相手方は、意思無能力無効のリスクに曝されてしまう。

そこで、以上を踏まえて検討するならば、ここでの望ましい解決は、本人が意思決定を行うこととしつつも、意思表示の瑕疵等については、あくまで法定代理人を起点として判断するということである。本来的な意思決定主体が誰であるかという問題と、意思表示に瑕疵があった場合、誰を表示者として扱うかという問題とを切り離すことは、それ自体、背理であるとまではいえないように思われる。前者の問題については本人による意思決定を理念としつつも、後者の問題については、取引の相手方の信頼保護との利益衡量において、これを別異に扱う余地は十分あるように思われるからである。

この点に関し、大正期に使者について詳細に論じた鳩山秀夫博士の見解が参考となるであろう⁽²⁴⁾。鳩山博士は、権限なき使者、いわゆる無権使者につき、無権代理人の責任規定（民法117条）を類推適用すべきか否かが問題となるところ、この問題は、使者たる権限ありと信じさせるに足るべき行為に基づいて相手方の信頼を保護すべき同一の社会上の需要があるか否かによって決せられるべきものとした上で、使者による意思表示の社会的意義は、代理人による意思表示のそれと大に異なるものであるから、代理制度の信用を保護するがために特に認められた法律上の責任は、使者についてはこれを認めることができないと結論づけた。

しかし、この見解は、裏を返すならば、使者による意思表示の社会的意義が重大なものであり、この者に対する相手方の信頼を保護すべき社会上の需要が代理についての需要と同一であるならば、当該使者の責任を肯定できるとの見解と評価できる。そして、この見解を前提とするならば、本人の意思決定に基づく後見人の法定代理もまた、それが仮に使者としての性質を帯びるものであったとしても、後見人に対する相手方の信用を保護すべき社会上の需要は高いと考えられる以上、代理人に準じた責任を肯定できるように思

(24) 鳩山秀夫「使者に依る意思表示」『民法研究第1巻』268頁以下（岩波書店、1925年）。

われる。

また、さらに言えば、本人の意思決定に基づくことを理由に意思無能力無効の主張を行うこともまた、その意思表示に後見人が関与している限りにおいて、排斥されるべきであろう。この排斥の理論的根拠としては、後見人の禁反言（先行行為に矛盾する言動の禁止）に求めることもできるものの、より端的には、後見人を本人の使者とはせず、あくまで法定代理人と位置づけ、後見人を起点する意思表示と評価することで、本人自身の意思無能力を問題にしない対処をすべきものと思われる。

3 本人の意思決定と「不当な影響」

こうして、本人の意思決定と後見人による法定代理とが両立するものと考えるとき、つぎに問題となるのは、本人の意思決定に基づく代理権行使をどのように確保すべきかである。

この場合、法定代理人が代理権の範囲で行った代理行為の効果は、仮にその代理行為が本人の意思に反するものであったとしても、本人に有効に帰属する。本人の意思に反したことは、あくまで本人と代理人との間の内部義務違反、後見においては善管注意義務を敷衍したものとされる本人意思尊重義務（民法858条）への違反として捉えられることとなる。

したがって、ここでまず重要となるのは、後見人の内部義務違反行為を防止し、本人に意思に即した代理権行使を確保するための具体的方策を模索することである。もっとも、これについては、現行法上、無権代理（民法113条）、損害賠償請求（同415条、709条）、後見人の解任（同846条）といった救済手段が用意されているものの、判断能力が減退している本人の状況に鑑みれば、本人自らこれらの救済手段を発動することはおよそ期待できない⁽²⁵⁾。

他方、こうした方策と同じく重要となるのは、形式的には本人の意思決定に基づく代理ではあっても、その意思決定が後見人や第三者の「不当な影響」によりなされた場合の法的処遇である。

(25) 詳しい検討は拙稿「成年後見人等の義務と責任の位置づけ」実践成年後見51号10頁以下（2014年）に委ね、本稿ではこれ以上の検討を行わない。

障害者権利条約12条4項は、成年後見制度を含む「措置」における「濫用を防止するための適当かつ効果的な保障」として、「法的能力の行使に関する措置」が「不当な影響（undue influence⁽²⁶⁾）を及ぼさない」ものであることを要求する。すなわち、「不当な影響」による障害者本人の意思決定は、実質的には本人の意思決定とは評価できないとの考えが背景にあるものと解される。

もっとも、何をもって「不当な影響」による意思決定と解すべきであるのかについては、障害者権利条約はそれ以上に何も語らない。同条約12条を解説する一般的意見第1号は、その第22項において、「意思決定を他者の支援に依存（rely）している者の場合、これが悪化する可能性がある。不当な影響は、支援者と被支援者の相互作用の質として、恐怖（fear）、敵意（aggression）、脅威（threat）、欺瞞（deception）又は改ざん（manipulation）の兆候が見られることを特徴とする」と説くが、それ以上に具体的な基準を示すものでもない。「依存」のほか、「恐怖」、「敵意」、「脅威」、「欺瞞」、「改ざん」といったキーワードが列挙されるものの、例えば、どの程度の依存関係があれば「不当な影響」があると評価できるのかなどについて何かを指示するものにはなっていない。

この点、例えば、後見人にとって不利益で本人にとって利益な、いわゆる利益相反の契約が両者間に締結された場合、一般には「不当な影響」による意思決定がなされた蓋然性が高いといえるものの、常にそうである確証もなく、また、このような外形のみの判断では、現実存在し得る「不当な影響」のすべてを拾い上げることはできないであろう。

そもそも、何が「不当な影響」のない真の意思決定であるのかについての確たる見解があるわけでもない。人任せも本人の意思決定の1つであるとするれば、何が真の意思決定であるのかは、当該個人の性格や、場合によってはその地域の住民の特性や国民性などにも着目すべきであるのかもしれない、いずれにせよ、

(26) フランス語版での対応する語は、abus d'influenceであり、直訳すれば、「影響の濫用」となる。また、undue influenceは、イギリス契約法上の概念として、しばしば「不当威圧」と訳され、紹介されている。もっとも、本稿では、条約の公定訳に従い、本文中において、英語版の訳語である「不当な影響」を用いる。

この点の実証抜きには語れないように思われる。

結局、こうした障害者権利条約の要請を法制度に取り込むとするならば、この点の実証研究が必要であり、そして、かかる実証研究においては、心理学の知見⁽²⁷⁾や研究手法が大いに活用されるべきであろう。例えば、どのような発言が他者の意思決定に影響を与え易いかを調査し、その調査結果から、より影響を与えず、したがって、本人の自発的な意思決定を促し易い発言のあり方を模索するといった研究などが考えられる。

第4 結 語

以上のとおり、民法学の領域においても、刑事法学と同様に、心理学との接点が多くみられ、その知見や研究手法を活かす余地は多分にあるものとする。著者は心理学の専門家ではなく、本稿では、あくまで民法学の中で心理学の寄与が期待される領域の存在を指摘し、問題提起を試みたにとどまる。今後は、法学者の側からも、心理学を含む人間科学への理解を深め、対話を継続し、より深い法理解に達するべく精進を重ねたい。

（なお、本論文は、平成26年度日本大学学術研究助成金〔総合研究〕課題番号（総14-001）（研究代表者、和田万紀）に基づく研究成果の一部である。）

(27)「不当な影響」によらない本人の意思決定として、本人に責任を帰属させることができるか否かに関しては、ハイダー（Heider）に始まる心理学上の帰属理論（attribution theory）が参考になるかもしれない（外山みどり「責任の帰属と法」菅原郁夫ほか『法と心理学のフロンティアⅠ巻』97頁以下（北大路書房、2005年）参照）。

中野区のスポーツを通じた健康政策と施設利用料

—— 東京都弓道連盟第三地区内「八区」の比較を中心として ——

山 田 光 矢

はじめに

- 1 体育・スポーツ施設の現状と弓道場
- 2 地方自治体の財政健全化とスポーツ施設への指定管理者制度の導入
- 3 高齢社会における高齢者のスポーツ推奨の必要性和政策
- 4 「八区」のスポーツ施設利用政策と中野区の特异性
- 5 中野区の弓道場使用料の値上げと中野区弓道連盟の対応
- 6 中野区の高齢者健康維持政策とスポーツ施設利用策の今後のありかた

はじめに

この論文の主目的は、中野区のスポーツ施設の利用条件、とくに弓道場の利用条件の特异性を、周辺の7つの区との対比を通じて明らかにすることである。ここでいう「八区」は、東京都弓道連盟第三地区に所属する8つの区で構成される団体の呼称である。東京都弓道連盟は都内を3つの地区に区分している。それを支部がおかれている区と市で分類すると、千代田区・中央区・台東区・墨田区・江東区・荒川区・足立区・葛飾区・江戸川区の9区で構成されている第一地区、大田区・品川区・渋谷区・世田谷区・港区・目黒区の6区で構成されている第二地区、残りの8つの区と多摩地域の市町村で構成されている第三地区となる。

このように第三地区は、面積や人口を見ても広範な地域で構成されている。それゆえ、弓道連盟がおかれている区と市を単位とした場合、新宿区・中野区・杉並区・文京区で構成される東部地区、板橋区・練馬区・豊島区・北区で構成される北部地区、武蔵野市・西東京市・小平市・小金井市・東村山市・三鷹市・東久留米市で構成される中部地区、町田市・府中市・調布市・八王子市・多摩市・稲城市で構成される南部地区、国分寺市・福生市・日野市・東大和市・立川市・国立市・青梅市・あきる野市・羽村市で構成される西部地区の5つの地区に区分されている。

都内の区や市に置かれている弓道場を単位として、全体を比較することは困難なことから、本論文は第三地区の東部地区と北部地区に帰属する、中野区、新宿区、文京区、杉並区、豊島区、練馬区、板橋区、北区を対象に、その管理主体や使用料金等を通じて対比し、中野区の特殊性を明確にすることを目的としたものである⁽¹⁾。なおこの8つの区の対抗戦を「八区対抗」と呼んでいることから、この論文では8つの区の集合体を「八区」と表した。

1 体育・スポーツ施設の現状と弓道場

現在、2020年開催の東京オリンピックにおける体育・スポーツ施設等の建設のありかたが話題となっている。どのような形であれ、オリンピック関連施設の新増設によって、日本の体育・スポーツ施設が拡充されていくものと考えられる。それは、戦後日本の武道を含む体育・スポーツの振興と施設の充実が、1964（昭和39）年の東京オリンピック開催によってもたらされてきたことから理解できる。当時は、1960（昭和35）年の高度経済成長策の導入を契機とした日本の経済力の向上の時期であり、それを背景にしたオリンピック施設及びその関連施設の充実がもたらされたと判断できる。

その後日本経済は、1973（昭和48）年のオイルショック以降の低成長期に移行するが、景気回復策として箱もの行政といわれる公共施設の建設を中心とした積極財政政策が導入されたことから、日本の体育・スポーツ施設は増加してきた。その後のバブル景気は更なる施設の増加をもたらしたが、バブル崩壊後、

施設は減少傾向にある。小泉改革は体育・スポーツ施設の運営に関しても見直しを求めたことから、施設は減少傾向を継続していたが、2020年の東京オリンピックによって、再び増加していく可能性も考えられる。

2008（平成20）年の日本の体育・スポーツ施設数は、全国で22万2553箇所である。その中で、学校体育・スポーツ施設は全体の61.2%の13万6276箇所である。大学や高等専門学校の体育施設は3.8%の8375箇所であって、学校関係施設がほぼ65%を占めている。続くものが5万3732箇所24.1%の公共スポーツ施設である。公的施設が全体のほぼ90%となっている。残りのものが1万7323箇所7.8%を占める民間スポーツ施設と、6827箇所3.1%を占める職場スポーツ施設である。民間の体育・スポーツ施設は全体の1割強となっている。

学校体育・スポーツ施設は、1969（昭和44）年には10万1672箇所であったが徐々に増加し、1990（平成2）年には15万6548箇所となった。その後は徐々に減少し、13万6276箇所となっている。そこにはバブル崩壊の影響などが認められる。社会体育施設は、1955（昭和30）年には1634箇所にすぎなかったが、東京オリンピック後の1968（昭和43）年には4659箇所となり、その後も急増を続け、2005（平成17）年には4万8055箇所最多となった。しかし2011（平成23）年には4万7571箇所になり、その後は減少傾向が続いている。

2005（平成17）年がピークになっていることから、小泉改革の影響があったことが理解できる。民間体育施設は、1987（昭和62）年の1万3447箇所が最初に統計に表れた数字であり、1996（平成4年）の1万8146箇所をピークに、2011（平成23）年には1万5532箇所まで減少している。ここにもバブルとその崩壊の影響が見て取れる⁽²⁾。

弓道場設置の流れを見ると、1969（昭和44）年には1798箇所であったものが、1975（昭和50）年には2067箇所となり、1980（昭和55）年には2431箇所に、1985（昭和60）年には4994箇所と増加の一途をたどってきた。しかしその後は、1996（平成8）年には3211箇所へ、2002（平成14）年には3136箇所へ、2008（平成20）年には2943箇所へと減少傾向にある。減少傾向の特徴は施設における弓道場の状況を見れば明確となる、学校体育・スポーツ施設では、1996（平成8）年の

1386箇所（43.2％）が、2002（平成14）年には1516箇所（48.3％）へと増加し、2008（平成20）年には1451箇所（49.3％）と減少に転じている。ただし弓道場全体の減少の影響を受けて割合は高まっている。

大学・高専体育施設では、317箇所（9.9％）の数は317箇所（10.1％）で維持されてきたが、その後305箇所（10.4％）に減少している。ここでも最終的には施設数は減少しているが割合は高まっている。公共スポーツ施設では、1392箇所（41.4％）から1172箇所（37.4％）そして1111箇所（37.8％）へと減少している。最終的には施設数は減少しているが、ここでも割合は微増している。職場スポーツ施設では、95箇所（3.0％）が49箇所（1.6％）から20箇所（0.7％）へと激減している。民間スポーツ施設では、84箇所（2.6％）が82箇所（2.6％）から56箇所（1.9％）へと減少している。一般市民にとって弓道は、公共スポーツ施設を中心に行われていることがわかる。ここでいう弓道場は「弓道の試合（近的）が行えるもの」と定義されている⁽³⁾。

2 地方自治体の財政健全化とスポーツ施設への指定管理者制度の導入

財政法第4条において赤字公債の発行が禁止されている日本では、1965（昭和40）年に特例法で赤字公債を発行したが、その後10年間は発行されなかった。しかし1973（昭和48）年のオイルショックによる高度経済成長の終焉や、1975（昭和50）年以降の財源不足の影響もあって、1975年以降、数年の未発行年を除き、継続的に赤字公債が発行されてきている。その結果赤字公債発行残高は増加の一途をたどっている⁽⁴⁾。赤字公債発行残高の大きさは、財務省の2016（平成28）年3月29日に成立した「平成28年度一般会計予算」に対する、「平成28年度一般会計予算は約96.7兆円ですが、このうち歳出についてみると、国債の元利払いに充てられる費用（国債費）と地方交付税交付金と社会保障関係費で、歳出全体の7割超を占めています。一方、歳入のうち税収は約58兆円であり、一般会計予算における歳入のうち、税収で賄われているのは約6割弱であり、4割弱は将来世代の負担となる借金（公債金収入）に依存しています⁽⁵⁾」との

説明からも理解できる。

同じ説明の中で財務省は、歳出総額については、社会保障関係費が31.9兆円で全体の33.1%を、地方交付税交付金等が15.3兆円で全体の18%を、国債費が23.6兆円で全体の24.4%を占めており、この3費目で歳出総額のほぼ75%となっている。残りは5.9兆円で6.2%の公共事業費、5.3兆円で5.5%の文教及び科学振興費、5兆円で5.2%の防衛費、9.5兆円で9.8%のその他となっている。他方、歳入総額のうち租税及び印紙収入は57.6兆円で全体の約60%、公債費は28.4兆円で約30%の特別公債費と6兆円で約6%の建設公債費の合計34.4兆円で、歳入全体の約36%となっている⁽⁶⁾と説明している。

このように日本の財政悪化は、赤字公債がオイルショックにともなって発行され、バブルの一時期を除いて継続して発行されてきたことが一因となって生じているものである。それゆえ財政悪化の解消が政府の主要課題の一つとされ、「日本の財政は、1970年代の財政悪化、1980年代の財政再建、1990年代の財政悪化、2000年代（前半）の財政再建と、交互に財政政策のスタンスが変化している⁽⁷⁾」のである。財政悪化下の景気刺激策は、赤字公債発行を前提とすることが多く、更なる財政悪化ばかりでなく、次世代での財政再建の必要性の増大を招くことになりやすいのである。

日本では1980（昭和55）年には第2次石油ショックの影響を受けたものの、鈴木内閣と中曽根内閣では、第2次臨時行政調査会の答申を受け、「増税なき財政再建」を模索した。また中曽根内閣は1985（昭和60）年のプラザ合意を受けて内需拡大に向かった。この結果、日本は円高不況を克服したかに見えたが、その実態はバブル景気であった。1990年代の日本はバブル経済崩壊への対応に振り回された。この期の混乱は、海部・宮沢・細川・羽田・村山・橋本・小渕と政権交代を挟んで内閣が7回交代したことからも理解できる。こうした財政悪化による混乱に一応の終止符を打ったものが、2001（平成13）年から2006（平成18）年まで継続した小泉内閣であった⁽⁸⁾。

財政再建にとって重要なターゲットとなるものは、歳出総額のほぼ75%を占める社会保障関係費、地方交付税交付金、国債費である。この中で小泉内閣が

地方交付税関係費を対象に実施した政策の1つが三位一体の改革である。小泉内閣は三位一体の改革を、「『地方にできることは地方に』という理念の下、国の関与を縮小し、地方の権限・責任を拡大して、地方分権を一層推進することを目指し、国庫補助負担金改革、税源移譲、地方交付税の見直しの3つを一体として行う改革です⁽⁹⁾」と説明している。このように小泉内閣は、三位一体の改革を通じて地方交付税総額の適正な支出を実現し、歳出削減の実現を目指したのである。

さらに小泉内閣は規制緩和の一つとして、2003（平成15）年9月に「地方自治法の一部を改正する法律」を施行し、地方自治法第244条の2「公の施設の設置、管理及び廃止」の第3項の改正を通じて指定管理者制度を導入した。地方自治法第10章「公の施設」に関する規定である。政府は、第244条の2の第3項の「普通地方公共団体は、公の施設の設置の目的を効果的に達成するため必要があると認めるときは、条例の定めるところにより、その管理を普通地方公共団体が出資している法人で政令で定めるもの又は公共団体若しくは公共的団体に委託することができる」との規定を、「…略…法人その他の団体であつて当該普通地方公共団体が指定するもの（以下本条及び第244条の4において「指定管理者」という。）に、当該公の施設の管理を行わせることができる。」と改め、指定管理者制度を導入したのである⁽¹⁰⁾。

公の施設に関する具体的な規定はないが、「福祉施設や病院、市民会館、保育所、児童館、体育館などの公的施設であり、廃棄物処理センター（清掃工場）や給食センターなどの公的施設は、自治体の庁舎と同様に、行政サービスを執行（実施）するための施設（設備）であり、指定管理者制度の対象ではない」というのが総務省の見解である。なお、指定管理者制度を導入した公の施設における利用料金制については、「自治体は、適当と認めるときは利用料金を指定管理者の収入として収受させることができ、利用料金は条例に定めるところにより指定管理者が定めるが、あらかじめ自治体の承認を受けることとされた」のである。

このため、「指定管理者が管理を行うための必要経費は、①すべて利用料金

で賄う、②すべて設置者である自治体の支出金で賄う、③一部を支出金で、残りを利用料金で賄うの3つの選択肢があり得ること」になったのである⁽¹¹⁾。それゆえ各地方公共団体が、公の施設の管理に関して指定管理者を利用する場合、どのような制度設計を行うかによって、大きな相違が生まれてくることになったのである。

なお、2008（平成20）年の公共スポーツ施設における指定管理者制度の導入状況を見ると、総施設数5万3732箇所のうち、指定管理者制度を導入している施設は2万357施設であり、導入率は37.9%となっている。文部科学省は4万1692箇所の16施設と、1万2040箇所のその他の施設に分けて導入率を計算している。最高率は1816箇所のうち1068箇所で導入され、58.8%の導入率をほこるトレーニング場である。さらに、50.5%の水泳プール（屋内）、50.3%の球技場、50.0%のバレーボール場（屋外）が続き、最低率は8258箇所のうち2256箇所で27.3%の多目的運動施設となっている。

最多の施設は8460箇所の体育館である。次いで8258箇所の多目的運動広場、6766箇所の野球場・ソフトボール場、5530箇所の庭球場（屋外）、2512箇所の水泳プール（屋外）の順となっている。弓道場は8番目の施設箇所数で、1111箇所の中の478施設で導入されており、導入率は全体の6位にあたる43.0%となっている⁽¹²⁾。

3 高齢社会における高齢者のスポーツ推奨の必要性と政策

総務省統計局によると、「平成27年国勢調査による10月1日現在の我が国の人口は1億2709万5千人となった。前回調査の平成22年と比べると、人口は96万3千人減少している」のである。それを総人口を年齢3区分別にみると、「15歳未満人口は1588万7千人、15～64歳人口は7628万9千人、65歳以上人口は3346万5千人となっている。総人口に占める割合を平成22年と比べると、15歳未満人口は13.2%から12.6%に低下、15～64歳人口は63.8%から60.7%に低下、65歳以上人口は23.0%から26.6%に上昇となっている」のである。その結果日本の少子高齢化の現状は「15歳未満人口の割合は、調査開始以来最低となった

一方、65歳以上人口の割合は、調査開始以来最高」となっているのである⁽¹³⁾。

こうした日本の少子高齢化問題の深刻さについて、日経新聞は「75歳以上の人口は1612万人と総人口の『8人に1人』を占め、初めて14歳以下の子ども（1588万人）を上回った。75歳以上の人口は85年時点では471万人であったが、30年間で3.4倍に増加。同期間で14歳以下は4割減っており、少子高齢化に歯止めがかかっていない。14歳以下の人口割合は12.66%。日本と同様に少子高齢化が問題化しているイタリア（13.7%）やドイツ（12.9%）を下回り、世界最低の水準まで低下している⁽¹⁴⁾」と論じている。

合計特殊出生率には若干回復基調が見られるが、それでも我が国の人口は減少していくものと推計されている⁽¹⁵⁾。国立社会保障・人口問題研究所は、「人口推計の出発点である平成22（2010）年の日本の総人口は同年の国勢調査によれば1億2806万人であった。出生中位推計の結果に基づけば、この総人口は、以後長期の人口減少過程に入る。平成42（2030）年の1億1662万人を経て、平成60年（2048）年には1億人を割って9913万人となり、平成72（2060）年には8674万人になるものと推計⁽¹⁶⁾」されるとしている。こうした中で第1次ベビーブーム期に生まれた団塊の世代は、2015（平成27）年に全て66歳を超え高齢者となった。これが「2015年問題」であった。

この高齢者の多くは2025年には75歳を超え後期高齢者となる。これが「2025年問題」である。確かに日本の75歳以上の人口は2025年の2200万人で高止まりする。しかし現役世代が減少することから、2060年には4人に1人が75歳を超える超高齢社会となると推測されている⁽¹⁷⁾。それゆえ、日本の近未来が明るくなるための諸施策が現在求められているのである⁽¹⁸⁾。

2006（平成18）年の介護保険法改正では、「要支援・要介護状態になる前からの介護予防を推進する地域支援事業を創設した。中でも、地域支援事業における介護予防事業では、運動器機能、栄養、口腔機能、閉じこもり、認知機能、うつ の6分野を挙げ、高齢者の要介護状態への移行を予防し、健康で自立した生活を維持するための取組み⁽¹⁹⁾」を進めることにしたのである。「閉じこもりの要因には身体的、心理的、社会・環境要因があり、それらが密接に関連しあっ

ている⁽²⁰⁾」ものである。

この高齢期における閉じこもりの「予防や支援の第一歩は近隣での仲間づくり⁽²¹⁾」である。すなわち「身体機能維持につながる外出の維持には、ソーシャルサポート、人とのつながりが重要である。それは運動・スポーツを介した他者との交流、すなわち社会関係の拡大によってもたらされるといえる⁽²²⁾」のである。このことは高齢者の健康福祉にとって体育・スポーツの果たす役割の大きさを伝えている。

文部科学省の20歳以上の人々を対象に行った、「体力・スポーツに関する世論調査」（平成25年1月）によれば、自分を健康だとするものは全体で87.1%であるが、20歳代の94.7%から年代ごとに低下していき、60歳代は84.7%、70歳以上は73.7%となっている。体力の自信の有無では、全体では61.8%で、20歳代の68%に次ぐのが60歳代の66.6%であり、70歳代は51.2%となっている。運動不足を感じるものは全体で74.6%であるが、最大が30歳代の87.8%であるのに対して、70歳以上では59.8%で最小であり、続くのが60歳代の67.2%となっているのである。

運動・スポーツの日数では、多い順に週に3日以上（年151日以上）が30.1%、週に1－2日が28.6%、月に1－3日が22.6%、3か月に1－2日が10.0%、年に1－3日が7.2%となっている。週3日以上の割合は70歳以上が53.6%で最多であり、60歳代は42.4%で第2位であり、最少は30歳代の12.4%で、高齢者と若者の差は大きい。なお、週1－2日は60歳代が32.3%で最多であるが、残りは27%前後で大差はない⁽²³⁾。

調査の数字からは、高齢者は健康に不安を感じてはいるものの、体力には自信を持っており、運動不足もあまり感じておらず、体育・スポーツをやる日数も多く、健康に気を使っていることが理解できる。若者は健康には自信はあるものの、時間的な制約もあり、体育・スポーツをやる余裕がないことが想像できる。健康と体力に対する自信は、各年代共に運動量に比例するとともに、年齢と反比例しているものの、65歳以上で大きく変動し、20歳前半に類似した数値となっている。

年齢とともに体力が劣え健康に対する自信が薄れていくものの、定年退職期以降の高齢者の時間的余裕が、体育・スポーツに励む時間を増加させ、体力や健康への自信を回復させていることが理解できる⁽²⁴⁾。国民がこの1年間に行った運動・スポーツの種目をみると、ウォーキングが50.8%、体操が30.8%、ボーリングとランニングが12.7%となっており、他は10%以下となっている。なお、弓道とアーチェリーは全体で0.4%となっている⁽²⁵⁾。

高齢者の体育・スポーツ振興に関しては、伊勢崎市は医療費抑制を理由に65歳以上の市民の利用料金を無料とした⁽²⁶⁾。逆に広島市は高齢者に対するスポーツ・文化施設などの利用料金の減免制度を見直している。その理由を広島市は、「世代間負担の公平化を図るため、スポーツ施設や文化施設などの公共施設利用料金の高齢者免除制度を見直します。これにより、平成25年7月1日から65歳以上の高齢者に子供料金と同額の負担をしていただきます」として市民に通知している。

広島市はこれまで「高齢者の健康増進や、社会参加を促進するため、本市では昭和49年から、スポーツ施設や文化施設などの利用料金を免除して」きたことを強調するとともに、「制度開始当時、65歳以上の高齢者人口は6%でしたが、現在は20%と大幅に増加し、市民5人に1人が高齢者であるという状況である」ことを強調し、値上げの理由としている。ただし「これまでの制度が高齢者の健康増進や社会参加の促進を図ってきたことを考慮し、高齢者に全額の負担を求めるのではなく、子供料金と同額にすることにしている」ことを強調している⁽²⁷⁾。

高齢者への体育・スポーツへの参加機会の増進あるいは維持を前提とした施設利用料金政策は、医療費抑制や介護保険制度の維持等、社会保険関係経費の削減にもつながる可能性がある。市区町村ではそれぞれの立場から多様な政策を行っているが、子どもに体育・スポーツの楽しさを教えることは、高齢者となったときにも体育やスポーツに溶け込む土台を作るものであり、高齢者が比較的容易に体育やスポーツに溶け込むあるいは復帰する可能性を高めるものであり、必要な政策であるということが出来る。

4 「八区」のスポーツ施設利用政策と中野区の特異性

東京都弓道連盟第三地区に所属する「八区」の平均を見ると、表1のように平均人口42万996人、平均高齢者数は9万9218人、平均高齢化率21.9%、平均面積は24.13%である。「八区」の中で平均人口を超える区は、上位から練馬区、杉並区、板橋区の順となっており、65歳以上の人口では練馬区、板橋区、杉並区の順となっている。これら3つの区の面積も練馬区、杉並区、板橋区の順となっており、3つの区では広い面積の中に多くの人々が住んでいることがわかる。ただし高齢化率を見ると、北区、板橋区、杉並区、中野区の順になっており、練馬区は最下位となっており、練馬区の特異性が伝わってくる。

文京区は人口・65歳以上人口・面積は全て8位であり、高齢化率は7位である。豊島区は人口・65歳以上人口・面積は全て7位であり、高齢化率は5位である。中野区は人口・65歳以上人口・面積は全て6位であり、高齢化率は4位である。文京区、豊島区、中野区では4つの指数にある程度の相関性が見て取れる。新宿区は人口は4位で、65歳以上人口と面積は5位であり、高齢化率は6位である。北区は人口は5位で、65歳以上人口と面積は4位であるが、高齢化率は1位となっている。北区の高齢化率の高さが理解できる⁽²⁸⁾。

これら8つの区ではほぼ人口の5人に1人が高齢者であり、少子化の影響を考慮すれば高齢化率がこれから高まっていき、社会福祉関係費の増加することが見込まれている。2014（平成26）年の東京都の合計特殊出生率は1.15で、前年よりも2ポイント伸びたが、国立社会保障・人口問題研究所がいう人口置換率2.07から比べればかなり低い。「八区」のそれを東京23区の順位でみた場合、練馬区・11位、北区・12位、板橋区・14位、文京区・16位は中位から若干下程度であるが、豊島区・20位、中野区と杉並区・ともに21位、新宿区・23位と下位に並んでおり、今後の人口減が予測される。

東京都の将来人口は、2020年の1335万人をピークに減少していき、2050年には1175万人、2100年には713万人まで減少すると予測されている。その中で65歳以上の高齢者の数と高齢者数は、2020年には321万人で高齢化率は24.0%で

表 1 「八区」の概要

区	人口（全体）	65歳以上の人口	高齢化率	面積	合計特殊出生率	実質赤字比率	実質連結赤字比率	実質公債費率	将来負担比率	備考
中野区	318,242	6	22.07%	15.59	6	-3.16%	-4.74%	2.90%	-109.90%	
新宿区	348,189	4	20.64%	18.22	5	-4.35%	-5.82%	1.40%	—	マイナス： 数値不明
文京区	218,489	8	19.94%	11.29	8	-5.93%	-8.44%	-2.40%	-188.30%	
杉並区	556,549	2	22.71%	34.06	2	-5.99%	-7.95%	-6.40%	-86.70%	
豊島区	299,149	7	20.67%	13.01	7	-4.37%	-7056%	-2.30%	-85.40%	
練馬区	732,838	1	19.72%	48.08	1	-2.85%	-3.37%	-2.00%	-78.90%	
板橋区	552,462	3	23.36%	32.22	3	-4.02%	-6.33%	-3.20%	-84.20%	
北 区	341,806	5	26.42%	20.61	4	—	—	-2.40%	0	マイナス： 数値不明
合 計	3,367,724		—	193.08						
平 均	420,966		21.90%	24.13						

註 1：「八区」は東京都弓道連盟第三地区に属する 8 つの特別区の呼称である。多摩地区も第三地区に含まれる。残りの 15 区は第一地区（9 区）と第二地区（6 区）に分かれている。

註 2：人口に関しては早稲田大学特命教授伊藤茂「超高齢社会を迎えた東京 23 区の将来」〔第 60 回（n300）NSRI 都市・環境フォーラム〕参照。出典は森記念財団「2030 年の東京 part 2 超高齢社会データブック」(<http://www.nikkenri.com/forum/HP/300siryo.pdf>)

註 3：各区の財政状況は、それぞれの区の HP の数字を用いたので年代に若干ばらつきがあるが、すべての区で財政には大きな問題は認められない。

註 4：人口（全体）、人口（65 歳以上）、高齢化率、面積、合計特殊出生率の右の欄の数字は八区内の順位である。

註 5：合計特殊出生率は「平成 26 年東京都人口動態統計年報（確定数）のあらまし」(<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUZA/2015/10/DATA/60pak200.pdf>) 参照

あるが、2050年には461万人まで増加しピークとなり、高齢化率も37.6%となると予測されている。2100年には高齢化人口は327万人まで減少するが、高齢化率は人口減少の影響を受けて45.9%となると予測されている⁽²⁹⁾。

高齢化率の向上の中で、元気な高齢者の高齢者に占める割合は、2010（平成22）年に70.8%であり、その後若干減少が予測されているが、2035年でも70.9%と70%台を維持することが予測されている。75歳以上に限っても、2010（平成22）年の55.2%が、2035年には56.3%まで増加するものと推測されている。この元気な高齢者は、高齢者から要介護認定者、高齢入院者、高齢通院者を除いた高齢者である。ただし、要介護認定者には急性疾患による短期入院や通院する人も含まれるので、この重複部分を調整すると、高齢者のうち70%強から75%が元気な高齢者と考えられている⁽³⁰⁾。人口減による歳入減への適切な対応をしつつ、高齢者の元気を維持していくことによって、社会保障関係費を中心に歳出をいかに調整していくかが、今後の地方公共団体の課題の1つといえる。

「八区」の指定管理者制度の導入状況を表2から見ると、文京区は全施設を東京ドームグループ・ミズノ共同事業体に、板橋区は東京ドームグループに一括委託している。中野区はTACグループと日本体育施設グループに、新宿区は新宿スポーツコミュニティ共同事業体と公益財団法人新宿未来創造財団（区の外郭団体）に、杉並区は財団法人杉並スポーツ振興財団と3つの共同事業体に、豊島区は特定非営利活動法人豊島区体育協会と3つの共同事業体に、練馬区は区の直営（総合体育館）と3つの共同事業体に分散委託している。北区は新しい体育館が完成すれば4つの（共同）事業体に分散委託することになる。また、中野区、新宿区、文京区は、指定管理者に委託する施設がある程度集約されているのに対し、杉並区、豊島区、練馬区、板橋区、北区では、多種多様な体育・スポーツ施設の管理を指定管理者に委託している。豊島区を除くと、ある程度人口と面積と相関関係があることがわかる。

中野区の使用料が際立って高額である理由の1つとして、施設使用料決定における算出基準の独自性を挙げることができる。2007（平成19）年の「施設使

表 2 八区の主要体育・スポーツ関係施設の特徴と運用携帯

区	主要なスポーツ施設の種類	主競技場・剣道場・柔道場・卓球場・トレーニングルーム・会議室他	指定管理者等	備 考
中野区	中野区体育館	主競技場・プール・軽体操室・会議室他	三菱電機ビルテクノサービス・東京アスレティッククラブ・エクレ指定管理者共同事業体 (TAC グループ)	
	郷宮体育館	主競技場・プール・軽体操室・会議室他		
	哲学堂運動施設	野球場 (2 面)・庭球場 (6 面)・弓道場他	日本体育施設グループ	
新宿区	新宿スポーツセンター	大体育館・小体育館・武道場・プール・トレーニング室他	新宿スポーツコミュニティ共同事業体	
	コズミックススポーツセンター	大体育館・小体育館・多目的室・第一武道場・第二武道場・プール・弓道場他	公益財団法人新宿未来創造財団	区の外郭団体
	大久保スポーツプラザ	多目的ホール・和室・テニスコート・児童遊戯室・会議室他		
文京区	文京総合体育館	競技場・柔道場・剣道場・弓道場・卓球場・多目的室・プール・会議室等	東京ドームグループ・ミズノ共同事業体	プールとトレーニングルーム シルバー (65歳から79歳)：若干の割引制度あり ゴールド (80歳以上)：無料
	文京スポーツセンター	競技場・武道場 1・武道場 2・弓道場・卓球場・多目的室・プール・会議室等		
	江戸川橋体育館	競技場・柔道場・剣道場・多目的室等	TAC・FC 東京・MELTEC 共同事業体	全体の担当は 杉並区教育委員会事務局スポーツ振興課 小規模な運動場・体育館・プール等に関する指定 管理者の記載はない
杉並区	上井草スポーツセンター	体育館・プール・グラウンド・小運動場・テニスコート・弓道場・会議室他	財団法人杉並区スポーツ振興財団	
	高円寺他 3 体育館と下高井戸運動場	上井草スポーツセンター以外に運動場 11、体育館 5、プール 5 がある	シダックスと新東ヒューマンサービス他の共同事業体	
	高井戸温水プール	同 上	コナミスポーツ&ライフ他の共同事業体	
豊島区	大宮前体育館	同 上	東京ドームグループ	荒川野球場・南長崎スポーツセンター
	総合体育場	体育室・野球場 (2 面)・庭球場・弓道場		
	巢鴨体育館・西巢鴨体育館他 2 施設	巢鴨：競技場、西巢鴨：テニス場、荒川野球場、南長崎：競技場・多目的広場		
練馬区	池袋スポーツセンター	武道場	㈱ビュウウォッシュ・アズビル共同事業体	
	雑司ヶ谷体育館	競技場・体育室	コナミスポーツ&ライフ・近鉄ビルサービスグループ	
	豊島体育館	競技場	特定非営利活動法人豊島区体育協会	
練馬区	総合体育館	競技場・卓球場・柔道場・剣道場・弓道場・エアライフル場・相撲・会議室他	地域文化部スポーツ振興課：他の施設の所管課	区の直管施設
	平和台体育館・桜台体育館他 2 施設	平和台：競技場・武道場 (2)・温水プール、桜台：競技場・柔道場・剣道場	東京ドームグループ・大泉スワロー共同事業体	学田公園野球場、豊玉中公園庭球場
	光が丘体育館・高野台運動場た 2 施設	光が丘：競技場・温水プール・会議室等	オーエンス・NTT ファシリティアーズグループ	東台野球場、夏の雲公園庭球場
板橋区	上石神井体育館・石神井プール他 2 施設	競技場・第一武道場・第二武道場・温水プール・会議室	毎日・首都圏・練馬共同事業体	石神井・三原台プール、びくに公園庭球場
	大泉学園町体育館・北大泉野球場他 2 施設	競技場・第一武道場、第二武道場・温水プール・会議室	ミズノグループ	土支田庭球場、大泉さくら運動公園多目的運動場
	小豆沢・赤塚・東板橋・板橋体育館	小豆沢：武道場・プール、赤塚：室内競技場、他：トレーニングルーム		
北区	高島平温水プール	温水プール	東京ドームグループ	所管課：スポーツ振興課
	屋外施設：荒川河川敷体育施設他	野球施設・陸上競技施設・フットサル場・サッカー場・庭球場・相撲場他		
	赤羽体育館 (新築：H29 年 1 月開設予定)	第 1・第 2 競技場・弓道場・トレーニングルーム・ランニングコース他	KITA マネージメントグループが第一候補	建設中：新規に指定管理者選定予定
北区	桐ヶ丘体育館・瀧野川体育館	競技場・フレイブルーム・トレーニングルーム・武道場・弓道場他	アズビル㈱・㈱ビュウウォッシュグループ	29 年度以降：KITA マネージメントグループ*が定
	北運動場・神谷体育館他 3 施設	運動場・体育館・野球場・サッカー場他	日本製紙総合開発北運動場共同事業体	29 年度以降：日本製紙・日比谷アメニス共同事業体
	十条小学校温水プール・王子プール他	プール・多目的広場等	株式会社サンアメニティ	29 年度以降も継続予定

註：各区の利用条件等については各区ホーム・ページ等の情報を整理し作成した。
* KITA マネージメントグループの構成団体はアズビル株式会社・株式会社ビュウウォッシュ・株式会社ルネサス・まちづくり北株式会社・瀧野川種苗株式会社であり、アズビル㈱・㈱ビュウウォッシュグループが母体であるとみられる。

用料の見直しについて」において、「現行の使用料は、平成12年度に見直しを行い、平成13年7月（一部は平成14年4月）に改定を行った。前回の見直し後6年が経過したこと及び受益者負担の適正化を図るため、有料施設の使用料の算出方法を見直し、適正な使用料に改定する」ことを見直しの根拠として提示した。この方針では「受益者負担」を強調したことが大きな特徴といえる。それを受けては下記のような方針を明示している。それは、

1 基本方針の3つの柱

(1) 施設使用料算出の基本的考え方を見直す。

- ① 「職員人件費」と建物の「減価償却費」を含めた、施設の維持管理・貸出業務のすべての経費を原価とする。
- ② すべての施設の積算方式を統一する。
- ③ 施設の性質別による利用者負担割合を設定する。

(2) 施設利用者の急激な負担増を緩和する。

- (3) 団体に対する使用料の減額・免除は、原則として行わないこととし、新たな助成などのしくみを構築する。

といったものを柱とするものであった。

こうした方針を受けて、「施設使用料の算出方法＜基本方針(1)＞」の(1)には「『職員人件費』、『減価償却費』を含む、施設の維持管理・貸出業務のすべての経費を原価とする」、(2)には「すべての施設の原価計算方式を統一し、利用者の負担の公平化を図る」、(3)には「施設の性質により利用者負担の割合を設定し、施設使用料を算出する。具体的な施設利用者の負担割合は、別紙1の通りとする」との規定がおかれた。また「急激な負担増の緩和＜基本方針(2)＞」には、「引き上げ率の上限は、現行施設使用料の1.5倍とし、利用者負担増を緩和することとする。なお、今後、施設使用料は3年ごとにみなおすこととする」との規定がおかれた。この結果、弓道場を含むスポーツ施設の利用者負担は70%（税30%）とされた。この結果施設使用料は、職員人件費と減価償却を含んで受益者負担を柱に、3年ごとに1.5倍以内の値上げがなされる可能性が残ることになったのである。

この時引き上げ率1.5倍（上限）の施設となったスポーツ施設は3施設で、上高田・哲学堂野球場は1回2時間以内の2500円が3700円へ、哲学堂弓道場の個人利用料金が390円（実際は300円）から580円（実際は450円）、団体貸切利用料も同率の値上げへ、体育館開放（小中学校）のうち中学校体育館が400円から600円、中学校小体育館が200円から300円へととなった。その他の施設は据え置きか低率の値上げとなった。TACグループが管理する施設は後者で、日本体育施設グループが管理する施設の一部だけが上限の値上げとなっている⁽³¹⁾。

野球場はほとんどが2チームの試合形式の利用と考えられ、人数からみた場合にはさほど大きな値上げとは考えられない。弓道場は単独で野球場の地下に設置された施設であり、人工灯や空調施設の利用、雨漏り等を発生する建物自体の劣化対策が必要である。安定した環境で弓道が行える半面、ランニング・コストがかかりやすいという欠点も併せ持った施設ということになる。中野区の料金設定の基本方針は、弓道場の利用者と、体育館を使用する子供を直撃する形となったといえる。

5 中野区の弓道場使用料の値上げと中野区弓道連盟の対応

弓道場を中心に各区の体育・スポーツ施設の形態や利用条件を比較すると、表3からもわかるように、中野区の特異性が明確となってくる。中野区と板橋区では独立した弓道場を持っているが、他の区では体育館かスポーツセンター内に併設されている。ただし、板橋区では全施設を東京ドームグループが管理しており、小豆沢公園には、体育館と和弓場が離れて設置されているが、一体となっているものとして運営されている。

利用料金を見た場合、個人利用では中野区が3.5時間900円、杉並区が1時間200円で3時間では600円、文京区を除くと3時間300円から400円となっている。文京区は2.5時間で310円であり3時間換算では372円であり他区と大差はない。中野区と杉並区を例外とすれば、弓道場の使用料金は3時間300円から400円が平均的な水準ということになる。ただし、中野区哲学堂弓道場の利用者は、使用後に弓道場の清掃、安土整備、的紙の張替えなどを行っており、その時間を

表3 八区の弓道場の形態や利用条件等

区	弓道場の形態	利用料（個人）	利用料（団体）	備 考
中野区	哲学同弓道場（独立）	3.5時間：900円	3時間：7,200－18,400円	新体育館建設計画：弓道場は含まず
新宿区	コズミックスポーツセンター内	3時間：300円	3時間：8,400－10,500円	洋弓場は別。一部登録団体は減額
文京区	文京スポーツセンター内 （洋弓と共用）	2.5時間：310円	2.5時間：4,400－4,600円	プールとトレーニングルーム 65－79歳：割引, 80歳以上：無料
杉並区	上井草スポーツセンター内	1時間：200円	2時間：2,600円	登録団体は2時間2,200円
豊島区	総合体育場内	3時間：400円	3時間：2,400－2,600円	高齢者等の体育施設利用促進事業 を実施 ⇒ 65歳以上半額（200円）
練馬区	練馬区総合体育館内	3時間：100－300円	3時間：2,400円	新体育館建設計画：弓道場を含む 65歳以上：半額, 75歳以上：無料
板橋区	板橋区和弓場（独立）	3時間：310円	3時間：2,300－2,900円	高齢者は150円。洋弓場は別にある
北 区	瀧野川体育館内	3時間：300円	3時間：1,640－2,040円	65歳以上は150円
	桐ヶ丘体育館内		3時間：1,220－1,440円	

註：各区の利用条件等についてはそれぞれのHP等の情報を整理した。

含めて30分が加算されているのであり、30分が大きなアドバンテージとはなっていない。

弓道場を含む体育・スポーツ施設の利用料において、すべての区ではほとんどの施設で、子供料金を半額程度に設定している。子供の健康を考えれば当然の措置といえる。また65歳以降の高齢者に対しても、北区と高齢者等の体育施設利用促進事業を実施している豊島区では半額措置を、板橋区は310円を150円にする措置を講じている。練馬区は65歳以上を半額としたうえで75歳以上を無料としている。板橋区はプールとトレーニング場に関する記載しか見つけられなかったが、65歳から79歳までには半額措置を、80歳以上の高齢者には無料措置を講じている。杉並区、新宿区、中野区のホームページには割引の記載は見つけられなかった⁽³²⁾。

なお、中野区では、その後も規定に基づいて3年ごとの使用料の見直しに着手している。弓道場に限ってみても、2012（平成24）年には33.3%の値上げで、450円が600円となり、2015（平成27）年には再度1.5倍の値上げが実施され、600円が900円となった。過去10年でみれば、中野区哲学堂弓道場の使用料は300円から900円へと3倍（300%）の値上げとなっている。弓道場の使用料の値上げ率が突出していることが理解できる。

2014（平成26）年の弓道場使用料の値上げに際して、中野区弓道連盟は表立った行動は控えている。中野区弓道連盟は、2014（平成26）年12月26日に、関係先に「先ごろ、平成26年10月29日の中野区報（HP）により、施設使用料の見直しを実施する旨の通知を拝見しました。これに関しては、8月29日付けの区議会厚生委員会資料『施設使用料の積算結果について』に示された積算結果に対し、9月12日に中野区体育協会が、『厳しい改定』であることから、『認められない』ことを主旨とする『見直しについての要望書』を提出させていただきました。それにもかかわらず、ほぼ原案にそった改定がなされたことに対し、私どもとしましては、特に強く見直しをお願いする次第です」との書き出しで始まる「書面」を提出することにとどまっている。

今回の値上げについては、中野区議会厚生委員会に提出された「施設使用料

の積算結果について」の内容が各関係団体に提示され、意見を求められていたものの、中野区弓道連盟は単独での抗議姿勢はとらなかったのである。そこでは、中野区体育協会との共同歩調を選択したのみであった。しかし今回の体育・スポーツ施設の使用料改訂においても、1.5倍の上限額を提示されたものは、小・中学校体育館の開放（小学校体育館：400円が600円，中学校：600円が900円）と哲学堂弓道場の使用料（個人使用が600円から900円，団体利用もほぼ同率の値上げ）だけであった⁽³³⁾。その他の施設の値上げ幅はあまり大きなものではなく、共同歩調では意思表示が弱すぎたといえる。

「書面」は続けて「『見直しについての要望書』にもありますように、弓道場は1.5倍すなわち300円の値上げとなり、1回（3.5時間）900円となっています。弓道場に関しては、平成23年度の改定の際にも、1.33倍すなわち150円の値上げで、450円の使用料が600円になりました。3年ごとに最大1.5倍の改定基準から見た場合には、確かに基準以内の値上げといえます。しかし、結果としては、わずか4年の間で450円が900円となるものであり、2倍の値上げとなっています」として厳しい値上げへの反対姿勢を示している。また、「近隣各区の弓道場使用料を見ますと、3時間程度で300円がほぼ標準となっています。他区との比較から見た場合にも、2倍から3倍ほどの相違のある施設使用料となっています。この点からも再考をお願いする次第です」として値上げの見直しを要求している⁽³³⁾。

しかし中野区弓道連盟は「書面」の内容に関しても新たな行動は起こしていない。値上げに関する事前の意見聴取には何の意思表示もしなかった。その後においても、体育協会に合わせて返答したのみで、強い反対はしていない。また新体育館への施設要望の意見聴取に対しても、弓道場の新設は要望してはいない。取哲学堂弓道場の利用継続と1.5倍の使用料値上げを受け入れたのである。条例による値上げである以上、条例の改正による値下げの請求も可能（値下げがなされる可能性の高さは不明）ではあるが、そうした行動もってはいない。3年後（現在ではほぼ1年後）に迫った使用料金の見直しの要求策を模索しているようである。

哲学堂弓道場は1994（平成6）年に落成した建物である。バブル期の計画に基づいて造られたものであったことから、かなり贅沢な施設ともいえる。それゆえ、今後施設の老朽化にともない多額の施設整備費が必要となるばかりか、建て替えや全面リニューアルの必要な時期が遠からず訪れることは間違いない。それも考慮すれば、現在の規則に基づけば哲学堂弓道場の利用料は、さらに厳しい率で値上げされる可能性が高いことは想像できる。来年度の見直しに向けて、よりきちんとした対応が必要となることは必定である⁽³⁴⁾。

6 中野区の高齢者健康維持政策とスポーツ施設利用策の今後のありかた

中野区の弓道場の使用料は、他の地方公共団体の施設使用料と比較してみても、かなり高額なものといえる。これは中野区の施設利用料決定基本方針の影響といえる一面もある。「職員人件費」、「減価償却費」を含む、施設の維持管理・貸出業務のすべての経費を原価とするという考え方は、総合利用可能な大規模体育施設にとってはあまり影響の少ない条件と思われるが、単独施設とされている哲学堂弓道場にとっては大きな重荷ともいえる。加えて同弓道場がバブル期の計画によって建設された施設であり、ランニング・コスト、メンテナンス経費、リニューアル経費が多大となる可能性の高い建物である。ここに受益者負担を前提にした料金設定を行えば、必然的に高額な利用料となる。それゆえ中野区弓道連盟で借り上げている日時だけは、会費のみで利用できることから、利用者が極端に多くなっているのである。

利用料金の設定は少し複雑な対応が必要である。社会保障関係費の抑制と高齢者の健康の維持・回復・促進等を考えた場合、高齢者の利用しやすい使用料設定も考慮に入れる必要がある。文京区や板橋区は、体育・スポーツ施設の一括管理型の指定管理者制度の下にあっても、可能な限り全施設の利用料金を同一化し、種目や施設などによる不公平感の縮減に取り組んでいる。複数の指定管理者制度を活用している他の区においても、料金体系はほぼフラットなものとなっている。中野区の哲学堂弓道場が例外なのである。

ここでもある程度総合的な施設の維持・管理を前提とすれば、使用料の縮減の可能性も認められる。文京区や板橋区のように、1つの法人を指定管理者にすることも選択肢の1つであり、その他の区と同様に、複数の法人管理下にある諸施設の使用料を、一体化したものとして設定すれば不公平感は縮減できる。

それが不可能である場合でも、日本体育施設グループに委託している管理施設を一体的なものととらえて、「職員人件費」、「減価償却費」などの計算をすれば、施設利用料算出において哲学堂弓道場の使用料抑制に働くはずである。中野区が日本体育施設グループに委託している体育・スポーツ施設は、中野上高田公園（運動施設：野球場・庭球場・駐車場・会議室）、哲学堂公園（運動施設：野球場・庭球場・弓道場・会議室）、妙正寺川公園（運動施設：広場）である。これらを一体化して使用料を算出した場合でも、弓道場の利用料は引き下げが可能となると思われる。

哲学堂公園の4施設を一体化しても若干の調整は可能と思われる。日本体育施設グループの収支報告によれば、収入額1億7410万573円であり、その内訳は、指定管理料9036万5000円、利用料金7167万2912円、事業収入1051万6066円、その他162万6595円となっている。利用料を施設全体で計算することを考慮すれば、ある程度の値下げは可能になるはずである⁽³⁵⁾。

2015（平成27）年度の哲学堂公園（運動施設）の総利用人数は12万8981人であり、利用件数は3万110件である。野球場は、一般の利用人数は3万3036人で利用件数は3115件であり、団体は5406人で352件であり、利用率は46.9%となっている。庭球場は一般の利用人数は6万869人で利用件数は2万4345件であり、団体は4767人で1037件であり、利用率は99.1%となっている。弓道場は個人の利用人数は6172人で利用件数は502件であり、団体は1万4697人で571件であり、利用率は99.8%となっている。

会議室の一般の利用人数は249人で利用件数は77件であり、団体は3785人で1112件であり、利用率は17.5%となっている。会議室の利用料は400円から1000円であり、使用頻度も少ないので問題ではないが、他の3施設を一体として計算すれば、弓道場の個人利用にはある程度影響が出てくるものと考えられ

る。弓道場の利用料金の高さが団体利用に集中している形態が伝わってくる⁽³⁶⁾。

中野区弓道連盟では、現行規定に基づく3年ごとの使用料改訂を所与のものとして、その値上げ幅の縮減に向けた要望を活動の中心においているように思われる。しかしそれでは現状の矛盾を解決することは不可能である。中野区の施設の使用料改訂の基本方針そのものの問題点を指摘し、「書面」の「特に弓道は、高齢者も無理なく行える武道としての評価も得ており、多くの高齢会員も活動しております。今回の措置は、こうした高齢者の健康維持のための機会すら奪う可能性もあります。施設の有効利用、区民の健康の維持、中野区の弓道の普及と発展などを考えても、区民を中心とする中野区弓道連盟会員や一般区民等の活動の機会を確保していただきたいと存じます。」言葉を強調し、少子高齢化社会の進展に向けて、対応を変えることを要求することも大切であると思われる。

それでも問題が解決しない場合には、おなじ「書面」の「現在建設予定の新しい中野区体育館内の施設として、新たに弓道場を設置し、可能な限り低廉な使用料で活動する機会を与えていただきたいと存じます」との要求を再度行うべきである。単独の弓道場であることが高額利用料設定の一因となっていることを強調する必要があると思われる。

このように、中野区の体育・スポーツ施設の管理運営と利用者への対応は、他の7つの区とあまりにも大きくかけ離れているといわざるを得ない。「職員人件費」、「減価償却費」を含む、施設の維持管理・貸出業務のすべての経費を原価とし、受益者負担とすることが、地方行財政改革の一手段であることは理解できる。しかし、それがあまりにも一部の施設の利用者あるいは種目の愛好者に、過度な負担を強いていることも事実である。少子高齢化がさらに進行していくと予測されている中野区の実情を考慮し、総合的な視点に立った、合理的な使用料の設定方針と使用料の見直しを中野区には求めたい。値下げが利用者増につながる可能性を考慮することも必要なものと考ええる。

註

- (1) 地区の区分と所属する区市は、「公益財団法人全日本弓道連盟」のホームページ (<http://kyudo.jp/contents/code/in403>) から抽出した。
- (2) 文部科学省『体育・スポーツ施設現況調査結果概要』「4. スポーツ施設」(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/shisetsu/kekka/1261398.htm) 参照
- (3) 文部科学省・前掲調査・年次統計表参照
- (4) 財務省「公債残高の累増」(http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/condition/004.htm)。なお財務省は、2016年8月10日に、「国債や借入金や政府短期証券を合わせた日本の借金残高は1053兆4676億円であり、名目国内総生産（GDP）の二倍強に匹敵する額となっている。3月末に比べて4兆1015億円増加している。この金額は、7月1日時点の総務省の人口推計、1億2699万人（推計値）で割ると、国民1人当たりでは約829万円」となっていると説明している。（日本経済新聞、2016年8月11日朝刊）
- (5) 財務省「平成28年度一般会計予算（平成28年3月29日成立）の概要」(http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/condition/index.htm) なお国債発行残高に対しては、「平成28年度末の公債残高は約838兆円と見込まれている。この額は、約58兆円とみられている一般会計税収の約15年分に相当する。これは国民1人当たりで約664万円となる。4人家族でみれば一家族約2656万円の借金を抱えている計算となる。日本の勤労世帯（平均世帯人数3.4人）の年間可処分所得は約508万円であり、5年を超える可処分所得に相当する借入金を日本は抱えていることになる」と説明している。
- (6) 財務省・前掲結果概要・年次統計表参照
- (7) 田中秀明『財政規律と予算制度改革 なぜ日本は財政再建に失敗しているか』日本評論社・2011年3月、49頁
- (8) 田中著・前掲書・51－59頁や首相官邸「日本の歴代内閣」(<http://www.kantei.go.jp/jp/rekidainakaku/>) を参照して整理した。
- (9) 総務省「税源移譲」「国から地方への税源移譲」（三位一体の改革）(http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_zeisei/czaisei/czaisei_seido/zeigenijou2_1.html)
- (10) 斜里町「指定管理者制度（地方自治法改正）の概要」(<https://www.town.shari.hokkaido.jp/03admini/20machizukuri/files/siteikanriseidogaiyou.pdf>) を参照して整理した。
- (11) 公務公共サービス労働組合協議会「指定管理者制度とは」(http://www.komurokyo.jp/campaign/img/siryo/law/04_1.pdf) を参照して整理した。
- (12) 文部科学省・前掲調査概要・「平成20年度体育・スポーツ施設調査結果の概要」参照。なお16施設は、陸上競技場、野球場・ソフトボール場、球技場、多目的運動広場、水泳プール（屋内）、水泳プール（屋外）、体育館、柔道場、剣道場、柔剣道場（武道場）、バレーボール場（屋外）、庭球場（屋外）、庭球場（屋内）、バスケットボール場（屋外）、弓道場、トレーニング場、その他の施設である。

- (13) 総務省統計局 HP「平成27年国勢調査 人口等基本集計結果」, 平成28年10月26日 (<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon1/pdf/gaiyou1.pdf>)
- (14) 日本経済新聞「75歳以上, 子ども上回る 15年国勢調査確定値」, 2016年10月27日朝刊
- (15) 日本の人口は, 1947(昭和22)年の合計特殊出生率4.32がピークではあるが, ほぼ「4」を超える出生率が1949(昭和24)年まで維持されたことから増加の一途をたどってきた。これが第一次ベビーブームであり, ここで生まれたものが「団塊の世代」である。「団塊の世代」誕生のほぼ25年後にあたる1971(昭和46)年から74(昭和49)年の間は, 1973(昭和48)年の合計特殊出生率2.14をピークとし「2」を超える出生率がみられた。これが第2次ベビーブームであり, ここで生まれたものが「団塊ジュニア」である。しかし1975(昭和50)年以降, 日本の合計特殊出生率は低下傾向をほぼ継続しており, 2005(平成17)年には過去最低の1.26まで低下している。その後「2015(平成27)年の合計特殊出生率は1.46で, 前年を0.04ポイント上回って2年ぶりに上昇した」との厚生労働省の発表にみられるように, 合計特殊出生率は若干回復基調にはあるものの, 出生数の増加はみられず, 少子高齢化が社会の大きな問題の1つとなっている。(増田寛也著『地方消滅』中公新書2282, 2014年8月, 序章および第1章参照)
- (16) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」(<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/sh2401top.html>)
- (17) 東京新聞「2025年問題とは」(<http://www.tokyo-np.co.jp/article/seikatuzukan/2014/CK2014020502000184.html>)を参照して整理した。
- (18) 2025年問題に関する出版物が増えている。2015年6月には藤田孝則著『下流老人』朝日新書が出版され, 2016年9月には, 小黒一正著『2025年 高齢者が難民になる日』日本経済新聞社, 山岡純一郎著『長生きしても報われない社会』ちくま新書1208, 松原惇子著『老後独りぼっち』SBクリエイティブが相次いで出版されている。こうした書籍が投げかける未来社会を明るくするための施策が現在求められているといえるのである。
- (19) 山縣恵美著「高齢者の閉じこもり対策の現状と課題—対象者選定と支援方法に着目して—」同志社大学政策科学研究第19巻第1号, 2015年9月, 66頁
- (20) 竹内孝仁著「寝たきり老人の成員—「閉じこもり症候群」について」松崎俊久, 柴田博『老人保健の基本と展開』株式会社医学書院, 1984年, 148-152頁
- (21) 渡辺美鈴他著「生活機能の自立した高齢者における閉じこもり発生の予測因子」『日本老年医学学会雑誌』4(2), 238-246頁
- (22) 長岡雅美著「社会を育てるスポーツの力—高齢者におけるスポーツの心理的・社会的効果に着目して—」『人間福祉学研究』第5巻第1号, 2012年11月, 43頁
- (23) 文部科学省「体力・スポーツに関する世論調査」(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2013/08/23/1338732_1.pdf)。また時の話題「高齢者のスポーツ振興」(<http://www.yamadatadaaki.net/old/reports/>)

shoko/toki25-25.pdf) にも同様の内容が強調されている。それは日本経済新聞「高齢者の運動能力伸びる 75歳以上は最高 健康志向一段と スポーツ庁公表」2016年10月10日朝刊

- (24) 文部科学省「平成26年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1362690.htm)。なお成人の身体活動や運動の必要性と目標の設定に関しては、厚生労働省が「身体活動・運動」において、その内容を詳細している。(http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/b2.html)
- (25) 文部科学省・前掲報告書・15頁
- (26) 伊勢崎市 HP (<http://www.city.isesaki.lg.jp>) および、上毛新聞ニュース「65歳以上のスポーツ施設利用無料化 医療費抑制へ 伊勢崎市」2011年12月31日 (<http://www.jomo-news.co.jp/>)
- (27) 広島市財政局財政課予算局「高齢者に対するスポーツ・文化施設などの利用料金を見直します」(<http://www.city.hiroshima.lg.jp/>)
- (28) 人口等は伊藤茂「超高齢社会を迎えた東京23区の将来」〔第60回 (n300) NSRI 都市・環境フォーラム〕(<http://www.nikken-ri.com/forum/HP/300siryo.pdf>) の数字を用いた。高齢化率は公益財団法人特別区協議会「特別区基礎講座 高齢化の現状と将来」(<https://www.tokyo-23city.or.jp/research/hakase/seido4-05a.html>) を用いた。
- (29) 公益財団法人特別区協議会「東京の将来人口の推計について」(第7回東京の自治のありかた研究会資料) (https://www.tokyo-23city.or.jp/research/kondankai/document/130225_bessi03-1.pdf)
- (30) 伊藤・前掲資料・NSRI 参照
- (31) 中野区議会・文教委員会資料「施設使用料の見直しについて」(<http://kugikai-nakano.jp/shiryou/14814105617.pdf>)
- (32) 表の作成にあたっては、各区の HP の資料を比較する形で整理したので、施設の状況や委託の形態等に関しては整合性はとれていないことをお断りしておく。
- (33) 【厚生委員会】中野区議会 HP (<http://kugikai-nakano.jp/shiryou/149311659.pdf>)
- (34) 中野区弓道連盟の「書面」は、私自身が会員であり理事として原案作成にかかわってきたことから、ここでは利用した。
- (35) 日本体育施設グループ「平成27年度 運動施設等指定管理者事業報告概要」(http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/dept/403200/d002873_d/fil/27jigyohouhouku.pdf)
- (36) 日本体育施設グループ・前掲概要

終わりに

私が日本大学で渡部先生に最初にお会いしたのは、日本大学文理学部にある

体操部が使用している体育館であった。体操部の4年生であった渡部先生を、山形から上京し右も左もわからない私が遠くからみていたことを今でも思い出す。ピアノもこなす渡部先輩（当時の呼び方を使わせていただきます）は、女子体操を床運動を中心に指導されていた。運動神経とともに音楽もこなす柔軟性を持つ渡部先輩は、私にとって生涯追いつけない大先輩として映っていた。

しかしそうした出会いからの交流は長く続かなかった。私が入学した年は日大紛争が始まった年であり、クラブ活動を継続することが不可能となってしまった。レギュラー陣はどこかで練習をし、先輩方はどこかで卒業のための勉強と試験に向き合われた後卒業されていった。4年生の方々には挨拶する機会もなかった。

我々は2年生の夏まで講義もなく自分で何かをやっているしかなかったのであり、体操部活動は1年生の中ばで断念せざるを得なかった。大学が再開され、3年生で三崎町に戻ってきた私の前に渡部先輩は先生として現れ、そこからまた交流が復活することになったのである。

その後私も教員生活に入ると、今度は教員の先輩と後輩という関係になった。渡部先生にはゴルフやスキーなどの手ほどきも受けた。体操だけではなく様々なスポーツの現状や将来についての話を聞かせていただいたり、若者と健康の大切さと、大学としてそれをどのようにサポートしていくべきかといったことにもご示唆をいただいた。今の私は渡部先輩に鍛えていただくことで育ってきたのである。

定年を迎えられるわけですが、スポーツマンである渡部先生には新しい自由な時間が待っていることと思います。また「おい、山田」と呼んでいただき、楽しくスポーツをやったり、飲みながら話し合う機会を与えて下されば幸いです。

先生のますますのご発展とご多幸を祈念し、今後ともご指導をいただけることを期待し、先生へのお礼の言葉にかえさせていただきます。ありがとうございました。

大学生の感情特性と心理的自立が学習意欲に及ぼす影響

—— 習慣的スポーツ活動の関与を想定して ——

水落文夫 田中輝海 金野 潤
竹内雅明 菅野慎太郎 佐藤秀明

はじめに

大学生の基礎学力および学習意欲の不足は教育の重要課題である。「平成25年度私立大学教員の授業改善白書」（公益社団法人私立大学情報教育協会, 2014）は、全国330校の私立大学・短大の専任教員17,291名を対象とした調査から、大学生の学習に関する問題として「主体性の欠如」「基礎学力の不足」「学習意欲の不足」を挙げ、「授業には参加するが自分から学び考える積極性が見られない（大学：54.8%，短大：53.3%）」など、大学教育の場で、自ら進んで学ぶ姿勢の低下と学びの動機づけが十分に機能していないことを指摘している。そして、教員には、課題探究型、学生参加型、双方向型、体験型の授業の積極化を推進して、大学生の主体性を引き出す工夫を求めているが、これらの提言は今に始まったことではない。9年前の同白書（公益社団法人私立大学情報教育協会, 2005）でも、同様の指摘と提言がなされ、自ら学ぶ意欲の不足に対しては、主に教学マネジメントの課題として、状態的意欲を高めるための方略が、長年にわたり探究されている。

その成果として、教育サポートスタッフの導入を始めとする環境改善によって学習意欲を刺激するような学習機会が与えられるようになり、大学生が主体的に学べる環境は整備されつつある。この学習方法や学習への適応を改善する試みは様々な方面に及ぶ。にもかかわらず、大学生の中には授業開始から学習

への積極的態度がみられない者も少なくなく、目標操作や方法の工夫だけでは限界があるように思われる。いわゆる、授業に「出ない学生」や「いるだけ学生」などの、やる気のない大学生が認められ、個人における学習に対する比較的一貫して持続する、特性的意欲の低下が危惧される。

特性的な学習意欲と密接に関わるのは、「内発的—外発的動機」の概念であろう。櫻井（2009）は、Deci（1980）の「自己決定理論」を基礎とし、自律的な学習行動に共通する特性的な動機づけに注目して、「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」を提唱した。そして、学習動機の一つと考えられる「統制的な学ぶ意欲」と対置される「自ら学ぶ意欲」について、内発的—外発的動機との関係に基づき2つの観点から説明している。「目的—手段」の観点によると、内発的動機の特徴は「おもしろいから学ぶ」ことであり、学びは目的적であると同時に自律的で、どちらかといえば状況的意欲に関連している。「自律—他律」という観点によると、内発的動機の特徴は「自ら進んで学ぶ」ことであり、これは、長期的な学び（日常的な学び）に共通する姿勢を意味し、より特性的意欲に関連するものと位置づけている。大学生の学習意欲の低下問題には、日常から様々なことに興味や関心をもつような、持続的な態度や傾向として捉えた、特性的意欲の側面からアプローチすることも必要であろう。

我々の研究は、習慣的なスポーツ活動の心理的・社会的恩恵に関心をもって進められている。中でも、一過性および習慣性の身体運動やスポーツ活動によって高められるポジティブ感情（レビューとして、ビドル・ムツリ，2005）に注目し、スポーツ行動に限らず心理的・社会的な適応行動への直接的な効果と、媒介要因を介した間接的な効果について検討してきた。そして、既報（水落ら，2014）において、スポーツ系サークル活動で習慣化された運動・スポーツ活動によるポジティブ感情の喚起経験が、日常のポジティブ感情特性を増強すること、このポジティブ感情増強が、自ら学ぶ意欲を高め維持することに直接的に貢献するとともに、意欲および活力の低下という、日常の疲労自覚症状を緩和することで、間接的に自ら学ぶ意欲を高めることを示唆した。ただし、疲労自覚症状緩和の間接効果は限定的であり、広範なポジティブ感情の機能を勘案す

れば、適応的な学習行動を支える媒介要因は他にもあると考えられる。

大学生のほとんどは青年期の後期にあたる。一般的に「依存する子どもの時期から自立した大人の時期への移行期」とされる青年期は、心理的・社会的成熟の指標となる「自立」の獲得が重要な発達課題とされる。とりわけ、後期は依存と独立のバランスが取れるようになる自立の時期（高富・桂田，2011）であり，社会と適応的に関わるができる大人を目指した自立獲得プロセスにおける仕上げの時期といえる。これまで，発達の重要な方向性と認識されながら，自立は「自律」や「独立」との相違，「依存」との関係，性・時期（長期化する青年期）・文化・生活環境などの影響要因も複雑で，概念化は難しいと言われていた。最近になって，自立が複数の下位概念から構成され，それらに認知面，情緒面，行動面の要素を含むことが共通して指摘されるようになった（山田・宮下，2007）。渡邊（1990）は，「自立」の概念化には，他者の介助・介入・支配・監督からの離脱を意味する「消極的自立」と，自己判断・自己決定・自己統制に基づき，時間的展望をもって主体的に自己自身の力でやることである「積極的自立」の，2つの下位概念を導入することを推奨している。そして，従来の「依存」の対極概念である「独立」は消極的自立，「自律」は積極的自立の一つを指すとしている。この自立の生涯発達過程において，青年期には認知的・情緒的・価値的など様々な側面で消極的自立を獲得完了し，青年期から成人期の間で消極的自立から積極的自立へと向かうとされる。櫻井（2009）の「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」の基礎を成す Deci（1980）の自己決定理論では，自信，自立（自己決定して行動できる），関係の3つの欲求が，青年期の心理的・社会的発達を導くとしている。すなわち，櫻井（2009）が提唱する，「自律—他律」の観点による自ら学ぶ特性的意欲の形成は，主に「自律」に係する時間的展望をもって主体的に行う，「積極的自立」に影響されると考えられる。

このような自立の概念化に関わる影響要因についての研究が進む一方で，青年期の発達課題となる心理的・社会的自立を要因とする，特性的な学習意欲などの心理的適応に関する研究成果は十分とはいえない。その中で，Hoffman

(1984) は、自立を心理的分離という内面の変化として捉え、心理的自立を構成する情緒的自立と学業における自信の間に関係があることを報告している。また、この情緒的自立と青年期の健全な主体性発達に正の相関があることも報告されている (Frank et al., 1990)。この心理的自立の定義についても、福島 (1992) が、自己の確立だけでなく、他者や社会との調和をはかる精神的自立と社会的自立で成り立つことを示して以来、多くの研究者が概念化を試みている。高坂・戸田 (2006b) は、心理的自立を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を有した状態」と定義し、設定した行動・価値・情緒・認知の4つの概念的枠組みに基づき、「将来志向」「適切な対人関係」「価値判断・実行」「責任」「社会的視野」「自己統制」の下位尺度をもつ心理尺度を開発している。そして、青年期の現在把握・将来志向と適切な対人関係が、向社会的行動に正の影響をもつことを明らかにした。このうち、積極的自立に含まれる将来志向に関連して、葛西ら (2010) は、レジリエンスの「肯定的な未来志向」に、スポーツ成長感と時間的展望体験が大きく影響しており、スポーツ活動を通じて自分自身の身体を優れていると知覚できることが、未来を肯定的に捉えることと関連していると報告している。さらに、ポジティブ感情が肯定的再解釈を促進すると指摘されており (大塚ら, 2008)、この機能が、時間的展望の獲得期とされる青年の、自己の人生に対する時間的な視野が広がる (日渴・齊藤, 2007) ことに貢献していると考えられる。すなわち、習慣的な運動・スポーツ活動に関連するポジティブ感情の増強は、やはり運動・スポーツ活動と関連する心理的自立の下位概念である将来志向を高めることで、間接的に学習行動に働きかけるプロセスが考えられる。

Fredrickson (2001) は、提唱したポジティブ感情の拡張—形成理論の中で、ポジティブ感情の機能を、個人の注意、認知、行動のレパートリーを広げ、その後の身体的、知的、社会的な個人資源の継続的な形成を促すこととしている。このポジティブ感情特性が高ければ、豊富な個人資源を基盤に、日々の高い学習意欲の維持も実現できそうである。したがって、日常における習慣的な運動・スポーツ活動は、大学生のポジティブ感情特性を高め、その感情の機能に

より自ら学ぶ意欲を高める直接効果と、心理的な積極的自立である将来志向を促すことを介して、自ら学ぶ意欲を高める効果も期待される。スポーツ系サークル活動などの学内スポーツ活動に参加するかどうか、大学生の習慣的運動実現の機会になっており（荒井ら，2003），その実現の可否が日常的に感じる感情や志向を介し，最終的には自ら学ぶ意欲に影響している可能性がある。

そこで，本研究は青年期の習慣的スポーツ活動がポジティブ感情特性を高めることを想定し，このポジティブ感情を独立変数，自ら学ぶ意欲を従属変数，心理的自立の将来志向を媒介変数とする仮説モデル（図1）を設定し，この根拠となる基礎的資料を収集するため，大学生の主な運動機会であるスポーツ系サークル活動参加の有無に関わる感情特性，自ら学ぶ意欲，心理的自立の関係性について検討することを目的とした。

なお，大学生活を通して起こる様々な出来事に対して，青年期の感情表出の起伏は大きいと思われるが，本報では，その背後で緩やかに流れている日常的感情（速水，2000）に注目している。日頃感じる持続的で偏在的な生活感情には肯定感情と否定感情がある（内田，1990）とされ，日常的感情を構成する両感情を，長期にわたる安定した性質で，特定の同じ感情を経験しやすいかどうかの個人的傾向である感情特性（古賀，2003）として評価する。



図1 本研究における仮説モデル

方 法

1. 調査対象

N 大学 B 学部 に在籍する 1 年生男女 581 名を調査対象とした。このうち感冒などにより、ここ 2 週間の体調が不良と申告した者、および回答に不備があった者、保健体育審議会運動部に所属する者を除く 357 名（男性 188 名、女性 169 名、年齢 18.4 ± 0.8 歳）を分析対象とした。分析対象者の所属学科は、人文系 6 学科、社会系 3 学科、理学系 7 学科の B 学部 16 学科であった。

2. 調査方法

調査は 2011 年の、新入生のサークル活動の習慣が安定する 6 月と、長い夏季休暇の影響が少ない 11 月に行った。調査方法は質問紙による自記式調査であり、プロフィール項目と 3 つの心理尺度で構成されたアンケート冊子「大学生の学ぶ意欲の調査」を用いた。調査は授業時間を利用した集合法により行った。授業時間は、週末や当日の身体的・精神的作業負荷による感情変化の影響をなるべく避けるために平日木曜日の午前中 1 時限目であった。質問紙には、研究の目的と方法および調査結果の匿名性に関して記載するとともに、同様の内容を口頭で説明して調査協力を依頼した。回答は調査協力に同意した者のみが行い、回答終了後すぐに調査冊子は回収された。回答に要した時間は 20 分程度であった。そして質問紙に回答されたすべての情報は符号化して、個人を特定できないように配慮した。

3. 調査項目

(1) プロフィール

調査項目は、人口統計学的要因 4 項目（氏名、年齢、性別、学年）、定期的な運動・スポーツ活動の要因に関する 4 項目（現在の運動部・サークル活動継続の有無と種目名称等、競技レベル：出場大会のレベルと試合出場の有無、スポーツ活動経験：小学校から大学の各学期における運動部・クラブ活動参加の有無と年数、運動部・

サークルの週間活動頻度）であった。

(2) 日本語版 PANAS (Japanese version of positive and negative affect schedule)

快と不快が独立した次元を構成するという立場（たとえば, Watson and Tellegen, 1985）に基づき作成された PANAS 感情尺度 (Watson et al., 1988) を, 佐藤・安田 (2001) が邦訳して再構成した日本語版 PANAS (以降, PANAS) を, ポジティブ感情 (PA: Positive affect) とネガティブ感情 (NA: Negative affect) の評価に用いた。PANAS は, 「活気のある」, 「誇らしい」など 8 項目で評価される PA 因子と, 「びくびくした」, 「おびえた」など 8 項目で評価される NA 因子の 2 因子構造をなしている。両因子の独立モデルに対するデータ適合度, 尺度の安定性と因子の内的一貫性, さらに気分導入下での評定値の分析から, 心理尺度としての信頼性と妥当性が確認されている (佐藤・安田, 2001)。

回答は, 感情特性を評価するために, 「普段のあなたの気分を評定」することを教示して, すべての質問項目に対して, 「1: まったく感じていない」から「5: 非常に感じている」までの 5 件法で評定させた。両因子得点は 8—40 点の範囲に分布し, その感情を強く感じているほど高得点になるように配点した。なお, 佐藤・安田 (2001) が作成した日本語版 PANAS では「1: まったくなかった」から「6: いつもそうだった」の 6 件法であったが, 予備調査の結果, 「ときどきは」と「しばしば」の区別, および「ほとんどいつも」と「いつも」の区別が困難であるとの指摘が多かったことから 5 件法を採用した。その後, 採用した評定法で得られたデータを検証的に因子分析 (最尤法, プロマックス回転) することで, 同様の 2 因子構造を確認した。

(3) 心理的自立尺度第 2 版 (PJS-2: psychological Jiritsu scale version 2)

高坂・戸田 (2006b) は, 心理的自立概念を把握するために, 行動・価値・情緒・認知の 4 つの概念的枠組を設定し, この枠組に基づいて PJS-2 を作成した。PJS-2 は, 主に大学生を調査対象として開発されており, 本研究で採用した改訂版は 6 つの因子 (「将来志向」因子: 「将来の目標」「明確な計画」などに関する 6 項目, 「適切な対人関係」因子: 「他者への思いやり」「他者との関係維持」などに関する 5 項目, 「価値判断・実行」因子: 「自己の決断」「明確な意見表明」などに関

する5項目、「責任」因子：「責任ある行動」「責任ある立場」などに関する5項目、「社会的視野」因子：「世間の情勢」「社会の出来事」などに関する4項目、「自己統制」因子：「感情のコントロール」「落ちつき」などに関する5項目）の30項目の質問で構成されている。このうち、「将来志向」や「価値判断・実行」は、本研究で注目した積極的自立（渡邊，1990）に関連する下位概念と想定される。

PJS-2 各因子の内的一貫性を Cronbach の α 係数により確認したところ、.753— .941といずれも高い値を得ている（高坂・戸田，2006b）。さらに、PJS-2 の初版尺度である PJS において、依存性尺度との関連による併存的妥当性や社会的迷惑行動・向社会的行動との関係などから構成概念妥当性が確認されている（高坂・戸田，2006a）。

回答は、「あなたの自立的態度」を評価することを教示し、すべての質問に対して「1：まったくあてはまらない」から「7：非常にあてはまる」までの7件法で評定させた。因子得点はそれぞれの質問項目数により、4—28点，5—35点，あるいは6—42点の範囲に分布し，その自立的態度を強く自覚しているほど高得点になるように配点した。

(4) 大学生用の自ら学ぶ意欲測定尺度（VoLeMoS：voluntary learning motivation scale for college students）

櫻井（2009）の「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」では，自ら学ぶ意欲がどのような動機づけプロセスを経て実現されるのかを，欲求・動機（知的好奇心，有能さへの欲求，向社会的欲求），学習行動（情報収集，自発学習，挑戦行動，深い思考，独立達成），認知・感情（おもしろさと楽しさ，有能感，充実感）の3つのレベルで説明している。VoLeMoS は，このプロセスモデルを特性的なモデルとして捉え，大学生を対象に調査することを目的に，知的達成（学習）領域の要因に限定して，自ら学ぶ意欲の発現を評価するために作成された。すなわち，自ら学ぶ意欲を，欲求・動機レベル（「知的好奇心」因子：「多様な興味を満足させたい」などの6項目，「有能さへの欲求」因子：「もっと賢くなりたい」などの4項目），学習行動レベル（「積極探究」因子：「自分で目標を決め，その達成のために頑張っている」などの6項目，「深い思考」因子：「学んだことを身の回りの出来事と関連づけて

考える」などの6項目、「独立達成」因子：「難しい問題でも自分の力で解こうと努力している」などの4項目）、認知・感情レベル（「おもしろさと楽しさ」因子：「基本的に学ぶことは楽しい」などの6項目、「有能感」因子：「専門が同じ学生の中では優秀なほうである」などの6項目）の3レベル7因子38項目の質問から評価できる。なお、プロセスモデルの学習行動レベルには、情報収集、自発学習、挑戦行動の要因が想定されているが、作成された尺度ではこれら3要因が1つの下位尺度としてまとまって「積極探究」と命名されている。VoLeMoSの内的一貫性と安定性は、Cronbachの α 係数と再検査信頼性係数で確認され、モデルのデータに対する適合度と複数の外的基準との関連性から構成概念妥当性が支持されている（櫻井，2009）。

回答は、特性的な学習意欲を評価するために、「最近のあなたの状態」を想定することを教示し、すべての質問に対して「1：まったくあてはまらない」から「5：よくあてはまる」までの5件法で評定させた。因子得点は質問項目数により、4—20点あるいは6—30点の範囲に分布し、その意欲を強く自覚しているほど高得点になるように配点した。

4. データ処理

我々の既報（水落ら，2013）において、身体的健康（睡眠時間、熟睡度、朝の体調、朝の食欲）とPANASの2因子（PA、NA）のそれぞれで、対応のない t 検定および χ^2 検定により男女差が検証され、PANASのNA因子（男>女： $p<.05$ ）を除き有意な差は認められなかった。本報において新たに分析対象としたPJS-2の6因子とVoLeMoSの7因子についても、それぞれの男女差を対応のない t 検定により検証した。その結果、VoLeMoSの「積極探究」因子（男>女： $p<.05$ ）を除き有意な差は認められなかった。仮説モデルを構成するPA因子および「将来志向」因子を初め、多くの因子で明らかな男女差が認められなかったため、本報では、以降の分析を男女まとめて行った。

まず、現時点でのサークル活動継続を基準に分析対象者を3群に分類した。非活動群とした171名（男性83名、女性88名）は、いずれの運動部・サークルに

も所属していない大学生であった。運動系群とした122名（男性73名，女性49名）は，学内外のスポーツ系サークルに所属して1-6回／週（平均 2.37 ± 1.20 回），1-6時間／日（平均 2.38 ± 0.83 時間）の頻度でスポーツ活動を定期的に行っている大学生であった。それぞれの対象者が活動するスポーツ種目は25種目に及んでいた。なお，分析対象から保健体育審議会運動部所属の大学生選手18名を除外した。これらの者は，活動頻度や時間からみたスポーツ活動量が活動群の中では極めて多く，競技性の高い特異な活動形態であった。標本数は少ないが，その特異性が結果を偏重させることを危惧した。したがって，本報の運動系群はスポーツ系サークルで活動する者の群であった。文化系群とした64名（男性32名，女性32名）は，B学部の学術系，文化系，音楽系の3系に分類されるサークルのいずれかに所属して1-6回／週（平均 2.32 ± 1.25 回），1-5時間／日（平均 2.21 ± 1.14 時間）の頻度で文化活動を定期的に行っている大学生であった。運動系群と文化系群の両者に当てはまる大学生は運動系群に分類した。

3つの心理尺度の各質問に対する評定は，本来順序尺度による変数であるが，本報では便宜的に間隔尺度をなす変数として扱った。この評定値から求めたサークル活動別3群のPANASの2因子とVoLeMoSの7因子の各因子得点平均値について，対応のない一要因分散分析（事後検定：Bonferroniの多重比較検定）を行ったところ，いずれの因子も非活動群と文化群の間に有意な差は認められなかった（水落ら，2014）。新たに分析対象としたPJS-2の6因子についても，同様に分析したところ，いずれの因子も両群に有意な差は認められなかった。

そこで，本報では，PANAS，PJS-2，VoLeMoSの各因子について，スポーツ系サークルに所属して習慣的にスポーツ活動を行っている「活動群」122名（運動系群）と，それらに所属していない「非活動群」235名（非活動群と文化系群）の2群間で，対応のない t 検定により平均値の差を検定した。次に，PANAS，PJS-2，VoLeMoSの各因子の関係性について，因子間の相関分析（Pearsonの積率相関係数）を行った。そして，当初の仮説および分散分析・相関分析の結果をもとに作成した「ポジティブ感情」，「将来志向」，「自ら学ぶ意

欲」の関係性を示す仮説モデルの適合度を共分散構造分析により求めた。モデルの評価には、Goodness of Fit Index (GFI), Adjusted Goodness of Fit Index (AGFI), Comparative Fir Index (CFI), Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) を採用した。なお、モデルの採択基準として小塩 (2008) を参考に、GFI, AGFI, CFI は0.90以上, RMSEA は0.10以下とした。すべての統計分析には、統計解析ソフト SPSS Statistics 23および Amos 21を用いた。有意水準は5%未満に設定した。

結 果

1. 活動群と非活動群の感情特性, 心理的自立, 自ら学ぶ意欲

(1) PANAS による感情特性の評価

図1に、スポーツ系サークル活動の有無による2群のPANAS両因子の得点平均値を示した。平均値の差を対応のない t 検定により検定したところ、PA因子に有意な差 ($t(355)=5.624, p<.001$) が認められ、活動群が高値を示した。NA因子に有意な差は認められなかった。

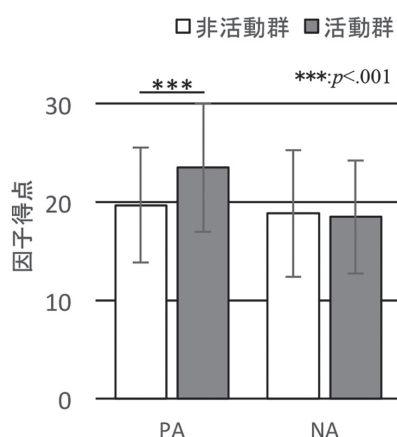


図2 スポーツ系サークル活動の有無による2群の感情特性

(2) PJS-2 による心理的自立の評価

図2に、2群のPJS-2各因子の得点平均値を示した。平均値の差を対応のない t 検定により検定したところ、「将来志向」因子 ($t(355)=2.814, p<.01$) と「適切な対人関係」因子 ($t(355)=2.198, p<.05$) に有意な差が認められ、いずれも

活動群が高値を示した。その他の因子に有意な差は認められなかった。

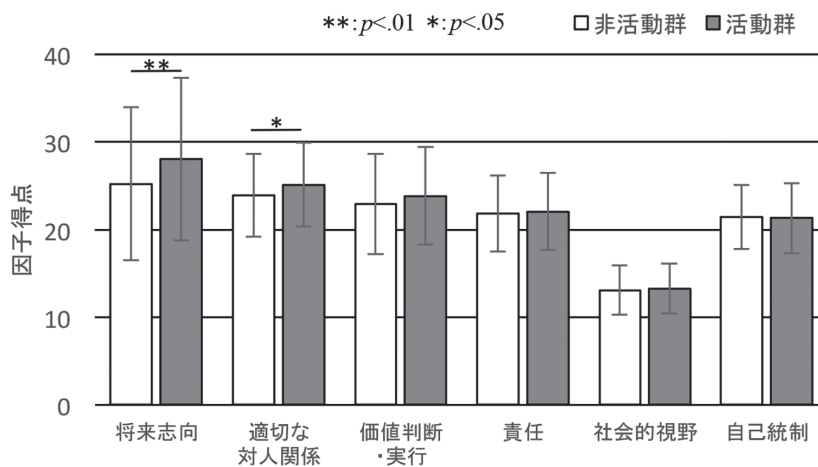


図3 スポーツ系サークル活動の有無による2群の心理的自立

(3) VoLeMoSによる自ら学ぶ意欲の評価

我々の既報(水落ら, 2014)において, 2群のVoLeMoS各因子の得点平均値が報告された。それによると, 欲求・動機レベルの「有能さへの欲求」因子($t(355)=2.202, p<.05$)と学習行動レベルの「積極探究」因子($t(355)=2.197, p<.05$)に有意な差が認められ, いずれも活動群が高値であった。その他の因子に有意な差は認められなかった。

2. 感情特性, 心理的自立, 自ら学ぶ意欲の関係

(1) 各変数間の相関関係

表1に, すべての分析対象者におけるPANAS両因子およびPJS-2各因子とVoLeMoS各因子の因子間相関関係(Pearsonの相関係数)を示した。

PANASのPA因子とNA因子に有意な相関関係は認められなかった。

PANASとPJS-2において, PA因子は「将来志向」「適切な対人関係」「価値判断・実行」「責任」の4因子と有意な正の相関関係($r=.28-.38$, いずれも $p<.01$), NA因子は「適切な対人関係」「価値判断・実行」「責任」「自己統制」の4因子と有意な負の相関関係($r=-.14-.22$, いずれも $p<.01$)が認められ, それぞれの変数間には弱い関係があると推定された。

PANASとVoLeMoSにおいて, PA因子は「独立達成」因子を除く6因子

と有意な正の相関関係 ($r=.27-.45$, いずれも $p<.01$) が認められ, それぞれの変数間には弱い関係あるいは中程度の関係 (「積極探究」因子) があると推定された。NA 因子は「有能さへの欲求」($r=.11$), 「面白さと楽しさ」($r=-.12$), 「有能感」($r=-.12$) の 3 因子と有意な相関関係 (いずれも $p<.05$) が認められたものの, いずれも弱い関係にどどまっていた。

PJS-2 と VoLeMoS の欲求・動機レベルにおいて, PJS-2 の「社会的視野」因子を除く 5 因子と欲求・動機レベルの 2 因子で, いずれも正の有意な相関関係 ($r=.16-.37$, いずれも $p<.01$) が認められ, それぞれの変数間には弱い関係があると推定された。PJS-2 と VoLeMoS の学習行動レベルにおいて, PJS-2 の「社会的視野」因子と VoLeMoS の「独立達成」因子を除く因子間で, いずれも正の有意な相関関係 ($r=.13-.62$, $p<.05$ および $p<.01$) が認められ, それぞれの変数間には弱い関係あるいは中程度の間関係があると推定された。PJS-2 と VoLeMoS の認知・感情レベルにおいて, PJS-2 の「社会的視野」因子と VoLeMoS の「面白さと楽しさ」因子を除く因子間で, いずれも正の有意な相関関係 ($r=.17-.47$, いずれも $p<.01$) が認められ, それぞれの変数間には弱い関係あるいは中程度の間関係があると推定された。

表 1 各変数間の相関関係 (Pearson の積率相関係数)

* $p<.05$ ** $p<.01$

		感情特性 PANAS		自ら学ぶ意欲 VoLeMoS						
				欲求・動機レベル		学習行動レベル			認知・感情レベル	
		PA	NA	知的 好奇心	有能さへの欲求	積極探究	深い思考	独立達成	面白さと 楽しさ	有能感
感情特性 PANAS	PA	.04		.31**	.34**	.45**	.32**	.05	.27**	.33**
	NA			-.02	.11*	-.01	.01	.01	-.12*	-.12**
心理的自立 PJS-2	将来志向	.33**	-.06	.27**	.28**	.62**	.32**	.21**	.26**	.41**
	適切な対人関係	.37**	-.14**	.29**	.37**	.33**	.44**	.18**	.28**	.37**
	価値判断・実行	.38**	-.20**	.36**	.20**	.45**	.44**	.37**	.34**	.47**
	責任	.28**	-.16**	.28**	.19**	.36**	.41**	.35**	.31**	.45**
	社会的視野	.03	-.03	.02	-.10	.19**	.13	.08	-.01	.30**
	自己統制	.09	-.22**	.17**	.16**	.15**	.23**	.22**	.17**	.27**

(2) 仮説モデルの評価

本研究の仮説に基づき, 感情特性の「ポジティブ感情」, 心理的自立の「将来志向」, および「自ら学ぶ意欲」で構成した仮説モデルの妥当性と各変数間

の関係性を明らかにするため、共分散構造分析によるモデル検証を行った。その結果、検証モデルの適合度指標は $GFI=.958$, $AGFI=.890$, $CFI=.962$, $RMSEA=.091$ であった。このうち、 $AGFI$ の値は採択基準を満たしていなかったが、許容できる値と判断し、このモデルを採択した。採択したモデルのパスを図4に示した。図中の四角形は実際に観測されたデータである観測変数を表し、楕円形は実際には観測できない理論的に仮定される潜在変数を表している。

次に、「ポジティブ感情」から「自ら学ぶ意欲」への直接効果、「将来志向」を介した間接効果、および総合効果について検討した。直接効果である「ポジティブ感情」から「自ら学ぶ意欲」は有意なパス係数（標準化推定値 $\beta=.39$, $p<.001$ ）であった。間接効果について、「ポジティブ感情」が「将来志向」を有意に促進させ（ $\beta=.24$, $p<.007$ ），その「将来志向」が「自ら学ぶ意欲」に有意に影響する（ $\beta=.54$, $p<.001$ ）ことが確認された。このことから、間接効果は $\beta=.13$ ($.24 \times .54$) となり、総合効果は $\beta=.52$ ($.39+.13$) となった。なお、媒介変数である「将来志向」の説明率は6%と低かったが、従属変数である「自ら学ぶ意欲」の説明率は54%となった。

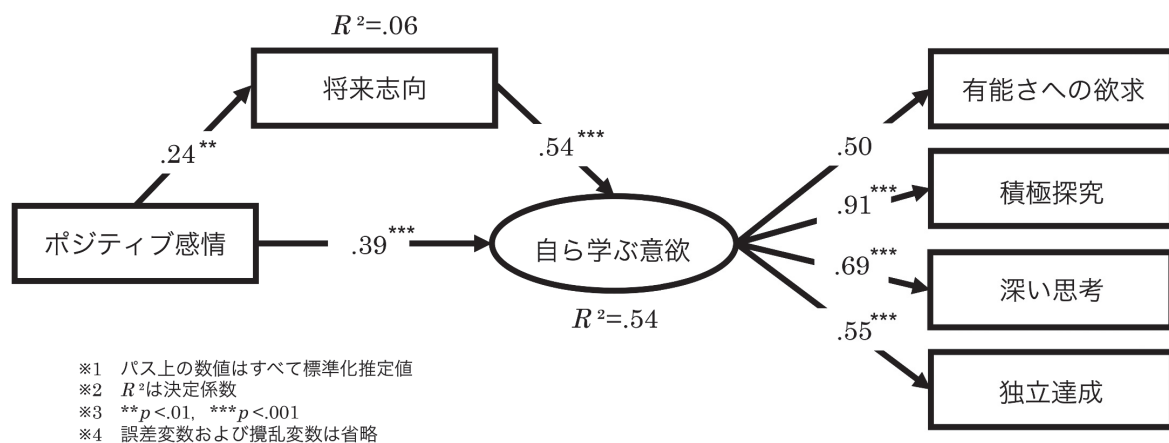


図4 ポジティブ感情、将来志向、自ら学ぶ意欲の関係性

考 察

1. 感情特性, 心理的自立, 自ら学ぶ意欲に対するスポーツ活動の関与

活動群は非活動群に比べ、PANASのPA因子、PJS-2の「将来志向」と「適切な対人関係」の因子で、明らかに高い得点を示した。また、既報（水落ら、2014）では、VoLeMoSの「有能さへの欲求」と「積極探究」の因子で、活動群の明らかに高い得点を確認されている。すなわち、活動形態や頻度に違いはあるものの、定期的に運動・スポーツをサークル活動として行っている大学生の多くは、それがみられない大学生に比べて日常的に感じるポジティブ感情が明らかに高い。そして、青年期の主要な発達課題であり、学業を含む心理的・社会的な適応行動に関連する、将来志向や適切な対人関係などの心理的自立が進んでおり、自ら学ぼうとする意欲は、欲求・動機レベルにおける有能さへの欲求と、学習行動レベルにおける積極的な探究という側面で高いと考えられる。

活動群の大学生が参加するスポーツ系サークルでの活動は、定期的・継続的に運動刺激が負荷されるという点で、非活動群とは生活習慣が異なる。その活動の頻度は週に1回または2回の者が56%を占める。すなわち、半数以上の者は週1、2回の生活習慣であり、その頻度が際立って高いとはいえない。ただし、目的をもったスポーツ集団の中で多様な対人関係が成立し、スポーツ活動を軸に、それぞれが様々な役割を担いながら、活発な社会的活動を展開していることが考えられる。ときには、活動時間の枠を超えて、スポーツ活動による運動刺激だけでなく、様々な種類の刺激をその環境から継続的に受けている場合もあろう。学内の自主的活動という点では、文化系サークルも同様であり、高頻度で濃密な社会的活動を経験している大学生も多い。しかし、サークル活動に参加していない学生と文化系サークルに参加している学生の、感情特性、心理的自立、自ら学ぶ意欲のいずれにおいても、明確な違いがみられないことから、活動群の日常的なポジティブ感情、肯定的な将来志向と安定した対人関係、さらに日常的な学ぶ意欲の高さに関連する要因は、習慣化されたスポーツ

活動を媒介とする、継続的な運動刺激や社会的活動が中心と考えられる。渡邊(1990)は、他者の介助・介入・支配・監督からの離脱を主課題とする消極的自立と、自己判断・自己決定・自己統制に基づく積極的自立(自律)を、自立の下位概念として位置づけることを推奨した。そして、青年期の重要な発達課題である積極的な行動的自立を、長期的展望のもとに自己決定に基づき、準備・実行・事後処理まで主体的に自らの力でできること、積極的な情緒的自立を、他者と心の交流をもちつつ、情緒的な自己統制と心の安定を保てることとしている。スポーツ系サークルでスポーツ活動を行っている大学生の、将来志向と安定した対人関係が高いことは、このような積極的自立の獲得が進んでいることを示しており、この時期の習慣的なスポーツ活動が、ポジティブ感情増強に限らず、心理的自立と学習行動のプロセス全般にわたり、広範に肯定的な影響を与えていると考えられる。

2. ポジティブ感情特性、将来志向、自ら学ぶ意欲の関係性

各因子間の相関係数を求めたところ、まず PANAS の PA 因子と NA 因子に有意な相関関係は認められなかった。また、PA 因子は心理的自立の各因子と自ら学ぶ意欲の各因子と正の相関関係が認められ、その広範な関係性が確認されたが、NA 因子は相関関係が認められた因子も少なく、全般的に弱い負の相関関係に止まっていた。本研究では、山崎(2006)や阿久津(2008)の報告を参考に、ポジティブ感情とネガティブ感情を一次元の両端ではなく独立した感情として捉えている。今回の結果はこの考えを支持しており、ポジティブ感情が独立して積極的自立の発達および適応的学習行動を支えていると推測される。

また、心理的自立と自ら学ぶ意欲の因子間の相関関係をみると、心理的自立の「社会的視野」を除き、ほとんどの因子間で正の相関関係が認められ、様々な側面の心理的自立が、自ら学ぶ意欲の欲求・動機、学習行動、認知・感情のプロセス全般に関係することが示された。特に、心理的自立の「将来志向」と自ら学ぶ意欲の「積極探究」の間では、 $r=.62$ と比較的高い相関係数が認めら

れ、明確な時間的展望に基づく肯定的な将来志向と、情報収集、自発学習、挑戦行動といった学習行動レベルの学習意欲との関係性が強調されている。櫻井（2009）の「自ら学ぶ意欲のプロセスモデル」の基礎を成す、Deci（1980）の「自己決定理論」では、内発的動機づけの源として自律性への欲求をあげている。青年期の発達課題として主要な、自己決定して行動できる積極的自立は、自ら学ぶ意欲の学習行動レベルにおける自律欲求に近い概念であり、このような学習意欲の問題は青年期の発達課題の問題として捉えることも必要と考えられる。

本研究は、ポジティブ感情が自ら学ぶ意欲に及ぼす影響を検討するため、以下に示す先行研究に基づき、ポジティブ感情を独立変数として、心理的自立の将来志向を媒介変数に、そして自ら学ぶ意欲を従属変数とする仮説モデルを設定した。このモデルの背景に、大学生のスポーツ系サークル活動による、習慣的なスポーツ活動の影響を想定している。すなわち、分散分析と相関分析から、このようなスポーツ活動参加が、ポジティブ感情に限らず、仮説モデルを構成する心理的自立と自ら学ぶ意欲にも幅広く関係しており、さらにこれらの要素間でも比較的明確な関係性が認められたことから、モデルに対するスポーツ活動の関与は十分に想定できる。

まず、ポジティブ感情と将来志向の関係について、Fredrickson（1998, 2001）は、ポジティブ感情が認知を柔軟にすることで問題を前向きに捉え、異なる側面からの対処を試みるコーピングを促進させるとしている。これらの報告は、ポジティブ感情が「問題解決」や「認知的再解釈」に影響することを示唆している。また、大塚ら（2008）も同様に、ポジティブ感情が肯定的再解釈を促進すると指摘しており、この機能が時間的展望の獲得期とされる青年の、自己の人生に対する時間的な視野が広がる（日潟・齊藤, 2007）ことに貢献していると考えられる。そこで、ポジティブ感情から将来志向へのパスを仮定した。

次に、将来志向と自ら学ぶ意欲の関係について、Deci（1980）の自己決定理論では、自律性の欲求が内発的動機づけの源としており、櫻井（2009）が提唱する自律—他律の観点による自ら学ぶ特性的意欲の形成は、自律に関係する時

間的展望をもって主体的に行う積極的自立に影響されると考えられる。また、大石・岡本（2009）は、時間的展望に関わる「未来指向性」とレジリエンスとしての「遂行性」との関連を見出し、将来の目標をもつという、未来をポジティブに評価することが、動機づけを高めることで遂行性を高めるとしている。加えて、心理的自立を構成する情緒的自立と、学業における自信の間に関係があり（Hoffman, 1984）、青年期の将来志向が向社会的行動に正の影響をもつ（高坂・戸田, 2006b）と指摘されている。これらの報告に基づけば、将来志向から自ら学ぶ意欲へのパスが妥当と解釈される。

これらから、ポジティブ感情が将来志向を介して自ら学ぶ意欲に影響を及ぼすという、間接効果を想定するモデルを設定した。しかし、独立変数から従属変数への直接のパスがなく、媒介変数を介することにより説明されるモデル、いわゆる完全媒介モデルは稀であり、ポジティブ感情の広範な機能を考慮すれば、ポジティブ感情が自ら学ぶ意欲に直接的に影響を及ぼすことは容易に考えられる。Fredrickson（2001）は、ポジティブ感情の経験によって、個人の注意、認知、行動のレパートリーが一時的に広がり、その後に身体的、知的、社会的な意味での、様々な個人資源が継続的に形成されるとした。したがって、ポジティブ感情特性が高くなることで、豊富な個人資源を基盤に、学習に関わる情報に対する志向性を高め、高い意欲を維持して、自律的に学習行動をすることができるようになると考えられる。そこで、このモデルにポジティブ感情から自ら学ぶ意欲への直接効果を想定するパスを設定した。

なお、本研究で検証する仮説モデルでは、VoLeMoSの「知的好奇心」、「面白さと楽しさ」、「有能感」の3つの観測変数を割愛した。櫻井（2009）のプロセスモデルを基盤とする本研究は、特性的な自ら学ぶ意欲の特徴として、「自律—他律」の観点による「自ら進んで学ぶ」という性格の側面に注目している。これに対して、探索行動を生起させる情報や刺激の存在が前提となる「知的好奇心」や、認知・感情レベルのプロセスである「面白さと楽しさ」と「有能感」は、いずれも「目的—手段」の観点による「おもしろいから学ぶ」という状況的意欲の評価が含まれやすいと考えられ、さらに、習慣的なスポーツ活動

参加との関連が認められなかった（水落ら，2014）ことも割愛の理由となった。

以上のことから，本研究では，独立変数から従属変数の直接的なパス，および媒介変数を介した間接的なパスを想定した，部分的媒介モデルを構成した。そして，構成したモデルの妥当性と各概念間の関係性を，共分散構造分析により検証したところ，モデルの適合度指標は概ね良好であり，自ら学ぶ意欲の説明率が54%と高いことから，採択した検証モデルは，大学生の自ら学ぶ意欲の影響要因を解明することに貢献すると期待される。

さらに，独立変数が従属変数に及ぼす影響の強さを示すパス係数をみると，ポジティブ感情から自ら学ぶ意欲への直接効果，および将来志向を介した間接効果の，いずれにも有意な正の影響を確認できた。とりわけ，ポジティブ感情から自ら学ぶ意欲へのパス（ $\beta=.39$ ）と，自ら学ぶ意欲の下位概念である積極探究（ $\beta=.91$ ），深い思考（ $\beta=.69$ ）といった学習行動レベルへのパスが高く，ポジティブ感情から学習行動レベルのプロセスへの直接効果が主たる影響と示唆される。これに対して将来志向から自ら学ぶ意欲へのパス（ $\beta=.54$ ）は高いものの，ポジティブ感情から将来志向へのパス（ $\beta=.24$ ）が比較的低く，将来志向の説明率も6%と低いことから，心理的自立を介した間接効果はそれほど高くないようである。

スポーツ系サークルにおける習慣化されたスポーツ活動による，ポジティブ感情の喚起経験が，日々のポジティブ感情表出を促す。この特性的なポジティブ感情の増強が，情報収集，自発学習，挑戦行動，深い思考，独立達成といった主に学習行動プロセスに働きかけ，幅広く自ら学ぶ意欲を高め維持することに貢献していると考えられる。また，このポジティブ感情は，青年期の重要な発達課題である心理的自立の，とりわけ時間的展望の獲得を支え，時間的な視野を広げる将来志向を高めることで，間接的に学習行動に働きかける効果も推測される。しかし，この間接効果は，ポジティブ感情から将来志向の関係において，それほど影響力ではない。したがって，自ら学ぶ意欲を高めることに対して，ポジティブ感情特性の直接効果は高いが，将来志向を介した間接効果は控えめに評価すべきであろう。

この研究で得られた結果の解釈については、既報（水落ら，2013，2014）と同様に次の点において留意しなければならない。まず，大学入学前の運動・スポーツキャリア，入学後のサークル活動における運動・スポーツの実施頻度や運動強度など，多くの関連条件が未統制のままであることを踏まえると，得られた知見をそのまま青年期の大学生に一般化することは慎重にならなければならない。また将来的に，学習の特性的意欲に関連する環境的・心理的要因を包括するプロセスモデルに発展させ，その検証を行うためには，各要因の因果性と影響力を探るために，縦断的あるいは介入研究が必要となる。

まとめ

習慣的運動・スポーツ活動と関連性があるポジティブ感情特性と，これに影響された心理的自立の下位概念である将来志向が，自ら学ぼうとする自律的な意欲に及ぼす影響を検討した。分析対象は357名の大学生男女であり，調査・分析項目は感情特性（日本語版 PANAS による），心理的自立（心理的自立尺度第2版による），自ら学ぶ意欲（大学生用の自ら学ぶ意欲の測定尺度による）であった。そして，スポーツ系サークル活動参加の有無による2群（活動群と非活動群）の各心理尺度の因子得点平均値の差，およびポジティブ感情，将来志向，自ら学ぶ意欲を変数とする共分散構造分析を行ったところ，以下のような結果が得られた。

- 1) 2群のポジティブ感情と，心理的自立の将来志向，適切な対人関係の平均値に有意な差が認められ，いずれも活動群が高値を示した。
- 2) 因子間の相関分析により，ポジティブ感情は，心理的自立の4つの因子（将来志向，適切な対人関係，価値判断・実行，責任），および自ら学ぶ意欲の独立達成を除く各因子と，有意な正の相関関係が認められた。心理的自立の社会的視野を除く5因子は，自ら学ぶ意欲のすべての因子と有意な正の相関関係が認められた。
- 3) ポジティブ感情を独立変数，自ら学ぶ意欲を従属変数，将来志向を媒介変数とするモデルの適合度指標は概ね良好であり，最終的に採択した

検証モデルは、大学生の自ら学ぶ意欲の影響要因を解明することに貢献した。なお、ポジティブ感情の将来志向に対する説明率は比較的低かった。

スポーツ系サークルにおける、習慣化されたスポーツ活動によるポジティブ感情の喚起経験が、日々のポジティブ感情表出を促す。この特性的なポジティブ感情は、将来志向といった心理的自立の獲得を促進するとともに、主に学習行動を支える積極的な探究を中心に、幅広く自ら学ぶ意欲を高め維持することに貢献すると推測される。

付 記

本研究をまとめるにあたって、平成23年度日本大学文理学部人文科学研究所共同研究費の一部から助成を受けました。

文 献

- 阿久津洋巳（2008）「ポジティブ感情とネガティブ感情の測定：項目反転理論の適用」岩手大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要， 7， 35-144.
- 荒井弘和・木内敦詞・中村友浩・浦井良太郎（2003）「大学1年生における身体活動量と性別・運動経験・日常生活行動との関係」. 大学体育， 79， 21-26.
- ビドル， S.J.H.・ムツリ， ナネット（2005）「気持ちが良くなる要因：身体活動と心理的安寧」竹中晃二・橋本公雄（監訳）『身体活動の健康心理学—決定因・安寧・介入』大修館書店， pp.150-182.
- Deci, E.L. (1980) 「The psychology of self-determination」石田梅男訳（1985）『自己決定の心理学—内発的動機づけの鍵概念をめぐって—』誠信書房， pp.23-60.
- Frank, S.J., Pirsch, L.A., and Wright, V.C. (1990) 「Late adolescents' perceptions of their relationships with their parents: Relationships among deidealization, autonomy, relatedness, and insecurity and implications for adolescent adjustment and ego identity status」 Journal of youth and adolescence, 19, 571-588.
- Fredrickson, B.L. (2001) 「The role of positive emotions in positive psychology : The broaden-and-build theory of positive emotions」 American Psychologist, 56, 218-226.
- Fredrickson, B.L. (1998) 「What good are positive emotions?」 Review of general psychology, 2, 300-319.

- 福島朋子 (1992)「思春期から成人期にわたる心理的自立：自立尺度の作成及び発達の検討」発達研究, 8, 67-86.
- 速水敏彦 (2000)「大学生の日常的感情に関する研究—感情日誌を用いて—」名古屋大学大学院教育発達科学 (心理発達科学) 研究科紀要, 47, 47-57.
- 日潟淳子・齊藤誠一 (2007)「青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連」発達心理学研究, 18, 109-119.
- Hoffman, J.A. (1984)「Psychological separation of late adolescents from their parents」*Journal of Counseling Psychology*, 31, 170-178.
- 葛西真記子・渋江裕子・宮本友弘・松田保 (2010)「スポーツ活動経験とレジリエンスの関連—時間的展望, 身体的自己知覚の視点から—」教育実践学論集, 11, 39-50.
- 公益社団法人私立大学情報教育協会 (2014)「私立大学教員の授業改善白書平成25年度調査報告」.
- 公益社団法人私立大学情報教育協会 (2005)「私立大学教員の授業改善白書平成16年度調査報告」.
- 古賀弘之 (2003)「音楽と感情・気分に関する研究」広島大学大学院教育学研究科紀要, 52, 45-52.
- 小塩真司 (2008)『はじめての共分散構造分析：Amos によるパス解析』東京図書株式会社, pp.110-111.
- 水落文夫・金野潤・菅野慎太郎・義本大友・深見将志・竹内雅明 (2014)「本学部学生のスポーツ活動に関わる感情・疲労自覚症状が学習意欲に与える影響」日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要, 88, 91-105.
- 水落文夫・水上博司・野口智博・金野潤・田中輝海・竹内雅明 (2013)「本学部学生のスポーツ活動と感情・疲労自覚症状の関係—大学運動部およびスポーツ系サークル活動参加の有無に基づく比較—」日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要, 86, 123-138.
- 大石郁美・岡本祐子 (2009)「青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連」広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 43-53.
- 大塚泰正・鬼頭愛子・堀匡 (2008)「労働者の肯定的再解釈コーピングを促進する要因に関する縦断的検討」広島大学心理学研究, 8, 129-135.
- 櫻井茂男 (2009)『自ら学ぶ意欲の心理学—キャリア発達の視点を加えて—』有斐閣, pp.3-10, pp.26-34, pp.43-49.
- 佐藤徳・安田朝子 (2001)「日本語版 PANAS の作成」性格心理学研究, 9, 138-139.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006a)「青年期における心理的自立 (Ⅱ)—心理的自立尺度の作成—」北海道教育大学紀要 (教育科学編), 56, 17-30.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006b)「青年期における心理的自立 (Ⅳ)—心理的自立の発達の变化—」北海道教育大学紀要 (教育科学編), 57, 135-142.
- 高富莉那・桂田恵美子 (2011)「大学生の心理的自立と親の養育態度との関連」臨床教育心理学研究, 37, 27-32.

内田圭子（1990）「青年の生活感情に関する一研究」教育心理学研究, 38, 12-20.

渡邊恵子（1990）「自立の概念化の試み」. 日本女子大学紀要（人間社会学部）, 1, 189-206.

Watson, D. and Tellegen, A. (1985) 「Toward a consensual structure of mood」 Psychological Bulletin, 98, 219-235.

Watson, D., Clark, L.A., and Tellegen, A. (1988) 「Development and validation of brief measures of positive and negative affect : The PANAS scales」 Journal of Personality and Social Psychology, 54, 1063-1070.

山田裕子・宮下一博（2007）「青年の自立と適応に関する研究：これまでの流れと今後の展望」千葉大学教区学部研究紀要, 55, 7-12.

山崎勝之（2006）「ポジティブ感情の役割：その現象と機序」パーソナリティ研究, 14, 305-321.

サッカーにおけるスモールサイドゲームに関する研究

—— ポジション別プレー現象の相違について ——

坂 本 宗 司

I. はじめに

日本は、1993年にJリーグが発足して以来、国際サッカー連盟（以下、FIFAとする）が主催するFIFAワールドカップに1998年から出場し、2002年日韓共催FIFAワールドカップでベスト16に入るなど、ワールドカップに5大会連続出場している。近年では海外で活躍する日本人選手を多数輩出するなど、大きく発展を遂げてきた。公益財団法人日本サッカー協会（2012年より財団法人日本サッカー協会から公益財団法人日本サッカー協会へと変更、以下どちらもJFAとする、2009a, 2013）は、『Japan's Way』を掲げ、ボールを保持する時間を長くし試合の主導権を握ること、全員攻撃・全員守備でハードワークをすること、攻守に関わり続けること、そのために必要な運動量などを課題に挙げ、世界と戦うためのコレクティブなサッカーの形成を目指している。これまで、世界のサッカーの戦術は『トレンド』とさえ表現されるように固定されたものではなく常に課題を改善しながら発展してきた。吉村（2003）や湯浅（1997）は攻守におけるサッカーの戦術の重要性について述べ、JFA（1999）も同様に、世界のトップレベルのサッカーを目指す上で戦術を理解する“チカラ”が備わっていることを前提とし、判断力とそれを実行するための正確な技術力が日本サッカーの課題点の一つであると提起し、世界と戦うためのクリエイティブな選手の育成を期して行わなければならないとしている。

育成、指導現場においてサッカーの強豪国といわれる国々では、コートを縮小し少人数で行うスモールサイドゲーム（以下SSGとする）を用いた指導方法が主流となっている（JFA, 2009c）。SSGとは、FIFAの定める11人制ゲームのコートサイズ（縦105m, 横68m）よりも小さいコートを用い、少人数で行うゲーム形式のトレーニングの一つで、トレーニングのテーマに沿ってコートの大きさ、選手の人数、ルールなどを適宜変更することが可能である。現在、FIFA ランキングにおいて世界のトップ10に入るフランスでは、サッカーにおけるあらゆる技術の習得に最適であるとし、中学生年代（以下U-15とする）においてSSGを多用している（JFA, 2009b）。また、サッカーにおいて、あらゆるスキルの獲得に最適と位置づけられる10歳から12歳の年代をゴールデンエイジ（以下、U-12とする）と呼び、イングランドやオランダといったサッカー先進国においても、この即座の習得が可能とされるU-12において11人制ゲームの実施を禁止し、サッカーに必要な基本的な技術や動作を習得させる意図としてSSGのトレーニングを行っている（小野, 1998）。FIFA ランキングが示すように、強豪と呼ばれるランキング上位国の多くはSSGを導入していることもあり、SSGによる指導方法が一定の成果を収めていると言えよう。JFAでも、2011年より主催するU-12の全国大会が11人制ゲームから8人制SSGへと移行するなど育成年代に積極的にSSGを推奨してきた。しかしながら、少人数制サッカーは個に頼る局面が多くなり「SSGはサッカーとは別の競技」と否定的な意見も少なくはなく、SSGを試合形式と捉えるかトレーニングとして用いるか否かの判断は、現場での指導者に委ねられているのが現状である。指導現場で実際行われているSSGのプレー様式からその現状を明らかとするとともに今後の指導現場において実用性のあるSSGの指導へと発展させていく必要性があると考えられる。

これまでSSGは、その有用性について多面的に研究が進められている。技術面の研究では、U-12を対象としたSSG中におけるボールタッチ回数に関する研究が長年に渡り実施されており、11対11において動員される技術面の獲得が期待されていること（掛水ほか, 1996；1997；鬼頭ほか, 2005；中山ほか, 2004；

齋藤ほか, 2004) が報告されている。また, U-15から大学生までの幅広い年代を対象とし, 運動強度と心拍数の観点からの研究(吉田, 1982; 永都ほか, 2003; 津田ほか, 2003, 2007; 梶山, 2009)において, 基礎体力向上に期待できるトレーニング法としての有効性が高いことが報告されている。しかしながら, SSG中に発生する現象やプレー場面自体の特性を示した研究は散見されない。

そこで本研究は, U-15におけるSSG中の現象の発生場面およびプレー現象に着目し, その特徴を明らかにすることとした。得られた結果より, 攻撃, 守備の2つのポジション特性群に分け, それぞれの特性を持つポジション選手間によって行われたプレーおよび現象の発生場面の頻度を比較し, 4対4のSSGにおいて攻守を専門とするポジションの選手間でのプレー現象の相違について分析を試みた。本研究結果がコーチング現場における指導者および選手育成の一助となることを期待したい。

Ⅱ. 方法

1. 被験者

東京都のクラブチームSに所属するU-15の13名であった。表1に攻撃を専門とする選手(以下F群とする), 守備を専門とする選手(以下D群とする)ごとに分類した被験者の身長, 体重, 年齢, 競技歴の平均値および標準偏差を示した。被験者の運動実施頻度は, 平日3日2時間程度, 週末に練習試合3時間程度行うものであった。なお, 被験者には本研究の趣旨, 内容, 実施方法を十分に説明し同意を得て行った。

表1 被験者の身体特性

M±SD	身長 (cm)	体重 (kg)	競技歴 (年)	年齢 (歳)
F 群	162.7±5.2	50.2±7.8	7.3±2.0	14.0±0.6
D 群	167.1±5.8	54.4±5.5	7.3±1.6	13.7±0.5

2. 調査時期および場所

2015年11月から2016年2月の間計5回, 場所は東京都内にある学校Kの屋

外グラウンドにて実施した。

3. SSG の内容および実施方法

図1にSSGに用いたコートサイズおよび形状を示した。SSGに用いたコートサイズは、縦40m、横20mのコートとし4対4のゲームを行った。

ゴールは正規サイズ（横幅7.32m、高さ2.44m）のものを使用し、ゴールキーパーを配置した。4対4のSSGの基本形は縦30m、横20m（JFA, 2007）であるが、今回の研究では、フルコートゲームにおける縦長の形状に近づけ、11対11中でみられるプレー現象の出現に近づけることを意図し、コートサイズを設定した。また、被験者の選定にあたっては、クラブチームSの指導者（サッカーA級コーチジェネラル資格保有者）によって、経験年数やポジション特性から選手を抽出し、できるだけ2チーム間での競技レベルの差がでないように考慮した。SSGは、5分間のゲームを4ゲーム行い、5日間計20ゲームであった。ゲーム間は3分間の完全休息であった。なお、疲労度によるプレーの変化を考慮し、ポジション変更やゲーム間での被験者の変更はなく同一者とした。ゲームの試技中は指導者から特に指示を行わず、最大努力での試技を行うことを求めた。

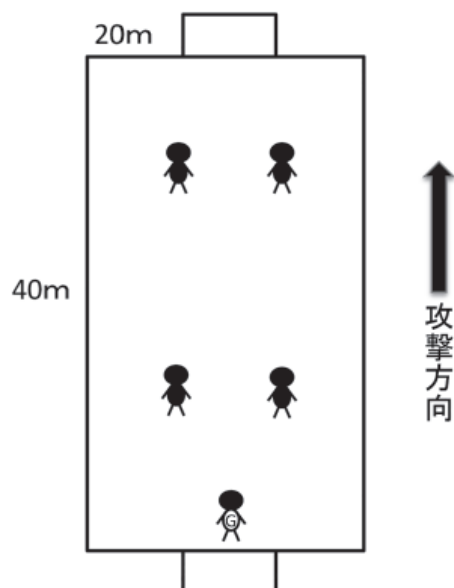


図1 SSGに用いたコートサイズおよび形状

オン・ザ・ボールのプレー				
項目			回数	合計
シュート	ペナ内	枠内		
		枠外		
	ペナ外	枠内		
		枠外		
パス	縦			
	横			
	バック			
	ロングフィード			
	サイドチェンジ			
	くさび			
ドリブル	運ぶ			
	仕掛け			
オフ・ザ・ボールのプレー（攻撃的なプレー）				
項目			回数	合計
パス&ゴール				
追い越す動き				
第3の動き				
相手背後を狙う動き				
オフ・ザ・ボールのプレー（守備的なプレー）				
項目			回数	合計
インターセプト				
ボール奪取				
シュートブロック				
カバーリング				
アプローチ	前、横（視野内）			
	後（視野外）			

図2 チェックシート

4. 分析項目

分析項目は、SSG 中に発生したプレー現象の総数であった。プレー現象をボール保持場面とボールを保持していない場面の2局面に分け、ボール保持時の選手のプレー現象をオン・ザ・ボールのプレー、ボールを保持せず攻撃に關与する選手のプレー現象を攻撃時におけるオフ・ザ・ボールのプレー、ボールを保持せず守備に關与する選手のプレー現象を守備時におけるオフ・ザ・ボールのプレーの3項目に分類した。さらに、オン・ザ・ボールのプレーをシュート、パス、ドリブルの3項目、攻撃時におけるオフ・ザ・ボールのプレーをパス & ゴー（パスを出した直後に前後左右に関わらず動き出していること）、追い越す動き（ボール保持者より背後のポジションから前方へとサポートする動き）、第三の動き（ボールを保持する味方選手が他の味方選手にパスを出し、その選手がパスを受けるより前に動き出しを開始し、有利なポジションでボールを受けようとする動き）、背後を狙う動き（ボール保持者より前方のポジションから相手背後のスペースを狙う動き）の4項目、守備時におけるオフ・ザ・ボールのプレーをインターセプト（相手のパスを途中で奪うこと）、ボール奪取、シュートブロック、カバーリング（味方の守備者が攻撃者に突破された時に、他の守備者がすぐに守りに行くこと。あるいはすぐ守りにいけるポジションをとっていること）、アプローチ（守備者がボールを持っている相手との間合いを詰めるプレー）の5項目に分類し、それぞれの場面においてF群、D群の行ったプレー現象をより細かくチェックシート（図2）に記入した。なお、チェックシートの項目作成や発生したプレーの局面の分類にあたっては沼尻ら（2012）の先行研究を参考にし、11人制ゲームで使用されるプレーと同様のものをSSG 中から抽出し、発生したプレーの頻度を記録することができるチェックシートを独自に作成した。

5. 分析方法

対象としたSSGをビデオカメラ（HDR-PJ800 SONY 製）にて撮影した。ビデオの撮影に際し、コート全体を撮影し、発生現象、プレー場面を正確に記録するため、ビデオカメラを高所に設置して撮影を行った。また、撮影されたビデオ

オの映像を2回以上再生し、SSG中にみられたプレー現象を抽出し、項目ごとに分析を行った。現象やプレー場面の正確性については、JFA公認ライセンス保有者3名（A級コーチジェネラル，B級コーチ，C級コーチの計3名）によって2回以上ビデオの確認が行われた。

6. 統計処理

SSG中におけるF群，D群のオン・ザ・ボールのプレー（シュート，パス，ドリブル），攻撃時におけるオフ・ザ・ボールのプレー（パス&ゴール，追い越す動き，第三の動き，背後を狙う動き），守備時におけるオフ・ザ・ボールのプレー（インターセプト，ボール奪取，シュートブロック，カバーリング，アプローチ）の発生回数をPearsonの χ^2 検定を用いて比較した。統計処理には，統計処理ソフトSPSS Statistics 20を用いた。それぞれ有意水準を5%未満とした。

Ⅲ. 結果および考察

1. SSG中のプレー総数について

表2にSSG中にみられたF群，D群におけるプレーの総数，オン・ザ・ボールのプレー数，攻撃時におけるオフ・ザ・ボールのプレー数，守備時におけるオフ・ザ・ボールのプレー数と割合を示した。

SSG中におけるF群およびD群のプレー総数は，1552回でF群が680回（43.8%），D群が872回（56.2%）であった。オン・ザ・ボールにおけるF群，D群の合計が872回（56.2%），オフ・ザ・ボールにおけるF群，D群合計は680回（43.8%）であった。群ごとにみると，オン・ザ・ボールのプレーでは，F群が430回（49.3%），D群が442回（50.7%）であった。オフ・ザ・ボールでは，F群が250回（36.8%），D群が430回（63.2%）であった。

表2 SSG 中のプレー総数

	SSG 中のプレー	オン・ザ・ボール	オフ・ザ・ボール	オフ／攻撃	オフ／守備時
F 群	680 43.8%	430 49.3%	250 36.8%	65 59.1%	185 32.5%
D 群	872 56.2%	442 50.7%	430 63.2%	45 40.9%	385 67.5%
合計	1552	872	680	110	570

SSG 中のプレー回数は D 群が F 群を上回る結果であった。また、オン・ザ・ボールが 872 回（56.2%）とオフ・ザ・ボールの 680 回（43.8%）を上回っておりボールを持っているプレーの回数が増える結果が示された。11 人制のサッカーの試合において「一人の選手がボールに触れる時間の平均は 53.4 ± 8.1 秒である」（Carling, C, 2010）ように、ボールを持っていないオフ・ザ・ボールの動きが大半を占める。しかしながら、本研究で、ボールを保持した状態でのオン・ザ・ボールでのプレー回数がオフ・ザ・ボールのプレー回数を上回った結果から、SSG では通常の 11 人制よりもボールに関与するプレー機会が多い可能性が示唆された。これは中山ほか（2004）が「ミニサッカートレーニングが選手のボール接触回数や運動量、満足感などの情意面を十分に確保・充足できるトレーニングである」ことを支持する結果であった。また、オン・ザ・ボール、オフ・ザ・ボールのプレー回数共に D 群が上回っていた結果から、運動量やトレーニング内容の質が高かった可能性が窺えた。

2. オン・ザ・ボールのプレーについて

表 3 に、オン・ザ・ボールにおけるプレーの回数（上段）と割合（中段）を示した。シュートは、F 群で 73 本（68.2%）、D 群で 34 本（31.8%）の計 107 本であった。パスは、F 群で 239 本（41.9%）、D 群で 332 本（58.1%）の計 571 本であった。ドリブルは、F 群で 118 回（60.8%）、D 群で 76 回（39.2%）の計 194 回であった。

Pearson の χ^2 検定を行ったところ、シュート、パス、ドリブルにおいてそ

れぞれ有意差が認められた。 χ^2 検定の結果よりさらに残差分析を行ったところ、表3に示す通り有意な差が認められた。

表3 オン・ザ・ボールのプレー

	F 群	D 群	合計	χ^2 値	有意確率
シュート	73 68.2% 19.5	34 31.8% -19.5	107	14.215	.000***
パス	239 41.9% -46.5	332 58.1% 46.5	571	15.147	.000***
ドリブル	118 60.8% 21.0	76 39.2% -21.0	194	9.093	.003**

上段：頻度 中段：割合 下段：調整済み残差 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

オン・ザ・ボールにおけるプレーではF群、D群共にパスが最も多いプレーであった。SSGは、狭いサイズのコートで行っているため、相手選手との距離が近く、多くの時間ボールを保持することは困難であったと推察される。相手守備者と距離が近い中で、素早い判断と正確なボールタッチなどが求められると考えられる。F群、D群の比較でみると、シュート、ドリブルにおいてF群が有意に高い値を示した。つまり、F群におけるドリブルからのシュートの一連のプレーが行われていたと考えられる。一方、パスにおいてはD群が優位に高い値を示した。このことからD群では、ゲームの組み立てであるポゼッションプレーの役割を担いパスの供給を行っていたと考えられる。これらの結果から鑑みると、F群、D群共に、ポジションによってプレーの役割分担が明確である11人制ゲームでのプレーとSSG中のプレー内容が近似したものであったと推察される。

3. オフ・ザ・ボール（攻撃時）のプレーについて

表4に、攻撃時のオフ・ザ・ボールにおけるプレーの回数（上段）と割合（中段）を示した。パス & ゴーは、F群で19回（50.0%）、D群で19回（50.0%）の

計38回であった。追い越す動きは、F群で4回（25.0%）、D群で12回（75.0%）の計16回であった。第三の動きは、F群で9回（81.8%）、D群で2回（18.2%）の計11回であった。背後を狙う動きは、F群33回（73.3%）、D群で12回（26.7%）の計45回であった。

Pearson の χ^2 検定を行ったところ、追い越す動き、第三の動き、背後を狙う動きにおいて有意差が認められた。 χ^2 検定の結果よりさらに残差分析を行ったところ、表4に示す通り有意な差が認められた。

表4 オフ・ザ・ボール（攻撃時）のプレー

	F 群	D 群	合計	χ^2 値	有意確率
パス & ゴー	19 50% .0	19 50% .0	38	.000	1.000
追い越す動き	4 25.0% -4.0	12 75.0% 4.0	16	4.000	.046*
3人目の動き	9 81.8% 3.5	2 18.2% -3.5	11	4.455	.035*
背後を狙う動き	33 73.3% 10.5	12 26.7% -10.5	45	9.800	.002**

上段：頻度 中段：割合 下段：調整済み残差 *p<.05, **p<.01, ***p<.001

攻撃時におけるオフ・ザ・ボールの動きでは背後を狙う動きが最も多く、次いでパス & ゴー、追い越す動き、第三の動きという結果であった。會田（1999）は、攻撃の課題において「球技では、味方に有利で相手に不利な状況を作り出すことをねらいとして、変化する状況に応じてプレーを選択し、味方と協力して、プレーを実行することが重要である」とし、吉村（2003）は、攻撃の際、ボール保持者に対し、サポートをする選手、バランスをとる選手、突破する選手という具体的な役割分担が必要であり、3人から4人の選手の関与で構成されることが課題であり、サポートに関わる人数が有効な攻撃に影響を与えるとしている。本研究の結果は、背後を狙う動きやパス & ゴーが多かつ

たことから「2人の関係」によるプレーの実行が多かったと推察される。4対4におけるゲームの課題は、前後左右の方向性と選択肢によって広い視野を確保しながらのプレー（JFA, 2007）であるため、先述のように有効な攻撃とされる第三の動きを増やすには、ボール保持時、非保持時に関わらず、視野を確保するための準備行動や周囲を確認する行為、身体の向きを整えるなどの動き出し以前の準備に関わるコーチングを行うことが必要であると考えられる。

群別にみると、パス & ゴーでは、F 群、D 群共に同値で違いがみられなかった。パス直後の動き出しの回数はそれぞれに相違がなかったことがわかる。一方、第三の動き、背後を狙う動きにおいて F 群が有意に高いことを示した。F 群の選手は、SSG 中ではゴールへ直接向かう動きが多かったと推察される。また、追い越す動きでは、D 群が有意に高かった結果より、F 群と比較し長い距離をゲーム中に走行していたと読み取れ、自身がゴールへと向かう動きよりも攻撃に関わるサポートの動きが多かったと推察される。これらの結果から鑑みると、F 群、D 群の SSG 中のプレーは、オン・ザ・ボール同様に11人制ゲームで行われるプレーと類似し役割分担が明確になったものであったと考えられる。

4. オフ・ザ・ボール（守備時）のプレーについて

表5に、守備時のオフ・ザ・ボールにおけるプレーの回数（上段）と割合（中段）を示した。インターセプトは、F 群で29回（36.7%）、D 群で50回（63.3%）の計79回であった。ボール奪取は、F 群で37回（35.9%）、D 群で66回（64.1%）の計103回であった。シュートブロックは、F 群で8回（24.2%）、D 群で25回（75.8%）の計33回であった。カバーリングは、F 群15回（36.6%）、D 群で26回（63.4%）の計41回であった。アプローチは、F 群86回（41.5%）、D 群で121回（58.5%）の計207回であった。

Pearson の χ^2 検定を行ったところ、インターセプト、ボール奪取、シュートブロック、アプローチにおいて有意差が認められた。 χ^2 検定の結果よりさらに残差分析を行ったところ、表5に示す通り有意な差が認められた。

すべての項目においてD群がF群を上回るプレー回数であった。ボール奪取、シュートブロックにおいて有意に高い値を示した。また、インターセプト、アプローチにおいて有意差が認められた。一方、カバーリングでは有意差が認められなかった。

表5 オフ・ザ・ボール（守備時）のプレー

	F 群	D 群	合計	χ^2 値	有意確率
インターセプト	29 36.7% -10.5	50 63.3% 10.5	79	5.582	.018*
ボール奪取	37 35.9% -14.5	66 64.1% 14.5	103	8.165	.004**
シュートブロック	8 24.2% -8.5	25 75.8% 8.5	33	8.758	.003**
カバーリング	15 36.6% -5.5	26 63.4% 5.5	41	2.951	.086
アプローチ	86 41.5% -17.5	121 58.5% 17.5	207	5.918	0.15*

上段：頻度 中段：割合 下段：調整済み残差 *p<.05, **p<.01, ***p<.001

F群よりもD群が守備におけるプレーが多かった結果より、D群がF群に対しディフェンスの意識が高かったことが窺える。D群は、オン・ザ・ボール、攻撃時のオフ・ザ・ボール同様、11人制ゲームと同じくSSGにおいても守備に主眼をおいたプレーを行っていたものと思われる。JFA（2006）は、「守備から攻撃の切り替えが早く、意図的に奪いファストブレイクへと繋げる」と世界の上位国を分析している。つまり、現代の攻守一体型サッカーの中では良い守備から攻撃へ繋げることを要求され、D群のみならずF群にもボールを意図的に奪うプレーが求められていると言えよう。しかしながら、本研究の結果はF群の守備回数が少ないことを示した。11人制ゲームにおいて、攻撃から守備、

守備から攻撃へとめまぐるしく展開するサッカーへと対応するトレーニングとして、SSG 中における攻守の切り替えや、球際への激しいアプローチ、粘り強い守備をより意識したプレーを身につけさせ全員攻撃、全員守備を意識的に行わせることが必要であると考ええる。

Ⅳ. まとめ

本研究は、中学生年代における SSG 中の現象の発生場面およびプレーに着目し、SSG 中のプレーの特徴を明らかにすることとした。得られたプレー結果より、攻撃、守備の 2 つのポジション特性群に分け、それぞれの特性を持つポジション選手間によって行われたプレーおよび現象の発生場面の頻度を比較し、4 対 4 の SSG において攻守を専門とするポジションの選手間でのプレーの相違について分析を試みると共に、コーチング現場における指導者および選手育成の一助となることを目的とした。その結果、以下の通りであった。

1. オン・ザ・ボールでは F 群においてシュート、D 型においてパスが有意に高い値を示した。
2. 攻撃時のオフ・ザ・ボールでは、「2 人の関係」の動きが多かった。F 群ではゴールに向かう動き、D 群では味方をサポートする動きが多かった。
3. 守備時のオフ・ザ・ボールでは、すべてのプレーにおいて D 群が F 群を上回り、インターセプト、ボール奪取、シュートブロック、アプローチで有意に高い値を示した。

上記の結果より、それぞれのプレー場面において、F 群、D 群の選手は SSG 中では自身のポジション特性がプレーに顕著に顕れていたと推察される。したがって、さまざまな動きの要素を含む最小単位として、U-15 においてサッカーに必要なスキルを身につけることが期待される SSG であるが、プレーおよび発生場面に偏りが出てしまう可能性が示唆された。この指導場面の課題を修正するために、指導者は SSG によるトレーニングの意図を選手に対し明確にすることが必要になると考えられる。また、コート サイズや形状などの設定を工夫することで発生するプレーの偏りをなくすことに留意する必要がある

う。しかしながら、あるプレー場面に特化した練習として活用をする際には効果的である可能性も考えられる。指導現場では、獲得させたいプレーの意図を持って臨機応変にSSGを活用することが必要であると考えられる。今後、様々なコートサイズによるプレーの変化、パスからシュートに至った経緯、年代別やトレーニング強度、経験年数による現象の変化など多面的な追跡調査を進め、より実践的なトレーニング方法の構築を目指していきたい。

文献

- 會田宏,「監督・審判の眼（7）球技の戦術-球技の監督にとって戦術とは?」,バイオメカニクス研究, 3・1, 1999, 68-73.
- Carling,C,「Analysis of physical activity profiles when running with the ball in a professional soccer team」, 3, 2010 Feb;28, 2010, pp319-326.
- 梶山俊仁,「サッカーゲーム中の心拍数に及ぼす競技人数とコートの広さの影響-高校サッカー選手の場合-」, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 58, 2009, pp261-267.
- 掛水隆・大橋二郎・沼澤秀雄,「ミニサッカーの運動強度とボールタッチ回数について」, 日本体育学会大会号, 47, 1996, p488.
- 掛水隆・沼澤秀雄・大橋二郎・中塚義実,「サッカーのゲーム型練習の運動強度とボールタッチ回数」, サッカー医・科学研究, 18, 1997, pp133-137.
- 鬼頭伸和・亀山健二・伊藤智識,「U12の間欠的持久力と技術からみたインターバル形式ミニゲーム練習のトレーニング効果」, 第2回日本フットボール学会抄録集, 2005, p36.
- 公益財団法人日本サッカー協会技術委員会,「第8回フットボールカンファレンス報告書」, 2013.
- 永都久典・大橋二郎・磯川正経・鎌田俊司・福井真司,「8対8サッカーゲーム中の心拍数について-埼玉県大学サッカー選抜プレイヤーを対象として-」, 城西大学研究年報自然科学編, 17, 1993, pp43-51.
- 中山雅雄・拝崎拓郎,「少年サッカーにおけるミニサッカー（small-side game）トレーニング効果について-パススキルを中心に-」, 第1回日本フットボール学会抄録集, 2004, p55.
- 沼尻直宏・吉村雅文,「サッカーのトレーニングに用いられるスモールサイドゲームに関する研究」, 順天堂スポーツ健康科学研究, 3（3）, 2012, pp184-187.
- 小野剛,「クリエイティブ・サッカーコーチング」, 1998, 大修館書店, pp18-77
- 齋藤伸行・鎌田安久・佐々木博之,「サッカーのゴールデンエイジにおける11人制ゲームと少人数ゲームの実施状況および運動強度・プレー内容について」, 第1回日本フットボール学会抄録集, 2004, p51.

- 津田龍佑・松本光弘, 「サッカーにおけるダブルボックス4対4の体力トレーニングからみた負荷特性－11対11のフルコートゲームと比較して－」, 日本体育学会大会号, 54, 2003, p563.
- 津田龍佑・篠崎徹・後藤邦夫・高松薫, 「サッカーにおける各種ゲームの体力づくりからみた負荷特性－コートの広さおよび人数の特性－」, Int.J.Sports and Health Sci, 2007, 5, pp42-53.
- 吉田勝志, 「ミニ・サッカーゲームの心拍数－参加人数またはコートの大きさに係わる心拍レベルの傾向」, 中部工業大学紀要, B (18), 1982, pp67-73.
- 吉村雅文, 「サッカーにおける攻撃の戦術について－有効な攻撃のためのトレーニング－」, 順天堂スポーツ健康科学研究, 7, 2003, pp48-61.
- 湯浅健二, 「闘うサッカー理論」, 1997, 三交社, pp24-25
- 財団法人日本サッカー協会, 「2000FIFA World Cup FRANCE *Technical Report*」, 1999, pp64-65
- 財団法人日本サッカー協会技術委員会, 「2006FIFA ワールドカップ JFA テクニカルレポート」, 2006.
- 財団法人日本サッカー協会技術委員会, 「サッカー指導教本2007」, 2007, pp16-17, 90-91.
- 財団法人日本サッカー協会技術委員会, 「ピッチからのことば－世界のトップ10を目指して－」, 2009, pp54-60.
- 財団法人日本サッカー協会技術委員会, 「Technical news Vol.34」, 2009, pp52-55
- 財団法人日本サッカー協会, 「JFA news No. 304」, 2009, pp14-15.

競技スポーツの参加動機について

—— 高校生競技者を対象にして ——

高 橋 理 恵

I. 背景と目的

現在、わが国における競技スポーツ実施者の多くは、主に中学校や高等学校（以下「高校」と略す）などの学校運動部に所属している生徒で占められている。都道府県体育協会加盟団体（中央競技団体など）へ登録している登録者の割合をみても、「中学生が35.1%，高校生が29.1%と多く，大学生は7%，社会人は1.9%」（鈴木，2006，p101）と，学校運動部に所属している者が多くみられる。

一方で、彼らの多くが高校卒業と同時に競技を継続しない傾向にあると言われている。佐伯（2004，p61）が、「学校運動部のキャリアは，年齢によって絶対的にスポーツ活動が終了する」と指摘するように，競技スポーツを継続するか否かの分岐点は，中学，高校，大学それぞれの終了（卒業）時と一致している。また，わが国の競技スポーツの特徴として，次第にその競技スポーツがエリート化していくことで「愛好者をふるい落とし減少させるシステム」（佐伯，2004，p61）として機能している点が指摘されている。

その背景の1つに，競技スポーツを統括するスポーツ組織の構造がある。わが国におけるスポーツ組織は，学校間の対抗戦のために選手を鍛え，選抜する学校運動部をモデルとして発展してきた。それは，「単一種目専攻・オールシーズン型」（佐伯，2004，p60）を中心とし，「多様な愛好者を迎え入れるというよりも，優れたもの以外を排除」（佐伯，2004，p64）し，「多くの愛好者を吸

収し・統括する術」(佐伯, 2004, p64)を持っていないという特徴を有している。このようなスポーツ組織の例として挙げられるのが、中央競技団体である。中央競技団体はさまざまな競技スポーツを統括する団体であり、競技力向上や競技会の開催などの諸活動を展開し、その主な目的は、当該競技スポーツの普及振興である。数多くある中央競技団体の中でも、上記で示した特徴を有した団体として挙げられるのが、公益社団法人日本フェンシング協会(以下「FJE」と略す)である。FJEは活動目的を「我が国におけるフェンシング競技を統括する唯一の団体として、フェンシング競技を通して国民の心身の健全な発達に寄与する」と謳っているものの、競技力向上以外の活動についてはまだまだ検討の余地があるように思われる。また、現在のFJE登録人口は約5,500人を推移する程度であり、その内、約半数が高校生競技者で占められている。しかしながら、フェンシング競技においても高校生競技者の多くが卒業と共に競技を継続しないのが現状である。このように、FJEは、フェンシング競技を統括する団体として、競技者を十分に取り込めていない面が窺え、「いかにして継続者を増やすべきか」が重要な課題として浮かびあがってくる。

以上のような現状から、各スポーツ組織の更なる発展を望むには、中央競技団体が抱える課題を解決し、より多くの愛好者を吸収し統括する仕組み作りが重要である。そのためには、競技人口を増やし、且つ継続させる取組みが重要であり、「新規登録者を増やすこと」と、「競技者を継続させること」の2つの視点で取り組む必要がある。実施者がどのような動機を持ってスポーツに参加しているかを把握することは、継続・普及させるための方策を検討するには有益な資料となると考えられる。

そこで本研究では、フェンシング競技人口の多くを占め、開始人数や継続しない人数の割合が多い高校生競技者を対象とすることで、彼らがどのような動機でフェンシング競技を実施しているのかその動機を調査し、現状を把握するための基本資料を作成することを第1の目的とし、その資料をもとに分析、考察して、今後のFJEの活動に参考となる私案を提示することを第2の目的とした。

Ⅱ．方法

1．調査対象と調査時期

公益財団法人全国高等学校体育連盟フェンシング専門部に登録している高校に所属しているフェンシング部員のうち、平成26年度全国高等学校総合体育大会（平成26年8月1日～5日）に出場した生徒は572名（180校）である。このうち、欠損値のあったものを除く295名（男子134名、女子161名）の回答を対象とした（有効回答率76.4%）。

2．調査内容

現在どのような目的や意思（参加動機）を持ってフェンシング競技に関わっているのかを調査するため、アンケート調査では、属性（性別、学年、役割）、競技開始時期（幼稚園、小学校、中学校、高校）、そして参加動機（52項目）を用いた。参加動機への回答は「5：そう思う」「4：どちらかといえばそう思う」「3：どちらともいえない」「2：どちらかといえばそう思わない」「1：そう思わない」の5段階で求めた。

実施にあたり、全国高等学校総合体育大会フェンシング競技大会前日に開催された監督会議の場にて口頭で趣旨を説明し、アンケート用紙を配布した。アンケート対象者には監督から伝えてもらった。回答後は会場内に設置した回収箱に入れてもらい回収した。なお、本アンケート調査の回答をもって調査への参加同意とした。

3．分析方法

アンケート調査の分析方法として、属性及び競技開始時期については、単純集計にて集計し、参加動機についての質問項目は、山本（1990）の先行研究を参考に、因子分析（重みなし最少二乗法、プロマックス回転）を行った。次に、参加動機について、競技開始時期による違いを検討するため、競技開始時期による群分けを行い、全体及び男女別の2群間の比較を用いて行った。群分けは、高校入学前の開始グループを「入学前群」、高校入学後の開始グループを「入学後群」とした。回答に対し、「そう思う」を5点、「どちらかといえばそう思

う」を4点,「どちらともいえない」を3点,「どちらかといえばそう思わない」を2点,「そう思わない」を1点として得点化し, 因子尺度得点を算出し平均値の比較を行った。

因子分析及びt検定は, SPSS Statistics Ver21 for Mac を用いた。t 検定では有意水準を5%とした。

Ⅲ. 結果

1. 開始状況の単純集計

「競技開始時期」の回答について, 幼稚園2名(0.7%), 小学校44名(14.9%), 中学校40名(13.6%), 高校209名(70.8%), であった(表1)。

表1 競技開始時期

項目	人数(人)	割合(%)	(男/女)
幼稚園	2	0.7	1/1
小学校	44	14.9	24/20
中学校	40	13.6	23/17
高校	209	70.8	86/123
合計	295	100.0	

2. 因子分析

1) 参加動機の因子構造

得られたデータから平均値・標準偏差を求め, 分布の偏っている項目の有無を確認し, いずれの項目も偏りがなかったため, 52項目の回答を用いて因子分析をおこなった。抽出にあたり, 各因子の因子負荷量が0.35以上を基準に因子ごとの項目を抽出した。因子数8, 7, 6, 5と順次検討したところ, 因子数5以上にしても各因子に高い因子負荷を示す項目に大きな違いが見られず, 累積寄与率が50%を超え, 各因子の説明が可能であると判断できたため, 5因子構造を採用した。負荷量の基準を満たさない21項目を削除し再度分析を行った

（表2－1，表2－2）。なお，抽出された因子の内的整合性を示す Cronbach の α 係数は，いずれも .849 ～ .898 と高い値であった。

2) 因子の命名

第1因子は，「やめると仲間に引け目を感じると思うから」や「やめるとチームメイト，あるいは指導者に非難されるから」など，部活をやめることで，指導者やチームメイトなど人間関係への影響を懸念している内容の項目により構成されていたため，「人間関係志向」因子と命名した。第2因子は，「技術，あるいは記録が向上したときの喜びを味わいたいから」や「勝利を体験したいから」など，技術や記録の向上を目指し，フェンシングを通じて達成感ややりがいを感じているといった項目により構成されていたため，「達成・やりがい志向」因子と命名した。第3因子は，「やめたら生活が乱れる」や「やり遂げることは，社会的な信頼を得ることにつながると思うから」など，運動を継続することで何かしらの恩恵を受けられるといった項目により構成されていたため，「継続による恩恵志向」因子と命名した。第4因子は，「おしつけられず，自主的に練習できるから」や「チームの雰囲気的自由だから」などチーム内の自由な雰囲気などフェンシングを取り巻く環境についての項目から構成されていたため，「環境志向」因子と命名した。最後に，第5因子は，「体力をつけたいから」や「健康を維持したい」など，健康や体力に関する項目により構成されていたため，「健康・体力志向」因子と命名した。

3) 因子尺度得点

以上の因子分析結果を踏まえ，高い負荷量を示す因子を構成する下位尺度は，「人間関係志向」が8項目（得点範囲：8～40），「達成・やりがい志向」が7項目（得点範囲：7～35），「継続による恩恵志向」が9項目（得点範囲：9～45），「環境志向」が4項目（得点範囲：4～20）「健康・体力志向」が3項目（得点範囲：3～15）によって構成された。

表 2-1 参加動機の因子分析結果（重みなし最小二乗法，プロマックス回転）

項目\因子	因子 1 人間関係志向	因子 2 達成・やりがい志向	因子 3 継続による恩恵志向	因子 4 環境志向	因子 5 健康・体力志向
16	.887	.116	-.245	.016	-.040
27	.853	.000	-.028	.049	-.018
8	.781	.016	-.193	-.250	.162
34	.620	.051	.235	.083	-.059
25	.608	.093	.258	-.084	-.024
45	.573	.068	.267	.149	-.084
29	.564	-.049	.168	.131	.007
13	.533	-.067	-.097	.208	.035
2	.060	.921	-.047	-.102	-.077
4	.024	.811	.016	-.153	.086
3	.047	.809	.012	-.121	.045
1	.081	.747	-.019	.042	-.107
31	-.065	.536	.072	.194	-.001
32	-.064	.519	-.004	.300	-.038
15	.031	.367	.138	.088	.137
49	.124	-.138	.822	-.081	.002
51	-.114	.166	.821	-.138	-.046
50	.156	-.149	.761	.019	-.050
37	.005	.039	.628	.172	-.059
44	-.185	.134	.623	-.024	.079
52	.199	.016	.612	-.090	.117
42	-.071	.167	.456	.058	.187
47	.312	-.178	.431	.010	.029
48	-.182	.152	.385	.285	.046
38	-.087	-.013	.064	.772	-.017
30	.075	.043	.046	.677	.012
28	.097	.017	-.091	.659	.063
20	.083	-.103	-.115	.633	-.014
7	.009	-.028	.081	-.106	.818
9	-.007	.108	-.103	.204	.716
17	.063	-.076	.116	.105	.671
貢献量	10.15	3.73	1.64	0.77	0.69
貢献度 (%)	32.73	12.03	5.30	2.50	2.24
累積貢献度 (%)	32.73	44.76	50.06	52.56	54.80

表 2-2 因子相関行列

因子名	1	2	3	4	5
人間関係志向	—				
達成・やりがい志向	.038	—			
継続による恩恵志向	.497	.427	—		
環境志向	.323	.439	.727	—	
健康・体力志向	.276	.513	.644	.631	—

3. 参加動機尺度得点の平均値の比較

1) 競技開始時期 2 群における参加動機尺度得点の比較

入学前群と入学後群のそれぞれの参加動機尺度得点について t 検定を行った結果、人間関係志向尺度 ($t=2.667$, $df=293$, $p<.01$) について有意な差がみられ、入学後群が入学前群よりも高い平均値を示した (表 3)。

表 3 競技開始時期 2 群における参加動機尺度得点の比較

因子名	得点範囲	高校入学前 (N=86)		高校入学後 (N=209)		t (293)	p	有意差
		M	SD	M	SD			
人間関係志向	(8-40)	18.81	8.23	21.56	7.93	2.67	.008	**
やりがい・達成志向	(7-35)	30.11	5.15	30.61	4.83	0.80	.426	n.s.
継続による恩恵志向	(9-45)	28.61	9.14	30.31	8.88	1.49	.138	n.s.
環境志向	(4-20)	11.81	4.24	12.72	3.93	1.75	.080	†
健康・体力志向	(3-15)	10.06	3.67	10.65	3.33	1.35	.179	n.s.

** : $p<.01$, † : $p<.1$, n.s.: not significant

2) 男女別の競技開始時期 2 群における参加動機尺度得点の比較

男女別で入学前群と入学後群のそれぞれの参加動機尺度得点について t 検定を行った結果、男子はいずれの尺度についても 2 群間に有意な差はみられなかった (表 4 - 1)。女子は、「人間関係志向尺度」 ($t=2.941$, $df=159$, $p<.01$), 「継続による恩恵志向尺度」 ($t=2.188$, $df=159$, $p<.05$), 「環境志向尺度」 ($t=2.499$, $df=159$, $p<.05$), 「健康体力志向尺度」 ($t=2.365$, $df=159$, $p<.05$) において、有意な差がみられ、いずれも入学前群よりも入学後群が高い平均値を示した (表 4 - 2)。

表 4-1 男子の競技開始時期 2 群における参加動機尺度得点の比較

因子名	得点範囲	高校入学前 (N=48)		高校入学後 (N=86)		t (132)	p	有意差
		M	SD	M	SD			
人間関係志向	(8-40)	20.44	8.74	22.54	8.28	1.38	.171	n.s.
やりがい・達成志向	(7-35)	30.85	4.55	30.19	5.05	0.76	.449	n.s.
継続による恩恵志向	(9-45)	30.42	9.04	30.95	9.16	0.33	.744	n.s.
環境志向	(4-20)	12.96	3.81	13.43	3.92	0.67	.501	n.s.
健康・体力志向	(3-15)	10.67	3.47	10.48	3.47	0.30	.762	n.s.

n.s.: not significant

表 4-2 女子の競技開始時期 2 群における参加動機尺度得点の比較

因子名	得点範囲	高校入学前 (N=38)		高校入学後 (N=123)		t (159)	p	有意差
		M	SD	M	SD			
人間関係志向	(8-40)	16.76	7.13	20.87	7.64	2.94	.004	**
やりがい・達成志向	(7-35)	29.16	5.74	30.90	4.66	1.91	.058	†
継続による恩恵志向	(9-45)	26.32	8.86	29.86	8.69	2.19	.030	*
環境志向	(4-20)	10.37	4.35	12.22	3.87	2.50	.013	*
健康・体力志向	(3-15)	9.29	3.81	10.77	3.24	2.37	.019	*

** : $p < .01$, * : $p < .05$, † : $p < .1$, n.s.: not significant

IV. 考察

まず、単純集計による競技開始時期の結果から、対象となった高校生の多くがフェンシング競技を高校入学後から開始していることが確認された。このことは、多くの選手が高校入学後にフェンシング競技と出会っている可能性を示している。小学生や中学生で競技を開始した選手のきっかけ等について本調査では項目として含めていなかったため推測の域を脱しないが、競技に触れる機会の有無や地域特性など環境に差があったのではないかと考えられる。

次に、因子分析の結果から本調査の対象者におけるフェンシング競技の継続参加動機の特徴として、因子間の相関関係からは、「継続による恩恵志向」が他の因子との相関が高く、他の因子尺度得点が高くなると恩恵が高まることが言えるため、「競技をする上で、継続しやすい環境を重要と捉えている」ことを示唆している。一方、「人間関係志向」においては、「継続による恩恵志向」を除いた他の因子との相関が低かったため、運動部活動の継続動機には指導者や仲間との関わり方といった、「競技そのものよりも、競技に関わる人間関係を重要と捉えている」ことが考えられた。

上記の結果を踏まえ、競技開始時期による参加動機の違いについて比較し、入学後群が入学前群よりも人間関係を重視している傾向がみられた。この理由の1つに「重要な他者」の存在が考えられる。子どものスポーツ活動への参加には、親、友人、教師やコーチなどからの影響を受けるとされている。スポーツ社会学の研究領域では、そのような「重要な他者」の存在は、スポーツ活動を行う選手（あるいは生徒、子ども）が「社会化」していく過程に影響を与えるとされている。スポーツ社会学での「社会化」とは、スポーツ活動を通じ、個人が所属している社会に必要な役割やスキルを獲得していく学習過程のことである。本調査では対象者の当該競技への参加における「重要な他者」については質問項目としていなかったため断言はできないが、高校入学という新しい環境の中で、新しい競技を開始するにあたり何らかの不安を感じ、他者とのつながりを必要としていた、又は、他者からの影響を受けて参加している可能性があるだろう。そのため、入学後群が人間関係を重視する傾向があるのではないかと考える。一方で、入学前群は競技歴が長くなることで、高校の学校運動部を取り巻く環境への意識よりも、フェンシング競技そのものに意識が向いており、継続して参加するにあたり入学後群よりも重要な他者の影響を受けていないことが推測される。つまり、入学後群は、人間関係を含めた何らかの目的を持ち、それを達成するための手段としてフェンシング部に入っているが、入学前群では、フェンシング競技を行うことを目的とし、その手段としてフェンシング部に入部しているのではないかと考えられた。一方で、人間関係を重視し

ている傾向は、先行研究で示されている他競技の参加動機と同様の内容である。当該競技は、マイナースポーツと言われ、参加動機に何らかの特徴があるのではないかと推測されたが、実施している選手にとっては、参加動機に他の競技種目と何ら変わりがないことが確認された。このことは、競技の継続参加を促す際に、他の競技種目の事例を活用できることを示唆している。

最後に、男女別で競技開始時期における参加動機尺度得点の平均値を比較した。その結果、男子生徒については2群間に有意な差はみられなかった。そのことから、男子生徒のフェンシング競技に対する継続参加動機の形成には、競技開始時期による影響がないように考えられた。競技開始時期の違いが継続参加には直接関係がないことから、他の要因が考えられるため今後の検討課題としたい。一方、女子生徒においては、「やりがい・達成志向」以外の参加動機において有意な差がみられた。本調査では競技開始時期による比較を行ったため、同じ競技開始時期での男女間の比較は行っていないが、競技開始時期の男女別の比較において、継続参加動機の違いは男子生徒ではみられなかったことから、前述したフェンシング競技を手段として認識するのは、男子生徒よりも女子生徒に顕著に表れていたのではないかと推察された。

これらの結果から、フェンシング競技を継続して参加する動機として人間関係や実施環境を重視する傾向は、フェンシング競技においても他の先行研究と同様の参加動機であったと言えるだろう。特に入学後群における女子生徒の参加動機において、競技そのものもが持つ特徴や魅力よりも、その競技を続けるための外的要因が作用していることが考えられた。このことは、運動部活動が学校教育の一環として行なわれているが故に、フェンシング競技を手段として各々が目指す目標や目的を達成しようと考えた生徒がいたからではないだろうか。

V. まとめ

本調査は、高校生競技者を対象に、彼らがどのような動機でフェンシング競技を実施しているのかその動機調査を第1の目的とし、その資料をもとに分析、

考察して、今後の FJE の活動に参考となる私案を提示することを第 2 の目的とした。その結果、第 1 の目的である動機調査では、フェンシング競技を継続して参加するための特徴的な動機はみることができなかったが、競技開始時期による参加動機での比較において、入学後群の女子生徒に特徴がみられた。今後の課題としては、男子生徒において競技開始時期の違いが継続参加動機と関係がなかったことから、他の要因を検討する必要があるだろう。また、同じ競技開始時期の男女間の比較によって違いがあるのか、学校運動部以外にも同様なことが言えるのか、フェンシング競技特有の理由があるのかななどをさらに探るため、クラブチームで実施している競技者も調査対象としながら継続して調査を行っていききたい。

次に FJE に対する私案である。競技者を継続させるための方策として、入学後群の参加動機が「人間関係」を重視している点や、入学前群がフェンシング競技そのものに意識が向いている点から、目的別（競技志向やレクリエーション志向など）に応じた大会やイベントの開催、友人同士や家族など、誰もが気軽にフェンシング競技を楽しめる機会を中央競技団体が企画し、随時情報を発信していくことが FJE にとっての喫緊の課題と思われる。

文献

- 鈴木守（2006）NF の組織化の現状と課題。佐伯年詩雄監修 菊幸一・仲澤眞編 スポーツプロモーション論，明和出版：東京，pp.100-114.
- 佐伯年詩雄（2004）わが国スポーツ体勢の特徴と問題。現代企業スポーツ論，不味堂出版：東京，pp.60-64.
- 山本教人（1990）大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較。体育学研究，35，pp.109-119.

対話を生む演技

—— 劇場文化における感情と「リアル」 ——

児 玉 直 起

はじめに

劇場（実演）芸術は、芸術行為者（演者）と受容者（観客）が同じ空間を同時に共有しておこなわれる唯一の芸術である。実演者と観客のからだは「いま、ここ」に存在（現前）するという事実の実演芸術の成立条件であり、同時に、演者と観客の双方向的なやりとりを生み出す条件でもある。もちろん、行動（演技）するのはもっぱら実演者で、観客が舞台に話しかけるわけではない。それでも、生身の演者たち（俳優、ダンサー、歌手等々）が生身の観客たちの目の前で行動（演技）すると、彼／彼女らが発する精神的エネルギーのベクトルは、観客のからだへと向かい、さらに、それを受けた観客のからだから演者たちへとね返る。このとき、受信者である観客は発信者に、発信者である演者は受信者に、それぞれ変化^レするのだ。この事態こそ、スタニスラフスキーのいう舞台と客席との「精神的エネルギーの交換」もしくは「感情の交流」であり、平田オリザのいう「（内的）対話」

もこれに該当するだろう。⁽¹⁾このような相、互、変、容、や共振作用はそこに新たな何かを生み出す。それが劇場文化の「生命」であり、文学や映画や美術等の諸芸術には見出せない特権的価値でもある。⁽²⁾

実演芸術のこうした特性を実演者の視点からみると、演者（俳優）の演技は、一般に考えられているように、「ただ舞台の上にくり広げられ」れば、それで完結するというものではない。竹内敏晴がいうように、その演技（行動）が「観客のからだにとどき、観客のからだに、あるふるえを起こし反応させるとき」「初めて成り立つ」といえるのだ。⁽³⁾つまり、先に述べた実演者と受容者双方の身体的現前性は、舞台芸術の必要条件にすぎず、その条件のみで、ただちに「交流」や「対話」が生まれるわけではないのである。受容者のあり方も問題になるが、なにより、実演者のふるまい（演技）が肝要である。さらに演出も。演者のふるまいを方向づける演出如何で、舞台は生きもすれば死にもするからだ。

では、演者がどんなふるまいをすれば、あるいは演出家がそのふるまいをどのように方向づければ、観客との「対話」や「感情の交流」は実現されるのか。舞台に立つ演者は感情をどのように表現すれば舞台に「生命」が宿るのか。舞台芸術の特性を活かす実演者の演技（行動）とは何か。

本稿では、受容者との「交流」や「対話」を促す実演者の演技（術）について考察する。取り上げるのは、先に挙げた竹内敏晴、スタニスラフスキー、そして平田オリザの演技論である。三者とも、舞台芸術（演劇）の本質を実演者と受容者の相互的なあり様に見出す点で共通することは、別稿で論じた通りである。⁽⁴⁾竹内は演劇（演出）を始めた時点でスタニスラフスキーから影響を受けており、当然ながら二人の演技観に共通性は少なくない。一方、劇作家の平田は、スタニスラフスキー（の信奉者）にはかなり批判的である。そんな三者が演技をそれぞれどう捉えているのか。具体的に検証し、実演芸術に固有の価値と演技のあり方との関係を明らかにしたい。な

お、「実演者」は、俳優のみならず、ダンサー、歌手、演奏者等々に置き換え可能であるが、便宜上ここでは演劇における俳優の演技（アクション）を対象を絞って論じる。

— 感情表現と「いま」 —

個人的な体験からはじめたい。長年舞台公演のフィールドワークを続けるなかで、気づいたことがある。舞台を見たり生の演奏を聴いたりすると、思わず自分の頬が弛み、身体がほぐれていることがある。しかも、「頬が弛む」頻度や持続時間に比例して、公演の満足度も高い。これはジャンルの別を問わない。逆に、さほど、あるいはまったく頬が弛まないこともある。この場合、不満を残したまま劇場を去ることになる。たとえ前評判がよく、評価の高い演者が出演しても、頬が弛むとは限らない。つまり、「頬の弛み」は、筆者にとって、舞台公演を評価する身体的指標なのである。

このような徴候の現れ方は、もちろん個人によって異なるだろう。ただ、見る側の「頬が弛む」のは、演者のふるまいに前者の身体が思わず反応したことを意味する。それは確かである。この身体的な変化は、実演者と受容者の間で「エネルギーの交換」や「感情の交流」が起きはじめた兆しともいえる。逆に、「頬の弛み」（身体的変化）がまったく生じないか、生じても単発的で、身体も解きほぐされないまま終わる場合はどうか。再び竹内の言葉を借りると、演者の「行動」（演技）が「観客のからだにとど」かず、「観客のからだに」「ふるえを起こし反応させ」損ねた証⁽⁵⁾といえよう。だが、なぜそうなるのか。このとき実演者のふるまいは、台詞の発語（話）や感情表現はどうなっているのか。

竹内敏晴（一九二五～二〇〇九）は劇作家・演出家の山崎哲との対談で、「美しい」ということば（台詞）を発す

る行為について次のようにいう。そもそもこの発語は、美しいと感じた経験が先にあり、それを言語化するということではない。むしろ『ウ・ツ・ク・シ・イ』という音をもつてその経験を選び、もしくは名づけたとき、その人の中に何かが成立することである。けれども、「美しいということばに感情を込めるといふしゃべり方をすればことばは過去をくり返そうという不毛な試みになって、今、ここに、生まれ出てくることばにはならない。つまり死んだ言語に化粧しているにすぎない」。

「ことばに感情を込めるといふしゃべり方」。これは、学生演劇等のアマチュア芝居ではお馴染みだが、実は、プロの俳優でもこのやり方で発語する者は少なくない。人前で演技する実演者は、それを導く演出家も含め、それほど「感情」もしくは「感情表現」を重視している証左だろう。だが、竹内によれば、言葉に感情を込める発語は、「過去をくり返そうという不毛な試みにな」らざるをえない。「いまここ」を基盤に成立する実演芸術の観客にとって、事前に準備したもの（過去）の反復行為ほど退屈なものはない。もちろん、実演者は何度もリハールをおこなない、事前の準備に励まねばならぬ。さもないと、よい舞台を作り上げることなどできはしない。これは、演劇でもバレエでもオペラでも同じである。だが、発語が主要な位置を占める演劇の場合、先のしゃべり方では、「今、ここに、生まれ出てくることばにはなら」ず、「死んだ言語に化粧」する反復行為となる。つまり、その俳優の言葉も演技も死んでしまうのだ。竹内が重視するのは、あくまでも「今、ここに、生まれ出てくることば」である。では、どうすればよいのか。感情はどうなるのか。

「僕は感情というものは、言葉に引っぱり出されてたまたま出てくるものだと考えている。ところが日本では最初に感情ありきで芝居をやりたくてしょうがないんですね。それをどうやってつぶすかですね。言葉そのものを相手に話しているうちに、言葉と体が触れ合ったときに、何かが起こってくる、あとは『からだ』がやって

だが、そうはいっても演劇には感情や情緒はつきものではないのか。主人公の苦難や喜びに観客は同情や共感を抱く。そもそも、そこに演劇の大きな魅力があるのではないか。芝居好きには、劇場で泣くことこそ最高の喜びだという者もいるだろう。舞台に感情が不在では客は泣くことなどありえないのではないか。とすれば、演技と感情との関係をどう考えればよいのか。

こにあるのは「相手を目の前から排除し消してやろうとする行動であって、その行動するからだの内を満たしているものを、心理的にいえば怒りと名付けられるにすぎない」⁽⁸⁾。

では、感情を意識するのはどんなときか。「その感情が一杯になっている状態から少し引き離されて、ふと我に帰ったとき」^[44]。つまり「激しい行動が去って、静かになってから」だ。「非行動的になればなるほど、人は感情を味わうことができる」。

「非行動的」は「非演技的」と言い換えることもできる。ここに「感情表現」の難しさがある。特に演者にとつて。なぜなら「演技をやりたい」という人は、激しい感情を味わいたいという欲求をもっている人が多い。だが、これは「自己矛盾」である。「激しい感情に身をまかせれば、その時は激しい行動があるばかりでそれを味わうことなどできない。味わおうとすれば感情を極めて静かなものに落ち着けねばならぬ。そこで、あせった人は、やたらに緊張し身を叩きつけ興奮を高めようとして、実はシラケる結果になり、演技テクニックを学んだ人は静かな感情の動きの現れを大げさに拡大してみせることが、感情描写＝演技だと思ひこむことにな」⁽⁹⁾。先に引いた対談では、こうもいう。「役者というのは、他者に美しいという事柄を手渡すということよりは、美しい、とか悲しいとか、自分で味わいたい種族なんですね。そうすると、それは相手に言葉を話し掛けるという行為ではなくて、自分でそれを味わうという内部操作にしかすぎなくなる」⁽¹⁰⁾。

「静かな感情の動きの現れを大げさに拡大してみせる」不自然な「感情描写」に、これまで何度「シラケる」思いをしてきたことか。「他者」が不在の「内部操作」では、客席のからだにふるえを起こすことはできない。引用の「相手に言葉を話し掛けるという行為」の「相手」とは、観客ではなく舞台上の相手役のこと。つまり、そもそも役者の発語（美しいという事柄）が相手役に伝わら（手渡すことができ）なければ、二人の対話を観（聴い）

ている観客に伝わるはずもないのである。⁽¹¹⁾

では、どうすれば俳優は感情を表現できるのか。そもそも感情を「表現する」という考えに問題はないのか。

「感情を操作することはでき」ない。なぜなら「それは、無意識の領域から、いつくるか知れず、突如として現れて私たちのからだを満たすというより、ひつつかんでしまうものだから」。ゆえに、「演技を、たとえ少しでも真実の感情の動きで満たそうとするならば」「感情をしばらくだそうとし」てはならない。できるのは、「感情がやってくるようからだを準備しておくだけ」だ。⁽¹²⁾

竹内のいう「からだ」は「無意識」とほぼ同義といってよい。感情は無意識の領域と繋がっている。無意識を意識的にコントロールすることはむろん不可能だ。とすれば、感情がやってくるように身体的なあり方を準備しておく。それしか方法はない。いたずらに感情を表現しようと（意識）すると、演技は空回りし、「シラケる結果」になるほかはない。これでは、舞台と客席との「エネルギーの交換」や「対話」は生じるどころか阻害されてしまう。

竹内のこうした考えは、コンスタンチン・スタニスラフスキー（一八六三―一九三八）に由来する。若い頃、どのような会でスタニスラフスキーの演技論を研究した経験をもつ竹内は、スタニスラフスキーの到達点を次のように説明していた。⁽¹³⁾

「彼「スタニスラフスキー」がたどりついたのは、身体的行動の芸術という考え方でした。つまり、肉体ではない、心理でもない、それをひとくくりにして一人の生きた人間が何に向かつてどのような行動するかということがその場で生きるということであって、その生きている行動を捕まえさせれば、舞台でも生きることができ、心理主義のように予め理解したものをなぞってみせるのではなく、役者は実際にその場に立って行動しなければ

いけないということです。それが、スタニスラフスキーの結論だった⁽¹⁴⁾。

役者は、もちろん、前もって十分にトレーニングし準備を怠ってはならない。だが、準備し理解したものを、なぞってみせるのは禁物である。さもないと、過去を反復する不毛な試みに堕してしまい、舞台で生きることからかけ離れてしまうから。「生きている行動を捕まえ」というスタニスラフスキーの「身体的行動の芸術」とは何か。

二 身体的行動と無意識の発動

俳優の教育法を綴った、いわゆる『スタニスラフスキー・システム』は全四巻からなる。自伝の『芸術におけるわが生涯』が第一巻であり、システムの序論にあたる。本論は三部構成で、スタニスラフスキーの分身ともいえる演劇学校の教師トルツォフと生徒たちとのやりとりが才能ある生徒ナズヴァノフによる日記の形式で書かれている。「俳優の自分に対する仕事」は『体験の創造過程における自分に対する仕事』（第一部）と『具象化の創造過程における自分に対する仕事』の二部からなり、第三部は『俳優の役に対する仕事』と題されている。ただし、第二部（三巻）と第三部（四巻）は未完に終わり、著者の死後、残された草稿やメモ類が編纂出版された。この第三部には次のような一節がある。

とく、舞台の上では、役としてではなく、自分自身の存在として生きる必要があり、役からはただ与えられた状況を得るだけであることを、俳優たちに忘れさせないことだ。結局のところ、課題はこんなふうになる——作家、演出家、舞台美術家、照明担当が、そして自分自身が想像のなかで生み出した所与の状況にお

いて、身体的に何をするのか、つまり、どう行動するのか俳優に真摯に答えさせることだ（けっして体験する「役を生きる」のではないし、まして感情のことを考えるなんて、とんでもない）。「……」（私が、身体的に行動する、と言って、体験する「役を生きる」と言っていないことに注意してほしい。それは、正しい身体的行動があれば、体験「役を生きる」はおのずと生じてくるからだ）。（傍点原文、「」は翻訳者の挿入⁽¹⁵⁾）

右の文章にはスタニスラフスキーが到達した「身体的行動」のエッセンスが記されている。「舞台の上では、役としてではなく、自分自身の存在として生きる」こと。だが、否定されている「役として（生きる）」とはどういう意味か。英語版の翻訳者ヘレン・ノワクは“not [live] off the part”「役のすねをかじる／居候（寄生）するのではなく」と訳している。⁽¹⁶⁾つまり「役としてではなく……」とは、⁽¹⁷⁾役に生きる（寄生する）もしくは役に生きるのではなく、「自分自身の存在として」役を生きる、ということ。たとえば、鈴木太郎という俳優がオセローの役を演じる場合、鈴木太郎がオセローになりきるのではなく、鈴木太郎という存在の内側から（live from inside one's own being）⁽¹⁸⁾オセローを生きる必要があるということ。だが、そのためには、つまり鈴木ならぬオセローを生きるには、なにより、オセローという役から得られる想像上の状況において、身体的に何をするのか（行動）、その点に集中せよ。スタニスラフスキーはそういうのである。「役を生きる」（体験する）ためには、逆説的だが、生きることや感情について考えてはならない。なぜなら、「生きること」も「感情」もおのずと生じるものだから。さもなければ、すなわち「感情について考え、感情を無理やり自分のなかから探り出そうとすると、すぐにその無理から脱臼を起こし、体験は〈役者じみた〉ものになり、行動はわざとらしい演技にかわ⁽¹⁹⁾ってしまう。」「わざとらしい演技」は、共演者を、したがって観客を「シラケ」（竹内）させる。竹内流にい

えば、それは、いまここで生きられた行動（演技）にならず、当然ながらリアルな演技とはいえなくなる。われわれの議論に沿っていえば、そうした演技は、舞台と客席の「交流」や「対話」を妨げるのである。

スタニスラフスキーが「身体的な課題」や「行動の図式」といった言葉を用いるのは、俳優が「感情を驚かせないよう」にするためだった。だが、その課題や図式に隠された本質は「けっして身体的な課題そのものにあるのではな^いい。その狙いは、「身体」や「行動」といった外^{外的}な言葉のイメージとは裏腹に、あくまでも「十分の九が無意識で成り立っているも^ととも繊細な心理に」、すなわち内^{面的}に「ある」。それほど、感情と密接なつながりを持つ無意識の領域を扱うのは、厄介で注意が必要なのである。スタニスラフスキーは次のようにいう。「人間感情の無意識の袋に押し入ったり、財布のようにかきまわしたりしてはいけない。無意識には別の態度が必要だ。それは、森の茂みから野鳥をおびきだす猟師のような態度だ。野鳥は探すと見つからないものだ。鳥自身^が飛び込んでくる猟師の囀^{おと}が必要だ。私が君たちに与えたいと思っているのは、まさに身体的、基礎心理的な課題という姿をしたこの囀^{おと}「呼び水」なのだ」。

無意識の発動（感情）を促す手法が、森の茂みに隠れている野鳥を、囀^{おと}を用いておびきだし捕獲する猟師の態度に喩えられている。無意識（意識下）から生じる感情は、森に隠れた野鳥さながら、無闇に引っ張りだそう（表現しよう）としても、うまくいかない（見つからない）。へたをすると、「真実の感情」は「紋切り型「演技」の濫用で簡単に脱白^{（21）}し」、揚げ句に「たんなる芝居がかった不自然な演技、力み、叫び、偽りのパトス」と化してしまう^{（22）}。

このように、晩年のスタニスラフスキーが到達した「身体的行動」とは、「無意識」の領域が無理なく発動し、「役を生きる」あり方やそれに伴う「正しい感情」が、「おのずと生じてくる」ようにするためのきわめて実践的

な方法であった。それは、「役者じみた行動（演技）」、「わざとらしい演技」、「職人的な演技」に陥ることなく、あくまでも「生きた、人間的な行動」⁽²³⁾をつかまえるための演技術である。スタニスラフスキーにとって、「演劇は、観客と俳優のあいだで絶えず行き来する精神的なエネルギーの交換——目、みえない糸を通じての感情の交流によってこそ、命をもつ」⁽²⁴⁾。だとすれば、俳優の「生きた、人間的な行動（演技）」こそ、観客との「精神的なエネルギーの交換」や「感情の交流」を促す演技にほかならない。つまり、スタニスラフスキーの「身体的行動の方法」こそ、舞台芸術の特質を活かす演技術なのである。

ところで、ここまで論じてきたスタニスラフスキーの演技術は、一般に流布しているイメージとかなり異なるのではないか。スタニスラフスキー・システム^①といえ、もっぱら「内面性」や「感情表現」を重視して「役になりきる」演技を体得する訓練法だと誤解^②している向きが少なくないからだ。確かに、初期のシステム^③では「情緒的記憶」を掘り下げて、役の「内面」を作る訓練法などが説かれていた。だが、中期以降、特に晩年のスタニスラフスキーは、そうした演技（訓練）の方法を否定していた。彼のシステム^④は三十年にも及ぶ長い実践と思索の集成である。そこに力点の移動や修正が見られるのは当然だろう。このような誤解や混乱が生じた理由のひとつとして、システム^⑤の翻訳・出版にまつわる複雑な事情があつた⁽²⁵⁾。たとえば、日本では長年第一部と第二部のみ紹介されてきたが、それも英語版からの重訳であり、その英語版そのものが不適切な編集（元原稿の大幅な削除）と問題点の多い翻訳の所産だった。そもそも、先の引用を含む晩年の資料を集めた第三部『役に対する仕事』の初邦訳は、やっと二〇〇八年に出版されたにすぎない。にもかかわらず、竹内敏晴や鈴木忠志ら少数の演劇人が、早い時期からスタニスラフスキーの可能性の中心^⑥を正確に読みとっていたことは注目に値する⁽²⁶⁾。

ならば「現代口語演劇」の平田オリザによるスタニスラフスキー批判はどう考えればよいのか。⁽²⁷⁾ 平田の批判も右の不完全な翻訳や出版事情に起因するといえるのか。

三 外的要因と「リアル」構築

平田オリザ（一九六二―）は演劇における「対話」（コミュニケーション）の機能を重視する。この点では、スタニスラフスキーや竹内と同じである。「対話」とは、平田の定義では、双方が変わることを前提とした営為のこと。その彼が、スタニスラフスキー・システム^①を公然と批判するのはなぜなのか。システム^②を直接論じた文章を吟味する前に、彼が役者のふるまいをどのように制御するのか、その演出法にふれておきたい。

平田オリザがロボット工学者の石黒浩と「ロボット演劇プロジェクト」を手掛けてきたことは周知の通りである。二人が創ったロボット演劇はいまのところ全五作。第一作目『働く私』（二〇〇八年初演）は、男女二人の俳優と二体（男女）のロボット（日常活動型ロボット「ワカマル」）のみ出演の小品（二七分）だ。近未来の設定で、失業者には国から家事を手伝うロボットが支給されるため、「真山夫婦は2体のロボットと一緒に暮らしている。ロボットの名前はタケオとモモコ。モモコは、料理やデザートを作ったりと、真山家にとってはなくてはならない存在である。一方タケオは……。働くために作られたロボットが、働けなくなってしまった状態を通して、人間にとって、『働く』とはいかなることなのかを考える⁽²⁸⁾」という趣向。石黒は、この演劇を共作した際、平田の演出に驚いたという。

「平田氏は、役者に対して一切精神論を口にしない。『もつと感情を込めて』などの、解釈が難しいことは何一つ言わないのである。そのかわり、役者の立ち位置や間の取り方については非常に厳密である。五〇センチ前に

来てとか、○・三秒間をあけてというように、まるでロボットの制御するように、役者に指示を与えていく。それを見ていて、これならば簡単にロボットもプログラムできると思った⁽²⁹⁾。平田の演出は「精神」や「感情」などの内面にはいつさい関わらない。彼が集中するのは、役者の立ち位置や間の取り方等、「まるでロボットを制御するように」身体的（物理的）な動きを調整するための指示である。つまり、平田の演出は、内面ではなくもっぱら外面（外側）に関わるものであり、しかもその制御は「非常に厳密」なのだ。石黒の報告はさらに続く。

演劇に必要なロボットの動きや台本（『働く私』）が完成し、役者とロボットのリハーサルが始まると「俳優たちが大きなショックを受けた」。理由は「平田氏の彼らに対する演技指導と、ロボットに対する演技指導にまったく差がなかったためである。役者たちは、自分たちはロボットと同じなのかと思ったという」。石黒が平田にそのことを伝えると、平田は「『役者に心は必要ない』と言い切った」。さらに、自分の「指示通りに動けば、必ず演劇の中で心を表現できる」とも⁽³⁰⁾。

俳優への演技指導（演出）とロボットへの演技指導が変わらないと知れば、俳優たちがショックを受けるのも無理はない。なにしろ平田は「役者に心は必要ない」とまで言い切っているのだから。たしかにこれは衝撃的な問題発言だ。われわれの議論に戻れば、心のない俳優（ロボット）の演技と観客との間に「エネルギーの交換」や「感情の交流」は起きるのか。そう問うてみれば、問題がはつきりする。そもそも、観客はロボットに感情移入することは可能なのか。もしそうなら、先に論じたスタニスラフスキーの演技術は無意味ということになるのか、と⁽³¹⁾。

初のロボット演劇『働く私』の初演後、人間とロボットとの対話だけでなく、ロボット同士がやりとりするラストシーンに感動する観客を見て、平田は「スタニスラフスキーに勝った」と思ったらしい。「近代劇の歴史つ

ていうのはいろんな転機があります。ひとつはスタニスラフスキーが人間の内面というものをきちんと再構築して、そこから発話するところ、アリティが出る、っていうことで、それが百年続いてきたわけですけど、ロボットは絶対に内面がないんで、そのスタニスラフスキーの理論が間違ってたというのが物理的に証明できた。現代口語演劇が誕生して二十年なんですけど、その理論としては『外的な要因だけでリアルは絶対構築できるし、内面は関係ない』っていうことを理屈でずっと言ってきたわけです。二十年かけて。だから言うなれば相対性理論が実験で証明されたようなものですね⁽³²⁾。ここで「スタニスラフスキーの理論」として言及される「人間の内面をきちんと再構成する」云々のいわゆる内面重視の演技術は初期の特徴であり、後にスタニスラフスキー本人によって修正されたことはすでに述べた⁽³³⁾。さらに、平田自身が創作した「現代口語演劇⁽³⁴⁾」でいえることが、スタニスラフスキーの念頭にあったシェイクスピアやイプセン等の近代演劇を演出する際にも該当するのは、議論の余地がある。だが、こうした疑問はひとまず置いて、平田がスタニスラフスキーを論じた文章を見てみよう。

「私は、演劇における『リアル』は、観客の脳の中で形成される一つのイメージ、幻想だと考えています。『……』スタニスラフスキー・システムでは、よく、内面の探究が伴わない演技を、『上辺だけの演技』と呼びます。私は、誤解を恐れずに言えば、上辺だけの演技でもまったくかまわないと考えています。私に（あるいは観客に）リアルな感覚を与えてくれれば、俳優の心の中では、今晚のおかずのことを考えていてもいい、こうにかまいません。『……』すぐれた俳優が、きちんと内面を作った演技をして、そのあとに、何か他のことを考えながら同じ演技をしたとします。おそらく私には、その違いは分からないとおもいます⁽³⁵⁾」。平田にとって、演技とは、なによりリアルであること、より正確には、リアルに見える（リアルな感覚を与える）ことが至上命令だ。ゆえに、俳優がリアルに見える演技をするなら、心の中で、つまり内面で、その演技とはまったく無関係のことを考えて

いてもまったく関知しない。なぜなら、演劇の「リアル」あるいは「リアリティ」は、観客の頭のなかで形成される幻想だから。平田オリザはそういうのである。もっとも、これは別に新しい考えではない。そもそも演劇とは虚構であるから、平田は至極当然のことを述べているのである。

では、感情についてはどうか。たとえば「悲しい」という感情は、平田によれば、『カナシイ』という言葉で表せる以上、それはすでに戯曲の中に折り込まれているはずの事柄である。役者はこれ以上『悲しく』演技し表現する必要は、まったくない。だが、役者は、「ほうっておけば、『悲しい』という言葉で戯曲の中から発見したとたん、悲しく悲しく演技しようとする習性をもっている」。つまり『悲しさ』という概念を無理に表現しようとする⁽³⁶⁾」。

これは、役者という種族が激しい感情を自分で味わいたい欲求をもつと述べた竹内敏晴の認識と重なる。ただし、竹内やスタニスラフスキーが「感情ありき」で芝居するのを戒めるのは、その演技が空回りし、シラける結果（わざとらしい演技）に、つまりリアルでない演技になるからだ。一方、平田が役者に「表現の欲求」から解放されることを望むのは、役者が「戯曲の要請を踏み外す」事態を避けるためにほかならない。そもそも平田が役者を「表現者」ではなく「再現者」と見なすのはそのためだ。平田と竹内やスタニスラフスキーとのこうした違いは、ひとつには、平田が劇作家（戯曲家）であるという事実に起因する（スタニスラフスキーはもちろん俳優兼演出家、竹内は演出家）。

「大前提として、まず戯曲家は、役者がどのように演技しても悲しく見える戯曲を書かなくてはならない。戯曲家は、そのように確⁽³⁷⁾かさを持った戯曲を書かなければならない」（傍点平田）。

平田の戯曲家（つまり自分）への要請はかなり厳格だ。戯曲家（劇作家）はすべてを語り尽くさねばならぬ。た

たとえば、「役者の立つ位置、動き、表情など、およそ言葉に出来る範囲のものは、すべて戯曲におさめるべきだ」と平田はいう。「従来の戯曲のト書きは、たいへんに中途半端で、たいていの場合それを補う役割を演出家が果たしてきた。しかし、ダンスでいうところの『振り付け』にあたるこの作業は、戯曲によってなされるべきだ。私の考える戯曲とは、世界そのものを写す設計図だからである」⁽³⁸⁾。要するに、平田が目指す「世界を写す」演劇は、その「設計図」通りに役者が発語し動けば、相応の感情や心が「あるように見える」戯曲（設計図）の存在こそが「大前提」となる。そこには役者の「自由」が入る余地はない。平田の台本がよく楽譜になぞらえられるのは、台詞以外に役者の立ち位置や発語のタイミング等を厳密に指示する図や記号が記されているからだ。だが、彼が腐心するのは立ち位置や発語のタイミングだけではない。平田は、感情や心があるように見える「状況」（コンテキスト）を巧みに作り上げる稀有な劇作家である。例を挙げよう。

高村光太郎と智恵子の生活を扱った『暗愚小伝』と題する作品がある。⁽³⁹⁾ 高村家の居間を舞台に、彼を取り巻く縁者や知人との交わりが、沈黙や間を含む対話で表現される。智恵子が正気を失う場面もあるが、俳優は殊更にそうした演技をするわけではない。つまり、劇的な変化はない。あつたとしても明示的には見えない。居間のテーブルには、つねに将棋盤と駒の入った箱が置かれている。モノは変わらないが、ヒトの心はときに大きく揺れ動くことが示唆される。先の実例として取り上げたいのは、智恵子の法事後の場面である。この席で、光太郎はこれから銀座へ繰り出そうと客たちを誘うが、その後、突然やめるという。

光太郎 ★悪い、やっぱり、僕行かない。

荷風 え？

光太郎 ごめん。やっぱ、ちょっと行かない。

荷風 だって、おまえが行くって言い出したんだよ。

光太郎 悪い、

一恵 行きましようよ。

光太郎 あれ、ま、たまには夏木にうまいもん食わせてもらえよ。

夏木 いつも食わせてるって、

光太郎 いあ、まあ、外でさ、

荷風 え、じゃ、この四人で行けっていうの？

〔★前の台詞の語尾に重ねて言う。〕⁽⁴⁰⁾

こうして法事客の荷風ら四人はタクシーで銀座へ出かけてしまう。その後のト書きは次の通り（傍点引用者）。

*四人、下手に退場。

光太郎、一人残って、机の上の茶碗を片づける。

茶碗を持って上手に少し急ぎ足で退場。

数秒後「田園」がかなり大きな音で聞こえてくる。

一分間ほどの空白。⁽⁴¹⁾

「田園」はもちろんベートーヴェンの「田園交響曲」のこと。智恵子は、生前、そのレコードを好んで聴いていたという。

このシーンの幕切れは、右の通り、一人になった光太郎が客の使った湯飲み茶碗を盆に載せ、上手へ去る。ただそれだけだ。が、無表情のまま、「茶碗を持って」「少し急ぎ足で」去って行くその後ろ姿を劇場で見たとき、グツと迫るものがあつた。妻を失った彼の深い悲しみや慟哭が、湯呑みを片付ける俳優（山内健司）のからだから透けて見えたのだ。

台本に「シーン3／一九三七～一九三九／大いなる日に」と記されたこの場面で、光太郎は合計四回ほど登退場（出ハケ）を繰り返す。まず、後から来て線香をあげたいという客（荷風と村田絹子）を仏壇があるらしい奥（上手）へ案内してハケる（一回目の退場）。この間、舞台に残った客たちは、「あの、高村さん、最近、変じゃないですか？」「え、まあ、あの調子でしょ、いつも。」「★そうですか？」「そりゃ、智恵子さん亡くなって、まだ、元の通りってわけにはいかないでしょうけど、」「いや、そうじゃなくって、詩のことなんですけど、」「ああ、」「戦争の詩ばかりでしょ、最近、」「うん」「高村さん、本気であんなこと書いてるんでしょうか？」云々、と舞台に不在の光太郎について対話を交わす。⁽⁴²⁾その後、光太郎らが再登場し（二回目の登場）、客たちとの長いやりとりの後半で彼は客の一人（村田）が銀座でやっている小料理屋へ行こうと誘うのだ。「行ってみよう、これから、村田さんのお店。」「……」行きましようよ、法事っていつでも、なんか、陰気なんじゃ困るから」⁽⁴³⁾と。そして、二回目の退場後、知人らは「なんか、変じゃない、」「高村ですか？」「うん、」「さつき、本間さんにも言われた

んだけど、「うん。」「まあ、でも、こういう時勢だからさ、」「うーん。」「まあ、とにかく、元気になってよかったじゃないですか。」「まあ、それは、」「一時はどうなるかと思ったけど、智恵子さん亡くなったとき。」「うん。」と、退場した光太郎のことをまた語り合う⁽⁴⁴⁾。三回目にハケるとき、彼は「ふらふらと」退場することになる。この後四回目に再登場した彼は、先に引用した通り、突然「僕行かない」というのである。

こうして、数回の退場による不在の間、残された人物たちがクロスのように語る言葉は、落ち着きがなく少しはしゃいだような舞台上の光太郎とは別の側面を、あるいは別の側面の存在を観客にイメージさせる。つまり、舞台外の時空間で、最愛の妻の死に直面し、その後、戦争詩ばかり書く詩人の内側を意識させるのだ。結果、唐突に銀座行きを取り止め、独りで茶碗を片付けて立ち去る姿から、観客は、その見えない内面(余白)や心情を想像力で補うよう促されるのである。光太郎の内面や心情は、もちろん明示的にはいつさい描かれてはいない。妻を失った悲しさ(感情)を役者が直接演技で表現する(役者に心を必要とする)台詞やト書きはどこにもない。代わりに、そうした心情を想像するよう促す余白もしくは空白が巧みに仕込まれているのである。観客は、その空白を想像力で埋めなければならない。智恵子の愛聴した「田園」が流されるなか「一分間の空白」が設けられたのは、そのために劇作家が用意した余白の時間にほかならない。

このように、平田オリザは俳優の内面もしくは精神にいつさい介入せず、立ち位置や間の取り方、登退場や沈黙(空白)、さらに状況等の「外的要因」(役者に心は必要ない)を厳密に設定し調整することで、リアルな舞台を作り上げる⁽⁴⁵⁾。つまり、当初の議論に戻れば、観客の想像力が絶妙に導かれ促されて、舞台との内的な「対話」や「交流」を可能にするのである。だが、すでに見たとおり、「外的要因」のみでリアルな舞台が実現できるのは、平田自身の創作した戯曲が大前提である。かつてスタニスラフスキーが出演し演出した既製の作品にこのやり方

を採用したらどうなるか。たとえば、先に引いたスタニスラフスキーの「身体的行動」に関する一節は、『オセロー』の演出プランからの抜粋であった。仮に、平田オリザが「現代口語演劇」の手法で『オセロー』を演出したらどんな舞台になるのか。ちょっと想像できない。⁽⁴⁶⁾ 静かな演劇とも呼ばれる平田の「現代口語演劇」とシェイクスピア悲劇のような古典演劇（近代演劇）とは、スケールも世界観もまったく異なっているからだ。⁽⁴⁷⁾ 後者において、若い俳優たちが、観客との「交流」を阻害する「芝居がかった不自然な」「わざとらしい演技」に陥らず、むしろ「交流」を促進する、生きた演技をするにはどうすればよいか。そうした思索と試行の末に創出されたのが「身体的行動」の方法であった。

平田がスタニスラフスキーを批判する理由については、ここで詳述する余裕はない。ただ、先にふれた翻訳等の問題というより、むしろ「創造（詩）的誤読」（ハロルド・ブルーム）というべきだろう。⁽⁴⁸⁾ 批判の発端には、人（役者）の内面や精神に他人（演出家）が介入することへの嫌悪や、前の世代のスタニスラフスキー信奉者たちへの反撥が関与していたかも知れない。だとしても、スタニスラフスキーという「近代演劇の創始者」（平田）を仮想敵として定め、これと対抗し乗り越えることで、平田はまったく異なる独自の「現代口語演劇」（演技・演出法を含む）を創り上げようとした。そう見るのが妥当だと思われる。⁽⁴⁹⁾

おわりに

ところで、平田が「リアル」を構築するために採った「外的要因」の方法は、スタニスラフスキーが到達した「身体的行動」の方法と似ているとはいえないか。

共に、内的もしくは心（感情・無意識）的な領域への介入を意識的に避けていた。すでに見たように、前者が

内面を忌避し外面的な要因にこだわるのは、その通りに演技すれば「リアル」が実現できるはずの自身の戯曲から、役者を逸脱させないため。後者が感情（無意識）の領域に触れないのは、さもないと感情が脱臼し芝居がかった演技になるから。だが、両者とも、俳優の注意を外面的な領域に向けさせる狙いは、あくまでも、戯曲（台本）に相応しい内面（感情や心）が、前者はあるように、「見せる」ため、後者はおのずと「生じる」ようにするためだった。立場は異なるとしても、内面性（無意識）という難問への対応策として共に外面重視の方途を選んだ点では変わらない。

そうはいっても、スタニスラフスキーや竹内敏晴が、「役者に心は必要ない」との考えに同意することはむろんありえまい。この違いは、先に述べた通り、ひとつには両者が扱う作品の違いから来ている。これを、内面や心を前提にした立場（スタニスラフスキー・竹内敏晴）と前提にしない立場（平田）の違い、といいかえてもよい（ただし、竹内はスタニスラフスキーから多くを学んでいるとしても、当然ながら、二人を同列に論じることはいかぬ⁽⁵⁰⁾）。スタニスラフスキーは、より正確には、内面や心（感情）はあるとしても無理に制御しえない無意識の領域に属するため、直接関わる演技技術を修正したのだが。いずれにせよ、両者の違いはやはり大きいというべきか。たとえば、スタニスラフスキーから学んだ竹内敏晴が、俳優の演技（行動）は、観客のからだに届き、そこにふるえを起こし反応させて初めて成立すると述べたことを思い出そう。この演技（演劇）観は、平田オリザのそれとはかなり隔たりがある。竹内の関心は、元来、演技を通して明らかに「からだ」や「ことば」の問題に向いていた。彼が、演劇の世界から、演劇を手段として用いるレッスン（「からだ」と「ことば」のレッスンや「呼びかけ」のレッスン等）に軸足を移したのは、まさにそのためだ。平田の「現代口語演劇」は、竹内のいう「からだ」よりも、観客の「頭」（想像力）をターゲットに定め、反応させようとする。脳内で想像力が駆動した結果、からだ

にふるえが起こるのはありうるだろう（特に笑い）。だがそれは、スタニスラフスキーや竹内の「役を生きる」演技が惹き起こす「精神的エネルギーの交換」や「感情の交流」ほどの熱量には達しないかも知れない。⁽⁵¹⁾ 平田は舞台と観客のやりとりをいみじくも「内的対話」と呼んだ。その意味で、平田の演劇は、何度でも反復可能な映画に近づいているともいえる。演劇（舞台）の一回性を「神話」として退ける平田の考え方は、この印象を裏付ける。⁽⁵²⁾ それでも、生の舞台と映画（映像）とでは千里の径庭があることは、別稿で論じたとおりである。

最後に、舞台芸術（劇場文化）にとって重要とされる「感情」について触れておきたい。「感情表現」は、表現者の内側に感情がある、もしくは、内側から感情が生まれることが前提の営為である。だが、「感情」（内面）に対する立場が異なるスタニスラフスキーも平田オリザも、俳優に、直接的な感情（内面）表現を回避させ、身体的／外面的行動や課題に徹することを要求した。ここから見れば、感情は、むしろ人と人とのあいだに生成するものと見なす方が妥当なのかも知れない。⁽⁵³⁾ 少なくとも、舞台と観客との「交流」や「対話」を生む実践的な演技に関しては、そういえる。

注

- (1) 劇場文化が他の芸術文化と決定的に異なる点、及び両者を峻別しうる根拠については、児玉「劇場文化の生命——舞台と観客のあいだ」『桜文論叢』第九十一巻（日本大学法学部、二〇一六年）一二五頁。
- (2) 文学や美術のなかでも、詩人自身による詩の朗読パフォーマンスや、ハプニング等の美術家によるパフォーマンス・アートは、舞台芸術の特性を詩や美術のジャンルに取り込もうとする試みといってよい。
- (3) 竹内敏晴『劇へ——からだのバイエル』（星雲書房、一九七五年）一七七―七八頁。
- (4) 児玉、前掲書。
- (5) 竹内、前掲書、一七七―七八頁。

- (6) 竹内敏晴・山崎哲の対談「演じない演劇のために」『理想』一九八五年十月号、四二頁、傍点引用者。以後、引用の末尾に(傍点原文)と記す以外、原則として傍点はすべて引用者による。
- (7) 同書、五〇頁。
- (8) 竹内『劇へ』二〇七頁。
- (9) 同書、二〇七―八頁。
- (10) 「演じない演劇のために」四二頁。
- (11) スタニスラフスキーは、俳優は「観客のことはあまり考えないようにして、そばにいる戯曲の登場人物のことをもつと感じるように」と説き、「観客と交流するための最良の方法は、戯曲の登場人物との交流を通じたものなのだ」といつている。コンスタンチン・スタニスラフスキー『俳優の仕事 第一部——俳優教育システム』岩田貴・堀江新二・浦雅春・安達紀子訳(未来社、二〇〇八年)五四六頁。なお、竹内は宮本研の『裸足の青春』という職場演劇用の作品を稽古中、「相手に声が届くとはどういうことで、どうしたら成り立つのだろうか」と疑問を抱き、「話しかけのレッスン」を始めるきっかけになったという。竹内『からだ』と「ことば」のレッスン(講談社現代新書、一九九〇年)一九二―二一頁。
- (12) 『劇へ』二〇八頁。
- (13) 竹内『ことばが劈かれるとき』(思想の科学社、一九七五年/ちくま文庫、一九八八年)七七頁、竹内『レッスンする人』(藤原書店、二〇一〇年)二二七頁参照。後者によれば、一九四七年に創設された「ぶどうの会」は「山本安英とぶどうの会」が正式名称で、実際は劇団ではなく、スタニスラフスキー・システムを研究する研究会だったという。竹内は一九五二年に山本の紹介で演出家の岡倉士朗に師事し、その後ぶどうの会に入る。一九六四年に竹内が退会したのとほぼ同時に同会は解散。なお、竹内は一九五五年の初夏から同会の数人で、システム研究の資料として、スタニスラフスキー晩年の考えが盛り込まれた『オセローの演出プラン』(モスクワ、一九四五年)の翻訳を試みた。方法は、ロシア語の「原本を牧原(純)が訳し、仏訳を天野(二郎)が、英訳を竹内が読みながら、週一回ずつ会合して討論をつづけた」とのこと。竹内『オセロー』演出プランについて『テアトロ』第二七四号(一九五八年三月)八二―八三頁参照。
- (14) 『レッスンする人』二二八―二九頁。
- (15) スタニスラフスキー『俳優の仕事 第三部——俳優の役に対する仕事』堀江新二・岩田貴・安達紀子訳(未来社、二〇〇九年)三四二―四三頁。スタニスラフスキーは一九二九年から三〇年にかけて静養先のニースから『オセロー』の

演出プランを場面毎にメモし、モスクワ芸術座（主演のレオニードフ宛）へ送っていた。第三部の第五章は、このメモを集めた『オセローの演出プラン』（竹内たちぶどうの会が翻訳を試みたもの）からの抜粋が重要な部分を占めている。ただし、引用の条りは、新しい英語版 Konstantin Stanislavski, *An Actor's Work on a Role*, translated and edited by Jean Benedetti (Routledge, 2010) にはないが、著者の死後一九四五年にモスクワで出版された『演出プラン』の英訳本に見出せる。Stanislavski *Produces Othello*, translated from the Russian by Dr. Helen Nowak (Theatre Arts Books, 1948; 1963), p. 32 参照。

(16) Loc. cit.

(17) 「役を生きる」と「役に生きる」の違いについては、竹内『ことばが劈かれるとき』（ちくま文庫）一一二―一三頁参照。

(18) Nowak, loc. cit.

(19) 『俳優の仕事 第三部』三四三頁 (Loc. cit.)。

(20) 本段落の引用はすべて、同書、三五三頁 (*An Actor's Work on a Role*, p. 36)。ただし邦訳では最後の一文にある「囀」は「呼び水」と意訳されている。

(21) 同書、三七三頁。

(22) 同書、三〇一頁。

(23) 同書、三四六頁。

(24) スタニスラフスキーのインタビュー（一九一四）、ジーン・ベネディティ『スタニスラフスキー伝 一九六三―一九三八』高山図南雄・高橋英子訳（晶文社、一九九七年）二六六頁 [Jean Benedetti, *Stanislavski: A Biography* (Routledge, 1988; 1990), pp. 199-200] に引用、訳文は一部改変。児玉、前掲書、二二三頁参照。

(25) スタニスラフスキー・システムへの誤解（曲解）や混乱、及び、その演技論の重点の移動については、堀江新二「等身大のスタニスラフスキー（US バイアスとUSSR バイアスを超えて）——スタニスラフスキー生誕150周年に寄せて」『テアトロ』第八八二号（二〇一三年十一月）七六―八四頁、堀江「訳者あとがき」『俳優の仕事 第三部』四五九―六八頁参照。また、スタニスラフスキーの著作の翻訳・出版に関わる複雑な事情については、岩田貴「訳者あとがき」『俳優の仕事 第一部』（未来社、二〇〇八年）五六―七三頁参照。

(26) 竹内がぶどうの会で『オセローの演出プラン』の英語版等を熟読していたことはすでに触れた。鈴木スタニスラ

フスキー理解については、中村雄二郎との対談『劇的言語』（白水社、一九七七年）六一―六四頁参照。

(27) 平田のスタニスラフスキー批判に触れたものとして、たとえば、内田樹「平田オリザの法外な過激さについて」がある。文藝別冊『総特集 平田オリザ——静かな革命の旗手』河出書房新社、二〇一五年）一〇八―一〇頁。

(28) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター編『ロボット演劇』（大阪大学出版会、二〇一〇年）四頁。

(29) 石黒浩『ロボットとは何か——人の心を映す鏡』（講談社現代新書、二〇〇九年）一四三頁参照。

(30) 同書、一四四―四五頁。

(31) 筆者がロボットへの「感情移入」を体験したのは、平田の作・演出によるアンドロイド演劇『さようなら』の幕切れにおいてだった（二〇一四年十一月二十二日／東京藝術大学 音楽学部第六ホール）。その詳細を記す紙数はないが、スタニスラフスキーの演技術が無意味でないことは、本稿の「おわりに」で論じた通りである。

(32) 『エクス・ポ』（第二期第〇号、二〇一一年一月）に掲載の平田のインタビュー、佐々木敦「アンドロイドはロボット演劇の夢を見るか？」『総特集 平田オリザ』一二八―二九頁に引用。

(33) 「本書で意識的に感情と体験に優位を与えたことをいまでは悔やんでいるのだ」（『俳優の仕事 第三部』三〇三頁）。なお、アメリカのリー・ストラスバーグによるアクターズ・スタジオは、「感情や情緒の路線」の内面を重視した初期から中期のスタニスラフスキーのみがシステムの中心のように偏って捉えてしまった（堀江、前掲書、七八頁）。その意味で、平田のスタニスラフスキー批判は、実質的には「メソッド演技」批判と呼ぶ方が当たっている。

(34) シェイクスピア学者の河合祥一郎によれば、「シェイクスピア劇やギリシャ悲劇は新劇ではない。つまり近代演劇ではなく、そもそも綴帳も照明も舞台装置もない古典芸能であり、その意味で日本の狂言と同じだ。日常語とかけ離れた弱強五歩格の韻文（詩）で大部分の台詞が成り立っているシェイクスピア劇は、謡のある狂言によく似ている」（河合「オリザの芝居の precision（正確さ／精密さ）」『総特集 平田オリザ』一三四頁）。当時、本国のグローブ座で演じられた原語によるシェイクスピアはその通りだが、ロシアや日本等の諸外国で翻訳上演される場合は、「近代演劇」に数えることも許されよう。

(35) 平田『演技と演出』（講談社現代新書、二〇〇四年）一八五―八六頁。

(36) 『平田オリザの仕事Ⅰ——現代口語演劇のために』（晩聲社、一九九五年）六七―六八頁。

(37) 同書、六七頁。

(38) 同書、六六頁。ただし、平田はダンスの「振り付け」を、戯曲のト書き（演者の動きや立ち位置等に関わる身体上

の指示）の部分にのみ限定しているが、台詞も含むというべきである。

(39) 初演一九八四年、大幅改編一九九一年。筆者が観たのは二〇一四年十月（吉祥寺シアター）。

(40) 二〇一四年十月の上演ワープロ台本、四九頁。

(41) 同台本、五〇頁。

(42) 同台本、三七頁。

(43) 同台本、四三頁。

(44) 同台本、四五頁。

(45) 最新作『ニッポン・サポート・センター』の幕切れにおける鮫島太郎役（志賀廣太郎）や春山若葉役（辻美奈子）の、観客に背中を向けた演技（発語）も、その内面や心情を観客に想像させる手段のひとつである（二〇一六年六月二五日／吉祥寺シアター）。佐々木、前掲書、一三二―一三三頁も参照。なお、平田の「外的要因」の手法は、ヘミングウェイの *hard-boiled style*（氷山の一角で水面下に隠れた大部分を表象する）を想起させる。このアメリカ作家は主人公の内面や感情描写を排し、もっぱら外的行動のみ記述することで、その内面や感情を表出した。

(46) 「現代口語演劇」版の『オセロー』を上演するには、原作の大幅な改変（翻案）が必要だろう。仮に実現すれば大変興味深い舞台になるかも知れない。従来のシェイクスピアとはまったく別物になると思われるが。

(47) 河合、前掲書、一三三―一三五頁参照。

(48) Harold Bloom, *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry* (Oxford U.P., 1973). 等を参照。

(49) 平田オリザのスタニスラフスキー批判、および内面重視の演技術批判の意味については本稿の範囲を超えるため、稿を改めて論じたい。

(50) 竹内は幼少期に耳が不自由で喋れなかったが、突然「ことが劈かれて」話せるようになり、演劇の世界に入った人である。竹内も、内面や心を自明視していたわけではない。『ことが劈かれるとき』等を参照。

(51) 別稿で論じたように、表現者と観客とのやりとりを平田は「内的対話」と呼ぶが、この「表現者」はあくまでも戯曲の書き手（自分）を意味する。そこに役者は想定されてはいないのだ（児玉、一一―一三頁）。だが、実際の上演では、観客が反応すれば、それが役者にはね返り、後者のからだもたとえわずかではあれ、変化せざるをえないだろう。少なくともその役者が本物のロボットでない限り。

(52) 児玉、同書。

(53) 人間の心を知るためにロボットを研究する石黒浩によれば、「心とは、感情とは、人間が人間同士や、人間とロボットの相互作用を見て感じる、主観的な現象である」(石黒、前掲書、一五三頁)。本稿のこれまでの議論を踏まえ、これを、感情や心は、間主観的な現象である^レ といいかえることもできるだろう。

近藤芳樹『牛乳考』について

——『寄居歌談』から『舐蘇小言』『牛乳考』へ、そしてその執筆意図——

小 野 美 典

キーワード…『牛乳考』、『舐蘇小言』、『新聞雑誌』、牛乳、福羽美静

一 はじめに

『牛乳考』は、周防国出身の歌人・国学者近藤芳樹によって著された作品である。同じ著者の手になる『屠畜考』と合わせて、『牛乳考／屠畜考』と題して出版されたもので、本文末尾（『屠畜考』の後）の刊記に「明治五年九月 近藤芳樹」と記されている。後述のように、この年月には若干の問題も存する（福羽美静序の「明治五年冬季」との整合性）が、一応、この年月を出版の目安と考えることにする。

『牛乳考』は、半紙本五丁の小品ながら、先行研究において様々な言及されてきた作品である。しかも、国文学・歴史学・畜産学・乳業など、様々な分野において取り上げられている。

畜産学・乳業の方面からの研究では、加茂義一の論が詳しい⁽¹⁾。加茂以降のこの分野の論稿は、何らかの形で加

茂の影響を受けている。以下にその主要部分を掲げる（傍線部は稿者、以下同断）。

明治五年には近藤芳樹の『牛乳考』と『屠畜考』とが合本で刊行された。近藤は山口県の国学者で律令制度の権威であり、①『牛乳考』はわが国における牛乳飲用の起源及び典例を明らかにし、その滋養効果を説いたものである。（中略）

ことに『牛乳考』は、当時日本人が牛乳の飲用を西洋の風習とみなし、それを穢れたことと考えていたときにあたり、すでに②わが国においても遠き昔からわれわれの先祖が、たとえ王侯貴族の如き特権階級であつたにしろ、彼らが牛乳、酪、蘇あるいは醍醐を愛用していたことを明らかにしたことは、当時としては卓見であり、しかも保守的な傾向の強い国学者のなかで、彼が牛乳飲用に對する③日本人の偏見に反対し、牛乳の滋養のあることを認め、その飲用の普及を一般に勧めたことは敬服に値する。

加茂は、傍線部①②で、『牛乳考』は我が国における牛乳飲用の起源と典例を明らかにしてその滋養効果を説いた作品で、遠い昔には王侯貴族などの特権階級が牛乳ほかを愛用していた事実を示した、とした。また、傍線部③では、「日本人の偏見に反対し、牛乳の滋養のあることを認め、その飲用の普及を一般に勧めたことは敬服に値する」と言っている。加茂は科学史研究の立場から、『牛乳考』の記す史的事実の抽出に努めており、如上の指摘は肯綮にあたろう。

その後この分野では、雪印乳業が出版した『牛乳と日本人』において、『牛乳考』の冒頭が紹介され、「政府も明治五年九月、山口県の国学者・近藤芳樹に命じて『牛乳考』をまとめさせた。国学者というのが一見奇異だが、

律令制度の權威だったからだろうか」と記された⁽²⁾。この著書では、加茂の指摘した内容には触れず、政府が近藤芳樹に命じて『牛乳考』をまとめさせた⁽³⁾という、当時の政府の政策であった点が強調される。近年の畜産学・乳業・科学史・飲食史関係の分野では、『牛乳考』という点、「(近藤芳樹は)文部省の依頼により、肉食と牛乳を普及させるため『屠畜考』『牛乳考』を執筆し、食事の迷信打破に努めた⁽³⁾」という点に重要性が見いだされているようで、細野明義も、「新政府も国学者近藤芳樹に命じて牛乳の啓蒙書を書かせ、明治五年に「牛乳考」を刊行している⁽⁴⁾」と述べている。

ただ、この政府(文部省)が近藤芳樹に命じて『牛乳考』を書かせた⁽³⁾という指摘は、『牛乳考』の本文・奥書・刊記などには記されておらず、また、芳樹の周辺資料からも確認できない。次章で『牛乳考』成立の詳細を考察するが、成立当時の芳樹の肩書(山口県の国郡志取調掛、社寺局勤務)から鑑みてもその可能性は低い。政府(文部省)が命じて⁽³⁾に関しては、稿者としては疑念が存する旨をここに記し、判断を保留して後考に俟ちたい。国文学・歴史学の方面では、近藤芳樹の閱歴に関する研究⁽⁵⁾で『牛乳考』に触れたものは多い。年譜上の事実として、明治五年九月に『牛乳考・屠畜考』が出版された⁽⁶⁾というものである。内容に関して詳細に言及したのは、児玉識であった。やや長いが、以下に引用する。

明治五年(一八七二)に芳樹は「牛乳考、屠畜考」と題する二つの短い文を併載した書物を著しているが、それにも芳樹の現実主義的・合理主義的思考が多く見られる。

「牛乳考」は、「牛乳は補益の最上なる良薬にして、常にこれを飲むときハ、弱きを強く、老たるをつなせしむ」の文章ではじまり、牛乳を西洋伝来のものとして忌み嫌うものがあるが、牛乳は我国では孝徳天皇

の時代に朝廷に献じた例があり、またそれ以後も宮中で飲んでいたことを記した文献のあることをあげ、牛乳が決して西洋伝来のものでないことを説いている。（中略）

これまでの日本人が忌み嫌っていたことを逆に肯定し、驚くほど現実的・合理的な解釈をしている。一般には、「日本ニテ四足ノモノヲ喰ヌト云コト、神道ノ忌処トテ世甚タ穢ハシキ様ニシテ喰ズ、是固ヨリ惑ナリ」（『雑事筆記』）とあるように、神道が四足のものを食べることを忌み嫌っていたと伝えられており、これが神道家の全般的傾向であったとするならば芳樹は神道家の中でかなりユニークな存在だったと思われる。しかし、国学者らしく、仏教隆盛以前の風習を多くの史料から明らかにし、そこから、本来の日本の価値観を見直すというかたちで現実の日本社会の旧弊批判をしており、もろもろの悪しき因襲からの脱却を希望していた当時の人々にとって、芳樹の発言は説得力のあるものとして歓迎されたことであろう。⁽⁶⁾

児玉は、芳樹の中に「現実主義的・合理主義的思考」を看取する。そして、その思考が傍線部のような形で、現れたとする。

この児玉の論に対して、影山純夫は『『牛乳考』『屠畜考』』⁽⁷⁾では、芳樹は牛乳の適飲や牛馬の食用を勧めている。これを芳樹の現実主義的・合理主義的姿勢と評価する見方もできるかもしれないが、考証派の文献中心主義からの現実見直しというように考えるほうがよさそうである⁽⁸⁾とする。影山の論は、芳樹を所謂「考証派」国学者のグループとして位置付けた藤田大誠の論⁽⁸⁾などを参照したものであろう。

以上、研究史を概観したが、『牛乳考』が抱える問題点は、以下の三点に整理できる。

第一は、『牛乳考』成立の経緯。「政府が命じて」という旧説に疑問が存することは既に述べたが、それも含めて、先行研究で成立の経緯を追った論は見当たらない。また、それに関連するにもかかわらず、『牛乳考』の序文・奥書を問題とした論も見られない。本稿では、序文・奥書にも留意して、周辺資料も援用しながら、成立の問題を考えてみたい。

第二は、前項と関連して諸本の問題である。幕末・維新期の版本であるから、諸本というほどの仰々しいものは存しないが、版元の異なるものや明治二二年に叢書に入った本文（本文の字句・奥書が異なる）などが存在し、それらが先行研究を混乱させた形跡がある。本稿では、現段階の追求できる範囲で、それらに関して考察したい。

第三は、その内容である。現実的・合理的精神の現れとする児玉識に対して、考証派の文献中心主義からの現実見直しとする影山純夫など、論は帰一していない。また、稿者は、児玉の「もろもろの悪しき因襲からの脱却を希望していた当時の人々にとって、芳樹の発言は説得力のあるものとして歓迎されたことであろう」（前掲の傍線部末尾）という指摘に注目したい。維新期の人々に歓迎されたか否かはさておいて、この『牛乳考』という著作が近藤芳樹という一地方の役人によって書かれたことは事実であるが、その背後にどのような意図が存在したのであるか。つまり、芳樹が読者に何を語りかけ何をしようとしたのか。その考察は必要であろう。

近藤芳樹は、幕末・維新期に活躍し、和歌・国学・有職故実・地誌・律令ほか多方面で業績を残した人物で、近年とみに研究の盛んになっている人物である。芳樹の著作の執筆意図が奈辺にあるのかを考えるのは重要なことであり、『牛乳考』という小品は、それに一つの示唆を与えてくれる作品であろうと稿者は考える。

以下、三つの問題点に関して、順次考察を進めて行きたい。

二 『牛乳考』の諸本と成立

前章で触れたように、『牛乳考』（『屠畜考』と一書での出版）は明治五年九月の刊記を有する版本が存在し、この年月に刊行された作品と思われる。

稿者は、版本のうち、左記の三本を披見した。

① 山口県立山口図書館蔵本（請求記号…R六四八/A）

② 山口県文書館蔵本A（請求番号…吉田樟堂二二五）⁹⁾

③ 山口県文書館蔵本B（請求番号…石川卓美文庫二二七）

また、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで、左記の一本をウェブ上で閲覧した。

④ 国立国会図書館蔵本（請求記号…二三五―三九）

これら四本は、本文に関しては完全に一致しており、同版と思われる。ただし、表見返しに記載された蔵版者（出版社）名に異同がある。

①～④の表見返しはともに、単辺内有界、右上に「近藤芳樹著」、中央に「牛乳考」「屠畜考」と併記される。そして左下に蔵版者（出版社）名が記載されるが、①②は「抄宗寮蔵」、③④は「日新堂刊」となっている。この異同は、どちらかが先刷りでどちらかが後刷り、すなわち、後刷りの出版者が板木を入手して当該部分を入木改刻し、後印として出版したことを意味するが、その前後関係以上に、『牛乳考』の成立・流布を考えるうえで重要な異同と思われる。

芳樹は、天保十一年（一八四〇）に長州藩士として取り立てられ、嘉永二年（一八四九）には藩の儒家に列せら

れて萩城下の江向に開塾し、それを「抄宗寮」と名付けた。⁽¹⁰⁾ここで学ぶ特旨給学生二十人分の食料を藩から支給されていたという。抄宗寮はその後、明治三年十二月の廃止まで存続し、明治二年には「抄宗寮叢書」⁽¹¹⁾として『にほのうき集』『緑濱詠草』『高田のおしね』などが刊行されている。この叢書は、「抄宗寮」という芳樹の私塾の版であり、私家版的性格を帯びたものと解せられる。『牛乳考』『屠畜考』もそれに類するものとして計画された可能性がある。しかし、明治三年の抄宗寮閉塾により、叢書の一冊とすることを止め、蔵版者を抄宗寮とすることで版行したのではなからうか。それが、①②の「抄宗寮蔵」と見返しに記された版と推察されるのである。

一方、③④に見られる「日新堂」。これは、明治初期の新聞『新聞雑誌』(後に『あけほの』、更に『東京曙新聞』と改称して明治一二年九月まで存続)を発行していた「日新堂」を指すと考えて間違いないと思われる。⁽¹²⁾というのも、『新聞雑誌』は芳樹と非常に親しかった木戸孝允⁽¹³⁾の発意によって創刊された新聞であり、同紙五三号(明治五年七月)には「山口縣近藤芳樹^{トッ}舐蘇小言ノ畧二」⁽¹⁴⁾という文言で始まる、牛乳の薬効を述べて飲用を推奨する記事が掲載されているからである(なお、このあたりの詳細は第四章で触れたい)。「牛乳考」の前身とも見なし得る『舐蘇小言』の主張を、芳樹の名を明記して紙上で紹介した「日新堂」が、『牛乳考』の出版を企図したと考えても不自然でない。『新聞雑誌』第一号(明治四年五月)の「緒言」によれば、「日新堂」の住所は「東京小川町今川小路」であり、東京での出版ということになる。

長州萩の抄宗寮蔵版として版行された『牛乳考／屠畜考』が、『新聞雑誌』の主張と相通じる所が多く、日新堂から後印として東京で版行されたと考えられるのである。

以上、やや繁雑ではあったが、『牛乳考／屠畜考』の版本の表見返しの異同に注目して、出版の経緯の一端を考察した。

如上の箇所を除いて、①②と③④の本文は同一である。より先に成ったと思われる「抄宗寮蔵」版のうち、①「山口県立山口図書館蔵本（以下「山口図書館本」と略）」を底本として用い、以下、考察を進めたい。

ところで、現在、『牛乳考』（『屠畜考』も含めて）の本文として翻刻されているものは、中井薫の論稿のみである。ただし、中井の翻刻は、『如蘭社話』として明治二一・二二年に出版された叢書に収められた本文（以下「如蘭社本」と略す）を底本としたもので、山口図書館本と比較して、一部の字句・文言や仮名遣いはもとより、序文の有無・奥書の内容などかなりの異同がある。如蘭社本は、千葉県デジタルアーカイブでも公開されているので、⁽¹⁶⁾それを参考に、山口図書館本と如蘭社本の全容を示すと次のようになる。

〔一〕山口図書館本（『牛乳考／屠畜考』として序二丁、本文二三丁、全一五丁）

- (1) 序文（序二丁表～序二丁表） *福羽美静による序
- (2) 牛乳考の本文（二丁表～五丁表）
- (3) 牛乳考の奥書（五丁表～五丁裏、本文より二字下げ）
- (4) 屠畜考の本文（六丁表～一三丁表）
- (5) 全体の刊記（二三丁表）

〔二〕如蘭社本

A 『牛乳考』（『如蘭社話 卷八』、明治21年刊）

- (2) 牛乳考の本文
- 〔3〕 牛乳考の奥書 *〔3〕とは別内容

B 『屠畜考』（『如蘭社話 卷一二』、明治22年刊）

(4) 屠畜考の本文

右の両本を比べると、山口図書館本の(1)の福羽美静序は如蘭社本には見られない。前掲の中井論稿では全く触れられていないが、作品の内容を考えるうえで非常に重要と思われるので、第五章で詳しく見る。(5)の刊記も如蘭社本には見えないが、前章で触れたとおり、これは「明治五年九月 近藤芳樹」と年月・執筆者を明示したものである。(3)と(3)の奥書は、両者の成立を考えるうえで重要と思われるので、以下に全文を掲げて検討したい。

〔一〕山口図書館本の(3)の奥書

こは。おのれはやく著はしおける考なるを。或人。こゝかしこを省きて。常人の見やすかるべくちゝめなし。東京に送りて。雑誌の中に収めしめけり。されどあまりに事そぎすぐして。おのれが意の達らぬ所もあるこゝちすれば。こたび全文を梓にちりばめ畢ぬ。なほ引洩せる書どもおほかるべくおぼゆれど。さのみはとて筆をとゝめつ。

〔二〕如蘭社本の(3)の奥書

編者曰、この考は、明治五年九月、翁自ら上木して知友に頒たれし者なるが、部数限ありて、普くも世に播布さりき、因て社員の覧に供へんとて、爰に取出つるなり、別に屠畜考一篇あり、又めでたき考證なり、其は次巻に挿刻すべし

〔二〕の如蘭社本の奥書は、編者奥書である。『如蘭社話』の編者邨岡良弼・澁谷啓蔵いずれかの手になると目されるが、明治五年九月刊本が翁（近藤芳樹）自らの出版であったことを述べる。芳樹の没年（明治一三年二月二九日）から十年後に記載されたもので、この奥書の信憑性は高からう。先に考察した、芳樹の私塾の名で版行された抄宗寮蔵版（山口図書館本など）が芳樹自身の手で出版されたことを示すとともに、あわせて、日新堂刊本が後印であることの証左ともなりうる。

〔二〕の山口図書館本の奥書は芳樹自身の著者奥書で、重要である。内容的には次のようなことを述べている。

- i ここに記した考えは早い段階で執筆していた。
- ii それを或る人が略述して東京に送り、雑誌の中に掲載させた。
- iii 雑誌掲載のものはあまりにも略述されており、我が意を尽くさないもので、今回全文を上梓することにした。
- iv 引用されていない書物も多からうが、ひとまずは擱筆する。

『牛乳考』の成立を考えるうえで、iとiiは重要である。芳樹は『牛乳考』で展開される論を夙に執筆していたという。それが、或る人の手で略述されて東京に送られ、雑誌に掲載されたというのである。

この芳樹の奥書には具体的な書名・雑誌名が書かれていないが、芳樹の著作のうちで管見に入る範囲では、iについての古い記述としては『寄居歌談』巻四所収の文章を挙げることができる。また、一纏まりの著作としては、先に触れた『舐蘇小言』がある。そして、iiに関しては、iの『舐蘇小言』が『新聞雑誌』五三号（明治五年七月）に掲載されたことを指していると思われる。

『寄居歌談』巻四、『舐蘇小言』、『新聞雑誌』五三号ともに、『牛乳考』を考える上で重要な先行著作と思われる。

るので、次章以下において考察を進めたい。

三 『寄居歌談』 卷四の牛乳への言及

芳樹の牛乳に関する纏まった発言で、最も古いものとして、『寄居歌談』 卷四を取り上げて検討する。

『寄居歌談』は歌学書風の随筆で、五卷五冊、全一六九段から成る。卷一は天保一三年（一八四二）に出版され、続巻が順次刊行された。本稿で取り上げる卷四の出版年次は判然としないが、卷四・卷五は安政末年（一八六〇）頃から文久末年（一八六四）頃に刊行され、元治元年（一八六四）に五卷五冊が一括して刊行されたと言われている。⁽¹⁷⁾

『寄居歌談』の翻刻は、斎木康孝により卷四までなされている。⁽¹⁸⁾ 本稿では、斎木の翻刻も参照しつつ、架蔵本（五卷五冊本）の当該箇所（20丁ウ・22丁オ）をまず以下に掲げる。底本には章段番号はないが、斎木によって「（四卷）24」と通し番号の付された章段の全文である（以下、便宜的に「卷四の24段」と呼ぶ）。

今世に行はるゝ種痘^{ウエモカサ}といふわざは、寛政のころ英吉利^{イギリス}にはじめて行ひたりけり、こゝにもはやう紅毛^{オランダ}よりつたへつれど、用る人なかりしに嘉永の酉のとし、またかの夷^{エビス}のもちわたりしより、わが長門周防、さては肥前などにうゑはじめて、やうく天の下にひろまりにけり、備中のあしもりの殿人緒方章とて、今は難波に住て、世にその名とゞるける洪庵といふくすし、これをよめる歌あり、

としごとにおひそふ野べのこまつ原千代にしげれとうゑもかさねむ、

種痘^{ウエモカサ}をかくしいれたるなり、まことや①この種痘のはじめは英吉利にて何かしとかいふさかし人の、牛の

乳汁をとる者のこの病せぬを見て、おもひ得たることなりとぞ、かく②かの国などには、今も牛の乳汁をとりてくらふなるを、こなたにはかゝることもなく、物ごとにおそき国ぶりなりと、あざける人のある、こは皇国のいにしへのさまをしらぬよりしかおもへるなり、和名抄に、酥音与^レ蘇同、牛羊乳^ノ所^レ為、とあり、民部式に、凡諸国^ノ貢蘇各依^ニ番次^ニ、其取^ニ得乳^一者、肥牛日大八合、瘦牛減半、作^レ蘇之法、乳大一斗煎得^ニ大一舂^一、とみえて、一斗の乳を煎詰て一舂の蘇となすなり、この牛は典藥寮の乳戸に飼ひて、是を掌るは和菓使主の家業なり、そのよし姓氏録三代格等に見ゆ、よろづの食物に加て^{カテ}くらふにいみしき藥也とぞ、かゝれどこの蘇といふものつくるに、いみしく費のおほければ、おほやけの外にはたくはへしめ給はず、さるは春のはじめの大臣の大饗などにも、蘇甘栗の二種をば、勅使もてたまへることの、江家次第などにのせられたるにて知べし、そもくいにしへにありて今なきものども、これのみならずおほかるは、みな乱れ世のさわぎに絶果たるを、③かくめでたき御代になりても、さるものありともしらですぐせる人がちなるを、かう西の夷の国などよりつたへ来たるを聞て、から人はかしこきものなりとのみもてはやせど、もとわが国にありしことなるはや、とほき処にのみ心をやらすとも、少しは足もとにも目をつけよかし、④うまれこしかひある国としらねばやことうらにのみひろふあま^ノ人、とよめるうたこそげにはづかしきことのはなりけれ、

この巻四の24段は、前半と後半の二つに内容が分かれる。前半は種痘に関するもので、種痘がイギリスで最初に行われ、日本にはオランダから伝来したことが述べられる。そして、緒方洪庵の「種痘（ウエモカサ）」を隠題として詠み込んだ歌が紹介される。¹⁹ それに關係して、傍線部①で「何かしとかいふさかし人（エドワード・ジェンナー）」の牛痘法へと筆が進む。牛痘法は搾乳者が痘瘡に罹患しないことから思いついたことを述べ、傍線部②

以降、後半部分へと話題が進む。この後半部分で、芳樹は牛乳について見解を述べる。

傍線部②に「かの国などには、今も牛の乳汁をとりてくらふなる」と記し、イギリスなどで牛乳を飲む習慣があること、そして、日本にはその習慣がなく、遅れた国だと嘲笑する人がいることに關して、芳樹は論駁する。その要点は、和名抄や民部式を引用して、日本にも古くは牛羊の乳から「蘇」を作っていたこと、典藥寮の乳戸で牛を飼い、和藥使主がその職についていたことなどの考証である。藥効に関する言及は「よろづの食物に加てくらふにいみしき藥也」のみで、滋養強壯などの文言はない。本文全体では、かつて日本で乳から蘇が作られ、それが用いられていたことの考証に重点が置かれている。そして、傍線部③で自国を貶め異国を称揚する人々に注意喚起をし、傍線部④の歌「生まれてきた甲斐のある国（日本）と知らないから、異浦（異国）でばかり貝を拾おうとする海人が多いよ」が紹介される。『寄居歌談』巻四の出版された時代の排外的風潮が窺えるとともに、芳樹の国学者としての立場がはっきりと示された章段といえる。第一章で見た藤田大誠⁽²⁰⁾は、芳樹を考証派の国学者と捉えていたが、『寄居歌談』巻四の当該章段にこそ、芳樹の考証派の姿勢が全面に出ていると考えてよからう。

四 『舐蘇小言』の考察

『舐蘇小言』は、『牛乳考』に先立つ芳樹の著作であり、注目すべき作品である。

本書に關しては、夙に加茂儀一が『新聞雑誌』五三号掲載の「『舐蘇小言』の略」を引用する形で、芳樹が練乳の効用を述べていることに言及している。⁽²¹⁾

その後、『牛乳考』に触れる論稿は多いが、『舐蘇小言』に触れるものは殆ど見当たらなかった。近年、矢澤好

幸が、日本の酪乳業史を考察するにあたって『新聞雑誌』に注目し、「牛乳を普及するため近藤芳樹は「牛乳考・屠殺考」を明治5年9月に刊行した事は有名であるが、しかし同年7月新聞雑誌によると「舐蘇（トソ）小言」にも煉乳という語彙を使って牛乳の宣伝をしている。」と述べている。しかし、これも『新聞雑誌』からの引用であつた。

芳樹の年譜研究などでも『舐蘇小言』に触れた先行論はなく、稿者は散逸した芳樹の著作ではないかと思つていたが、山口県文書館に版本が存在していることを知り、今回、披見することができた。その詳細と翻刻は別稿に譲るが、書誌を簡単に紹介すると以下の通りである。

山口県文書館認定の標題は『舐蘇小言・牧牛贅言』、分類番号は「原田家一一九九」、縦二三・一糎×横一五・五糎。表紙・本文同一の楮紙系の和紙で、袋綴じ、紙縫りで仮綴じ。表紙中央に「舐蘇小言」と直刷り。一丁表から五丁表までが「舐蘇小言」本文。五丁裏中央に「牧牛贅言」と直刷り。六丁表から七丁表までが「牧牛贅言」本文で、その末尾に刊記が「壬申三月 山口 牧牛会社」と記される。

簡便な本文共紙表紙で、紙縫りの仮綴じという点からして、少数数の私家版と考えられよう。末尾の刊記は『牧牛贅言』に関するものと推測されるが、「壬申〔明治五年（一八七二）三月〕が芳樹の『舐蘇小言』の成立の下限を示すことは確かである。なお、『舐蘇小言』なる書名の読み方であるが、表題・本文ともに振り仮名は見られない。『新聞雑誌』掲載記事に「山口縣近藤芳樹舐蘇小言」とルビを付すが、果たして正しい読みか否かは判然としない（本来「舐」の音は「シ・ジ」である）。

さて、『舐蘇小言』の本文であるが、『牛乳考』本文の縮約版とも呼びうるものである。尤も、『舐蘇小言』の方が先に成立したのは明らかであるから、厳密には『舐蘇小言』本文に増補がなされ、『牛乳考』本文が成立し

た」というのが正しい。『舐蘇小言』の冒頭部分と後半部分（『新聞雑誌』でカットされた部分を含む）を以下に示す。また、『牛乳考』の該当部分も併記する。

〔一〕冒頭部分

A 牛乳ハ、補益ノ最上ナル良薬ニシテ、常ニコレヲ飲ムトキハ、弱キヲ強ク、老タルヲ壮ナラシム、然レ
 氏、腐敗シヤスキ物ナルユエニ、牛牧ニ遠キ所ノ者ハ、飲ムヲ難シトス、故ニミルクトイフニ製シテ用
 ユ、ミルクハ即チ煉乳ナリ、其能生乳ニ異ルコトナシ、〔『舐蘇小言』〕

B 牛乳は。補益の最上なる良薬にして。常にこれを飲むときは。弱きを強く。老たるを壮ならしむ。然れ
 ども。腐敗しやすい物なるゆゑに。牛牧に遠き所の者は。飲むことをかたしとす。故に美留久といふ物に
 製して用ゆ。美留久はすなはち練乳なり。其能。生乳に異ることなし。〔『牛乳考』〕

〔二〕後半部分

A 畜養ノ道モ、伝ヲ失ヒタルコソ惜ケレ、サレバ正月ノ大臣ノ大饗ニ、勅使ヲ以テ、蘇ヲ賜フノ式アルハ、
 コレ饗膳ノ塩梅ヲ調和セシメ玉ハムガ為ナリ、抑 孝徳天皇ノ御代ヨリ、今ニ至テ千三百年、西洋諸国ノ
 如キ、大概コレヨリ後ニ關ケタルヨシナレバ、イカデカ 孝徳ノ御代ニ、牛乳ミルクノ舶来アラム、恐ラ
 クハ、彼方ニハ、ワガ 皇国ノ製方ヲ、早く聞習ヒタルガ、断絶セズシテ、今ニ伝ハレルニゾアルベキ
 〔『舐蘇小言』〕

B 畜養の道も。伝を失ひたるこそ惜けれ。されば正月の大臣の大饗に。勅使を以て蘇をたまふの式あるは。

これ饗膳の塩梅を調和せしめたまはんが為なる事は勿論にて、若くは初春。陽氣発暢の時に。この補益の良薬を賜ひて。公卿を愛撫したまふ。いとも恐き聖衷より起れる事ならんもはかり難し。抑孝徳天皇の御代より。今に至て千三百年。西洋諸国のごとき。大概これより後に闢けたるよしなれば。いかでか孝徳の御代に牛乳美留久ミルケの舶来あらん。彼方カナタには。わが皇国の製方を。早く伝習したるが。断絶せずして。今に伝はれるにぞあるべき『牛乳考』

〔一〕の冒頭部分を比べると、カタカナ・平仮名の違いはあるが、A・Bともに同一本文であることが分かる。ただし、「Aミルク―B美留久」「A煉乳―B練乳」などと用字に違いがあり、乳製品が日本に定着していく初期の用字の変遷を考えるうえでは興味深い資料になりうる。〔二〕では、A・Bともに、「日本に古くからあった牛乳・ミルクの製法が西洋諸国に伝わり、日本では断絶したものの、西洋では連綿と続いて、今、日本に逆輸入されている」という認識が記される。その途中部分で、Bの傍線部分が増補されている。

〔二〕の例のように、『舐蘇小言』と『牛乳考』とで共通する本文は、両者ほぼ一致している。そして、『牛乳考』に単独本文が増補される形となっている。全体の分量で比較すると、『牛乳考』が『舐蘇小言』の約二倍の分量なので、かなりの増補がなされていることが分かる。ただ、その増補部分はすべて、諸書にみられる事例の追加・増補であり、芳樹独自の認識・見解が述べられているわけではない。

つまり、『舐蘇小言』の段階で、牛乳に対する芳樹の考えは完成しており、それに用例・事例を追加する形で『牛乳考』が成ったと考えられる。このことは、『牛乳考』（抄宗寮蔵版）の後書きからも窺える。

以下、次章において、『牛乳考』を取り上げて考察したい。

五 『牛乳考』の考察

第二章で掲げた『牛乳考』（抄宗寮蔵版、山口図書館本）の奥書を再掲する。

こは。^①おのれはやく著はしおける考なるを。^②或人。こゝかしこを省きて。常人の見やすかるべくちゝめなし。^{ミヤコ}東京に送りて。^③雑誌の中に収めしめけり。されど^④あまりに事そぎすぐして。おのれが意の達らぬ所もあるこゝちすれば。こたび全文を梓にちりばめ畢ぬ。^{ヲハン}なほ^⑤引洩せる書どもおほかるべくおぼゆれど。さのみはとて筆をとゞめつ。

前章までの考察を踏まえると、傍線部①「私が早く著しておいた考え」というのは、『寄居歌談』巻四や『舐蘇小言』を指していると思われる。ただし、『寄居歌談』巻四は、かつて日本で乳から蘇が作られ、それが供されていたことの考証に力点を置いて書いているので、奥書冒頭の「こは」を受けた「この本は（この内容は）私が早く著しておいた考え」という文言に完全には一致しない。前章で見たように、『舐蘇小言』での主張はそのままにして、用例・事例を追加したのが『牛乳考』なので、①は『舐蘇小言』と考えるのが妥当である。

傍線部②「ある人が、（『舐蘇小言』を）あちらこちらと省略して、人々の読みやすいように縮約し、東京に送って」は、書かれている通りであるが、「東京に送る」ということから、『舐蘇小言』の縮約を行ったのは、山口在住の（芳樹以外の）誰かということがわかる。抄宗寮蔵版『牛乳考』（山口図書館本）が刊行された明治五年九月は、芳樹が山口県の官吏だった時期であり、傍線部②の記述とも矛盾しない。また、第二章で考察した如蘭社

本の奥書の「翁自ら上木して知友に頒たれし」にも齟齬しない。抄宗寮蔵版『牛乳考』は、山口という一地方を中心とした出版だったのである。

傍線部③は第二章で考察した『新聞雑誌』五三号（明治五年七月）への掲載を指している。そして、傍線部④「あまりにも省略し過ぎて、私の考えが伝わらない所もあるように思うので、今回、全文を上梓した」は、『新聞雑誌』掲載のものは自身の言いたいことが完全に表現できていないわけではないとして、今回『牛乳考』を刊行する理由を記す。傍線部⑤「それでもやはり、引用していない書物も多いと思われるが、そうばかりも拘泥してられないと思って擱筆する」は、考証派の国学者としては、まだまだ引用していない書籍類も多くて不本意だったのだろう、一文を加えたのである。

以上のように、奥書の内容はこれまで稿者が考察した内容と齟齬しておらず、稿者の考えを補強するものと思われるが、まだ触れていない問題がある。それは、傍線部④「おのれが意」^{コ、ロ}、すなわち、芳樹が『牛乳考』の中で主張しようとした主意・主題についての考察である。

それを考えるにあたって、抄宗寮蔵版『牛乳考／屠畜考』（山口図書館本）に掲載されている福羽美静の序文は重要と考える。如蘭社本にはこの序が存在しないため、注(15)の中井の翻刻論文では問題にされず、先行研究でも全く触れられなかったものである。

まず、全文を掲げる（原文は句読点がなくて読みにくいので、稿者が適宜施した）。

序言

人とうまれては、其なすへきことをなし、なすましき事をなさゝる、これ萬物にすくれたる所なり。其なす

へきこと、は、世の為、人の為、利益となるへきことなり。其なすましきこと、は、無智偏固にして行状禽獸に類する等のこと也。近藤芳樹著述せるこの一卷をみるに、世の為、人の利益とならんこと、すくなからず。故にこの書をよみ、この書を用ん人は、其身のやしなひを増し、又、偏固拘泥のやまひを去り、世の大利益ともなりなんこと、けにいちしるかりけり。国に補益あるの書とは、これ等の書をこそいふへかりけれ。

明治五年季冬

福羽美静しるす

末尾の執筆時期を「季冬（一〇～十二月）」とする点に不審が残る。『牛乳考』の出版は九月なので、それ以前に序は書かれたはずで、「冬」では矛盾する。これについては、現段階で稿者は説明できない。後考に俟ちたい。

執筆者の福羽美静は石見国津和野藩士、国学者である。⁽²³⁾ 岡熊臣や大國隆正・平田鉄胤らに就いて国学・和歌・律令格式などを学び、維新後は新政府の神祇政策を推進し、明治四年一月二四日には歌道御用掛を拝命している。芳樹は明治八年三月に宮内省御用となるが、上京後の五月一四日には、美静と同じく歌道御用掛を命ぜられている。後年、同じ職場の上司・部下の関係になっているのである。年齢こそ、芳樹の方が美静より三一歳年長であるが、美静は津和野藩士の長男として藩主亀井茲監の信篤く、幕末維新期の津和野藩を牽引した藩士であった。第二次長州征討〔慶応二年（一八六六）〕の際、津和野藩が中立的立場をとって長州藩の大村益次郎の藩内通過を許し、結果的に征長軍側の浜田藩の浜田城陥落、長州藩の石見銀山占領となるが、長州征討の非を説いて津和野藩の中立的立場を進言したのは美静であった。そもそも、長州征討の遠因となる八月十八日の政変（文久の政変）で、三条実美ら公卿七人が長州藩へと落ち行く（七卿落ち）が、その時、福羽美静も七卿に同行して京

を出ている。津和野藩に帰った美静は藩命を帯びて山口に出掛け、七卿を慰問したという。

美静は長州藩に比較的近い位置にいた人物であり（それが、維新後の中央政府での活躍を招来するのであろう）、芳樹が『牛乳考』を刊行した際は宮内省の歌道御用掛であった。序を書く立場として最適の人物であった。

さて、その序である。

冒頭では、世のため・人のために利益となることをするのが人として肝要であると説き、芳樹のこの書（『牛乳考』。勿論『屠畜考』の序でもあるが、繁雑になるので本稿では触れない）は、まさに世のため・人のために利益となる点が少なくないとする。その「利益」とは、「其身のやしなひを増し、又、偏固拘泥のやまひを去り」という大利益であった。すなわち、(1)「自身の養生に役立ち身体を壮健にする」、(2)「頑迷固陋な考えを消し去る」という二つの利益である。(1)は身体、(2)は思想に関することであり、美静は『牛乳考』の内容に、人々の旧弊な考えを訂正させ、身体を壮健にする効能を見いだしたのであった。

美静が看取した『牛乳考』の本質は、まさに芳樹が意図するところであったと思われる。先述のとおり、『牛乳考』本文は、資料を博搜して日本の古代において牛乳が飲まれていたことを考証したものであるが、諸書引用の合い間には、美静の指摘した(1)(2)に関係する字句文言が頻出する。以下に一部を掲げる。

ア 牛乳は。補益の最上なる良薬にして。常にこれを飲むときは。弱きを強く。老たるを壮ならしむ。

イ 然るに固陋なる片鄙の人は。近來西洋より伝来せし方なるゆゑに。これを飲むをば。穢なりと云て。忌嫌ふ者おほし。こは甚じき僻事なり。

ウ 孝徳の御代より以來。主上をはじめ。中宮東宮にも飲御したまへること。是を以て知るべく。三宮のみな

らず。下々にも及びたりし：

エ 宝曆のむかし。賀茂真淵先生牛乳を飲れたり。と幼き頃聞たりき。当時はいかなる事にか、穢はしきものを。と快からずおもひしにそれより以来。古書に此事どものかく記せるを見て。疑ひを釈けり。

オ 前件にいへる如く。晴儀の宴会にさへ用ゐしめたまひて。穢れたる品にあらざる事明らかなれば。疑念を棄て飲み試みよ。果して虚弱老衰を補くるの功驗。瞬くうちにありぬべし。

アは『牛乳考』の冒頭、オは末尾である。互いに呼応するかのよう、牛乳が虚弱老衰を補益する良薬であることを述べる。美静が序で指摘した(1)「身体」にかかわる主張である。イでは「旧弊で頑迷な田舎者は、西洋から伝来した牛乳を飲むのは穢れだとして、忌避する者が多い」と述べ、思想の面での誤りを正そうとする。そのため、注(24)で触れたように十一点もの資料名を明示して、古代日本において牛乳が飲まれていたことを考証し、天皇をはじめとして皇族、さらには臣下、そして下々の者までもが飲用したことを述べる。そうした博引旁証の中にウが記されるわけである。

エの賀茂真淵の事例は、古代の記事が縷々記される中であつて、一見、唐突なように感じられるが、幼少時の芳樹が真淵の飲乳を穢れと感じたことを率直に記すことで、自らも誤解していたことを述べる。自己の誤りを記すことで、人々の間の誤った認識の是正を促そうとしている。単に考証的事例を掲げることだけが目的なら、このエの文言は不要であろう。

再度、末尾のオを見ると、「穢れた品でないことは明らかだ」として、滋養強壮のために飲むことを勧めて、擱筆する。

以上のように見てくると、『牛乳考』という作品は、表面上は諸資料を博搜して古代日本における牛乳飲用の事実を考証した作品のようにみえるが、その実、根底では人々の間に存する誤った認識を是正すること、更にはそこから人々が牛乳飲用により身体壮健となることを目指した「啓蒙の書」としての要素が強いと考えられるのである。

六 おわりに

以上の考察をまとめる。

まず、『牛乳考／屠畜考』諸本についてである。これは、明治五年九月刊の「抄宗寮蔵」版のものが最古の版で、長州萩にあった芳樹の私塾「抄宗寮」で刊行されたものと考えられる。これと同版のものが、「日新堂刊」（出版者名のみを入木改刻）として東京の日新堂から出版された。この版は「抄宗寮蔵」版よりも後印である。また、この日新堂は、明治の初期に木戸孝允の発意で創刊された新聞『新聞雑誌』の出版元と推測される。

右の版本が編集者によって改編され、叢書『如蘭社話』の中に、『牛乳考』（巻八、明治二年刊）、『屠畜考』（巻一一、明治三三年刊）として収められた。しかし、字句に異同が生じたのみならず、本来存した福羽美静の序文は編者によって削除され、『牛乳考』末尾に置かれていた芳樹自身の奥書は編者奥書に書き改められた。ただし、この如蘭社本の編者奥書は、「抄宗寮蔵」版が芳樹自身の手で出版されたことを示す点で重要な資料となりうるものであった。

「抄宗寮蔵」版の芳樹奥書には、『牛乳考』に先行する著述を自身がなしていた旨、それが縮約されて東京の雑誌に掲載された旨を記しているが、その雑誌は『新聞雑誌』であり、先行する著述とは『舐蘇小言』であると考

えられる。先行論で『舐蘇小言』に触れたものは、すべて『新聞雑誌』からの引用であったが、今回、山口県文書館に『舐蘇小言』が蔵されていることがわかった。『舐蘇小言』と『牛乳考』を比較検討した結果、前者の約二倍の分量が後者であり、両者が共通する本文は、字句・文言がほぼ一致していることを確認した。そして、『牛乳考』の単独本文は増補と考えられ、その増補部分はすべて諸書にみられる事例の追加・増補であった。最後に、これら芳樹の著作の内容とその執筆意図を考察した。

芳樹の牛乳に関する纏まった著述としては、『寄居歌談』巻四の24段所収のものが古い。これは、ジェンナーの牛痘法の記述から発展したもので、牛乳の効用には一言だけ触れ、専ら、乳から蘇が作られそれが供されていることの考証に筆が費やされる。史実の考証がこの章段の中心と考えられる。また、章段末尾の和歌からは排外的思想も窺える。

次に成立したのは『舐蘇小言』である。この段階で牛乳に関する芳樹の考えは完成しており、それに用例・事例を追加する形で『牛乳考』が成った。そして、『牛乳考』の執筆目的であるが、福羽美静の序に端的に示されるように、人々の間に存する牛乳に対する誤った認識・旧弊な考えを正し、牛乳飲用によって人々が身体壮健となることを目指した「啓蒙の書」として執筆したと考えられるのである。この捉え方は、第一章で見た加茂儀一以下、畜産学・乳業関係の論考の指摘と一致する。稿者も左袒したい。

先行論（第一章）では『牛乳考』の内容を、児玉識が現実的・合理的精神の現れとし、影山純夫が考証派の文献中心主義からの現実見直しと考察していたが、稿者の結論は、両氏の考えと矛盾するとは考えない。『牛乳考』の根底に、『寄居歌談』巻四に顕著だった考証的姿勢が強く存することは疑いない。芳樹は、激動の時代（幕末維新时期）に入っているところも多々あったであろう。明治の世になって現実的・合理的に考えれば、滋養強壮という

牛乳の効用は人々のためになるものであり、また旧弊な考えを打破するのも人々のためになるから出版しよう、と考えたとしてもおかしくはない。そうした結果、『牛乳考』が成ったと考えられるのである。

しかし、稿者はまだ何か物足りないものを感じる。隔靴搔痒の感である。

芳樹が、人々の間の頑迷固陋な考えを取り除き、人々を身体壮健ならしむという、二つの面からの啓蒙のために『牛乳考』を上梓したのは間違いないと思われるが、一地方の役人であった彼が、果たしてそれを単独で成し得たことであろうか……。しかも、その啓蒙は何のために……。『啓蒙の書』『牛乳考』の執筆・出版意図である。

木戸孝允の息のかかった「日新堂」から『牛乳考』が再版されている事実。「日新堂」刊行の政治色の強い『新聞雑誌』に『舐蘇小言』が掲載されたという事実。芳樹が『一君一民弁』という版籍奉還の考えに沿った著作を出版しているという事実。⁽²⁵⁾芳樹の明治維新政府への出仕が木戸孝允の推薦であったという事実。⁽²⁶⁾芳樹があまりにも木戸孝允と近いという事実……。

『牛乳考』の更に奥底、いや幕末・維新期の近藤芳樹という歌人・国学者の活動の更に奥底には、何か別の力も加わっているのではないか……。それを見極めなければ、近藤芳樹を論じたことにならないのではないか……。今後の課題としたい。

[注]

- (1) 加茂義一『日本畜産史 食肉・乳酪篇』（法政大学出版局、昭和51年4月、三四九頁）。
- (2) 雪印乳業株式会社広報室編『牛乳と日本人』（新宿書房、昭和63年4月、八七～八八頁）。
- (3) 西東秋男編『日本食文化人物事典——人物で読む日本食文化史』（筑波書房、平成17年4月、一三九頁）。

- (4) 細野明義「牛乳・乳製品の我国における啓発小史と健康訴求に関する今日の国際動向」〔日本酪農科学会『ミルクサイエンス』五八巻三号、平成21年12月、引用本文はこの論稿による〕。
- 細野明義「講演録3 我国における牛乳と乳製品普及の系譜」〔中央酪農会議『中酪情報』平成22年12月号、平成22年12月〕。
- (5) 稿者も近藤芳樹の和歌活動を中心とした閲歴に関して卑見を述べた。以下の拙稿などを参照されたい。
- 小野美典「近藤芳樹の編集した類題和歌集について——『類題阿武の杣板』『類題風月集』『類題和歌月波集』——」〔日本大学国文学会『語文』一三五輯、平成21年12月〕。
- 小野美典「近藤芳樹の類題和歌集編集の一端——『類題阿武の杣板』の編集——」〔日本大学法学部『桜文論叢』七八巻、平成22年11月〕。
- 小野美典「近藤芳樹編『類題阿武の杣板』について——歌人の考察を通して見えるもの——」〔日本大学国文学会『語文』一三八輯、平成22年12月〕。
- 小野美典「近藤芳樹編『類題和歌月波集』について——新暦による類題集編集——」〔日本大学国文学会『語文』一四六輯、平成25年6月〕。
- (6) 防府市史編纂委員会編『防府市史 通史Ⅱ 近世』〔防府市発行、平成11年3月、七九〇～七九五頁、児玉識執筆担当〕。
- (7) 影山純夫「近藤芳樹の学問と思想」〔『国際文化化学研究（神戸大学大学院国際文化学研究科紀要）』三四巻、平成22年7月〕。
- (8) 左記の中で、藤田は「考証派」を「字義通り考証学的な、地味ではあるが堅実な学問を特徴とする国学の傾向或は集団」と説明し、「本居大平と山田以文の学統である考証的な国学者で明治八年に宮内省文学御用掛となった近藤芳樹」と述べている。
- 藤田大誠『近代国学の研究』（弘文堂、平成19年12月、一四～一五頁）。
- (9) 山口県文書館のデータベースでは「写本」となっているが、実際は版本である。
- (10) 「抄宗寮」に関しては、左記を参照。
- 萩市史編纂委員会編『萩市史 第3巻』〔萩市発行、昭和62年3月、五五八～五六〇頁〕。
- 岡本みよ『近藤芳樹の手紙』（私家版、平成22年6月、三～三三頁の年譜）。

(11) 「抄宗寮叢書」については『近藤清石著作目録 附近藤芳樹著作目録』（山口県立山口図書館編集発行、昭和27年12月）を参照。山口県立山口図書館蔵の抄宗寮叢書（巻一・巻二の計二冊）の版本を披見したところ、巻一の3丁表・裏に督学小倉実敏による「丙寅春三月」の真名序があり、「丙寅」慶応二年（一八六六）には版行の動きがあったことが分かる。

(12) 『新聞雑誌』に関しては、左記を参照。

明治文化研究会編『幕末明治新聞全集 第六卷上下』（世界文庫発行、昭和36年12月、解題（西田長寿執筆））。北根豊監修『日本初期新聞全集 三二』（ペリカン社、平成3年10月、解題（北根豊執筆））。

(13) 近藤芳樹と木戸孝允との関係については左記を参照。

影山純夫「村田清風・木戸孝允と近藤芳樹」（神戸大学「近代」発行会『近代』一〇三号、平成22年7月）。

小野美典「山口県立山口博物館蔵『近藤芳樹自筆歌集』について——芳樹の他の歌集との関係、そして木戸孝允との関係、附翻刻——」（日本大学国文学会『語文』第一四四輯、平成24年12月）。

(14) 『新聞雑誌』の本文引用は、注(12)の『幕末明治新聞全集 第六卷上下』に依る。以下同断。

(15) 中井薫「『牛乳考』・『屠畜考』について」（『日本獣医史学会編『日本獣医史学雑誌』第二八号、平成4年3月）。

(16) 千葉県立図書館蔵本の公開。『牛乳考』は『如蘭社話 巻八』（如蘭社、明治21年11月）所収、『屠畜考』は『如蘭社話 巻一一』（如蘭社、明治22年5月）所収のもの。以下、如蘭社本の引用はこれに依る。

(17) 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、平成26年12月、当該項目「寄居歌談」執筆は揖斐高）に依る。なお、左記の論稿にも『寄居歌談』の成立に関する詳細な考察がある。特に、久保田の論考は成立に関して再考を促す指摘が多い。また、注(18)の斎木の翻刻（巻一）にも言及がある。

宇佐美喜三八『近世歌論の研究——漢学との交渉——』（和泉書院、昭和62年11月、三九九～四一一頁）。

揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院、平成10年2月、三三二～三四四頁）。

久保田啓一「近藤芳樹の活動拠点としての広島」（広島大学国語国文学会編『国文学攷』二一八号、平成25年6月）。

(18) 斎木康孝「（翻刻）近藤芳樹著『寄居歌談』巻一」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』第10号、平成17年3月）。

(19) この歌は、文久二年（一八六二）に洪庵が幕府の医官に召されて江戸に下るに際して、簀長水の描いた洪庵肖像に自讃して除痘館に遺したものとして著名（左記の論稿参照）。多治比の論稿では、大阪滞在中の芳樹の日記の天保一〇年

(一八三九) 二月二日に洪庵が登場して以降、芳樹と洪庵の交流が続くさまを詳細に追っている。また、「洪庵の和歌の最初の師は芳樹であったかも知れない」という重要な指摘もしている。『寄居歌談』巻四の24段では「洪庵といふくすし」と伝聞形式で記すが、両者の昵懇さからすると、芳樹が洪庵の口ずからこの歌を聞いた可能性も高からう。

管宗次『京大坂の文人——幕末・明治』〔和泉書院、平成3年7月、一七二～一七九頁「近世文学にみる種痘と除痘館」。

多治比郁夫『日本書誌学大系89』京阪文藝史料 第二巻〔青裳堂書店、平成17年1月、三八七～三九六頁「近藤芳樹と緒方洪庵」。

浅井允晶「緒方洪庵と『除痘館記録』」〔緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室編『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』思文閣出版、平成27年6月〕。

(20) 注(8)。

(21) 注(1)の著書の三五六頁。

(22) 矢澤好幸「明治期の東京に於ける牛乳事業の発展と経過の考察」〔乳の学術連合編『平成25年度 乳の社会文化 学術研究・研究報告書』乳の社会文化ネットワーク、平成26年9月〕。

(23) 福羽美静の経歴に関しては、左記を参照。

岩谷健三『津和野ものがたり 第2巻』津和野の誇る人びと〔津和野町教育委員会、昭和44年8月、一〇～一八頁〕。

『国史大辞典 第十二巻』〔吉川弘文館、平成3年6月、当該項目「福羽美静」執筆は加藤隆久〕。

『和歌文学大辞典』〔古典ライブラリー、平成26年12月、当該項目「美静」執筆は青山英正〕。

(24) ちなみに、『牛乳考』本文内で書名が明示される資料は以下の十一点である。

姓氏録、類聚三代格、西宮記、典葉寮式、和名抄、日本紀、萬葉集、春記、政事要畧、延喜民部式、東大寺所蔵天平十年周防国正税帳残欠、

(25) 小野美典「〔資料紹介・翻刻〕近藤芳樹『二君一民弁』」〔日本大学法学部『桜文論叢』八四巻、平成25年2月〕。

(26) 注(13)の拙稿参照。

〔付記〕

本稿を成すにあたり、資料の閲覧・写真撮影等に際しては、山口県文書館・山口県立山口図書館に便宜を賜った。衷心よりお礼申し上げる。

『桜文論叢』 執筆要領

平成16年2月10日大宮校舎委員会決定

平成17年9月29日桜文論叢編集委員会改正

平成17年9月29日施行

平成19年7月 5日改正

平成19年7月 5日施行

平成22年7月 1日改正

平成22年7月 1日施行

平成25年5月30日改正

平成25年5月30日施行

- 1 原稿は未発表の完全原稿とし，提出締切日を厳守する。他誌に投稿中でないものに限る。また，審査の迅速化のため，原稿の要旨を添付する。翻訳原稿については，必ず原著者又は原出版社の許可を得てから提出することとし，許可の確認ができる文書等も添付する。
- 2 文章は原則として常用漢字，現代仮名遣いを用いる。学術上必要な場合は，その限りではない。
- 3 原稿は，原則として，Microsoft Wordで作成し，フォントは和文では「MS 明朝」，欧文では「Times New Roman」を使用し，いずれも下部にページ番号を付すこととする。注は，原則として，「挿入」メニューの文末脚注機能を使用せず，すべて尾注とする。
- 4 原稿の提出は原則として，電子メールの添付ファイルで研究事務課（kenjimu@law.nihon-u.ac.jp 宛）へ送付するとともに，印刷した原稿2部を同課へ提出する。

5 原稿の長さは、表題、氏名、本文、注、引用文献を含めた上で、和文の場合 20,000 字以内、欧文の場合 10,000 語以内とする（和文は「ツール」メニューの「文字カウント」で「スペースを含めない文字数」、欧文は「単語数」でカウントする）。なお、多少の超過はやむを得ないものとする。表題と氏名は、和文表記及び欧文表記を併記する。

6 要旨は和文 600～1,000 字程度、欧文 300～500 語程度とし、A4 版 1 枚に収めるものとする。

7 校正については、初校の際の加筆、訂正はやむを得ない場合に限るものとし、再校以後の加筆、訂正は避ける。

執筆者による校正は再校までとし、初校、再校ともに入手後 1 週間程度で返却する。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

8 文献の引用について

① 横書きの場合、本文の当該箇所の右上（行間）に括弧つきの算用数字で注記番号を付し、各章等の後に引用文献等を表示する。縦書きも同様とする。

② 表示については、著書の場合、著者名、書名『 』、発行年、頁等を示し、論文の場合は、執筆者名、論文名「 」, 掲載誌名、巻・号、発行年、頁等を示すことを原則とする。

以 上

執筆者紹介（掲載順）

常 松 淳	日本大学専任講師	田 中 輝 海	九州大学大学院 人間環境学研究院・学術協力研究員
中 村 圭 子	日本大学非常勤講師	金 野 潤	日本大学准教授
Thomas Lockley	日本大学専任講師	竹 内 雅 明	日本大学非常勤講師
Simon Cooke	東北工業大学専任講師	菅 野 慎太郎	日本大学非常勤講師
松 山 博 樹	日本大学助教	佐 藤 秀 明	日本大学専任講師
志々見 剛	日本大学助教	坂 本 宗 司	日本大学非常勤講師
江 島 泰 子	日本大学教授	高 橋 理 恵	日本大学非常勤講師
清 水 恵 介	日本大学教授	高 見 玉 直 起	日本大学教授
山 田 光 矢	日本大学教授	小 野 美 典	日本大学准教授
水 落 文 夫	日本大学教授		

機関誌編集委員会

委員 長	渡 辺 容 一 郎	委員 柳 瀬 昇
副委員 長	新 谷 眞 人 子	委員 山 口 正 春
副委員 長	江 島 泰 子	委員 山 岡 山 敬 二
委員	稲 葉 陽 二 聡	委員 小 野 静 美 典
委員	大 岡 晴 美 知	委員 中 西 原 未 雄
委員	太 田 利 修 之	委員 員 野 村 和 彦
委員	河 合 川 貞 公 司	委員 員 福 木 滋 久
委員	長 谷 井 公 幸 一	委員 員 岩 井 方 義 千
委員	益 松 本 戸 克 典	委員 員 白 芳 賀 豊
委員	水 戸 克 典	

桜 文 論 叢 第 93 卷（非売品）

平成29年3月10日発行

発 行 者 池 村 正 道

発 行 所 日 本 大 学 法 学 部
機 関 誌 編 集 委 員 会
東 京 都 千 代 田 区 三 崎 町 2-3-1
電 話 03 (5275) 8510 番

印 刷 所 株 式 会 社 メ デ ィ オ
東 京 都 千 代 田 区 猿 楽 町 2-1-14 A&Xビル

ŌMON RONSŌ

Special issue commemorating the 70th birthdays of Professor Tamai Michikazu,
and Professor Watanabe Norihiro

Vol. 93, February 2017

CONTENTS

— ARTICLES —

<i>TSUNEMATSU Jun</i> , Empirical Science of Morality and the Trolley Experiments	1
<i>NAKAMURA-ASHIDA Keiko</i> , <i>Le Journal asiatique</i> et l'aube des études japonaises en France au 19e siècle	29
<i>Thomas LOCKLEY, Simon COOKE</i> , Investigating Attitudinal Change Arising from a Content and Language Integrated Learning (CLIL) History Curriculum in Japan	57
<i>MATSUYAMA Hiroki</i> , The Oedipal Aestheticism of Yeats and Joyce	89
<i>SHISHIMI Tsuyoshi</i> , François Bauduin (1520-73) — alliance de l'histoire avec la jurisprudence —	109
<i>ESHIMA Yasuko</i> , <i>La Bible de l'humanité</i> de Jules Michelet: Celle de tout le genre humain ?	139
<i>SHIMIZU Keisuke</i> , On the Self-determination in Adult Guardianship Law: With an Introduction to "Civil Law and Psychology"	163
<i>YAMADA Mitsuya</i> , Specificity Between Health Policy and Sports: Facility Rental Fees in Nakano City	177
<i>MIZUOCHI Fumio, TANAKA Terumi, KON-NO Jun, TAKEUCHI Masa-aki,</i> <i>KAN-NO Shintaro, SATO Hideaki</i> , The Influence of Affective Traits and Psychological Independence on the Learning Motivation of our Undergraduates: Assuming Involvement of Habitual Sports Activities	203
<i>SAKAMOTO Shuji</i> , A Study on Small-sided Games in Football: Focusing on Play Between the Positions of Offense and Defense	227
<i>TAKAHASHI Rie</i> , The Motivations of Participants of Competitive Sports: Focusing on Senior High School Players	241
<i>KODAMA Naoki</i> , Acting Towards a Dialogue: Feeling, Emotion, and Theatrical Reality	280
<i>ONO Yoshinori</i> , Remarks on <i>Gyûnyû-kou</i> Compiled by KONDOU Yoshiki: From <i>Gouna-no-utagatari</i> to <i>Tososyôgen</i> and <i>Gyûnyû-kou</i> , and the Intention of his Writing	308